

奇譚クラブ

1958年 9月号

女体受難の巻「お座敷シネプロ始末記」牧高志
懸賞入選作品「草雙紙に於ける責場の研究」沖龍彦



9月号

昭和三十三年八月三十日印刷 九月号（第十二号）
昭和三十三年九月一日発行（毎月一回一日発行）
昭和三十一年四月二十日 第三種郵便物認可
（毎月一回一日発行）
昭和三十一年四月二十日 第三種郵便物認可

奇譚クラブ

昭和三十三年九月号

9

奇譚クラブ

昭和三十三年八月三十日印刷 九月号（第十二号）
昭和三十三年九月一日発行（毎月一回一日発行）
昭和三十一年四月二十日 第三種郵便物認可

定価二百円

THE KITAN CLUB
Published Monthly By Tenseisya
Osaka Japan



IBM. 2805

臨時増刊号 集号 限定版



限定版SADO特集号 売切れぬ中、直ぐお申込下さい！

秘蔵豪華口絵 (二十七点)

○四馬孝・画名場面集

- 別れる女 (八尾幸道作)
- 夜汽車で逢った美人 (木堂 一作)
- 危 遇 (富士宮喬作)
- 玩 具 (東風二助作)
- 屠殺者 (宇関一夫作)
- 変な奴 (宇丸一平作)
- 或るスクリーン (浜道太郎作)
- あの時の事 (土井敦子作)
- 地 蜘蛛 (善左木男作)
- 滝 れい子・画名場面集 (藤川力行作)
- 移り香 (西東三郎作)
- 若妻と黒牛 (正木真龍作)
- 口 説 責 (辻村 隆作)
- 華やかなる制裁 (辻村 隆作)
- 蒼白き抵抗 (辻村 隆作)
- 非情の部屋 (南俊二解説)
- 夜の舗道

▽皆様待望の實画實写真集△
マニア垂涎の傑作満載
遂に完成す。異色特集号

表紙 四馬孝・画 オフ色刷
口絵 写真版印刷 二十四頁
グラビヤ印刷 二十四頁
本文 口絵説明解説 百十數頁

長らく要望されていたが果さなかつた「サディズム特集号」が遂々完成。皆様の前に姿を現しました。斯界唯一の奇巧編集陣が自信を持って皆様にお贈り出来る限定版特集号の第一弾であります。何卒一度手に取って、この愛すべき特集号をごらん下さい。必ずやお氣に召すと確信いたします。

発売以来、圧倒的な絶讃を博しておりますが、限定版のため、数に制限がありますので、売切れにならない中、今すぐお申込み下さるようお勧めいたします。なにしろ印刷部数が僅少です。故、その意味からも貴重品としての稀少価値を近き将来に於て生ずることが

本誌百号突破記念

懸賞原稿募集

本誌の通刊第百号を突破したのを機会に左記の通り懸賞原稿を募集いたします。故、何卒奮って御応募下さるようお待ちいたします。尚、募集規定には、従来と違って大いに幅を持たせましたので、御自由な気持ちで御執筆下さい。誌上の匿名及び無名の投稿も結構です。(この際は誌上で連絡いたします。)

○賞金

優作 壹万円 若干篇
秀作 五千元 若干篇
佳作 三千元 若干篇

種目 小説、創作、告白、手記、体験、等

枚数 本誌に適合した題材を扱ったもの
三十枚乃至五十枚程度(四百字詰)

締切 但し多少の増減は差支えありません。
当分の間特別に定めません。先に到着の分より漸次銓衡の上、入選作は最近号より掲載いたします。

投稿 「読者原稿」と区別するため、応募原稿の第一頁に「懸賞原稿」と書いて下さい。

発表 入選決定の分は、それぞれ賞金の送付を以って報告します。誌上では入選作の掲載を以って発表にかえます。

用紙 二百字詰又は四百字詰原稿用紙を用い、第五種開封便(百瓦につき八円)にて御送付願います。

読者原稿募集

〔創作〕異色ある題材を提げて立つ野心ある読者の投稿をお待ちします。枚数は三十枚迄、未発表の作品に限ります。採用篇は本誌五カ月以上掲載します。

〔体験告白手記〕読者皆様の偽りなき真実の叫びを募ります。枚数は三十枚程度採用篇には本誌三カ月以上掲載します。

〔映画、雑誌〕通信〕映画や雑誌の中で特に興味をお持ちになった事項についての通信をお待ちします。出処は必ず明記して下さい。掲載の分には本誌二カ月乃至三カ月分贈呈します。

〔私のイメージ〕熱烈奔放なイメージをどしどしぶつ放して下さい。どんな荒唐無稽なものでも奇抜なものでも結構です。採用分には、本誌三カ月分贈呈します。

〔アイデア〕将来本誌にて企画すべき事項につき詳細に。採用の分には本誌四カ月分以上贈呈します。

〔レポート〕新聞記事(週刊誌を含む)の切り抜き或は見聞等、皆様の特に興味をお持ちの事項につきお知らせ下さい。掲載分には本誌二カ月分贈呈します。

〔読者通信〕編集者、執筆者、投稿者等への通信、前号の批評、希望、感想、思ひ出話、読者相互の呼び掛け、応答或は編集や雑誌のあり方等について忌憚なきお便りをどしどしお寄せ下さい。つとめて誌上に発表いたします。但し、読者交歓室は都合により当分の間中止いたします。

○本誌月極購読料○

一月分 一冊 (送料共) 二百円
三月分 三冊 (送料共) 六百円
半年分 六冊 (送料共) 千二百円
一年分 十二冊 (送料共) 二千四百円

本誌は一切書店売りは致しませんので、購読御希望の方は、直接発行所へお申込み下さい。荷造送料は全部こちらで負担いたします。故、誌代のみお送り下さい。半年分御申込の方は景品として手札型写真三枚、一年分お申込の方は景品としてキャビネ型写真三枚を贈呈いたします。

奇譚クラブ

毎月十二巻第十一号
定価二百円

九月号

昭和三十三年八月三十日印刷
昭和三十三年九月一日発行

編集印刷兼発行人 吉田 稔
大阪市阿倍野郵便局私書箱第十四号

電話天下茶屋 三六〇七番
大阪市大正五〇〇四二番

御送金は振替、為替、現金書留、切手代用(八円切手に一割増)等どんな方法でも結構です。送り先は必ず指書でなつてお書き願います。尚、振替用紙御入用の方は八円切手封入の上お申込下さい。お送りいたします。

◎ 絶対に、他では入手できない責絵と



奇譚グラス

SADO 特

【内 容】

◎ 杉原虹児・画名場面集

○ 宿命の鞭

(住谷猪一郎作)

○ 女賊捕縛

(南 俊二解説)

◎ 南村俊平・画戯画傑作集

○ 大王様への貢物 水 槽

○ 戦友救出

いけにえ

○ うさぎの波乗りごっこ

鞭を提げる女 四馬 孝・画(表紙裏)

洋髪と日本髪 杉原虹児・画(目次裏)

秘作グラビア写真(八十一葉)

○ 緊縛艶姿十四態

田中 芳代嬢

(うつくしきいましめのかずかず)

○ 拷問・囚衣・懸崖

大塚 啓子嬢

○ 床間の花

花坂 道子嬢

○ 蠟 滴

愛川 悦子嬢

○ 白蝶の舞踊(連続写真)大塚 啓子嬢

○ 長襦 袢

花坂 道子嬢

○ 野外ヌード・スケッチ帖

撮影・塚本 鉄三

必至であります。

一度入手された方は殆ど手離さないでしようから一旦売却になりますと其の後の入手が非常に困難なことになります。

限定版「サド特集号」では、華麗な縛り絵集だけでも、十分に楽しませてくれます。それに加えて八十数葉に亘る緊縛写真の素晴らしさ、ヌードフォトの美しさ、全くマニア諸氏にとっては得難い贈物だといっても過言ではありません。本文中の口絵の解説文にしても、これだけ独立して読んでも十分読みごたえのある詳細な描写であります。

只今、発売中を機会にお逃しなく是非一冊お求め願います。

御注文次第、厳重包装の上急送申し上げます。

限定版特集号

定価 三百五十円(送料)

お申込は……

大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号

天 星 社

振替口座大阪五〇〇四二番



奇譚クラブ

復刊第三十二号
九月 号

目次

四馬孝傑作集 (5) いぶしゼメ	四馬 孝・画
南村俊平戯画二題	南村俊平・画
大井川渡邊、河童と少女	
縛り絵 責絵師の苦心	滝れい子・画
縛り写真特報	大塚啓子嬢
▽縦(たて)と横(よこ)の線	
▽柔肌の熱き血汐	
提供 田辺 啓二	
緊縛映画名場面集	
日活映画「殺人計画完了」(日高澄子)	
日活映画「悪魔の爪痕」(沢波久子)	
東映「少年猿飛佐助・第二部」(山東昭子・丘さとみ)	
東映「愛幻胡蝶の雨・第二部」(桜町公子)	
賣画 灰 皿	杉原紅児・画

本誌百号突破記念懸賞募集原稿入選作品

草雙紙に於ける責場の研究

創作受刑の肌

「通信」最近号を読んで

子供の頃の流腸(その二)

Mレポート「種」への執着

マゾヒズムへのいざない(第十二回)

「戦場にかける橋」とほくの責小説

続・女斗美短歌

幕末奇談『手枕お千代』

「映画通信」今月の縛られ女優達

残虐なる女性達

「切腹風土記」江戸の切腹

「ニュース小説」復員船「辰」丸事件

愛好家の記録(あるマゾヒストのノート)

「体験記」バ——「ナナ」の人々(第三回)

お座敷シネ・プロ始末記

マゾヒズム百景

映画「奴の拳銃は地獄だぜ」に思う

創作「紅山彦」

裸馬との対話

手帖雑報欄

「速報」今後の縛り映画

文部大臣の専属室(マリアンヌの手記)

変な小説『蜃気楼』

現代マゾヒズム芸術時評

魔教団 NO 8 (その七)

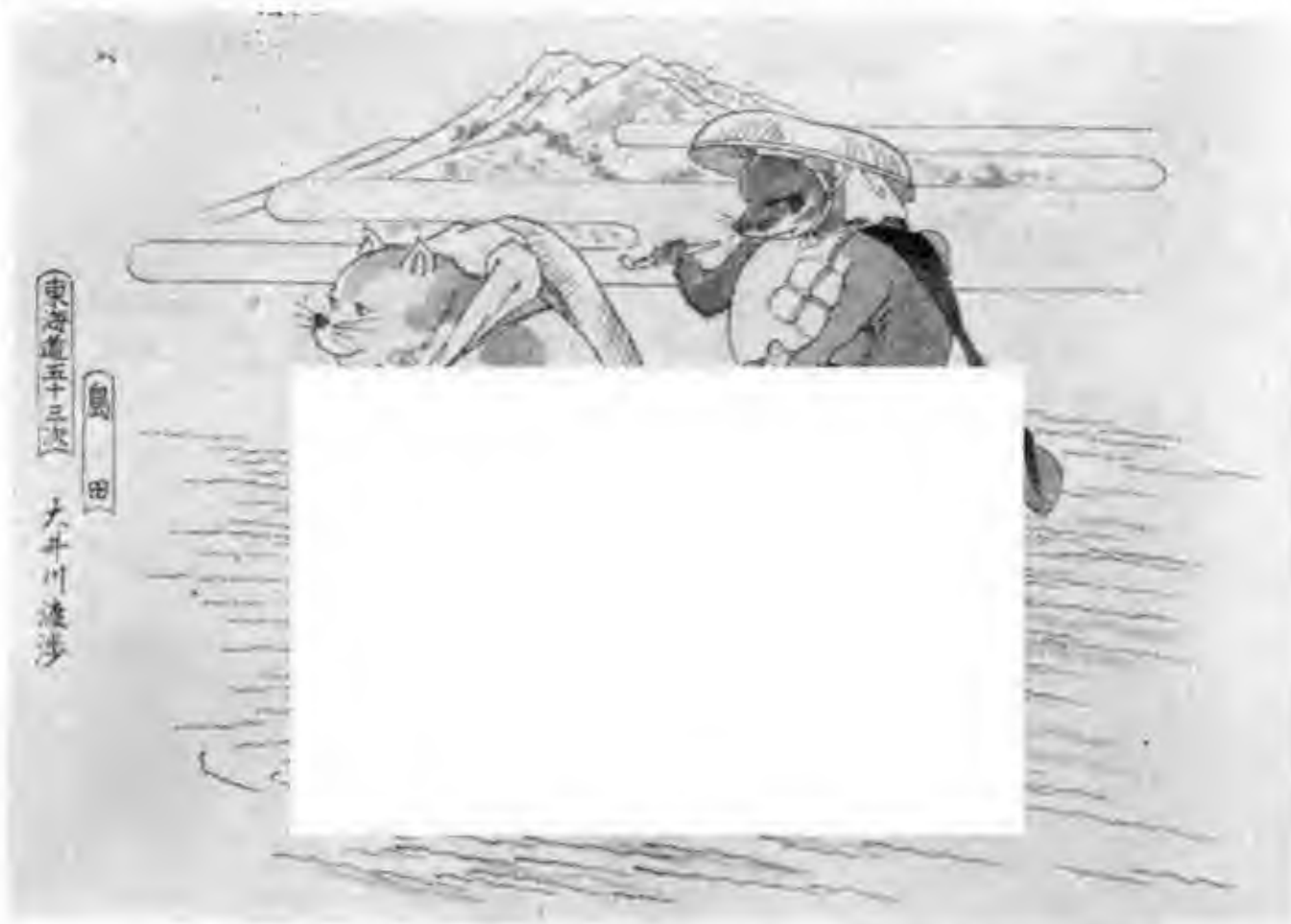
紺餅の蠟燭

「告白小説」マゾヒズムの谷間

読者通信

海野 築郎	56
大河原珠樹	66
森本 愛造	68
壬生 三郎	71
横村 奏	74
とやま・かつひこ	83
南 時夫	88
牧 高志	95
馬場 好男	102
浦田 紀夫	104
三条 卓夫	108
乗杉貴代子	118
沼 正三	120
嵯峨美也子	123
鴉嘔吐夫訳	124
奥田 滝天	130
原 忠正	140
土路 草一	142
菅 良太	150
鍵村江津子	151
読者通信	164

南村俊平戯画 二題



東海道五十三次

鳥田

大井川渡渉

大井川渡渉 「ねえ兄貴、この人足の座り心地も満更悪くもねえな」
「おい、おい、気をゆるしちやなんねえよ、人間という動物は俺らを欺ますのが名人だからな。」



河童と少女 「アハハ、どうだね、可愛いお嬢さん、水の中は涼しくって、いいだろう。この間から俺は、お前さんを狙っていたのさ。こゝは俺の領分だ。おとなしく言う事を聞いていないと、ひどい目にあうぜ」

いぶしゼメ

四馬孝傑作集(5)

イヴニングドレスの上から、ぐるぐると巻きついた太縄が胸を圧迫して、それだけでなくさえ息苦しいのに、男の手にした線香の束からは、もうもう煙が渦まいて彼女の顔面を襲ってきた。



四馬孝・画

責繪師の苦心

(滝れい子・画)

「そうやって、もう小半刻も辛抱しているんだ。だんだん紐が肌に喰い込んでくるだろう。そうだ、お前のその苦しむ姿を俺は紙に書きうつしたいんだ。」



縛り写真 特報

縦

た
て
と

横

よ
こ
の

線

モデル……大塚啓子



樹立の中に縄で縛られた乙女がいたという。
ぬぼたまの黒髪が水で濡れたように光っていた。
ボクは夢の国でニンフに逢ったように胸をときめかした。
ボクは縛られた美しい女の姿を眺めるのが好きだったので
神様がボクの心をあわれんで、かりそめの姿をお現しにな
ったのかもしれない。

柔肌に喰い込んだ縄が、まるで生物のように息づいている。なぜだろうか。白い肌に当たった新緑の陽ざしはまぶしくボクの眼を射すくめる。ゆくりなくも、ボクは与謝野昌子の短歌を思い出していた。



モデル……大塚啓子

縛り写真特報

柔肌の熱き血汐





△右▽日活映画「殺人計画完了」

縛られているのが日高澄子と武蔵章生、立てるは清水将夫、
鞭を持つた男は弘松三郎

△下▽日活映画「悪魔の爪痕」

筑波久子





東映 少年猿飛佐助（第二部） 山東昭子，丘さとみ



東映 変幻胡蝶の雨（第二部） 桜町公子

灰 皿

窓口から初夏の微風が注いでくる。ソファーに深々と腰を下して、今や画報に眼を通してゐる婦人。手にしたシガレットからは、火のついた灰が、灰皿の上へはたかれる。熱さに悶える灰皿のことなど知らぬげに……。

< 杉原虹児・画 >



新しい文献研究誌

奇譚クラブ

1958年 9月号

(第十二卷 第十一号 通刊第百十二号)



◎本誌百号突破記念「懸賞募集原稿」入選作品◎

草雙紙くさそうしに於ける責場の研究

沖 竜 彦



昭和三年に南宋書院と云うところから発行された、石田元季著の「草雙紙のいろいろ」と題した本がある。今でも時々古書展などで見かけるが或時遇然に此の本を手にとってからやみつきになり一頃黄表紙、合巻を含め盛に蒐集して歩いた。大体「責」に目的を持って集めたのではないので資料としては限られたものであるが一つのデータとして取上げて見たいと思う。

草雙紙は江戸の初期から発達し、始めは子供むきの遊び絵本風のものから段々大人の読みものとなり天明前後にはいわゆる黄表紙の最盛期となり、やがて敵討ものの合巻時代が来る。これが文化年間でその後歌舞伎ものや謡案ものが流行し、やがて長編ものとなり明治に至る。ここで取上げる資料は大体後期黄表紙から文化文政の合巻最盛期を中心としたものである。前述の「草雙紙のいろいろ」の書き出しに曰く「草雙紙はいわば当時の映画である。鹿の子絞りのような仮名に囲まれた画面は、君父の横死、宝物の紛失から、若殿の遊蕩、淫婦の誘惑、老臣の忠諫、孝子の流離、貞女の辛苦、従僕

の艱難……云々(中略)……それからそれへと連続する。」

一言で云えば大衆の娯楽読物であり、時代々々の流行があり当時のミーチャン、ハーチャンをわかせた紙上映画である。そんなわけで江戸時代の他の種類の小説読物類に較べて比較的軽く取扱われているが、何しろ執筆陣は当時一流の作者で(勿論全部一流のわけではないが、現在蒐集すると当然一流作家の手になるものの方が多く残っている)、絵がまた大い浮世絵の大家の筆になるもので手にとつてあきない面白さがある。その点でも江戸文化の爛熟期である文化文政頃のものが作者陣も浮世絵師陣も人材豊富でとびぬけて面白い。(黄表紙時代は別として)後になればなる程内容も絵もぐつと落ちることははっきりわかる。

こうした草雙紙の発端から流行の変転、その他時代背景などについて書けば尽きないものがあるが、かいつまんで説明した次第。此の様な資料の中から特殊なテーマを取出して探るやり方は昭和二年の早稲田文学草雙紙の研究特集号の中にもいろいろと題材が発表されているが「奇譚クラブ」むきのテーマはない。同系統の書物としては昭和五年に国際文献刊行会から出している、尾崎久弥著の「怪草雙紙画譜」と云うのがある。これは広義の「お化け」をテーマにしたもので大変に凝った本である。

何れにしろ、この文化文政(特に文化年間の初期の)時代の合巻、通称草雙紙は十中の八、九は敵討因果話で、これが大変に流行ったものらしい。そして当時の江戸っ子は文化太平にあきたものか、それとも読物の上で刺戟を求めたものか敵討に附随して血みどろな惨虐趣味に筆を凝らしたものである。画面でも次から次へと新しい趣向をこらし大衆もこれを喜んだ。

そんなわけで必然的に特にそれを目的にしなくても斗争や殺しに附随して刑罰、虐待、私刑の場面は極めて普通に見られる。殺しにしても文はともかくとして画面の惨虐性は今日の常識から考えると

全く異常に思える位である。それが沢山のなかの一つか二つならば仕方ないが敵討ものの流行った文化年間の初期には殆んどがこうだったのではあるまいか。試みに新群書類従の書目から文化四年の出板を見て数えて見た。此の年は敵討ものの専門の作者でベテランの南仙笑楚満人が五十九歳で最後の執筆、その他十返舎一九、山東京伝、曲亭馬琴、式亭三馬と云った大物が多く筆を執っている。一方絵の方は葛飾北齋、北尾重政、歌川豊国、国貞、豊広、勝川春英、春亭、そして鳥居派からは清峰が、喜多川派からは月磨が乱立してそれぞれの持味を生かしている。文政の後半期から後になると絵は歌川国貞を中心とした歌川派の、それもこの頃から較べるとひどくまずい絵で独専されてしまうので面白味は半減されてしまう。(但し、国貞、国芳は例外として)話をもとに戻そう。文化四年、板元は有名な鳶屋他十一、内容のほどは一々わからないが外題に敵討何々、或は何々の仇討とあるもの三十六、総出版数が五十八であるから大半を敵討でしめている事になる。敵討とつかないものの中にも例えば「忠孝再生記」だとか「怪談梅草紙」だとかどうも敵討がからみそうな外題が多い。なかには式亭三馬のようにいやいやながら流行で仕方なく筆を執っている人もある。彼は「式亭雜記」にも書いているが、実際の敵討物の著作の後述にも敵討ものはイヤだとボヤいている。それでいて彼の敵討ものは五十歩、百歩とは云え京伝なんかに較べて惨虐性がより強いような気がする。これも三馬の商魂か。前置きはさておき、手もとの合巻から実際にいろいろな場面を拾って行こう。無論、今私の手もとにあるほんの僅かな材料からこれだけ出てくるのだから、これだけ沢山出たもののなかには珍らしいケースもさぞかし多いのではなからうかと思う。

○「雷幸蔵 轟話」^{いかづち}、文化四年出版、竹塚東子作、勝川春亭画。三十枚ばかりの絵草紙である。竹塚東子と云う人は武州竹塚に住

む農夫で寛政の始め頃からの作者で特に後世にのこった代表作はない。いわば二流の人である。敵を討たねばならない信太郎と妻の楓が悪坊主の願哲と云うのと、この家の主（もとは信太郎の召使）の妻の悪婆に殺される。病気の信太郎の薬を買いに家主の男が出かけたすきに悪坊主と悪婆がしめし合せて路用の金銭を強奪するためである。絵の方、いろりを中心として上手に後から抱くようにして出刃を腹に突立てられている信太郎。下手の柱には楓が腰のもの一つで手足とも縛りつけられ、悪婆が松葉いぶしにしている。頁がよごれているため表情はよくわからない。

次の頁、にわか落雷で、悪人共は血へどを吐いて死ぬ。頁のまんなかに火の魂があつて、四人が死んでいる。楓は縛られたまま仰向になり腹を突きやぶつて赤ん坊が半身、体を持上げている。文の方では即ち此の子供が後に雷幸蔵と云う力士となり仇討ちをする筋になるわけである。さて此の赤ん坊が驚にさらわれて（何と荒唐無稽なることよ）、祖父の敵の屋敷のなかに落ちる。早速殺されるところを二人の女中に助けられるが、女中の一人きく（皿屋敷と同じだ）がつかまって責められる。絵の方、上手に松の太木があり上から腰巻一枚のきくが後手に縛られ逆に吊されている。縄の一方の端を肌ぬぎになった仲間が持つていて縄をあげたり下げたりしている様子。別の仲間がきくの鼻先に香のようなもの（なにか皿から煙が出ている）をつきつけている。下手には主人夫妻が縁側まで体をのり出してこの有様を眺めている。文の方をそのまま引用してみよう「ふびんや○○○（文字不明瞭）きくを丸裸になし庭の松の木へさかさまにつるしあげたり、おろしたりしてせめたるはむざんといふもおろかなり折しもしはすの○にて雪こやみなくふりて、かんき肌をつらぬくさへあるにかかる非道なる責にかよはききくはたまり○○目により血をながし白たへもあられない……云々」と云ったわけできくは責殺される。このあときくの幽霊が出たりして波瀾ばんじよ

うの上仇を討つのである。作り話とは云え相当ヒドイ話である。

○「かたみちちりきやきつぎ鮮討他力之焼纏」、文化三年出版。

同じ作者で絵の方が北周、北周とは調べて見てもよくわからない。多分北齊門下と思うが画風は北齊とも違う。荒けずりながらユニークで面白い絵である。これは敵討ものの流行り出す一つ前の時代の流行の黄表紙仕立て作もちょうど洒落や皮肉を主題としたいわゆる典型的な黄表紙と敵討との中間をゆくものである。その点前作と違って極めて気のきいたスマートなものである。遊八と云う男が旅に出て真二つにきられるが片身だけ死なないでいる。その半分になった奴が困って通りすがりの地藏さんに泣きつくとき地藏さんが同情してくれて半身を貸してくれる。此のあたり絵は半分人間で半分地藏さんの男を画いている。これが同じように何か因果関係がからんで半身が真黒の女と苦勞を共にし、いろいろこっけいな事があつた末またもとどおりになる極めておめでたい話である。この女が人にさらわれるがかわなのでもてあまして道標に縛りつけて逃げるところがある。絵の方、田舎道の道標に顔の片半面が黒い女が片方の乳をみせて縛られている。左右に人相のわるい男が縄をしめている。一種独特のユニークな絵である。

○「こぢきやうやうぢきやうぢきやう小女郎蜘蛛芋環」、文化六年刊、曲亭馬琴作、勝川春亭画。

殿様をだました小女郎蜘蛛がいろいろ悪事を働く。そのなかの一つ。下手にきまりものの木があつて木から腰巻一枚の女が妙なかっこうで吊され一人の仲間がこれを叩いている。すぐ近くにはくい立てられ下半身を埋められた裸の女が二人縛られ、一人は仲間を釘ぬきで舌を引張られている。上手は殿様が女郎をはばかせてきくを見て楽しんでゐる。文の方は「よりしげ○○○もと思ひてあまたのこしもとをいましめ、さまざまにせめとへども、もとより知らざることを

誰かは白状せん、小女郎これを見てごうもん……………云々」と割合に簡単に片附けている。ずっと後の方にもう一つこれは着衣の女が松に吊されて男女に松葉いぶしをくっている絵がある。馬琴特有の長いものでとてもついて行けないため話の筋は知らない。但し此の本評判がよかったと見えて、ずっと後の天保十二、十三年と更にあとの慶応二年と作者、画家歿後も再々再板にかけている。但し再板ものは画が歌川国芳に変わっていて、画は国芳の方が面白い。なお、これには切腹も出てくる。

○「於六櫛木曾仇討」、文化四年刊、山東京伝作、歌川豊国画。

これは当時の当り作で三馬の「式亭雜記」にも、京山の「蜘蛛の糸巻」にも記録に残っている。口絵と云って巻頭に登場人物を一人々々あげて紹介している。この趣向もこれが始まりだと云う。昔、博文館から発行された「帝国文庫」の京伝、三馬傑作集の結編にも入っている位だから一応ヒット作と見てよからう。お六と云う「女の鑑」のような貞女の仇討ものがたりである。巻頭の紹介に曰く、「主君のために髪をきりて米を求め、子売りて薬をととのう。貧苦を凌ぎ悲嘆を忍び、ついに木曾の山家に住み櫛をひきてすぎはひとす。これをお六櫛という。後時運開くる日を得て榮華を極む」とある。物語、このお六の主君筋にあたる鶴見多門の妻女久方と云うのが紹介のとおり引用するならば「奸佞好色大悪不道」の牛島大之進に恋慕されるが操を破らないため責殺される。やたらにこう云った場面が出てくるところを見ると当時としては単なる話の筋書として何でもなかったらしいが、今の常識から考えると「奇譚クラブ」のような特種な雑誌でも扱わないようなヒドイものである。

先ず今でも映画に出てくるような覆面をした二人の賊に襲われ、さるぐつわの上縛られて縄じりを持たれた美女、幼児。次の頁、お定りの構図で下手に立木、これに幼児が体ぐるみ縛りつけられ、片

方の腕がきられて下に落ちている。一人の仲間が刀を樋の水で洗っている。別の仲間が残った手を斬っているところ。(全くヒドイものである)上手では縁側で泣伏している久方、大之進が左手で久方を抱え、右手で子供の方を指している。「あれあのとおりがとくしんねへか、とくしんすればこんやからちきにおくさまだ」とある。次の頁、上、下が逆になって下手縁側大之進盃で酒を飲みながら庭で責められている女を見ている。庭には穴が掘られ立杭に久方が上半身裸で縛りつけられ、穴の中へ仲間がかごから蛇をあけている。杭の後には別の仲間が割竹を持って立っている。「あゝくるしや、たえがたや、どうぞなさけにはやくころしていなう」「いちのはった女めだ、大きにむだばねをおらせをつた」とある。大之進はあとでお六に仇を討たれる。後述のように京伝には女が横恋慕されて従わないために殺されると云うのが多いようである。

○「敵討狼河原」、文化三年刊、山東京伝作、歌川豊国画。

やはり美しい人妻が舟の上で悪者につかまる。(男は水に突落される)女は悪者に監禁され、責められる。これが同じ久方と云う名前である。雲助風の男に両手を後手にがっしりとつかまれている。雲助の大将が女の襟をとって刀を突つけている。

「おやかた、もうばらしてしまはっせへ」

「これでも〇にしたがはねえか、つらはうつくしいがしぶといあまめだ、さあいもざしだぞ」

「とてもゆるしてかへしはせまい、ころさば早くころせ……云々」文は特に強調されたものではないが、前作もそうであるが全編を通じて此の時代の豊国の筆は自由自在で好調である。

○「復讐奇観女達三日月於儼」、文化五年刊、山東京伝作、歌川豊国画。

こわい題である。当時「読本」と云うていさいの本があつて、作者は大体こつちの方に力を入れて、いろいろ漢文を交えて文章を凝らしたものである。従つて読者層も合巻の愛好者よりはインテリ階級が読者だったと思われる。(例の馬琴の八犬伝なども「読本」である)

然し、合巻ものによつては「読本」スタイルに凝つたものもあつて、この本なども完全に読本スタイルである。

これも明治になってからの博文館の「京伝三馬傑作集」に収録されている。絵の豊国と云う人もよく画風を変え、文化の後年から文政に入つてからは門人の国貞と共に一種独特の芸居風のくせのある絵を書いたが、人によつては後のものをあまり評価せず、寛政からこの頃までのものを一番油ののりきつた絵としている。こうした読みものの挿絵でも後期の緻密な絵よりも自由自在で面白い。

ところで三日月おせんであるが、またまた久方なる美しい人妻が悪漢黒塚鬼同次(くろづかきどうじ)につかまり田舎道の辻堂の柱に縛られ惨殺される。久方と云うのはいつも責め殺される役なのだろうか。ただの拷問のための責と云うのは殆んど無くて、すべて「殺し」を前提とした責であるところを見ると、当時の作者の目的は明らかに「殺し」にあつて、「殺し」をより惨酷にすればするほど「悪者」に対する読者の反感を深め、それが物語のテーマーとしての敵討ちをより効果的にする。云わば一つの演出だったかも知れない。実際にあり得た事ではないだろうが、物語りとしてもこうした責はサディズム以上のものがあつて極めて後味がわるい。

文章を引用しよう。

「かくて夜もふけ人どほりもたへたれば今は〇〇〇しときどうじは久方を辻堂の柱に縛りつけおどしつすかしつして様々にかきくどきたるが久方とはかくとくしんせず、かへすがへすきどうじをののしりはづかしめてとてとくしんせまじき様子なきにきどうじ大いに

怒りかはいさあまればにくさ百倍、どうでとくしんせぬからは生けおいては長く我が思ひの〇〇なりあー惜しいものだがしうことがないといひつつおいのうちよりかたなをいだして抜きはなし〇〇〇〇肩先あるいはひざ〇〇きに一寸二寸づつなぶりぎりにきりたるにぞ久方はあー苦しやたへがたやと……云々」

きどうじ「いてへかくるしいかそうであんべい、いちど思いをさせたのが一寸、二度思いをさせたのが二寸、なますのようにきさま〇べむ〇〇はれぬこれえんまどのちつとむごいをしますほどに少しの間そちらむいて知らぬふりしていてくだあれ」と云つたあんばいである。

此のあと、久方の幽霊が出没したりしてなかなか気味がわるい。

○「安達ヶ原那須野原米車九尾狐」、文化五年刊、山東京伝作、歌川豊国画。

これまた博文館の名家短篇傑作集と云うのに収録されている作品である。四十五丁で当時としては長い方の部類。

ここでまた蛇使いのまむしばあと云うのが出て来て女を蛇責めにする。絵は上下に変化があるが似たり寄つたりの構図で下手に大きなまな板あり仲間三人、一人は幼児をおさえつけ、一人は大きな出刃を手にとっている。上手縁側にばあがくわえぎせるで寝そべっている。すぐ前に穴が掘られ裸の女が杭に縛られ蛇責めにあつて

○「お夏清十郎風流伽三味線」、文化六年刊、山東京伝作、勝川春亭画。

これも長いものであるが、手もとにある本はひどく破損していて後半はちぎれてしまつてない。前半も所々落丁がある。

これも読本趣味に凝つた本で、此の頃からいろいろ敵討ちから歌舞

伎、いろものに傾向が變つてくる。これもその一つ。これは三馬が絵師の春亭ともめた有名な話（式亭雜記に書かれている）、その時の話では何でも三馬が八月から十月に版元へまわす原稿を五月前に作りあげ絵師の春亭へ届けておいたにも拘らず春亭が怠けてあとから出来た京伝の分（これが風流伽三味線である）を擬って画いた。そのため三馬の早く出来た原稿（於竹大日忠孝鏡、所蔵）が一切に間に合わなくなつて結局文化七年に刊行された。これがため三馬がひどくふんがいて文化八年まで絶交したが和睦後も殆んど春亭には画かせていない。

そう云ういわくつきの作品である。京伝自身は騒動には関係なかったようであるが此の春亭の画が実に達者である。所蔵の春亭の挿絵もののなかでは一番達者ではないかと思う。

これは女ではなくて継子（まきこ）いじめである。棒じぼりの形で箆に縛られた男の子の口をつまんで短刀を入れようとしている若い継母。そばで実子らしい幼児が玩具で遊んでいる。継子の男の子の襟がはだけて肩が露出している。

「おかかさん、どうぞかんにんしてこのなはをときおまんまをたべさせてくださいませ、どうもひだるくてなりませぬ、おじひでござる、おなさけでござるわいのう」

○「早道節用守」、寛政元年刊、山東京伝作画。

黄表紙もの。従つて敵討ものより一時代前であるから内容も全く異なる。絵も京伝が北尾政演と云つて重政門下にあつて政美と共に一流の腕の浮世絵師であつたおもかげを残している。作は京伝の黄表紙としては特に当り作でもないし、また特に傑出したものでもないようだ。版元は「写楽」の出版で有名な蔦屋重三郎である。これに芸者の棒じぼりが出てくるが内容はふざけたものであつて「責」ではない。極めてのんきで陽気な話である。

○「復讐安達太郎山」、文化三年刊、式亭三馬作、歌川豊広画。

挿絵の豊広は豊国と並んで、当時の歌川派の一方の雄。伎倆は、むしろ豊国より高く評価されているが、一般に人物の顔長く陰気なところがあり、また人気の投する役者似顔絵を画かず一般には豊国の方が人気があつたようだ。また豊国と違ふところは此の人、画風を交えず終始同じ画風で通した。しかし、名手と云つていいだろう。京伝と較べると三馬は自分では敵討ものをひどく嫌っているくせに、絵の構図は三馬の方がより血なまぐさく、よりリアルで氣味がわるい。（当時草雙紙の挿絵の構図は作者が作つてそれを浮世絵師が完成した）

前述の「於竹大日忠孝鏡」など責はないけれど殺しや悪病、幽霊の続出で大変怪奇趣味である。

「安達太郎山」はそれほどでもないが、若夫婦が冤罪でつかまり代官所で拷問を受けているところがある。

「……覚えなきとのいひはりければ代官はせめよとて恐ろしきせめどうぐかけならべ木馬ぶりぶりやがしぜめ（？）水責火責はいうにおよばず棒じぼりになして……云々」

お定りの代官屋敷の縁先で男は大の字に縛られ仰向きにされ腹の上に大石をのせられた上、口に水をつがれ割竹で叩かれている。

女は立杭に裸で縛られ若党に後から首をつかまえられる。同じく水を口に入れられ割竹で叩かれている。

○「谷汲観音利益仇討難有孝行娘」、文化五年刊、式亭三馬作、勝川春亭画。

此の方はもつとひどい。但し相当の破損本で、いたずら書などあり完全な状態ではない。落丁はないがいたずら書はどうも困る。

これは前にもあつた悪漢の横恋慕ものだがもつと悪どい。美しい若妻に横恋慕した悪漢が夫妻をとらえ、夫は裸で縛られ大

きな酒がめから酒を口につぎこまれている。酒責とはね。

女は浴衣で縛られ上から蚊張をかけられている。髪をふりみだし、片方の肩がはだけている。

次に男はとうとう殺され、女は大木に裸で十字縛り。男の首をつきつけられている。

結局これが敵討の発端になっている。本がいたんでいるのでよく読めず、大体的見当しかつかない。十五丁ばかりの短い話である。

○「島川^{しまがわ}太平^{たいへい}増補^{ぞく}仇討^{きうとく}御堂^{ごどう}詣^{よみ}末刻^{まうくわく}太鼓^{たいこ}」、文化五年刊、式亭三馬作、歌川豊広画。

式亭雜記によれば「読本まがいの趣向大はづれなり」と云っているから作者がはりきった割には評判よくなかったようである。

旅中の母娘が太平に襲われ母は松の木に縛られ斬殺、娘は崖から突落される。責はないが縛り、血斗、殺し、自殺等々そんなことのために書かれたような本である。

此の時代の特徴は敵役の悪虐非道もさることながら、敵討をする方の側も極めて執拗をきわめ、そのしんねりと執念深い事限りないものがある。悪因悪報も場合によっては話の筋には何等関係のない悪漢の近親にまで及ぶことまで屢々ある。大体後味のわるい話が多い。

此の点、本をいろいろ集めてみて十返舎一九のものは、同時代でも割合にさりとてあまり陰惨な光景はない。仇討ものも多く書いているが、あの敵討物語の全盛期にも、笑話や軽口風のものを出している。

沢山のもののなかだから、或は一つや二つはヒドイものもあるかも知れないが、大体温健派であるように思う。

○「父母^{おやのふたき}怨敵^{うたがひ}現腹鼓^{げんはらづつみ}」、文化二年刊、竹塚東子作、北尾重政画。

本の仕立は黄表紙であるが内容は敵討。前後編のうちの前の方だけで後の方十丁ほどは缺本となっている。

序文に曰く「今や報讐の稗史^{さいし}世に行はれて童児これを愛す（こんなものを童児に読ませたのかね?）、実にや忠をすすめ孝にもとづくる事、なほもて曳くが如し、しかし其冊中面白からん事を専にして死亡の体を多くする、頗る善を勧め悪をこらすの一助なるべけれど、君子は庖丁を遠ざくる語あり……云々」

御多聞にもれず殺し合いである。

絵の北尾重政は北尾派の祖浮世絵の大御所で他派の勝川春章、喜多川歌麿、門下の政演（京伝）等皆彼の世話になっている。此の頃はもう老人になってあんまり挿絵の筆を執らなくなる。

責ではないが若い武家の娘主従が道で雲助共に乱暴されるところを通りがかりの侍に助けられるところがある。猿ぐつわで衣服を乱した後手の若い女主従は責スタイルではなくて一種のあぶな絵趣味の感じを出している。

丹念に探せば蔵書の合巻のなかからまだ縛りの場面はあるかも知れない。

十返舎一九、南仙笑楚満人、感知亭鬼武、山東京山なんて人のもあるが蔵書のものにはそう云った場面はない。

尤も一九以外は一冊か二冊づつしかないので資料にはならないけれども。

ではこれから後期のものを見てみよう。

「増補続青本年表」と云うのを見ても文化をすぎ文政後期位からは絵は二、三を除いては国貞を中心とする歌川派で独尊されそれが全部同じような型にはまった絵を画く（その中でもうまいまじいのはあるけれども）。しかもあとになると国貞が二代目豊国になったり、その国貞を別の奴がついだりしてややこしくなる。挿絵のところには一々二代目だとか三代目だとか記していないが文化文政期のもの

とは絵が違ふからわかる。

作者の方も勝手に二代目を名乗ったりする奴がいて、さっぱり魅力がなくなる。

本の仕立ばかり豪華で内容はやたらに長くとても読む気にならない。幕末のものになると特にひどくなる。なにしろ長いから一つのなかには必ず何か出てくるに違いないし、その気になれば手に入り易いが、とにかく「資料」としてどんな点から見ても下らないので最初知らないで集めたものも、殆んど整理してしまった。その中に「貴」について印象に残ったシーンも幾らかあったから今、手もとに原本はないが参考書で思い出しながら書いてみる。特に幕末ものについては。

その前にこれはテーマから外れるが、一つ発見したこと。文化六年の「松緑高砂話」文化九年の「恋女房警討双六」何れも姥尉輔の作、この作者は合巻にはあまり登場しないが、これが有名な歌舞伎作者の鶴屋南北だと云われている。正確には四世なのであるが今日いわゆる大南北と云うとこの四世のことである。怪談ものの本の中までは此の二つがすごい。前後十年の敵討流行の影響もあるだろうが、ことお化けに関しては群をぬいている。

またこれから記す天保以後の幕末ものとの間に時期としては有名な柳亭種彦を中心とする文政中期以後の草雙紙デラックス版の時代があるが、資料が少く種彦、京山、或は歌舞伎役者の名で出されているもの等二、三宛所蔵しているが傾向が「人情本」的な淡いエロティシズムに流れていて前のような「貴」シーンは全くない。(蔵書の範囲では)敵討ものから風俗ものにはつきり傾向がかわって来ている。文政十二年からの種彦の「諺紫田舎源氏」などこれを代表するものである。そして概して物語が長くなる。

○「新編金瓶梅」、曲亭馬琴作、歌川国貞画。

これは長編もののうち天保九年に出た五集の一巻。例の金瓶梅を馬琴が日本風に脚色したもので天保二年から弘化四年までかかった長編合巻、その後も何べんも再板にかけられているから割合沢山残っている。作者の馬琴は此の時七十二歳、天保四年には右眼を、そして此の年には更に左眼を患い、しかも読本の有名な八犬伝その他多く併せ執筆中である。

本の感じも文化年代の合巻と較べてうんと感じが違つて来ている。国貞の画も緻密を極め型のきまつた絵、本の仕立は華美(天保改革の時一度もとに戻るが)。

「げに啓十郎が悪さかしきは、今に始めぬことながら、先にあだはなやうは吉を唆かして、遠く旅路に赴かせたる留守に、瓶子と密通して、遂に僅かなる金をもて彼と夫婦の縁を切らせて、さて瓶子を妙ちやうに預けおきし折、啓十郎はふなだての禍を恐れ、影を隠して久しく旅寝にありし故に、瓶子は曳水を入夫にして、豊かに世を渡るほどに、啓十郎は帰り来て、嫉く思へど、怨をいはず、却つて……(中略)……瓶子が居宅に來ぬるに及びて俄かに趣を更へ、責め罵りて赤裸にして鞭打ちこらし、あまつさへ下女に押しさげて、いとむごく使はれしに、瓶子は今更……云々」

画面縁側よりの柱に腰のもの一枚で縛りつけられた瓶子。これに啓十郎が棒をふりあげている。二人の妾がこれを止めている。

「もうよいかげんになされませ私らばかりちやございませぬもしおくさまがとめてくれとおっしゃったから参りました。おがみのごせうでござりますぞへ」

「かあいそうよ、まあまあおまちよ」とある。

国貞の画、いろはついていないが浮世絵版画の美人と同じようでは極めているに富んでいる。後期のものの貴シーンでは随一の傑作ではないかと思う。

とにかく大変セクシイである。文化年代の「殺し」のための責苦よりは温健で、きれいごとである。

○「怪談徒然噺」、天保三年刊、五柳亭徳竹作、歌川国芳画。

破損本で後半ちぎれてしまつてない。

作者の徳竹は主に役者名で発行する草雙紙の代作ばかりしていたようで二流以下の作者。画の国芳は国貞と並んでこれから幕末にかけての名手である。

頁をめくるといきなり発端に蜘蛛の巣のはった堂の中、腰の一枚の若い女が縛りあげられて三人の男に乱暴されている。一人は髪をつかんで撲り、一人は松明を手に持ち、一人は女の顔を蹴り上げている。堂の入口でこれをのぞく旅の僧。

これも女の様子、極めてセクシイで、風俗画風のもの。

旅の僧西心、とある山道で日が暮れ途方にくれて、通りすがりの荒果てた社に野宿する。

夜になって松明を先頭にして三人の男が社に近づいて来るので僧は驚いてかくれている。と彼等は社の天井へ上って行く。

「わきざしのきや○てうちたたけば、女はひいひいと泣き叫ぶ男いふやうまだがうがつきずしてくたばらぬとみへたりよくよくいんぐわな女め又明日の夜来べしとてかへりたり。ほどなく東も明らみ夜もあけたれば西心おそるおそる天井へ上り見れば年の頃二十三、四の女を丸裸にしてくくしあげ総身傷だらけになり泣いたり」

結局僧に助けられる。

○「関 太郎鈴鹿古語」、嘉永四年刊、楽亭西馬作、歌川国輝、芳員画。

嘉永四年と云うと一八五一年だからもう幕末も後期である。世界最初の郵便切手は十年前に英国で用いられている。つい少し前まで

嘉永生れの御老人も居られた事と思う。

作者西馬は前述の式亭三馬のものを多く出版していた書肆の主西宮新六（年代に若干疑もあるもので二代目かも知れないが）、文政十二年火事にあい家業が衰退、三馬の世話で作者になり例の俳優ものの代作などしていたらしい。

無論、著作権などうるさいことのない時代。特に幕末になると先人の真似模倣、複写は自由自在。西馬もダイジエストの名人。これも文化初期の敵討ものの趣向をいろ／＼取まぜ複雑にしたような作品である。

画家は無名ながら幕末のものとしてはよく画いている。

主人公関の太郎は山賊の親分で、幕末のものでは「白縫譚」など随分惨虐な場面が多いが、これも殺し、幽霊の多い話である。

文化の先人たちの残した資料が如何に豊富な殺しの趣向をのこしたもののか。

お店の若夫婦が山賊にとらわれ、大きなつづらに押込められるところ。刀をぬいた山賊共、蹴ちらかされたカルタ。

つづらで山道を山賊の本拠に運ばれる。

山賊の大將の前に先ず女が引出され責められる。

別の場所若旦那が責められる。

次に男の前で責められる女。

次に縄つきのままとう／＼二人共首をきられた上、峠から突落さ

れるところ。

芝居絵に似た身のこなし方で画かれている。

後の方また別の話だが、夜盗に襲われる母娘。娘はつづらに押込められ、母親がそれを止めようとすると賊は刀で腕を斬り払う。つづらに下った、血まみれの二本の腕は無気味この上ない。前述の京伝のもののなかにこれと全く同じ趣向のものがあつた。

娘は野原に連れ出され（人魂が盛にとんでいる）縛られたまま、

賊に乱暴されようとする。猿ぐつわで賊に着物の端をおさえられているので肩がぬけている。帯もほどけかけている。

物語の方、これは通行人が来て助けられる。

更に後の方、今度は山賊の本拠で脱走しようとした囲い女（もとは民家からさらって来た）がつかまって私刑を受けようとしているところ。

首領の前に引出され大勢の山男に囲れて女は大きなマナイタのような形の木製品に裸で手足共縛りつけられ、足の甲に釘を打たれようとしている。

山賊はうまいが女の姿態、表情等国貞、国芳に遠く及ばない。芳員の画である。同じ無名でも前半の国輝の方がうまいと思う。

○「青柳錦花皿」、嘉永四年刊、十返舎一九（二代目）作、歌川芳綱画。

作者の一九は二代目であって「ひざ栗毛」の一九ではない。画も無名。大体芳のつくのは国芳の門下である。

これもダイジェスト版で、要点は有名な紅皿、缺血の話らしい。従ってその通りの場面はひととおり出て来る。

石塔にくぐられる缺血。おまけに部屋の柱に裸で縛られ、いびられていところ、草履でうたれているところ、蔵に押込められるところ、危く乱暴されそうになるところ等画があるが画が如何にも拙劣で迫力は全くないと云っている。

○「雨夜四谷雑談」、嘉永四年より刊、作者は柳下亭種員、河竹其水（黙河弥のこと）、仮名垣魯文と三人の連作。画は国貞（二代目）、国輝、芳虎。

本の仕立は豪華で大変凝っているが、画は前と同じく実にまづい。此のうち河竹其水の執筆した安政七年に出た分に明烏や敷島式のや

りてばあの折檻場面がある。

○「菊寿童 霞 盃」、弘化四年刊、山東京山作、歌川豊国（二代目、初代の国貞のこと）画。

作者京山は京伝の弟。多作の割に後世傑作と云われる作品は殆んどない。此の人のものは風俗ものが多く、文化の敵討時代はともかく、惨虐なものはあまり書かなかつた。大変長命であつた。

久米の介とお梅が立杭に縛られ、いしもりの一平に責められるところ、何処からともなく矢が放たれ一平は絶命する。

三月月が出て男のひざに顔を伏せる女、長襦袢の模様、後手の縄等きれいごとである。

○「新局九尾伝」慶応二年刊、為永春水（二代目）作、歌川国貞（二代目）画。

春水はこれまた二代目で、いわゆる「春水」ではない。国貞も同じ。

足利持氏の寵妾玉藻（昔の玉藻前の代身）の矢疵より黒氣たなびき尾の字を名前とする九人の美少年となる、どこかで聞いたことのあるような話だ。前述の京伝の九尾狐にも似ているし、殺生石にも似ているし、八犬伝にも似たところがある。その他当時のもので似たものを探したらきりがない。

蜘蛛のおばさんにつかまっていぶし責にあっている女。納屋の柱に裸で縛られた女。

賊にいましめられる大店の娘。

等あるが特に取上げて云うべきところなし。本の片すみに「朝鮮牛肉丸」などと広告あり、そろそろ文明開化のにおいがして来る。と同時に浮世絵の滅亡をはっきり示されたような雑な絵で情ない。

○「雲竜九郎偷盜伝」、安政五年刊、樂亭西馬作、歌川国貞（二代目）画。

長い話で終りの方はたしか作者も画も交っている筈。前述の関太郎と同じ妖賊ものである。白縫譚など幕末の後期のもの、いろいろあったがさして愛惜を感じないので多く整理をした際出してしまったのでよく覚えていない。関太郎と同じような趣向で長い話の中に「責」は相当ひんぱんに出て来たように思う。ドラをたゝいて眠らせないやつや、猛犬にくい殺されるのや、山賊につかまって私刑を受けるもの、盗賊に襲れる商家。或は山賊に売られた女郎屋でやりてばあに裸で責められる女等々。幕末の長編ものはすべて似たり寄ったりで文化年代に見られたものをいろ／＼交ぜあわせ画をうんと下手にしたものと思えば間違いない。然し沢山のものの一つ二つに優れたものも或はあるかも知れない。

○「白縫譚」嘉永二年より刊、柳下亭種員作、歌川豊国（二代目）画。

作者没後も種彦（二代目）、種清と変り、画も同じように変った。初刊より三十五年にわたり明治に入り五十何編かで自然消滅のような形で無くなった。と同時に「児電也」その他の多くの長編草雙紙も同じ運命をたどった。

今手もとにないのでくわしくは述べないが、これは当時のものの中なかでもエログロのあくの強いもので無気味な場面続出であった。内容は無論ダイジエストで黒田家の御家騒動あり、例の蜘蛛あり切支丹の七草四郎あり、美男小姓あり、また田舎源氏の影響も受けていると云ったしろもの。

殺し、お化けは続出だから、「責」も多く出て来た。

四谷怪談もどきの前妾の虐待。それから愚か者を間男に仕立て無

実の殺害。

或は足利將軍の明から贈られた愛妾を嫉妬深い正室が縄をかけ奥殿で賜殺しにする。

上半身をむかれ血にまみれた女など此のところの画は特にすさまじかった。

又一ツ家まがいのところもあつて悪婆が特效薬を求めてはらんだ女を捕えんとするところ。

女がはりつけになり別の女に槍でさされるところ等々ヴァラエティに富んでいた。

画の構図や文の説明が出来なくて残念であるが仕方ない。幕末の長編ものはまだ沢山見られるので極めて入手し易い。

白縫譚や児雷也など特に和本関係の本屋ではよく見かける。それだけに資料としての稀少性は弱いかも知れない。

好事家は自分で見つけられて手に入れて見た方が早いかも知れない。幕末の長いものには大抵どれにでも一ヶ所や二ヶ所は必ず責が出てくるので一々とりあげていたらきりが無い。最後にあと一つあげて文をまとめたい。

○「怪談春の雛鳥」、弘化四年再板もの、林屋正蔵作、五雲亭貞秀画。

怪談の正蔵と云われた人である。初板の日は不明だが、大体文政の人である。

怪談の短篇集で、おしまいの方は作者も万享応賀、歌川豊国（二代目）画となっている。

これにも三、四ヶ所は縛り絵が出てくるが一ヶ所だけ、今迄と違

った構図がある。

幼児とその母親が田舎道の地藏の前で悪漢に襲れ、幼児は後手で

木に吊され、女は十の字に棒縛りされて仰向け様に帯を引張られて
いるところ。下が乱れてアブナ絵風のおもむきがある。

話の筋では危いところを通行人に助けられることになっている。
いろ／＼と長くなった。このうちの二、三を取上げて、原文の引
用と構図の説明をもっといいねいにやった方がよかったかも知れな
いが総花式になってしまった。

今回は一々探る余裕がなかったし、自分自身があまり興味を持っ
ていないもので「切腹」その他については取上げなかった。

幸にして好評を得たならば改めて資料の中よりたんねんに探り出
してこのようなやり方でやって見るつもりである。

なお、別の機会、「読本」についてもやって見たい。

奇譚クラブ旧号の在庫案内

本誌は復刊以来、すでに三十号を数え
ましたが、現在既刊の中左記の通り在庫し
ておりますから御入用の方は、お早い目
にお申込下さい。既刊の中、すでに若干の売
切品が出ておりますが、売切品の補充は絶
対に出来ませんし、在庫している中でも、
残部の僅少なものがございますから、欠号
は今の中に御求め願います。尚、各月号の
目次は、最近号の表紙裏、目次裏に掲げて
ありますから御参照下さい。

★復刊号の分

復刊第1号 (昭和30年10月号) △売切▽
復刊第2号 (昭和30年11月号) △売切▽
復刊第3号 (昭和31年4月号) 定価二百円

復刊第4号 (昭和31年5月号) 定価二百円
復刊第5号 (昭和31年6月号) 定価二百円
復刊第6号 (昭和31年7月号) △売切▽
復刊第7号 (昭和31年8月号) △売切▽
復刊第8号 (昭和31年9月号) 定価二百円
復刊第9号 (昭和31年10月号) 定価二百円
復刊第10号 (昭和31年12月号) 定価二百円
復刊第11号 (昭和32年1月号) 定価二百円
復刊第12号 (昭和32年2月号) 定価二百円
復刊第13号 (昭和32年3月号) 定価二百円
復刊第14号 (昭和32年4月号) 定価二百円
復刊第15号 (昭和32年6月号) 定価二百円
復刊第16号 (昭和32年7月号) 定価二百円
復刊第17号 (昭和32年8月号) 定価二百円
復刊第18号 (昭和32年9月号) 定価二百円
復刊第19号 (昭和32年10月号) 定価二百円
復刊第20号 (昭和32年11月号) 定価二百円

○後述

原文引用のうち○は原本虫くい破損。或は汚点のため判読不
能箇所。

参考書、原典の他

新群書類従第七書目

草雙紙のいろいろ (石田元季著)

怪奇草雙紙画譜 (尾崎久弥著)

江戸年代記 (磐瀬玄策編)

黄表紙百種 (続帝国文庫
鈴木利平編)

早稲田文学草雙紙の研究

「以上」

復刊第21号 (昭和32年12月号) 定価二百円
復刊第22号 (昭和33年1月号) 定価二百円
復刊第23号 (臨時増刊号) 定価二百円
復刊第24号 (昭和33年2月号) 定価二百円
復刊第25号 (昭和33年3月号) 定価二百円
復刊第26号 (昭和33年4月号) 定価二百円
復刊第27号 (昭和33年5月号) 定価二百円
復刊第28号 (昭和33年6月号) 定価二百円
復刊第29号 (昭和33年7月号) 定価二百円
復刊第30号 (サド特集号) 定価三百五十円
復刊第31号 (昭和33年8月号) 定価二百円

(代理部だより)

○本誌復刊号は全部送料は当方にて負担い
たします。故、誌代のみお送り下さい。六冊
以上一箱にお求めの方には、手札型写真三
枚、十二冊以上一箱にお求めの方には、キ
ャビネ版写真三枚贈呈いたします。
○休刊前の本誌は全部売切れてしまいまし
た。今後の補充はつきかねます故、御諒承
願います。

(創 作)

受 刑 の 肌

近

藤

一

女は二十六、七でてもあろうか、しっとりとした落着きを見せている。黒のスーツの襟許に純白のブラウスのレースが覗いて見えるのが清潔な感じを湛えていながら同時に又、肩や腰の辺りの丸味を帯びた厚味の豊かさは処女のものとは違った淫蕩な色香を溢れさせている。

この夜のために、親友の藤江亮が特に紹介して寄越した女である。女の和服姿の手札型写真の裏面に

此の女を伊吹小枝子として貴下に託す。
存分の糺明の後、処断一切随意。但し、
相可成は天地無用のこと。

杉田慎治殿

藤江亮

とだけあり、女は紹介の内容を知ってか知らずにか封筒ごと杉田に差出したのである。相も交らぬ親友の歯切れのよい遣口に、慎治は思わず笑をもらした。

一体この女は何者？牙を研いで待つサディスト達の中へ身を投出して責苦を甘受しようとする望んだのであろうか？慎治はもとより親友を疑ぐった訳ではない。しかし、言葉少なに控えている女の物腰に備わった気品と澄んだ瞳は不可解であった。

女の正確な氏名、住所は勿論、年令、職業も知る術はない。また知ってはならぬ約束を亮と結んでいた慎治は冷然と云った。
「お肌を拝見させて頂きましよう。」

女は一瞬、息をのんだ様子であった。が、すぐに大きく頷きながら幽かに「はい。」と云った。

肥り肉で雪白の肌であった。潤いを含み濡れているように光を反射させる肌であった。凝脂というのであろう、ムッチリと艶のある丸味が、どんな僅かな刺戟をもすぐ弾き返そうとして一本の小皺さえ見せないでいた。

ブラウスの袖に腕を収めている女に慎治は声をかけた。

「貴女は湯冷めなさる性質ですか？ でなかつたらお風呂へ入って来て下さい。衣装は風呂場へ廻しておきます。よく温まって念入りにお化粧をしておいて下さい。晩の食事は会

が済んでからにしましょう。醜態を演じられてはお互いに迷惑ですからね。」
女は「一々云い付を噛みしめるように頷いていたが、促されて風呂場へ立った。」

広間の中には五十名程の人々が或る期待に息の詰まる想いをしていた。正面の舞台は、好事家のR氏を後援者に慎治達が揃えたもので、小さい劇場など及ばぬ程の設備が整っていた。殊更に暗くした観覧席には女性の姿も十数名と数えられる。一様に煌々たるライトを浴びている舞台を凝視している。

黒いガウンを纏った若い男が曳かれて来た。細面、色白、貴公子然とした長身を追い立てられて歩む姿は、いかめしい刑事達に対照的に痛々しい。マゾヒストのY氏が扮した囚われの切支丹に観衆は魅せられてしまった。

「御禁制の切支丹の輩、御領内において秘かに勢を得んとすこと誠に上を畏れ

ぬ不届な仕業。よって厳しい詮議をなすにつき、本日は面白い趣向を考えついた。一昨夜捕えたこれなる男、信徒共の隠れ家を一向に明かそうとせぬ強情な奴。流石に日頃神父などと云われる者故、その信仰の固いこと感服の至りじや。その志を愛で、常の踏絵に代えてこの男を土足にかけさせようとの所存だが生身とは云え異教を奉ずる人非人には些かの情も禁物じや。思うさま踏み蹂る事がお上への忠義であろうゾ。」

役人の合図で竹の鞭を手にした捕手達が、ばらばらっと観客の中へとび込んだ。一人、また一人、観客席から女が追い立てられて行く。廻りの男達は、同伴者までが何の庇護も与えず、女を舞台へ押し上げるのを見送っている。すべての観客は同時に出演者であるのがこの掟であった。

十六人の女が舞台上に上った。興奮に頬を上げさせているサディスティンもあるし、また恰も自分自身がY氏と同じ立場に置かれたかのように小刻みに慄えながら喘いでいる二号風の女もいた。

神父は女達の眼前で衣服を剥がれた。ああっ！耐え難い羞恥の悩乱に神父の表情は歪む。身を揉んでみても捕手の逞しい腕は微動だもしない。青い静脈の浮き出すような両腕を捻じ上げられてシャツが剥ぎ取られた時、



囲んだ女達の間から、きやアッ！と悲鳴が上がった。一面に肌に烙きついた苛責の跡。縦横に走る赤紫の鞭痕、蒼い棒痕。黒く斑点をなすのは何の瘡みであつたろうか。女達の眼は光の中に妖しく燃え上る。獲物を前にした歓喜と期待、羨望と屈辱の幻想、同情を遙かに超える刺戟の激情等々様々の感情が異なる眼の中に輝いている。

神父は環視の中で衣服を剥ぎとられていた。腰部を僅かに白布で覆うのみの裸身は荒縄でぎりぎり後手に縛められて行く。

神父は女達の足の下で呻く。

「何を愚図々々しておるのかッ！」

怒声と共に竹鞭が女の背に鳴った。女は二歩進み出て、しかし足首まで括られ俯伏して蠢く神父を踏み蹂るような真似は躊躇された。

「早く踏め！ 踏むんだ！」

「ハイ……でも……」

「うるさい！ 貴様、切支丹だな？ おいッ！」

「この女は切支丹だ。召捕れッ！」

「あッ、何を！ ち、違いますッ！ 許して、許して下さいッ！」

淑やかということは罪になった。

「そこな女。其方は異国の服を身に纏い居るが切支丹ではないのか？」

「バイ、私は転び伴天連のマリアでございます。」

「何？ 転びと申すのか？ 偽りではなかるうな？」

「お役人様、私にはイエスの教えも大事でございますが、それよりも私の命の方が遙かに大事でございます。」

「ならば其の方、今此の男を踏むか？」

「オホホ、いと易いこと。命の助かりますことなら……。私は此の世の娛みをもっともつと味わいとうございます。」

マリアはハイヒールで俯伏の神父の尻を踏む。神父の顔は人々の注視に晒されて歪む。

「悪魔よ。神を売った魂は永遠に地獄に墮ちるのだぞッ！」

悲痛な叫びも女には通じないのか。

「何を申されますのやら。ウフフ……。貴方は喜んで責苦を受けられればよい御方。私の足の踏み様が神の試練とは思えませぬのか。私は娛しい。そして神を守った貴方は地獄の苦しみ逢つて責め殺されて了うのでございませ！ これが世の習慣でございませう。ほ、お役人様。命冥加な女伴天連の喜びの模様、ようくお目に留めて下さいませ！」

神父は女の蹂躪の律動に合わせるかのように、うおッ！ うおッ！ と獣の様に哭いた。

踏まなかった女が二人、ためらいながら申し訳に足をかけただけの女が一人、引据えられていた。

「三名の者よっく聞け！ 其の方共切支丹のこと明白となった。御禁制を犯した罪は決して許すべきに非ざるが、もとよりお上にもお慈悲がある。まして其の方共は女の身ゆえ、今日以降心を入れ替え我國古来の教えを奉ずるに於いては軽きお咎めにて許しつかわすがどうじや。」

和装の女は長褌袴と足袋、洋装の女はスリッパとストッキングに剥かれ、高手小手の縛めに緊い猿轡まで噛まされた。

呼び出された連れの男の手に巾広の革鞭が一本づつ握らされた。

「ええい！ 打て打てッ！ お上の慈悲じや！ 女共が転ぶ迄打ち据えるのじや！ お前達の恋しい女を助ける道はこの外にはないのだぞ！ 打てッ！ 打つのだッ！」

役人が絶叫する。

びしッ！ びしッ！ びゅッ、びゅッ、びゅッ、びゅッ。

役人の言葉に男達は鞭を振る腕に力を籠める。女はのけぞる。のめる。右に左によろめく。膝をつく。ぼったり倒れる。匍う。転がる。そして悶える。

十回の鞭打ちで猿轡をとる。誰も改宗を申し出ない。

「ええいっ！手ぬるいぞ！打て打てっ！」
びゅっ！びしっ！びゅっ、びゅっ！
また十回。

二十三、四の、三人の中では一番おとなし
そうな女が淡黄色の長襦袢の裾を乱してのた
うち廻りながら「水、水っ！」と云った。役
人の目くばせで薬罐と湯呑みが眼の前へ。

「それ、水が来たゾ！」

「水、水」女は呻く。頸をのばしてにじり寄
る。

「転ぶか？ どうじゃ。水が欲しくはないの
か？ 水だ、水だゾ！」

「水、水」

「転べ！ さ、転ぶのだ！ いいな？」

女は、ごくつと唾を嚥みながら頷いて、薬
罐に向つて口をあける。とくとくとく、湯呑
みに注がれる水を他の二人の視線が追つて、
強い意志にも耐え難い責苦に喉がぐつと悲し
く詰まる。

「一人は転んだゾ！ 転んだぞ！ さ、褒美
の水だ、吞めっ！」

役人は喘いでいる女の顔に湯呑みの水をば
しやっ！ とかけた。

三人の女達、それに裸身の儘の縛めに間断
のない呻きを上てていた神父の顔に、一瞬、
悲愁が浮かぶ。

「水、水。」女が喘ぐ。役人の足が匍い寄る女
を蹴倒し、頭をぐいぐい踏み付ける。女の濡

れた顔がくしやくしやに歪んで、尚も、
「水、水。」と求め続ける。

「えい、見苦しい。転び女を運び去れ！」

「お白州を窺う怪しい女、引連れしました。充
分に御詮議の程を。」

捕手の言葉に役人の眼がきらつと光る。門
番に両腕を抑えられた女、それこそ伊吹小枝
子であつた。女の匂う美しさがあつた。湯上
りの頬にほんのりと紅を刷いた気品と艶。紫
縮緬無地のお召に純白の西陣の帯を締め紫縮
緬の御高祖頭巾に面を包んでいる。もとより
類稀な美貌と云うのではなかつたが、役人の
心に此の女を汚辱の泥沼へ叩き込んでやろう
という欲望を起させるに充分な華麗さがあつ
た。

「頭巾を取れ！」

漆黒の髪は束ねて背に垂れていた。

「ふふん、なかなか気の強そうな女だが、
すぐに吠面をかかせてみせようぞ。」

責苦に苛まれた二人の女が引き摺られて来
た。三十二、三の女は襟首を掴まれたらしく
緋縮緬の長襦袢の胸がはだけて背中まで露わ
にされていた。裾も乱れ、湯もじは剥ぎ脱ら
れたのか見えない。足袋もいつしか脱がされ
向うずねから血を滲ませながらも足の裏を見
せる不躰をする程の悩乱には陥っていなかつ
た。若い方の女は二十才になるやならず、黒

のスリップの脇ホックがはずれ、ストリング
は千切れて、縄目にまつわりついているほか
り、黒いブラジャと黒いパンティが肌の白さ
に映え、首筋やウエストのくびれの辺りにま
で苛烈な鞭跡が真赤な尾を曳いていた。

「何と惨いことを……。」

「どうじゃ。この女共を見知っておるか？
真直に申し述べぬと、其の方も憂き目を見る
ぞ！」

「はい。同じ信仰に生きる者、両名共ようく
存じておりまする。」

「両名共確かに切支丹と申すのじやな。」

伊吹小枝子は神妙であつた。少しも悪びれ
る処もなく履物を脱ぎ白州の荒席に正坐して
いた。稍離れて二人の女が引据えられ、足首
の縄を解かれた神父が六尺棒に追われてよろ
よると曳かれて来た。

「おおっ！ 其方も捕われたのかっ！」

悲痛な声をふり絞る神父に、小枝子は静か
に答えた。

「はい、貴方様の安否を気遣う余り不覚を取
りました。貴方様がお召捕りになられました
今は、もはや逃れる途もございませぬ。私も
御一緒にイエス様の御許へお伴致します。」

小枝子は役人を仰ぎ見て云った。

「御法度を犯しました大罪人の私共故、もと
より重きお仕置は必定。張付け、火焙りも喜

んでお受けを致しまするが、唯一つ、それなる裸形の囚人は私がこの世の夫と定めましたる者、何卒お情をもちまして裸体の御処刑はお許し下さいますよう。囚衣をお許し頂ければ、せめて私の衣服など着せることをお許し下さいませ。」

余りにも神妙な小枝子の願いに役人は神父に囚衣を着ることを許し、二人の女達も身づくろいを許された。四人は荒席に正坐した。「四名の者、引廻しの上磔刑に処す。日取り等は追而沙汰致す故、牢に下って休息するがよい。いずれ明日からは残党共の行方を逐一白状致させるからのう。」

「ははは……それは無益でございましょう。」
「何？ 何と申すっ」

いつの間に取り出したのか、小枝子の手に黒塗りの短銃が握られ、びたりと役人の胸に向いていた。

「ははは……。お静かになさいませ。お命に關りまするぞ。」

歯嚙みする役人達を後に神父と二人の女は促がされて外へ。そして遂に逃れ去った。

小枝子は、激しい折檻に呻いていた。

三人の逃れ去った後、刻々と数を増す捕手に包囲され、棒で打たれ、短銃を叩き落とされ、幾人もの捕手に折重って抑えつけられた挙句、雁字搦目に捕縄を掛けられてしまった

のであった。

役人達は入替り立替り神父達の隠れ家を白状させようと弓の折れを振り下ろす。

ビシーリ、ビシーリ、ビシーリ。

びしっ！ む、むう。びしっ！ むううっ！

「い、幾ら、お尋ね、なされようと、私の、私の口から、お聴きになること、無駄でございましょう。でも、お役人様、お腹立ちは、御尤も。お氣持の癒えますよう、何卒、何卒、御存分になさって下さいませ。」

十数人の責手が相次いで加えた折れ弓の折檻も遂に小枝子の口を割ることはできず、きつと唇を噛んで堪える小枝子は白州をのたうちながらも悲鳴すら上げずに呻き廻っている。自ら唇を手にして傍に降り立った役人の間に、喘ぎ喘ぎ答える小枝子を見て、役人の口許に冷い笑みが浮かんだ。

「天晴れな申し条。女ながらも流石に切支丹の頭領じや。残党共の隠れ家はもう聞かぬ。

が、必らず探し出して極刑に処す所存。其の方の処刑は拙者の腹の癒える迄存分に苦しみを味わせてからのこと、其の方も伊吹小枝子と云われる身なら、決して音を上げるではないぞ。」

「此奴の口を割る名案はないか。」

役人の間に、人々の間から声が上った。

「天井から吊るして錘をつけてやれ！」

「遠慮はいらないぞ。逆吊にして二、三人でひっぱたいてみる！」

「三角板にのっけて、石の三枚も抱かせてみる！ 石抱きなんかア、此の女を逃したら当分本物は演れねえぞ！」

「正真正銘の海老責めを見せてくれ！」

「面倒だ。片っ端からやれやれっ！」

責める身の役人も責められる身の小枝子も血行の逆流するような注文に、心臓をぎゅつと絞られたように感じた。

切支丹詮議のために神父蹂躪、改宗強制のために女囚折檻、そして小枝子を十数人も入替つての鞭打ち。観衆の体内に在るサディズムもマゾヒズムも激しい刺激に沸き上って、場内には息苦しい迄の興奮が充ちていた。

「お待ちなさい。そんな無駄なことをしても、何にもなりませんヨ。」

冷やかな嘲笑を唇に浮かべながら、転び伴天連のマリアが云った。

「何だどっ！」

「無駄とは何だ！」

「お前も逆さ磔にしてやろうか！」

「愚かなお人達。いずれは極刑に処される女でも今はまず口を割らせることが先ではございませぬか。責殺するのは容易でも、か弱い女の身に逆吊り、石抱き、海老縛りなどは、口を割らせるより先に息の根を止めてしましますぞ。女には女の責め様がございます。まあ

私の仕方を御覧にな
って下さいませ。」

かなりの長い時間
責め抜かれた小枝子
は縛めを解かれても
ぐったりと倒れ伏し
ていた。下役が両脇
を支えて立たせ、マ
リアが帯に手をかけ
ると、それでも流石
にマリアの意図を識
ったのであろう、残
された力をふり絞っ
て抗った。両腕を捻
じ上げられているの
で、勢い抵抗は下半
身の烈しくぐねりに
現われた。

「ゆ、許して、嫌、
嫌っ！ 裸にするの
だけは許して。」

白縮緬の長襦袢に淡黄色の扱帯を締め上げ
た躰は、胴のくびれと対照に胸と腰を盛上げ
せ、身悶える度にムクムクと蠢く豊かなヒッ
プの膨みは、より淫虐な責めの欲望を咬らせ
る挑発にしかならなかった。小枝子も或いは
それを意識しているのかも知れないが……。
「お願い、許して、許してエ！」



「待てっ！」役人が声をかけた。

役人自ら小枝子を括り上げる。帯がとり去
られただけにきっちり合わせられた手首は
頸筋に近く、肘は二の腕を制されながらも大
きく張っていた。役人は後手にした小枝子を
仰向に押倒す。背に廻された腕が下になって
豊かな胸の膨みを更に盛り上げて見せた。

腰を揺り上げてのけぞった。

「死太い奴、云え、云えっ！」

役人の手から鞭がとぶ。

びしっ、びしっ、びしっ、びしっ、びしっ、

びしっ、びしっ。

仰向の小枝子の躰に息つく間も与えない。
胸に腿に、下腹に。

足袋を脱いだ役人
の足が、小枝子の顔
を圧し、形良く整つ
た鼻翼を指に挟んで
揺し廻す。

「裸に剥かれるのは
それ程厭か。ならば
云え。切支丹共は何
処だ、何処へ逃げた
のだ！ ええいっ！ こ
れでも云わぬか！」

鼻の千切れる程の
痛み、女の最も美し
かれ、と希う顔に足
をかけられる屈辱、
そして甚しい呼吸の
制約に、小枝子の下
半身は精一杯の悶え
を見せる。たしなみ
も忘れ果てたように
白い脛を摺り合わせ

うっ！ うっうっ！ うわっ！ うっ！
わっ！ 悲鳴を上げる余裕もない。吸い込んだ空気が一瞬詰まり、遂に吐き出される隙を見出せないであろう。

「どうだ。まだ云う氣にならぬか？」

うっ！ うーっ、あうう、うわーうっ、うううっ、あーああっ、ううっ！

鞭が止んで、始めて呻き声が高くなった。

柔らかな線に包まれた豊満な女体が、僅かに右左に揺れながらの苦悶だった。

「云え！ 切支丹の隠れ家は何処だ？」

「あーう、うっ、うー、ううっ、うっ」

「も一度、鞭の味が欲しいのかな？」

「嫌！ 嫌ですっ！ ううっ！ あーっ！」

「隠れ家は何処だ？云わぬか？」

「ごめんなさい。ゆ、ゆるしてっ！」

役人の眼が妖しく光った。

「よし。云わぬでも良いぞ。儂も聴かぬ故、其方も決して云うではない。良いな。」

役人が手にした鞭を捨てたのを見て、足許に打ちのめされている小枝子の面上に、ほつと安堵の色が浮かんだ。云えぬ筈の隠れ家を追究されて、呻き声すら断続的にされる加虐を誰が歓喜する筈があるうか。

役人が座に戻って目で合図をした。小枝子は噤り上げていた。捕手が後手の縛めを解くとそつと袖口で眼の端を抑え、それから二の腕と手首をいとおしそうに撫でた。

小枝子に一息つかせておいて、捕手の手は扱帯にかかった。

「あっ！ 嫌っ！ な、何をなさいますっ！」

「神妙にしろっ！」

突然の急襲に、さつと顔を硬張らせた小枝子は、安堵していただけに抵抗する間もなかった。襦袢の襟をぐいつと掴まれて丸い肩が露わになる。肌は細やかに、そして抜けるように白く光った。こんもりと張り出した胸乳は、腕を伏せたようなという形容がびつたり的美形でありながら、しかも硬さは全く感じられなかった。

「ええい！ それも皆脱がして了え！」

足袋は勿論、腰巻も許されなかった。

小枝子は、しかし、ナイロンのパンティを肌につけていた。

「此奴め、躰は日本の女のようにだが、心を異教に売り渡して、ここまで異人にかぶれ居ったか。」

「見せしめだ。女を柱に括りつけて晒し者にしろ。」

パンティ一つの小枝子は磔柱の下まで曳かれて行った。両腕を伸ばし手首、肘、腕の付根をぎりぎり横木に縛りつけられた。

「そりゃ何の跡だ。云ってみな。」

「そうじばたしたてちや何も見えないぞ。」

人々は口々に勝手な言葉を吐いて段を昇り降りした。

「とつくりと見て下さいましってな、胸をつき出す位するもんだ。」

「泣くな！ 切支丹でも恥ずかしいと思うのかよウ。馬鹿ア！」

或いはまた、白く盛上った下腹や太腿に鞭を当てて、「動くなっ！ 牝豚め！」と罵る者もいた。

肩から腋の下へX字型に縄がかけられ、小枝子は柱に縛りつけられる。乳房の下とウエストのくびれを幾重にも縄は柱に巻きつけて行った。人々の期待通りに白布が小枝子の皓歯を割って押し込まれ吐き出せないようにされた。鼻翼はびくびくと膨らんで空気を吸い入れた。

太腿に縄が廻り、しつかりと柱に止まったが、膝も足首も自由であった。

「お前は、あの伴天連の女房だと云ったな。お前の願いどおり、あの男の裸は許してやった。その代りにお前が裸で磔になるのだ。嬉しかろう。どうだ。女の恥を晒した上に苦しみがいて死んで行くのだ。その高慢な顔も自らの女の味を味わいながら物笑いになって死んで行くのだ。覚悟しろっ！」

小枝子の立っていた台が、ぐいっとはずされた。

一瞬、豊満な女の身体は縄目に抑えられながら、ずずっ！ と磔柱に沿って降下した。

さつ！と上った顔もすぐまたがつくりと項垂れた。自由な両脚が腿をすり合わせ、頻りに足の置場をまさぐって宙に踏み続けられた。

小枝子の処刑柱の下では、役人になった転び伴天連のマリアによって男の切支丹詮議が続けられて行った。思い出したような悪罵や嘲笑を浴びながら、取り残された淋しさと、被虐の快感のうちに、小枝子は全身の痺れが次第に激しくなっていくのを覚えていた。言葉奪われた軀を、皆を見下す高さに括りつけられていては、許しを求める術もなく、間断ない苦痛に堪えきれぬ呻きを、あうう！あうう！と喉の奥で押し殺しつつ、いつまでも磔けられていた。

予定された行事の総てが終って、群衆も残らず散り去った後に、なお美囚は肉体を十字に架けられ晒されたままでいた。白布を紅唇からはみ出させた顔は俯向いて頸を胸に接していたし、呻き声は疾うに途絶えていたが、丸い腹部の膨みがものうげに波打ち、時折足の指がひくひくと蠢くのは、責苦を耐え抜いた神経の意識を失わぬ徴なのであろう。

夜も更けたらしい。冷えた風が受難の女体を囂って取り包んでいた。

「何だか貴方が忘れられなくなりそうね。」

小枝子の寛いだ物云いの中には慎治に対する驚く程の親しみが窺われた。訝しげに顔を見守る慎治の視線を避けるでもなく眼をそらして小枝子は静かに云った。

「貴方は酷い方よ。私は今迄こんな虐められ方は初めてでした。本当に滅茶滅茶に虐げられたって感じね。貴方のような芯から冷酷非情な方は、私には決して忘れられないわ。」

「僕だって君を忘れないさ。」

「愚かで醜いマゾヒストですものね。」

「ひがんだね。」

「そうじゃないけど……。でも裸にむかれて恥を晒し出してしまったんですもの。誰だって気違い女とは思わないわ。」

「だから僕を恨んで忘れないのかい。」

「そうなれば嬉しいのだけど……。」

私は自分で望んでこちらへ伺ったのですもの、酷い目に逢うことはある程度覚悟して来ました。自分のマゾヒズムに相当な自信も持っていました。私が鞭打ちの拷問を受けたのは貴方を入れて十六人だっではつきり覚えてるんですもの。入れ代り立替り出て来る男の方に、もっともつと強くしても大丈夫よって誇らしくさえ思っていましたわ。でも貴方には敗けたの。貴方に打たれたら、私のマゾヒストとしての余裕も誇りも一遍に吹飛ばされてしまったんです。だって息もできないんですもの、この儘打たれ通して死ぬんじゃないわ。」

いかと思いました。おかしいわね。マゾヒストなら虐げられて責殺されれば本望でしょうに……。もっと打たれたいのかって云われた時、ごめんなさいって、つい地が出ちゃったのも、とてもお芝居する処じやなかったんですもの。打つ方には何でもなくても、打たれる私の身になったら、そりや物凄く苦しみでしたのよ。」

小枝子は心持軀を捻るように動かして、疼きに顔をしかめたのは心の傷痕も深手なのかも知れない。

「その上、ひとを安心させておいて逆をついて着物を剥いだ手口なんか冷酷そのものだったわ。あれでもう私は貴方に屈服する以外になかったんですもの。本当に貴方の足許に身を投出して許して頂きたかったわ。裸にされて恥ずかしいと思ったのは、もっとずっと後になってからだだったのよ。」

「君が好きになった。このまんま此処に閉じ込めておきたい位だ。」

「駄目よ。」

俯向いた儘、小枝子はぽつんと云った。

「私は誰も好きにならないんだから……。」「結婚してもいいんだよ。結婚できない理由があるんなら恋人でもいい。とにかく僕は君を独り占めにしていたいんだ。」

「いけないわ、私はそんな女じゃないの。今

の場合、お互いの必要とその充足、それだけでストップすべきだわ。」

「僕が今暴力で君に縄を掛けても、君はそう云えるだろうか。僕は縄も鞭も持っている。君を縛るのは容易なことなんだ。だけど何よりもまず君を愛している。」

「私はマゾヒストよ。そして貴方はマゾヒストの私を愛して下さるのね。」

小枝子はすわくと立上った。そして驚く慎

治に構わず衣服を脱ぎ捨てて、磔柱の処まで慎治の手をぐいぐい引いて行つた。

「この縄で私を縛り付けて、この鞭で血だらけになる迄打って頂戴。貴方が愛して下さる私の肉体は、貴方の思いの儘に独占できるのよ。でもそれだけ。私の心ははっきり私のもの、私だけのものとして残るの。さあ、思いきりやって！ 貴方の鞭が私の心を変えさせる自信があるのなら、力一杯やって頂戴。決

して遠慮なさらないでね。」

切支丹宗徒として架けられた十字の柱に、マゾヒスト故の試練を受けるために、女の真の幸せを希って已まぬ小枝子が、高々と磔けられていた。

慎治の手で厳しい責苦を再び受けたのは、慎治の手で十字架から解き放されてから三日目の夜のことである。

(終)

信) 最近号を読んで

[通]

近 藤

一

猛暑の中に連日御奮闘を重ねていらつしやる編集部の皆様の御苦勞には本当に頭の下がる思いが致します。私達のオアシスであるK Kが、地味でも堅実な前進を不断に続けて、漸く愛読者の層も拡げ、好評裡に迎えられていることは読者通信欄を一見して判然としていますが、それも偏に堅固な信念に基づく確立された編集指針の賜と、編集部や寄稿家の皆様に遙かに深い感謝を捧げるものです。

愈々充実の一途を辿るK Kが、しかも休刊前の豪華なものとも違う新しい華麗な雰囲気形成しつつあることがひしひしと感じられ愛読者の一人として感激しています。座右の特別の本箱に二段になった約七十冊のK Kがこういった歩みを示しています。

六月号の記事の感想について書くつもりでしたが他の方々と重複することにもなりかねないので七月号の読後感を新鮮な印象の裡に

綴ってみることに致します。

七月号の巻頭口絵、素敵です。まず目次のカット、弓的にされたあの女体が激しい嗜虐の恍惚感に眼を細め「もつとよ、もつとよ」と歓喜の呻きを上げている表情が見えるようです。四馬、杉原両氏のアイディア、麗筆共に冴え、殊に夏を迎えて水をあしらった辺り実にタイムリーで、八月号が更に期待されます。田辺氏提供のスタイルの上の一葉は星美智子ではありませんね。スタイルでは近藤美恵子がトップだと思えます。特写の「囚衣の女」は秀作です。白の囚衣の襟も合わせ豊胸、まつわりついた漆黒の長髪、僅かに覗く腰のもの、そしてムチムチした豊満な女体を心にくいまでに縛めている色つきの縄それらが巧みなメーキャップに飾られた表情に合致して反撥、悩乱、哀訴等が見事に表現されています。これだけのヴォリュームとヴァンプ役に

うってつけのマスクをもっている大塚嬢は確かに得難いモデルだと思います。KK発展のために失神の二、三度くらいは辛抱して頂いて素晴らしい拷問シーンのヒロインを演じて欲しいと思いますが……南村氏の口絵も面白いものですね。

記事のうち「拷問記」は、大塚嬢をモデルに撮って欲しい程の詳細な描写が佳く、「話の肩籠」の軽快な筆致も楽しいものでした。

「運命の少女」は久々に嵯峨紀世氏の作品として接し得たものですが、独特の静かな筆致の裡に華麗な或いは悲壯な責めを表わして行く辺り、私の好きな作者です。些か心理描写が粗く、唐突な変転もありましたが、これらどのような展開を見せるかと期待した途端の終結で残念でした。「紅山彦」の今月号は大自然の中のプランコ利用というアイディアの奇抜さと明るさで愈々佳境を思わせますね。佐藤すみ子氏の短歌は六月号の菅谷はるみ氏の詩と共にKKの異色の記事として光っています。河村操氏の「月明に泣く」は本号で私の最も印象づけられた記事でした。文章はかつての執筆者松井頼子氏を彷彿させるものと感じたのは私一人ではないと思いますが……。挿画もよく、特に美佐子の表情や姿態は本文の流れるような情調にぴったりしています。私の「イメージ」の挿画は滑稽味のあ

る変った画風ですね。「お町の最期」は流石に懸賞募集の入選作だけあってソツのない運びで感心しました。挿画も佳く作品自体決して異色というものではないにしても無難な好読物という処でしょう。「断層の女」の辻村氏の筆法は畳み込むようなスピードで迫力を増し、虚無のうちに何かしら希望のようなものが逆説的に秘められているように感じました。「美容病院(完結篇)」は最後の心理的苦痛を中心とした責め方もさることながら、作品の結末が実に静かで明るく、文字通有終の美を飾ったと思います。「魔教團」は次回の展開が待たれるところ。一体に男や女の愛情の交錯とか悦唐というような余りにも人間臭い非合理性などがこの作品には乏しく、機械のように精確で金属的な冷厳さを持った責めが展開される点が最大の特色といえるでしょう。読者通信一六八頁「A生」氏の御希望は私も大賛成で実現を期待します。

臨時増刊号は特集号と銘うただけであって巻頭から巻末に至る間、一頁のムダもなく一つの大綱に統一された編集は全く見事なものでした。今回のような企画に限らず、類似誌を含めて従来購入の後に「買ってみて良かった」という消極的な感動が起ることが屢々でしたが、この特集号については、むしろ積極的に同好の志のすべてに、この保有をお奨

めしたい感激を覚えました。編集者の述べていらつしやるとおり、狙いは確かに視覚に訴える方針にあるでしょうし、そのため特集されたフोटと挿画に関しては優秀の評価を惜しみません。企画の意義は完全に生かしたと思います。あとはただ愛読者各位が飲んでこの貴重な贈り物を受け容れるばかりです。

目次裏杉原氏の洋髪と日本髪を採り上げてみても素晴らしいものです。首に鎖つきの鉄輪をはめて匍わされたのや、鼻輪の鎖で吊り下げられたような人間以下の扱いも、日本髪 of 十態に較べると遙かに明るい感じを受ける程洋髪は楽しく日本髪は無残です。

口絵はすべて特集の名に恥じない立派なものです。殊に、玩具、夜汽車で逢った美人、非情の部屋、蒼白き抵抗、女賊捕縛等は果しない夢幻を誘う出来でした。

フोटのうちヌードスケッチは別として他のすべては緊縛マニア必見と云っても決して誇張ではありません。中でも大塚嬢のソロバソバ責や花坂嬢の「床の間の花」は心からの讃辞を惜しみません。

本文もまたすべて力作揃いで、その感想はもし機会があれば綴ってみたいとも思います。が、総じて今回の企画は成功であったと申し上げ、愛読者の一人としてマニア各位に御奨めして御挨拶に代えたいと思います。



子供の頃の浣腸

(その二)

池田喜代子

K小児科医の門を私が母に伴われてくぐったのは、私が中学校へ入ったばかりの年——つまり中学一年の時——でした。

初夏の太陽が未だ西の空に没し去らない、五時頃だったと思います。

控え室には小学生になったかならないか位の小さな女の子と、その附添いの若い母親の二人だけでした。その女の子は可愛い、オカッパ頭の子でしたが、見るからに弱な体でした。横に置いてある子供のマンガなどを引寄せて目をとおしていましたが、不安で落着かないのでしよう、絶えず母親と診察室の方に注意を払っておりました。

「どこが悪いんですの。」

母は、その若い母親にたずねました。私は

横を向いて、つとめて聞かぬふりをしながら、その実、一言半句も聞きのがすまいと、神経を集中させておりました。

「自家中毒症らしいんですよ。はっきりはわからないんですけど、よく診ていただこうと思ひましてね。そうでなくても体の弱い子でして……。毎年夏になると、必ず熱をだしたり、お腹をこわしたりなんです。」

「それはそれはお困りですね。可愛いお嬢さんなのに、おいくつ？」

母はその女の子に聞きました。

「十。」(数え年)

「体が小さいもんですから、よく、もう学校へ入ったのか、などと聞かれるんですよ。これでも三年なんです。そちらのお嬢さんは、

どこか体のお具合でも。」

「いいえ、今度中学へ入ったんですけどね、私立なもんですから、医者の診断書があると云うんですよ、それに虫じやないかと思ひましてね。少しもふとれないんですよ。」

「ああそうですか、この子も一度きよう虫駆除をやりましてね。あれは本当に大変ですわ。夜中に起こして浣腸するでしょう。子供はいやがりますからね。」

「きよう虫駆除には浣腸もかけるんですか。」
「ええ、夕食をぬいて、下剤かけるでしょう。そして夜中に、虫がおしりに下って来た時をみはからって、浣腸するんですよ。」

私は、胸が高鳴るのを憶えた。その無心にマンガを読んでいる子は、いや読んでいるか

にみえる子は、その実、恥かしさと気まり悪さでいっぱいなのだろう。本から目もはなそうともしないのである。私はその子の可愛いおしりをちらっ、とみた。そのおしりに毎晩無情な浣腸液が注入されたのである。

「それで治りましたか？」

母も興味を持ったらしく、その先をうながした。

「ええ、一週間ばかり続けましたからね。始めての日は、お医者さんにしていただいたんですよ。けど、あの浣腸する量がとても多いんですよ。見てて可哀そうになる位、なん本もするんですもの。」

「まあ、お可哀そうに。」

「でも、あきらめたのか、良く我慢しましたね。結局一週間で終わりましたけど、夕食を抜かすのも、こういう子供にはつらいでしょう。それにこの子の兄や姉達が、そのわけを知って、浣腸、浣腸、ってさわぎたててしまつて……」

その時でした。

「深井さん。」

看護婦の声に、まっ先に出て行ったのは、その女の子でした。恥かしいのか、ついに一度もこつちを振り向きませんでした。

「じゃ、お先に。」

そういつて深井さんは、女の子の後から診察室へ入りました。

私は中の病室の音が聞える様に、母にはわからない程度に耳をすませました。

医者は、年や病気の具合をことこまかに聞いています。

しかし具体的な内容は、ついにわかりませんでした。三十分程たつても、未だ出て来ません。私は、もしか、と思いました。せいぜい子供の病気で、三十分も診察なんかに手間どるはずはないのです。

浣腸、これ以外にありません。あの可憐な女の子は、病院のシーツの上でも、おしりをまくられ、浣腸されているのに違いありません。——後でわかったのですが、これは事実だったのです。

小児科医で子供が浣腸されるのは、ねこがねずみを捕えるのと同じ位平凡なことです。しかし、そうは云っても私がその時、いつ知れぬ興奮にかられたのは本当だからしょうがありません。

それからしばらくして、さっきの深井さん親子が出て来ました。母親は私の母に笑いながら会しやくしました。その子は、いいますと、目に涙をためて、顔を赤らめながら、じつと一点をみつめていました。おそらく診察室でも、泣きたいのを我慢しながら、浣腸されていたのでしょう。私はその子がいじらしくなりました。

「池田さん。」

看護婦の声に、今度は私達が中へ入りました。診察室のあの患者を圧する、何とも云えぬ雰囲気。小肥りのメガネをかけた医者の前に私は腰をかけました。一人の看護婦がカルテを持って入ってきました。

私は何かを探し求めるかの様に部屋の中を見わたしました。すると、ありました。医者のすぐ横のテーブルに、たった今使いましたといわんばかりに、グリセリン浣腸器が無造作に置いてあったのです。おそらく看護婦がしまい忘れたのでしょう。

私はその先端がまだぬれているのを見てとりました。ついさっきあの子のおしりに差し込まれた浣腸器。その先端のしずくは、丁度あの子の眼にたまっていた涙を象徴するかのよう。

看護婦が、やって来て、私に着物を脱ぐ様に命じました。その間に他の看護婦が、さっきの浣腸器やその他の用具を無造作に片付けました。すぐ後には、この看護婦の手で又この部屋へ浣腸器が持ち込まれ、あの子と同じ様に私がシーツの上で、それを甘受しなければならぬ、等ということは、その時には夢にも思いませんでした。

医者は母に向って、色々なことを聞きました。中学生だと聞かされて、少からず驚いたようでした。

診察は簡単に終わりました。



「あの先生、この子、虫じやないかと思うんですけど……」

母に言われて、消毒の洗面器に手を入れかけていた医者は又ひきかえしてきました。

「それで、便を調べましたか。」

「いいえ。」

「便を今日持って来ました？」

「いえ、別に。」

母は一寸あわてて言いました。

「それじゃ……」

そう云うと医者はほんの少し考えていましたが「浣腸をかけてみましょう。」

浣腸、と聞いて私は一瞬びっくりしました。簡単な身体検査のつもりでしたのに……

私は母をうらめし気にみました。が今更どうしようもありません。看護婦が、やってきて私に

「浣腸しますから、ズロースを脱いで、横になつて下さい。」

私はしぶしぶベッドに上りました。ズロースをおしりからずらして横になっていました。と、ほんのさっき、浣腸器を片附けた例の看護婦が、浣腸器に半分位のグリセリン液を入れて、やってきました。

まわりには若い看護婦が二、三居ます。一人が進んできて、私のスカートをまくりあげて肛門を静かに両親指で開きます。母と医者もそれをみています。その看護婦は笑っている様に私には思えました。ゆっくり浣腸器の先端が差し込まれ、やがて注入されました。それ程苦しいわけはなかったのですが、もう中学生でしたし——当時はもっとも女学生と言っていました——恥かしくてたまりませんでした。

浣腸が終ると、ズロースをはき、その上から自分で脱脂綿を押えていました。私がこの時不愉快でたまらなかったのは、検便の時、——赤痢患者を自分の家に出した人なら知っている様に——普通の大人はガラスの棒をおしりから差し込んで便を調べるのです。ところで子供の場合、動くとおぶないので、浣腸をかける場合があるのです。結局私はその時、小さな子供並に扱われたのでした。又検便の場合でも、大人なら翌日便を持って来てもらうんですが、わざわざそうするのも面倒くさ

いからというのが、その時、医者が母に言った言葉だったそうです。

ともかくそうして私は検便されました。排泄は医院の便器にさせられ、医者がその便を調べる間、私達は控え室で待たされました。

しばらくして、看護婦の声で又診察室へ入りますと、医者が言いました。

「蛔虫ときよう虫がいますね。早く治した方がいいですよ。」

きよう虫、という言葉、何という皮肉なことでしよう。さっきの小学生の女の子の事柄が、すべて今後は私にはね返ってくるのです。私は観念して医者の方の言葉を待ちました。

M レポート

「檻」への執着

ニューヨークシティバレエを追って

今年の三月に来朝したニューヨークシティバレエ団が、東京の産経ホールで上演したバレエのうち「檻」というバレエは非常に好評だったが、この「檻」ほどM諸氏を興奮させたシヨウはなかった。

このバレエは蜘蛛の生殖を表現した踊りだったが、雄が雌と生殖後に食い殺される蜘蛛の習性をリアルにだしたもので、雌蜘蛛

「蛔虫の方は、赤い包紙の方ですが、朝一食ぬいてから飲ませて下さい。お昼頃お通じがある筈ですから。大抵二、三日連用すればいいと思いますね。」

それからきよう虫の方ですが、これはちよつとやかいでね。蛔虫駆除が終わってから、こつちの方は夜食をぬかして白い包紙の薬を飲ませて下さい。劇薬ですから一度に何服も飲まないで下さい。中に下剤も入っています。夜中に虫が下る頃をみはからって浣腸して徹底的に排泄させて下さい。」

私はつとめて何でもない風をよそおっていました。さっきの女の子のように。

蜘蛛に扮した女ダンサーが雄蜘蛛をなぶりものにしたあげく、雄蜘蛛の頭を両股の間に挟んで締め殺すシーンがある。

本誌で知り合った友人のH氏（本誌にたびたび寄稿している）は産経にその写真が掲載されたのを見て、産経に掲載写真の分譲を頼んだが、新聞社で分けてくれなかったと残念がっていた。

また友人N氏は東京で二回このバレエをみたが、バレエ団が大阪へ移ると、用事をこさえて大阪まで観に行ったという熱心さであった。

とに角こんなにMグループを刺戟したシヨウは最近ない。（鬼山絢作）

「それを一週間もつづけてみて、又検便してみよう。」

医者はいともかんたんに言いましたが、私はやり切れない気持ちでした。さっきの看護婦達が面白そうにこつちをみている——事実はそうではないのでしょうか——ようで、恥かしさでいっぱいでした。

それから、約十日間、毎夜私は母の手で多量の浣腸をされたのです。

そして十一日目の午前、私は再び母に連れられて医院へ行きました。看護婦さんは、もう私のことなど、毎日沢山の患者さんに接しているのを忘れてしまっているでしょうが、あの日、皆の前で浣腸されたのかと思うと、診察室へ入っただけで、私は顔が真赤になる思いでした。

今日は医師の指示で検便をして貰うため便を持ってきたのです。簡単な診察の後、母は医師に聞かれるまま、いろいろと今迄の服薬の状況や浣腸のことについて話しました。医師や看護婦の視線を全身に受けて立っている私は、穴があれば入りたい気持ちでしたが、これは自分だけの思い過ぎだったかもしれせん。しかし、その日は浣腸されることもなく検便の結果は、明日改めて尋ねにきてくれという事で帰されました。

蛔虫ときよう虫は幸い、その時の治療で駆除されました。（おわり）



マゾヒズムへのいざない (第十二回)

— 原 忠正氏へ —

黒 田 史 朗

原忠正氏からの実に思いがけない呼びかけに接し、大いに感激いたしました。私のこれまでの、とかくひとりよがりになりがちに落ち入りがちな独断的文章に、ともかくこうして目を通して下さったという証拠が歴然だからであります。早速に返事としてのこの便りをしたためる訳であります。意のあるところをよおくお酌みとり願えるとしたら、私の感激はよりたかいものになるであろうことを確信します。

絵画にしろ文章にしろ、よく目をこらして眺めた場合、必らずそのものの中心をなすところの急所というべき部分があることは理明

のことわりだと思えます。急所というものはその作者なり筆者なりの、その一点に集中された生命の中の中心をかたちづくるもので実はその一言を、その一言だけを表現したかった、という肝腎かなめのそのものであります。

五月号の拙文「マゾヒズムへのいざない」の急所は、実はコッホが美しくなかった、美しかったという考証にあるのではなく、印度の狂信的娘が父親を殺してその肉を食ったという報道と、足のかたちをととのえる為に、ビールの空瓶乗りをする美容記事との二つを比較して、後者こそがマゾヒストにとって真

に刺戟的たり得る内容をはらんでいるのであって、前者の単なる無恥残酷な娘の食人行為は、マゾの立場から云えば縁うすき代物だ、ということをしるし述べた点にあるのであります。その点、原氏は——「夜と霧」の収容所の生活が、マゾヒストにとって、羨望の的であるとは私も思いません……「女らしさ」を度外視するということは決してありませんし——というように、かなりな共感といえます。か、こういう基本の線では私と一致していただけなので、私としましては非常に満足しています。私の云わんと欲した女性へのあこがれ——私共の対象はあくまでも女性なのだ、

女性の内の活潑なるものなのだ。活潑なるもののあらわれで、より女性を感じさせる、そういう近代的自己主張的な活潑さなのだ。それは決して中性的不感症の粗野な女性のことを指すのではない——という命題とも一致するのです。

私は右の趣旨の文章を書くにあたって、すこしも原氏のことを意識してませんでした。森本氏の「残虐なる女性たち」につづられる貴重な資料価値と矛盾するとも思いませんでした。原氏や森本氏の文章とは全く無関係に、ただ私のこれまでの考え方の一つとして右のような主張をこころみただけで、その点、原氏も御了承していただければ幸だと存じます。そして私の最もいいかかったその部分に於ては一致しているのです、今更それにふれずともよろしかろうと判じますので、これ以上の言葉を省きます。

肝心の急所における理解は右の如くお互に理解し合っているのですが、原氏はその急所のずれた地点で私の文章に異議をとなえられているようです。曰く、イルゼ・コッホは、まさしく美人であって、資質十分な女性であった。故に、真に女性らしき活潑なる女性を待望する私の文章には同意し得ても、その引用の仕方について承服しがたい。原氏はかように仰せられているようであります。私の目的とするところは、先にも述べましたように

コッホが美人であった、美人でなかったという、考証的事項にあるものではありませんから、私の立場からこれを云うとすれば、論点が本題から外れているように思うのです。

しかし、原氏の立場からこれをみれば、この外れた地点こそがまさしく氏の立場であって、私の論題とする部分は氏にとってはさほどの関心事とはなり得ない。即ち、原氏にとっては私の立場こそ最初から氏にとっての急所を外していたわけで、どうも奇妙な関係が出来上るのであります。私にとって、コッホの問題はそれほど重要でない、それよりむしろ、世間一般が見るマゾに対しての通念上の誤りをおそれたのであります。M過剰の中性的女性をドミナとして待望するの誤りを云いたかったのであります。

ところが翻って考えてみますと、原氏にとってコッホの件は、まさに由々しき重大事であるのであります。見のがす訳にはいかないものであります。乗馬服を着け、長靴をはき、手に鞭を持って立てるイルゼ・コッホの姿は原氏にとってのひとつの理想像であったからであります。私が犬と便器にマゾの象徴を見る如く、原氏は鞭と長靴と馬にそのシムボルを見られているようであります。この点こそが、まさに、黒田史朗氏に寄せる「という一文の急所ではございませんでしょうか。(犬と馬、便器と鞭とのちがいの優劣を今ここで

論じようという気持を私は持ちません。)つまり、私が不本意ながらも、知らぬうちに原氏の神棚を荒してしまったという不敬を働いた罪を遺憾に思います。氏にとっての理想像としてのコッホにケチをつけた格好になったわけであります。その点はいさぎよくお詫びいたします。しかし私は、如何に彼女がナチス要人達と面識があり、且つ情婦的存在であったとしても、その理由から彼女を美人なりと断ずる訳にはゆかないのです。勿論美人なりと断ずるのもゆきすぎでしょうが。軍人や高級役人の情婦的存在であった曾ての日本婦人達の、えてして肉体的条件だけがとりえの痴呆美をいやというほど見聞してきた多くの人の立場からいって、イルゼ・コッホのあの一般的に流布された、老醜の姿を彼女の本来の姿と判じるのも、これ又止むを得ないことでしょう。しかし、これこそまさに主観上の相違にすべては結着するので、問題はマゾヒズムという大きな基本のものに対してのお互の角度の食い違いを問題として取り上げべきだと思えます。原氏はサディスティンを定義してかようにおっしゃる。即ちサディスティンとは、残虐行為によって淫慾を発動、又は増加する女性を称すると。そしてかような定義のもとに、この定義に当てはまる女性を古今の歴史の中から定着させてこられた。その熱意と努力と誠に得難き成果には、

すくなく敬意を払うものであります。しかしマゾヒズムの最もラジカルな点での凌辱という観点から考える場合、サディステインに対しての氏の定義には、いささかの疑問が存在するのを私は否定し得ません。勿論、サディステインとしての資格を得るためには、氏の下された定義はこれ又不可欠の要素であり、この心張棒を無視しては絶対に成立し得ないと思うのでありますが、それでいて説明不足なものを感じないではいられないのです。遠藤周作氏の「月光のドミナ」で、主人公のその青年は、苦痛と凌辱の二つの途を、遂に凌辱の途へと踏み入る訳ですが、凌辱こそまさにマゾの本道ではないでしょうか。だとすれば、単に残虐なだけではマゾヒストの対象たるサディステインの資格には欠けるものがあるのであります。そして猶、一体サディステインとは、原氏の定義にあるように、きわめて特殊な女性ばかりを云うとすればこれは実に厄介なことになりかねないのです。サディズムにしろマゾヒズムにしろ肝要なのは生きた人間の問題であるという自覚です。サディステインと呼ばれる特殊な女性が存在するのではなく、潜在的要因から、ある条件のもとにサディステックな反応を示した一部の女性が存在するので、問題はこの可能性についてであります。イルゼ・コッホだとして要は一平凡な市井の婦人だったに過ぎないので

す。それがあのような特殊な条件のもとで花を開いた彼女の内にその可能性を固定したサディステインというワクに当てはめての捕え方をするのでなく、生きものとしての可能性、ポシビリティとして考えるとき、女性のうちにあるサディズムは特殊性を離れ一般的なものとして我々マゾヒストの許に立ち帰るのであります。

森本氏の「残虐なる女性達」というきわめて貴重なオーストリテイを、私は今迄かような視点から眺めていたのであります。つまり、ある条件の許でサディズムを発揮した多くの階級にわたる一般婦人達、というふうに課題しながら。しこうして、対象たる人間の一切の人格的なものを否定してゆく結着点、つまり残虐を越えた地点にあるもの、それは既に残虐性の影も消え、完全なる人格無視、それは遊びとして、ひとつの気まぐれとしての凌辱に変貌するのであります。そしてその意味で「残虐なる女性達」が面白いのは条件さえ備われば、そのような行為を不自然とも思わすあえてなし得た女心の秘密であります。要は条件をつくり出すことであります。道行く女性達の誰の心にもサディステインが住んでいるのであります。我々の仕事は、はじめから完全な私たちサディステインとして存在する。そのような幻影としか見られぬ戯画、カートゥーンとしてのサディステインを

探すのではなく、女の中に住む数千、数万の可能性の中から、これだ、これだと、その顕著なサディズムを選び出すであります。猶又、それを容易になすところのシステムへの憧憬と、そのフォーメイションにあるのであります。

最後に結論的にサディステックな女性を強いて云うならば、残虐的行為によって淫慾を発動する中世的サディズムを排し、誇りたかき女性として、その誇りたかき彼女等の自尊心に献身する、あくなき従属意識にこれらの実際的マゾヒズムの途を見出して行きたいものと思うのであります。サディステインとは、誇りたかき女性のことをこそ云うのであります。誇りたかきという彼女の心の中に、一切の秘密は蔵されているのであります。

三条春彦・画

未製本 時代物責絵巻

八枚一組 百五十八円(送共)

【内容】一、山法師と静御前、二、女スリと岡引き、三、淀君と千姫、四、犬公方と侍女、五、八百屋お七の最期、六、新選組と芸妓、七、十郎左エ門と腰元、八、小紫と悪旗本、以上八場面。
○残部僅少、売切近しノ

『戦場にかける橋』と

ぼくの責小説

菅 良 太

デビット・リーンの「戦場にかける橋」はさすがに七つのアカデミー賞を受けたものだけに、近頃見ごたえのある作品だった。全篇にみなぎる烈々たる英国軍人精神は毫も妥協や屈従のないもので、見る人の襟を正さしめるものがあつた。ニコルス大佐他の英兵は捕虜となつた後、あらゆる日本軍の圧迫に耐え忍びながらも、英国軍人精神を発揚して行く芯の強さの中に、僕はある種のマゾヒスティッ

クな昂奮をしばしば感じたので、ここにこの一文を書く氣になつた。
あの映画は印度に近い奥地の密林地帯にある日本軍の捕虜収容所を描いたものである。反日的な意図の下に映画を作つた戦時中ならばもっと日本軍の暴虐を描いたであらうと思ふが、さすがに平和時の国際親善の行われてゐる現代の作品だけに日本軍も捕虜に対して決して野蠻な行為を行わない。然し収容所長

の斎藤大佐（早川雪洲扮する）は頑固一徹でコチコチの日本軍人の精神を発揮する。早川雪洲のこの役は仲々美事でメーカーヤップも浅黒い顔に三分刈の頭髮、濃く太い眉、きりつと引緊つた唇、すべて典型的な軍人の美を表現してゐたが、多分にサディスティックな風貌であつた。雪洲にこのような卓絶した演技があつたから主役のアレック・ギネスの扮するニコルス大佐の淡い忍耐力の強い演技が一そう生き生きとしたのではないかと思う。あの映画によってギネスはアカデミー賞を、雪洲はアカデミー助演賞を受けてゐるが、この二人が対決する場面は火花を散らす演技であり英国、日本の将校魂の対比がはつきり感じられて美事であつた。それに比較するとホールデンの扮する米國軍人は一番つまらなく平凡であつた。つまり軍人に必要な精神美の世界が全くないからである。

映画は先ずニコルス大佐が英軍の敗残兵を率いてくる所から始まる。彼らは靴がなくはだしの者、シャツがなく半裸の者、殆ど裸体に近い姿の者達が、大佐に率いられて日本軍に投降するのであるが、皆明るく口笛を合奏しながら、足を踏みならして収容所に到着する姿は、先ずマゾ的なものを感じさせた。これを受入れる斎藤大佐は日本人らしく、どこまでも捕虜を輕蔑した態度で全員の捕虜に叫

ぶ（このあたりの雪洲の演技は見物である）
 「お前達は命を惜しんで敵国の捕虜となった以上、もはや軍人たる資格を失ったのである。今日からは日本軍の奴隷として甘んじなければならぬのだ。お前達をこのような運命におとし入れたのは指揮官の罪だ。お前達の指揮官はお前達に命を惜ませて、恥を与えたのだ」と罵倒するが、この辺に英日軍人の戦争や死に対する見解の差が感じられて興味深かった。将校に作業を強いる斎藤大佐と、あくまで国際条約を楯にとって将校の名誉のために作業を拒むニコルス大佐との対立になるが正に火花を散らす演技であった。怒った斎藤大佐は兵士の面前でニコルス大佐を殴りつける。殴られても屈服しないニコルス大佐は鼻から一筋の血を流しながら、静かに地上に落ちた国際条約の証書を拾い上げる姿は胸が疼くようなシーンであった。この両者の話合が成立しないために、ニコルス大佐と六人の英将校は午後から日没まで営庭に直立不動の姿勢で立っている。疲れ果てた一将校は卒倒する。夕暮の深林へ戻るおびたらしい鳥の群、彼らは猶頑強に姿勢を崩さず直立している……このあたりのダヴィット・リーンの手腕は実に美事であった。斎藤大佐はニコルス大佐を自分の部屋に連れて行く、間もなく失神したニコルス大佐が日本兵に担がれて出て

行く、この間に斎藤大佐がニコルス大佐を拷問した一シーンがあるらしいがカットされている。然し次のシーンで怒った斎藤大佐が太い藤蓑製の杖で机を叩いている場面が出てくるので拷問が暗示されているが、なまじ安手の責場面よりもこのカットの方が数等すぐれていると思った。ニコルス大佐は穴倉のようなひどい独房へ、他の将校はこれも粗末な営倉の中に数日押込められる。馬鹿正直で妥協を知らないしかも融通のきかない英国軍人精神がみごとに浮彫にされていた。大佐になる英国の名優アレック・ギネスは中年の魅力をもった俳優だが一見弱々しそうな肉体の中に強い英国人魂が強く表現されてアカデミー賞俳優の貫録を充分にもっていた。雪洲はやや悪役であるがそれでも一徹な日本軍人を表現して逞しい魅力をもっていた。時々紺の薩摩緋らしい和服を着ていたが、実際あんな蓄地で、いくら将校でも日本服は着まいと思われたが、外人の撮った映画だからいいとして理屈を言わないと案外あの和服は日本軍人らしい魅力があり、ソドミア的な匂いもあった。ホールデンは脱走する米兵で魅力のない役だが例の逞しい肉体が作業で泥や汗にまみれてからと光り性的魅力をもっていた。敗者の英国軍人が勝者の日本軍人に精神面で段々勝って行く過程がこの映画の中軸をなしてい

るが、敗れたと知って秘かに自決を覚悟するあたりの雪洲はよかった。和服で端座して遺書をしたため遺髪を切るあたり、凄蒼の気が充ちていた。大佐は後に殺されるがむしろ架橋工事が完成した日、割腹自殺する場面があったら一層面白いと思った。雪洲が和服で両肌脱ぎになり腹一文字に掻切る辺りは日本人にも外人にも必ず受けるに違いないと思う。又脱走して殺された捕虜を埋めるシーンで両手を括り丸太に通し、足は一しよに丸太に縛りつけて、丁度熊や虎を獲物にした時のような獣縛りにして担ってくる場面があったが、あれなどもマゾファンには気に入ると思った。

ぼくはあの映画を観て、あの脚本が自分の書いた小説に酷似しているのに驚いたのである。ぼくは日本軍人の捕虜を描いた責小説を幾篇も書いて来たが、その一つである「投降者」という一篇は「戦場をかける橋」と殆ど同一ストーリーで、異なる点は英国兵と日本兵とが反対の立場にあることだが、参考までにその梗概をここに書くことにする。

ビルマの密林地帯を敗走しつつづけていた鷹見大尉の率いる一部隊は日本敗戦ときくや、多くの部下の身を慮って涙を呑んで英国軍に投降する。英軍は日本軍のビルマ方面の暴挙

を憎悪する余りにこの投降者を極めて苛酷に取扱う。武器一切を差出した日本軍に対して身体検査と称して着衣一切を剥ぎ取り将校に至る迄を越中樞一つとしてしまふ。この処置を不当とした部隊の兵士の憤りを鷹見大尉はなだめ耐えさせた。反抗もせず悪びれずに黙々と収容所まで裸の行軍をつづけて行く日本兵を道の両側にいるビルマ原住民はあらゆる嘲罵を浴びせ、中には石を投げるものもあった。日本兵は其中で静かに足を踏みしめ正しい歩調をとって進んで行く……。

収容所で日本捕虜に課せられた作業は激しく、熱帯の炎天下裸のまま捕虜たちは牛馬の代りの荷運びや密林から巨材を伐り出して運搬をさせられたため、たった一日で多くの傷病者を出した。たまりかねた鷹見大尉は収容所長であるホーキンス大佐に捕虜の作業をもっと軽くしてくれと申出た。英軍側では鷹見大尉が一軍を率いる人望の厚い将校であることを知り、彼の部下の面前で屈服させることによって、部下の信望を失わさせ日本軍の統一を乱させ、英軍側に服従させようと計画した。作業中の日本捕虜全員を集合させ、直立の姿勢を取らせた面前で、隊長の鷹見大尉に言語に絶する苦痛と凌辱が加えられる。

鷹見大尉は三十三歳、壮年の将校で栗色に日焼けした肌と、男らしく凛々しい眉目を

もっていた。部下と同じように越中樞一つの姿で引出される。ジエームスというならず者上りの兵長の指揮によって英兵は先ず彼を後手に縛り上げ、両股を開かせた姿勢にさせ、七、八名の兵士が代る代る残酷を極めた拷問を加えて、剛気な彼に悲鳴を上げさせ、服従を誓わせようとするが、彼はいかなる拷問の苦痛にも耐え忍ぼうとする。然し若く名譽を重んずる彼にとって牀に加えられる残酷な凌辱には耐えかねて、全身より脂汗を流しししばば呻き声を唇から洩らす。捕虜とは言え隊長がこの凌辱に遭っているのを見かねた兵士たちは英兵に詰め寄るが、かえって殴られ、その中の数名は反逆者として営倉に投込まれる。鷹見大尉は血走った瞳を上げて、はやり立つ部下に向って、「俺一人が耐え忍べばよいことだ。妻子のあるお前たちはどうか前途を考えて黙って見ていてくれ。」と血を吐くように叫ぶ。英兵たちは面白がって猶彼を寄つてたかつて責立てる。それが終ると、今度は「引廻し」と称して牛車の上に仰向けに大の字に縛りつけると、ゆるゆると日本兵の整列している間を通り抜けて収容所の附近を一周させる。日本軍人に恨をもっている土民の老若男女は皆集って来て、嘲罵をあげせ棒切れで鞭ったり、小突いたりする。夫を日本兵に殺されたという女は紡ぎ用の錐で彼の身体の各

所を突いたりして苦しめた……。

そんな苦痛が加えられたが、鷹見大尉はあくまでも日本軍人として耐え忍んだ。彼は暴虐が加えられれば、加えられる程精神的に逞しくなった。日本兵たちはこの事以来以前にも増して彼を敬愛した。英兵たちは彼らの計画が成功しないと知ると鷹見大尉を一そう憎悪した。時としては兵よりも激しい作業を強いたり、理由なく恥辱を加えたりした。そのような忍従の幾日を経て日本兵達は一人も落伍する者はなく全員なつかしい母国に帰還する日を迎えた。

以上がぼくの小説の梗概であるが、勿論小説の骨子となるものは鷹見大尉に対する英兵や土民の加虐にあるのだが、今一つには困苦の中で益々固められていく軍人精神の美しさを描くのが目的であった。こうした精神美の世界にこそ真のマソヒズムは生き生きとした精華を放つのであるとぼくは信じる。責の個処の詳しい描写はここでは遠慮したが、想像にお任せしたいと思っている。映画「戦場にかける橋」と偶然に同じ構想をもったものであったので、梗概のみを発表したが、一見馬鹿らしい程の一徹な軍人精神にこそ自虐的な要素を多く含んでいることを改めて認識したが、男性マゾファンには必ず共感する個所の多い場面があると思うので紹介しながら筆を取った次第である。

続・女斗美短歌

土俵四股平

これはどこまでも四股平たる私の失策だった。と云うのは、奇巧に寄稿した草稿を、うっかりと机の下へ投込んでおいた、それが原因だった。

一時は私の助教まで勤めていた矢筈山順子は、いずれは名取りして家元を継ぐ野望を持っていた。野望と云うよりも自己承諾の形で、そう信じきっていたのだ。(矢筈山は順子の四股名)

その順子は、彼女の後輩である菊巴侘子に、いわば妹弟子に名取を奪われ、あまつさえ私の愛情を失って、破門同様になっている今日、ひたすら侘子を仇敵視するのは無理のないこ

とだった。だが怨むなら私を怨むべきで、侘子に対してのソレは、筋合いがそれるのであるが、彼女は侘子さえこの世にいなかったらと、呪いに呪っているのだった。(菊巴は侘子の四股名)

七ツも年下の侘子にはあるが、今は女対女として取組の機会を、女斗美にからんで狙う順子なのだ。だが師の私としては、可憐な侘子を、毒蛇のような順子の餌食にさせたくはない……かく云えば、侘子はキツト怒るだろう。彼女とて今は一人前の女になっているし、体重、身長、肉付に於て、決して順子に劣る存在ではない。バストライン九十五セン

チの堂々たる侘子である。だが相撲なれしているとは云えない。相撲と云えば私を相手にたわむれる程度だから……。

矢筈山順子は、島根の産、古い読者は記憶にのこっている筈だ。身長五尺四寸の富久子と組んで相手を泣かせ、多津子と寝業で引分け、強敵で大関級の北海道の産、北海千珠子と堂々の四つ相撲を取って死斗に持ち込み揃合って勝った戦歴?を持っている。

そのようなシタタカ者を、どうして最愛の侘子を組ませることが出来よう?と云うのが私の侘子対順子の取組回避の思案どころとなるのだ。

それに引替で、御本人の信子は案外淡々としている。

「先生、女斗美小説のモデルなどにせず、本当に一度でも順子にブツつからせて下さいませナ」と迫る。その若々しい顔に、後へ引かれぬ斗志がただよっている。かくして、

小説はいとまどどろかし順と吾

札の森に乳房競わん

京へ来て師弟を呪う恋敵

矢筈順子よ相撲取りばや

師の蔭にうごめく順子引出し

胸乳競わん恋の土俵に

師に請いて順子を森へ呼出し

勝つか負くるか相撲取りせん

と順子に対する挑戦的な短歌を

よんでいる。その問題の順子が久

々に私邸を訪れて来た。それはよ

いとして、何たるシンクスよだ。

不用意にも私が階下へ行つて座を

外したスキに、奇クの草稿を発見

したのだ。だがズルイ順子は、私が上つて来

ると、顔色一つ変えていなかった。其時既に

その草稿は、彼女のバッグに納めていたのだ。

鬼の首でも取った以上の証拠物件である。

かくして三日の後、信子は順子から激しい

挑戦状をぶつつけられた。これは重々私の責



腹槽順子

高々吊出し

信子が力

今ぞ見せはや

春画

任である。だが今さら、その顛末を物語化して駄筆をすする勇氣はない。

幸か不幸か、この事の起りは、女斗美短

歌からである。其処でその顛末は、どこま

でも信子の短歌を借りて解決したいと思うの

だ。

ここに掲げる短歌は勿論、信子

の自作ではあるが、前稿とは全く

内容の気分が違ふ。と云うのは、

前稿のソレは、女斗美にモチーフ

するやや架空的な短歌の集成だっ

たが、今回の信子自身にふりか

かった火粉、鬼女の如き矢筈山順

子の嫉妬の焰と斗った戦史であ

る。如何にその歌が生々しいかは

読者の肺腑をつくものがあるう。

順子をば土俵の外へ投出して

君に捧げし丸乳守らん

この歌は、信子の優しい本性を

表現した実に乙女らしい情が、強

い中にまどかに流れているが、ま

だまだ本当に組んでいない架空に

すぎない。

師の君の日頃の教えかしこみて

順子の太乳握らんとする

師の君のメトミ小説読むにつけ

いかで順子におくれ取るべき

恋敵順が乳房を引摺み

君が軍配のもとに倒さん

まだまだ夢である。胸の鼓動は高いが、眼

は血走っていないし、眉もつっていない。

腹槽順子高々吊出して

信子が力今ぞ見せはや

この作歌順子が見れば口惜しとて

信子に勝負挑むなるべし

この予言、その予感に遂に適中したのだ。

順子脱げ！いざ師を賭けて相撲せん

まことの愛の力競いて

いよいよ信子は立上った。決意を固めての対戦である。だがまだ自分と順子との相撲が、ただの相撲だと思っている。そこに現実と想像との誤差がある。

口惜しくば素肌となりてイザ組まん

恋も名取も信が掌中ぞ

強がり云々でも、相手の矢筈山順子は、信子にとって悔れぬ強敵なのだ。順子の顔色に、決死と云うよりも、女が一生一代を賭けて、恋の勝負にのぞむ死相の如き青味すらただよっている。かくれた殺気が血液に色濃く流れているのだ。

又しても胸乳痛むは恋敵

順が執念ここによるかと

はや両女の心と心は、ガツキと取組んでいるのだ。女性的な刺力のような線がもつれている。情として、信子の乙女心は、野辺の花の如くいと優しいものである。さて、

昨日までこらえこらえし憎しみを

今ぞ女の土俵に燃やさん

うぬ惚れをこめし互の大乳房

ハット見交しシリシリと寄る

驚きぬ互に吾と比べつつ

悔りがたき敵が乳房に

初めて見る互の裸身である。思ったより大きい張の強い相手の乳房に、双方の眼の色が一瞬にかわったようだ。信子の乳房はキングサイズ、順子のは大きくもあるが張りのいい高乳である盛乳であるのだ。

東―菊巴 西―矢筈山と呼び出され

サツと仕切ればハヤ必死なり

師は行司 力士は二人信と順

恋の相撲に如何で負くべき

順子組め！今ぞ名取の大乳房

四つに組ませ恋を賭けなん

乳房来い！乳房と呼ばれ胸底に

ひびくものありムズと取組む

乳房こそ娘の力喧嘩相撲

順が乳房にいかで負くべき

組付かれ組付きて乳は汗みどろ

み腹ぬらしてグツと詰寄る

順と吾乳首をたてて小競合い

それ！ソレ！それと押しつ抑えつ

突上げてすかせて振って突上げて

乳房相撲は今死闘なり

浅黒き力にみちし乳首四つ

今ぞ娘の勝負つけんと

娘相撲の緒戦と云うか、乳房のセリ合い乳房相撲は、波打つ大鼓腹を下にして、乳張りをせり、乳首のいきみを競って必死である。野苺のような順子の乳首が、乳房の小山からヤツと立上ったばかりの初々しい信子の乳首

と、ハンディキャップなしの取組が始まっているのだ。空気の入り過ぎたゴム毬のような順子の張乳を、ゴム風船とでも云うか柔軟な信子の乳房が、ともに受止めて争っている。順子の乳首が、又しても信子の乳首を抑込もうとする。

大乳房ムズと組めばへしやげたり

いずれの乳首下となりしや

大乳房モタリモタリと寄せあいて

ここぞとばかりドツとつぶしぬ

だが、もう互に乳房や乳首を組合わすだけではすまなくなった。

大乳房ムズと掴みて扱きあい

順子も吾も岩と動かず

互に指が乳房へかかれば、いよいよ相撲は本番である。双方の眉がつつてきた。歯が唇を噛んでいる。上腕に小しおらしい力瘤がブキブキと入ってきた。娘と娘、女と女が、相撲を意識して深々と差したのだ。四つ相撲だ。信子と順子の心が、相撲をギョツと掴んでの組姿である。

大乳房力一パイ握りあい

引倒しあい勝つか？負けるか？

グンナリと疲れを見せし大乳房

一度はなして又掴みかく

説明の必要もない。実に美事な現地描写の作歌である。ことに後の、一度はなして又掴みかくは生々としている。勝負かと思うと

ここで手をゆるめ、手をはなすと、相手はな
おも挑んで来る。其処でこちらは、何を小癪
なと又掴みかかると云うのだ。
娘と娘が取っ組んで、最初にふれるものは
乳首と乳首だ。だが其下には、斗志マンマン



一パイにへし合い吊合いするすさまじさ。互
に腰を落して相手の下腹へ、わが腹をつけ入
らせようとする競合いだ。吊れば外掛で防ぐ。
娘同志でも、女斗美の研究生同志とて、相撲
の手は若干知っている。だが実際は土俵のな

たる女腹が、互に大関
の貫祿を見せて力んで
いる。相撲といえど第
一に浮ぶのは腹だ。す
こぶる柔軟でサアとな
れば弾力にみちる女腹
である。

吾が腹に矢筈高々吊

り上げて

恋の相撲に勝たん

とぞもう

ムズと組み互に合す

腹と腹

矢筈が腹に如何で

負くべき

体重十六貫八百の菊

巴信子の腹は、デッブ

リとした太鼓腹で餅肌

で白い。一方、小麦色

の矢筈山順子の腹も、

それに劣らぬ鮫鰐腹

だ。必死の相撲に大波

をうつ女腹二つが、力

い座敷相撲だ。下鴨糺の森は理想編である。
故に吊ったとて、相手の尻を壁や柱へ押付け
るだけである。相手は壁や柱を蹴って押戻し
てくる。だが娘と娘が力づくでかかって、敵
の腹を一寸でも吊る勝利感には、忘れがたい快
感だと云う。ことに信子は腹櫓が得意で、堂
々の大関相撲を取る。

でんと来い！につっき順が鮫鰐腹

まともに受けて腹相撲とる

だがいくら腹相撲に勝ったとて、女の勝負
はつかない。順子は島根の田舎娘、信子は生
粋の京娘だ。相撲と喧嘩に馴れた二十七才の
年増娘と二十才の生娘とでは、相撲が長引く
ほど信子に分が悪くなる。相手はあの手この
手を知っている。

投出せど又投げ出せど挑みくる

矢筈順子と十たび取組む

二人は掴みどころのない肉体と肉体をブツ
けて必死と取組んだ。この歌で見ると一方的
に信子が強く見えるが、事實は彼女も幾度か
順子のために投倒された。やや足の弱い信子
は、座相撲が寝業になろうとかかる。

順と吾乳房を握りシリシリと

畳をすりつつ膝つめていく

同体に着ちた双方は、そのまま座相撲の体
勢で組んでいる。土俵の畳がきしむ。

順と吾互に腰は崩れたり

恋の死斗は今土俵際

これでもか！互に乳房引摺み

大腰すえて揉みに揉みぬく

摺合い勝負つかねばイサ噛まん

ドテン転びて口と口ゆく

手首をば噛まれながらも歯がみして

なおも絞めたり順が太首

女と女の決斗の大詰は、いつも烈しい噛合
いとなる。歯のコンクールで女王になった信
子の歯は、順子の皓歯と火花を散らしている。

血みどろの相撲となりぬ順と吾

互に乳首ガツと噛みたり

いよいよ双方死斗に入った。気丈夫な信子
の顔も半泣きである。順子の顔もいがんでい
る。だが互に声をのんで泣声をたてない。娘
の意地なのだ。女の勝負なのだ。師として、
もう見ていられないドタン場である。

『信子！』と声をかけたいが、それではエコ
になる、『エコされて勝ちたくありません。』

先生、信子の名のためにエコだけはやめて下
さい』と、彼女は、くどいほど私へダメをお
しているのだ。

お互にハヤ泣きながら離れぬは

恋には強き女相撲か

信子の作歌帖は、この辺で空白となってい
る。だがそれでは読者が物足りなく思われる
ことだろう。そこで作歌のバトンを師の私が
リレーして、蛇足ながら二三書きつけようと
思う。写生歌でいこう。

脂汗乳房握りて動かぬは

力互格の娘なるらん

信が乳順が盛乳に打勝つや

今寝業なり信子がんばれ！

片足を腋へかいこみ充分に

とどめ刺すらし乳房摺みて

胸底をえぐる苦悩にどてんうち

死斗となりぬ信も順子も

必殺の乳房相撲の五十秒

信は勝ちたり師をば守りて

勝名乗りこそ上げないが、相撲は……いや
門弟の決斗は、遂に菊巴信子の勝ちとなった
が、勝負がついても、卑怯未練な順子はなか
なか負けたと云わない。勝負がついたと云っ
ても。互に急所を噛合つて、順子がやや先に
悲鳴をあげたと云うことだ。だから順子はし
つこく取直しを要求するのだった。

『信子、もう一べん来い！今度こそコテンコ
テンにやつつけたるわ、息の根を止めたろ』
と挑む。見れば信子の疲労は極度に達してい
るようだ。私は勿論取直しをさせたくない。
でも勝気な信子は、けなげにも再び立上った。

『やめる信子！ 順子お前の負だ』

『ふふん、先生の負や』

『何ッ！ 相撲！』信子はカッとなって順子
に組もうとする。それは順子の思うツボだっ
た。最愛の弟子信子を、順子の蟻地獄へおと
すことは出来ない。やっとの事で二人を左右

に引分けたが、順子は捨台詞をのこして消え
て行った。曰く、

『先生がどないに邪魔しても、もう一度キッ
ト信子と組んでみせる。信子よく覚えとれ。

其場になって卑怯に逃げるなよ。この次こそ
決斗や』

『キツト相手になるわ。逃げかくれするもん
ですか。とことんまでやるわ』

『寝覚めの悪い勝負せんときや』それが順子
が玄関へ残した言葉だった。

相撲や格闘の技は順子が上だったし、力量
は信子に分があった。だから立業では順子が
優位で、寝業は信子が勝に出ていた。全体の
体力では田舎娘の順子が強く、勝負がついた
時、信子の疲労は負けした順子に倍するものが
あった。もし順子の要求を入れて、信子が取
直しに出たら、たとえ寝業に持込んでも、信
子の勝めは危いものだった。だが信子は、
『先生、死んでもいい、順子が憎い。先生や
らして、も一度だけ、先生のいらっしやらな
い場所で、二人きりで、女の秘術と力のあり
つたけを出してやりあいたい。先生、もう
一度だけムンズと組ませて順子と』と彼女は
私の膝へすがるのだった。

再び信子の歌を日記から拾ってみよう。

女腹ムズと組ませて大寝業

殺せ殺すと渡りあいたり

髪おどろ死斗の山へのぼりつつ

吾はたえたり乳房相撲に
嗚呼ッ！と焰の息を吐きながら

心に師を呼びて堪えぬ

順と吾泣かせ苦しめ殪さんと

しどろもどろに摺合いたり

かくて正式に名取って「土俵信子」と襲名した信子は、今私のそばで女斗美のデッサンを勉強している。日本趣味のゆたかな、琴と茶の好きなこの娘が、アノ死斗に堪えたのかと思うと、不思議と云うより奇蹟を超越した

臨時増刊号「責小説特集号」大好評発売中！

(表紙色刷、本文中質紙使用) 売切れぬうち即刻お申込を！ 定価一部二百円

「責小説特集号」は主として昭和二十七年年度に発行しました本誌の中から悦虐作品として好評を得ました作品二十篇を選び出し全部新しく挿画を描いて再録したものであります。いずれも力作揃いばかりで、この特集号一冊によって昭和二十七年年度発行の本誌の主要な作品を網羅していることになりました。八葉の口絵は内容から取材して、滝れい子氏、北原純子氏の二人を煩して描いて頂いた力作ばかりですから、これだけ独立しても十分に観賞価値あるものと思えます。

巻頭口絵

拷問 (片矢薫・作)

滝れい子画

吸血女流画家 (岡田咲子・作)

北原純子画

ある奇術師の恋 (吉丘垣根・作)

滝れい子画

鬼兵衛刺青異譚 (二俣志津子・作)

滝れい子画

遊女葦水の最期 (片矢薫・作)

北原純子画

縛られた妻 (早川新一郎・作)

滝れい子画

巫女屋敷の責絵巻 (岡田咲子・作)

滝れい子画

読切傑作責小説

拷問 (特高刑事の惨虐行為)

片矢 薫

賭博 (淫奔マダム狂騒曲)

二俣志津子

巫女屋敷の責絵巻

岡田 咲子

老いらくの恋異聞

篠ノ木参一

復讐のドラマ

片矢 薫

鬼兵衛刺青異譚

二俣志津子

吸血女流画家

岡田 咲子

ある奇術師の恋

吉丘 垣根

惨虐戦慄の徴用女工

片矢 薫

遊女葦水の最期

片矢 薫

囚 衣

古川 裕子

奴隷妻

片矢 薫

悪魔と口紅

桂 牧次郎

悪女

岡田 咲子

縛られた妻

早川新一郎

廊の灯影

片矢 薫

M と S

岡田 咲子

責 苦

竹谷 十三

記録係

岡田 咲子

赤に憑かれた男

上村久秀雄

気がする。暑い初夏なのに襟のボタン一つ外さずセッセと勉強している。そして時々あどけない目をあげて、私の横顔をぬすみ見ている……何時、仇敵順子が後妻打ならぬ、あと弟子の信子に対して、再度相撲を挑むか予期出来ない昨今である。二三日前も、他の門弟が矢筈山の後姿を附近で見たと云った。何もかも忘れたように、うららかな顔をしている信子を見ると、ムラムラと私の好奇心と云うか、獵奇心と云うべきかがこみ上げてきた。

『おい信子、もう一度順子と組むかい？』と云ってみた。すると信子はコンテの手をとめて、

『ええ組みますわ。こんどこそ先生のいらっしやらない場所……そうね、今度こそ私の森にしようかしら。丑満刻、荒草を踏みにじって……』

『今度も勝てるかい？』

『勝ちます。どんなことでもして勝ちます。信子の相撲は先生のものですもの。粗末には扱いませんけど、卑怯なことはせず、順子に信子のすべてを与えるかわりに、信子も順子のすべてを奪ってやります。娘と娘が心と肉体のすべてを恋に賭けて死闘してみます』

『……』私は言葉が出なかった。

『先生、信子はもう土俵信子ですわね』

そう云って、信子は再びコンテを紙へのぼしてゆくのだった。

(完)

幕 末 奇 談

手^{たま} 枕^{くら} お 千^ち 代^よ

海 野 築 朗

(一)

花のお江戸も滅茶苦茶である。

徳川三百年の泰平の夢破れて、十五代將軍慶喜は政權を奉還して恭順の意を表し、千代田の城も官軍にムザムザと引渡された。

その後、徳川の陸軍は四分五裂。彰義隊は例の上野山に立籠り散兵隊は上総に走り、新選組は下総に屯した。その内で最も有力な組織的部隊は歩兵奉行の大鳥圭介に卒いられた約二千の幕兵で、大砲が二門もあり徳川由緒の地、日光山に拠って形勢を望観して居た。朝廷に対して決して手向う訳ではないが、錦旗の美名のもとには薩摩や長州の野心が見え透^すいている。これは容易に帰順すべきではない。場合によつては潔く一合戦と云う腹を固めて、徳川に意を通ず

る各藩と連絡をとっていたのである。

時に慶応四年四月

陽春の日指しを浴びて、江戸から二十里ばかりの日光街道を北へ走る一挺の駕籠があった。

担いでいるのはいう迄もなく、く、り、か、ら、も、ん、も、ん、で、垢染みた破れ襦袢一枚に縄の帯といういでたちで、古河と小山の間にある松並木にさしかかると、ドッコイショと駕籠を下した。駕籠の中には無論、人が乗っているが、それが転げ落ちない様に、太縄がグルグル巻きつけてあり、竹編の屋根に垂を乗せているので駕籠の中が良く見えた——滅法美しい娘が荒縄で後手に縛られ、手拭で猿轡迄嵌められている。文金高島田もがっくり、はつれ毛が白い頬にかかり、紅鹿の子の花掛けも落ちるばかり——見るも凄艶な姿である。

どうみたって怪しい組合せなのだが、雲助共はのん気なもので、一息入れるらしい。道端にどつかと坐ると、腰の火打袋から火鎌と火打石を取出して、鉈豆煙管をふかしているといった案配。

丁度、そこから一寸離れた木蔭で休んでいた一人の侍があった。野袴に割裂羽織、陣笠をかぶっていた。グルグル太縄を巻いた駕籠に不審そうな眼をそそいだが、こぼれている娘の袖に

「あ、これこれ、その駕籠は何だ」

と気軽に近寄って来た。そして駕籠の中を一目見ると

「おや、猿轡ではないか」

面を緊張さして

「其方共、^{かきわ}拐しを致しておるな」

「いえ、旦那、それはお眼鏡ちがいで」

雲助共は、返辞を用意していたらしく、スラスラと答える。

「何、眼鏡ちがいだと申すか。美しい娘を縛り上げての猿轡、それが拐かしでなくて何だ。いかに御時勢と申せ、真昼間から無法な真似は許さんぞ」

刀の柄に手を掛ける。ところが雲助共一向に慌てない。むしろ腰を折って

「いえ、旦那。全くのお眼鏡ちがい……まあ一通り申し上げます。

それをお聞きの上で、あつし共が悪ければ仕方御座いませうが、これも人助けなんです」

「娘を縛って、人助けになるのか」

「はい、旦那。これは斯うで御ぜえすよ。この娘さんは江戸は芝神明前の呉服屋の娘さんですが、御存じの様に江戸は今にも戦争がおつ始まって、八百八町は焼野が原になろうという物騒なご時勢で、おまけに今、江戸市中に屯している薩長の兵隊なんかと来ては、どんな乱暴をするか判らねえし、まして女——それも年頃の娘とみたら決して見逃しにはしねえという噂が盛んになったもので、大事な

娘達は町人、お武家を問わず皆それぞれ田舎へ預けられる事になり

ましてね……この娘さんも下野宇都宮の親戚へ預け様と江戸を出たとたんに、どうした訳かだしぬけに気が違った様に狂い出しましたので、親達はビックリして、いろいろ手当はしやしたが益々募って、

江戸へ帰るのも考えものと、可哀そうだが道中だけでもと、この通り猿轡に縄目の苦しみ。いやもう実に気の毒千万な訳でして、それを嘘だとお疑いなら、なに、直きに後から親御様が見えますから……へえ」

「そうか、氣違いなのか」

「全く気の毒に、猿轡だって親御さんの手で嵌めた位でござえやすよ」

此の時、駕籠の中の娘は殊更に身を悶えさした。猿轡の下から必死に何か訴える所があるらしく

「うー、うッ、うー」

と出ぬ声を絞った。

その様子を、じつと覗めた侍は

「其方共の申す事も、一応尤もの様だが、この駕籠の中の娘の素振りにも、狂人と思えぬ節がある。とも角、一度娘の縛めを解き、猿轡はずしてみるぞ」

と駕籠に近寄り、まずグルグル巻の太縄を解き、それから後手に縛っている荒縄を解いて、華やかな衣裳を纏った娘を駕籠の中より抱え出して、最後にその猿轡を取去った。

と、娘は待兼ねていたらしく、口をゆがめると、ぱつと路上へ小布れを吐き出した。すっかり濡れているところを見ると、随分長い間咬んでいたらしい。

「助けて——」

娘は口が自由になると、絹を裂く絶叫をあげて侍にひしと取組つた。振袖の裾が、緋牡丹の様に一瞬宙に散った。

「私は氣違ひなどでは御座いません。この者達が無理無体に猿轡など……」

必死に侍を見上げる眼は、鈴を張った様に澄んでいる。

「こうなりや仕方がねえ……生っ白い若侍の一人や二人、やっちまえ！」

と正体をあらわした雲助共、いきなり息杖を振って打込んで来たが

「痴れ者奴！」

とつさに、侍の白刃が、びゅッ、と鳴ると、見事な峯打ち。もう雲助共は大地に長々とのびている。

娘は、ほっと胸を撫でおろした。江戸育ちらしい黄八丈の良く似合う、年の頃は二十頃としか見えぬが、高島田のこわれたのに氣付いて、銀の平打の簪に豊かな髪を器用に巻き束ねて、懷紙で手の油を拭きとった仕草などは、あんがい苔がたっている年かも知れぬ。

「危いところをお助けいただきまして」

と乱れた衣紋をとりつくろって、地面に白魚の様な双手を突く。

「大変な目に逢いましたな。お一人旅か？」

「はい」

「どんな事情かしらんが、一人旅は危険だ。殊に、あなたは美しすぎる」

「まあ」

ぱっと紅葉が散った。

「さあ、いつ迄も坐っていると着物が汚れる。拙者はこれで失礼する」

「あの、お名前を……」

「むずかしい名前だね。覚えられないでしょう。又の機会にしましょう」

「でも……」

娘は、やっと立上った。

「あの、私は綾乃と申します。貴方様は？」

いつとはなしに並んで歩き出して、娘は自分の方から名乗って話しかけた。

「名前などどうでもよろしい、それよりどちらへ行かれる。宛はあるのか？」

「はい、日光の親戚をたずねて参ります。ずーと駕籠で通せば安心だと思っていましたのに、江戸を出る早々あんな怖い目に遭いました……足弱で御迷惑とは存じますが、途中までお供させて頂けませんかでしょうか」

「折角だが、拙者は急用ある身、それに男女七才にして何とやら申す」

誠につれない返辞。

「では、私はどうすればよろしいので御座いましょう」

娘は力なく首垂れた。だが侍は冷淡に聞き流している。

「お願いで御座います。私もう恐ろしくて、とても一人で旅などしてられません。御迷惑でも、どうぞ御一緒に連れて行って下さいませな」

また、縋らんばかり身を寄せてくる娘だ。

「そう信用して良いのかな、あの雲助共と同じ、拙者も男だ。如何に危ない所を助けたとはいえ、今さっき逢ったばかりで素性さえ判るまいに……然し一層の事、拙者の花嫁になるというなら話は別だ」

と云うと、娘はさすがに頬を一層染めて恥らう仕草で

「まあ……」

と立止る。

「縁があったらまた逢いましょう」

たぐい稀なその美貌に何の未練もなさそうに、すたすたと歩き去る侍だった。

ところが娘は追って来た。

「あの、先程の御言葉、本当に御座いますでしょうか？」

無論、冗談のつもりだった侍は

「えっ！」

と今度は、こっちが立止った。

(一)

そして程なく小山泊りの春の宵――。

綾乃と名乗った娘は水も滴る薄化粧して、これはまた行儀良く用意の着替に胸高帯、湯上りの肌の匂いとその白さは、白羽二重を紅につつんだ様に、得に云えぬ艶かしさ。

やがて運ばれた膳の上についた銚子をとって、ニッコリ酌をするところなど至極物なれど、町家の箱入娘とも思えぬ。かと云って野暮な武家娘でもなし、どうも得体が知れない女だ。

(殊によると此奴、生娘らしい顔をしていな



がら、案外色仕掛けで浮世を渡る女狐かも知れぬ。……とすると先刻の駕籠も芝居だろう。面白い、一つ乗って見るか)

つい若気の悪戯心が動いた侍だった。

(しかも、女の身が仮りそめにも一生の問題を口約束するとは余りにも軽々しい。だがそれを餌に俺から何を狙う積りだろう……まさか、俺が、勝安房様の秘命を帯びて、日光の大鳥圭介様に届ける密書を持っていると、気付いた訳ではあるまい。すると、金か、ま

あ良い据膳食わぬは男の恥)

と云う様な訳で、とうとう娘と同宿した侍だった。娘の酌で一、二杯のんで

「おっと、大事な事を忘れていた。祝言の式だ。仲人なしの祝言。すべて略式。盃の順は逆になったが、まず花嫁さんに」

と盃を差すと

「はい。」

恥らしいを初々しく浮べて、恭々しく白い両手を揃えてうける。注がれた酒を差し俯きながら型どおりに三度飲んだ。――それっ切りお互に無言、稍育たけて、閉め切った部屋の空気は、酒の香と脂粉の香にしっかりと醸されてきた。尤も、侍の方でも何となくむずがゆい気持になつて、所在なく盃をあけていたのだった。女の方は一杯の盃に、もうぼーと桜色に上気し

て、全身から媚態がほのほのと立昇っている様である。

二本目の銚子を持って娘は、膝をすり寄せて

「さ、もうお一つ」

「うむ」

「さ、もうお一つ」

既に蕩然となっていた侍は、二杯目に

「いかん、よ、酔った……」

と手にした盃を、ぼたりと落すと、そのまま突然横にごろりと崩れた。

「あっ、どうなさいました」

とたんに、娘の美しい顔から媚がすーと消えて、眼がキラリと光った。

「ホ、ホ、ホ、男なんて、他愛のないもんだねー」

ニンマリ笑って、がらりと変ったその口調、矢張り只の女でない。

苦悶の色さえ浮かべている侍の傍ににじり寄ると、つと懐へ手を差し入れた瞬間、どうした訳か

「あっ！」

と飛び退こうとした。然し侍の手が娘の手首を、がっしりと掴んでいるのだ。

「はっはっは、痺れ薬を入れたと見てとつての芝居だ。お前の色仕掛けと、どっちがうまい」

と、娘の手をぐいと捻上げた。

「ち、ち、ち、痛いじゃないか、妾をどうしよう云うのさ」

「どうも斯うもない。何故この様な悪事をするか、それを申せ。誰に頼まれた。」

「誰に頼まれるものかえ。つまりは江戸が不景気だし、街道で良い鴨のくるのを待ってたのさ。妾は手枕お千代といって名代の枕探し、お役人が血眼で探している女泥棒なのさ。今迄一度だってどちを踏

んだ事のない妾だが、もう年具を納めますよ。さあ、その手離して下さいな。もう逃げ隠れはしやしないんだから」

一気に打蒔いたお千代、すっかり不貞腐っている。

「拙者の何を狙った？」

「決ってるじやありませんか、腹を押え押えの道中、胴巻には百や二百の金があると見込んで、前から馴染みの雲助共と万事舶来の流行だから、芝居も新手を出さなくちやーと、気違い娘の筋書きは、ねえ、昼間の通りさ。出たとこ勝負とぶつかって見たと云う訳さ。お痛い。何て馬鹿力だろう」

と、たった今緩められた手を撫っている。今迄黙ってお千代を瞋っていた侍は、つと威儀を正した。

「お千代とやら、其方も江戸の産れであろう。すれば徳川家の鴻恩を満更思わぬでもなかるう。悪に強ければ善にも……とやら、どうだ魂を入れ替えて見る気はないか」

「成程、枕探しの女泥棒を捕えて、立派な御意見、花も実もある武士とは貴方の様な方を云うんでしようね。でも折角ですが、妾は恩を掛けて貰うと云うのが大嫌いでね。親兄弟に死に別れてから、やり度い事をやり、したい様にして来た女です。見あらわせられたのは運の尽きですわ」

「然らば、たずねるが、其方、命は惜しくないのか？」

「そりや、貴方妾だって人間ですもの、死に度かあ有りませんわ。

之でも買いたい役者もあり、仕送りし度い男もあるんですが……命欲しさに右から左へ魂を入れ替えるなんて事は出来ませんよ。妾は、妾だけのもので御座いますからね」

行燈の光が、キッと結んだお千代の唇、恰好の良い鼻を横から照らして、眼には真珠の如きキラメキを宿している。

「不敵な女め。それ程粗末にする命なら、芝居乍ら祝言をしたのも何かの縁、この場で斬り捨ててくれよう」

「貴方の腕なら、キツと痛くないでしょうね。どうせ晒し首になるなら、一寸髪を撫付けますから、少し待って下さいな」

侍が大刀を引つけたのを、ビクともせず鏡台に向うお千代だ。

これには侍も、暫時呆然とした。

(こいつは、煮ても焼いても喰えん……)

まさか、本当に此の部屋の中で血を流す訳には行かぬ。

(どうするか?)

迷った。

「さあ、仕度は出来ましたよ」

お千代は艶然と振向いた。

「おや、どうしました。こう、ニッコリ笑った所で、ポンとやって下されば、首になってもそのまま、都々逸の一つも唄うでしょうからね」

どこ迄も人を食った女だ。

侍は、何か頷くと衣紋掛けに掛かっている手拭をとった。それはお千代が入浴に使って、まだシットリと濡れているものであった。

「おや、何をするんです。その手拭で斬口の血を拭いて下さるんですか?」

云い終らぬうちに、その手拭がガバッとお千代の唇を塞いだ。

「な、何を……」

それも一声で――

紅い袖口から白い二の腕迄、あらわに宙に泳ぐ。それをぐいと捻じ上げると、袖のめくれたまま刀の下緒で背中に縛り上げた。

(何の真似だい。一思いに殺さないのかね!)

フガフガと云う声になった。

お千代は、柳眉を逆立てて、足をばたつかせた。緋の長襦袢に白い脛が花模様を鮮かに描いた。

「騒ぐな、はらわた迄腐った女、斬る刀は持たぬ。明日になれば駕

籠にのせ、そのまま昼間の場所に捨ててくれるわ」

そのまま侍は、ゴロリと横になった。

(畜生!)

はげしいお千代の腕きに、行燈の灯がゆれた――。

その翌朝。

お千代は松並木の一本の枝に昨夜のまんま吊り下げられていた。

額にベタツと紙がはられて、顔を覆いかくしていた。

その紙には――手枕お千代と申す名代の女白浪を天に代りて仕置きするもの也――

侍は、そのまま十五里の強行軍で、石橋、雀宮、姿川、鹿沼を経て今市へ入ると、もう幕軍の先遣隊がいる。案内されて、本陣の大鳥圭介に無事密書を手渡した。

幕府の政事総裁であり、陸軍総裁である勝安房守義邦の密書と聞いて大鳥圭介は恭しく密書を開いたが、見る見る昂奮の色が面上に漂った。密書の要旨は――上様はひたすら恭順の意を体して、輪王寺宮様にも官軍の大総督府に和宮様から哀訴しているが、若し官軍が飽く迄徳川を朝敵とするなら、江戸八百八町へ四方から火をかける。房総の漁師まで呼んで江戸に火の手が見えたら船を出して江戸市民を助ける様指示してある。その時は日光の部隊は、長駆江戸迄馳せ上り、薩長の兵を打って貰い度い――と云う内容。

「うーむ。いよいよ勝さんもやるか……」

大鳥圭介は思わず呻いた。それにしても、この江戸焼打の秘策を届けるとするならば、この男は余程勝安房に信任厚い男に違いない。

「君の名前は?」

「はっ、新選組の土方歳三です」

「何、新選組の土方!」

大鳥圭介はじめ廻りの諸士は、吃驚してこの侍をまじまじと凝視

した。

土方と云えば二年程前は、新選組の副長として泣く子も黙る剣豪。筋骨たくましい眼の鋭い色浅黒い姿を想像し易いが、目の前に微笑をたたえている土方は、やっと三十そこそこ眼の涼しい、やや色白の好男子なのだ。

「そうですか、御苦労でした。温泉へでも入り、ゆっくり休息して下さい」

大鳥隊長は密書を仕舞うと、すっかり親しみを現わして歳三に云った。

「有難う御座います。然し、役目が済めば直ぐ江戸に立帰って復命し、下総に帰ります。隊士達が待つて居ります」

新選組の隊長近藤勇は負傷して療養中で、落日の新選組の士気は、副長の土方歳三一人にかかっているのだと思うと

「そうか、では気を付けて……」

圭介は感慨を籠めて頷いた。

(三)

春の日が暮れて、一刻千金にたとえられた宵が、しのび足に迫って来た。

おぼろな宵やみに、そことも知れぬ桜花の匂いが、そよ風にのってただよってくる。

かすかにほこりの立つ野末の道を、背に大つづらを背負って小山宿はずれから、結城村の方角へ歩いていく男がある。

尻っ端折りの毛脛、煮しめた様な古手拭いで頬冠り、膚もすけて見えるボロをさげている。「目で非人の仲間と知れる男だが、目は驚の様に鋭い。」

ずーと遠く筑波山が、墨絵の様に眠っている。宵の口なのに殆んど人気がないのは、このあたりに非人が数多く巢食っていて、うつ

かりして近在の者や旅人でもこの辺を通れば、男だろうと難癖つけて唯では通さない。若しそれが若い女であろうものなら、口に云えない恥しめを受けるといふ。

やがて一むらしげれる森かげの荒れ寺。下野から下総へ流れる鬼怒川のせせらぎが聞える程の静寂さだ。男は背丈にあまる雑草を分けて、くずれかかった正面の持仏堂の軒下へ、ズカズカ入っていった。住みなれた我が家へ戻る様に——そして朽ち腐れた雨戸をあけて上りこむと、ぼーと灯がさした。

「権兄いかい？」

「おう俺だ。今夜はいい土産を持って来た。お前達が日頃から欲しがっているものだ」

いっているうちに、異形な人影がそろそろと現われて来た。

「何だ、見せる……」

足の悪いのや、手のない男や、顔中膿みつぶれて崩れたのだ。

「うん、今拝ませてやる。灯を持って来い」

と権兄い、背負った大つづらを肩からおろすと、ガンジガラメに縛った細紐を解いた。

「小山宿の松並木で晒し者になっていた女泥棒だが、途方もねえ別嬪だ。勿体ねえから頂戴して来たんだ。驚くな、ほら……」

ガタンと、つづらのふたを開けて、たくましい両腕をムツと差し入れると、やがて人形を抱く様に軽々と引き出したのはお千代だ。

「ほほう、えれえ拾いものをして来たじゃねえか、凄く別嬪だ。どれ、よく見せる。顔も見せる」

「俺にも拝ませろ」

「へえ、何てすべすべした綺麗な肌だろう。見事な黒い髪だ」

「一寸、拝ませてくれ！」

わいわい喚き立てるのへ

「待て待て、良く見える様にいま猿轡をとってやるが、勝手に縄を

解くんじやねーぞ。つづらの中でも大暴れした女だ」

と、権はお千代の猿轡をとった。

むうんと鼻をついた異様な臭気に、お千代は、顔をそむけた。

吊り下げられた身体の重みで、縄目は肉に食い込み、腕も胸もしびれていた。息苦しい猿轡のまま、更につづらに押し籠められてはきたが、まだ気の張っているお千代だ。だが、上からのしかかるように見下しているのは、世にも醜惡な非人共の顔である。

はっ、と思わず身じろいだお千代の裾が、二つに割れて、燃える



種異様な興奮で大変な騒ぎになった。

「よさないか、けたもの！」

お千代はもう見栄も外聞もなく、のけ反ってからだを捻じって、反転した。

その為に一層、裾は割れ胸許は乱れ、妖しいまでの濃艶さだ。一人が何か云うと、取り巻いた人垣がどっと声を上げて囃し立てる。帯が解けて流れて、衣裳の黄や赤や青の色が、肌の白が、男達の間から、もまれる様に動いた。

様な緋の色があらわになる。

権は、ごくつと唾をのんだ。

「着ているものを引つ剥いて売ったって大した金だ。どうだ手前達……時にはこんな拾いものがあるから乞食は三日やるとやめられねえって云うんだな」

「全くで」

「たまらねえや、この匂い」

「どれ——成程、畜生」

鼻を鳴らして、一人がお千代の胸許へ顔を近づけて犬のように匂いをかく。

「畜生、いつまでかいでやがるんだ」

「俺にも、かがせろ！」

「少し、さわらしてくれ！」

鼻をふくらます奴、袖をつかむ奴、髪にさわる奴、裾を捲くる奴、緋縮緬を引っ張る奴、一

「おい、待て待て、そんなに乱暴すると、壊れちまう」と権が制して、淫らに舌なめずりした。

「今夜は、俺の花嫁にするんだ」

「てへ、たまらねえ。明日の晩から、こちとらにお裾分けか」

「余り綺麗で、可哀そうな気がするが……泥棒とあっちゃー仕方がねえ」

「ちえッ、何が可哀そうだ。殊勝な事を抜かすねー。そう云う手前は、さっきから涎ばかりたらしているじゃねーか」

そんな話声が、ちらほらお千代の耳に入ってきた。

（こんな非人にこれ以上馴れものにされるより、一思いに舌をかみ切って……）

と思いつめた心の底に、ちらっちらっと思いで消え消えては浮ぶものは、あの小山宿の侍の面影であった。それが不思議な程、生への執着となつて、悪臭を放つ醜怪な非人達に抱きつかれ、撫で廻され、したい三昧に馴られて、その気の遠くなりそうな嫌悪と悪寒をも、せい一ぱい必死に歯を食い縛って堪え忍ぶお千代だった。

権は、ためつ、すがめつ、お千代の頭の先から足許迄ねめ廻していたが、いきなりお千代の身体を抱き上げた。

「何をするのさ！」

まだ、何処にそんな抵抗力が残っているかと思う程の激しさだ。

「へ、へ、へッ、祝言の床入りだよ」

「畜生！ 誰が、死んだって、畜生！」

あらん限りの力を絞って、権の双腕の中で跳えたお千代は、男の力に、甲斐ない事をする、とうとう

「あれ！ 助けて！」

と紅の悲鳴を挙げた。それは生れて始めての叫びであった。

(四)

おぼろな空に月が出たのか、破れびさしのすきまから、青白い月光が筋になって荒むしろの上におちている。

その荒むしろの上には、権の為に、あられもない緋の長襦袢一枚にむかれたお千代が、腰紐で後手に縛られ横たえられていた。

少し前に、舌も噛めぬ様口一ぱいにぼろ布を詰められ、その上を更に煮しめた手拭が覆っていた。

（あ、あッ）

お千代は絶え入る様に息を引き、せい一ぱいに身体を硬くした。権は、にじり寄ってきた。

その獣欲に燃えた眼は、後手に縛った腰紐が食い入って、さらにふっくらとふくらんでいる胸、胸から腰、腰から乱れた裾へ——じいっと刺す様に、なめる様に這い回るのだった。

「うー」

と足をバタつかせて、不自由な上体を必死にはね起すと、権の腕が、ぐいとのかかって抱きよせる。

柔かい身体は香ばしい体臭を伴って必死に身跳える——

その戦慄のリズムを、抵抗を楽しむ様に、

「ふ、ふ、ふ、もがけくもつともがけ」

と淫獣の笑みを浮かべた権は、片手で長襦袢の襟をグイと引き下げた。

白桃の半球の様な乳房は、縛めの凹みを残してくつきりと盛上り、激しく喘いでいた。

権は、せきを切った様にお千代を押し倒した。その時

「痴れ者！」

の大喝一声！ 白刃の峯が権の頭を強か打った。

「ぐう」

ひき蛙のつぶれた様な声を出して、権は仰向けにのけぞった。

絶望の余り失神間際だったお千代は、其処に立っている侍を見て

愕然とした。

侍は土方歳三だった。

——帰路、小山宿を通る時、何か甘美な気持が動いたのは、お千代を思い出したからだ。前に泊った旅籠宿で、それとなく松並木に晒した女白浪の事を聞いて見ると、結城街道一帯の雑木林に住む非人が、つづらに入れて背負っていったとの話。

「あの非人共にあっちゃ、連れ込まれた女は惨々罵られ、三日目には半死半生、狂い死するといひますぜ」

宿の主人は、お千代の美貌を知っているばかりに、如何にも勿体ない、といった顔をした。

（大事の前の小事。それにお千代の奴、今迄さんざん男をだました罰だ……）

と一旦は自分の心に云い聞かしても、すぐムラムラと或る感情が込み上げてくる。別にこれと云って形のまとまった感情ではないが唯、狂い死するとは余りにも悲惨な様な気がするのだ。

（一思いに斬れば良かった）

そして、いつとはなしに結城の方へ道をとった歳三は、偶然、ある林の中にある寺から、非人達の喚声を聞いたのである——

「大変な目に遭ったな、許せ」

歳三は素早くお千代の猿轡と縛めを解いた。お千代は、やっと自由になっても、痛みと痺れの為に、しばらくは身体を撫で擦る事も出来ない、滑らかな、お千代の両手首には、縛めの痕が赤紫にクッキリとついていた。

物音に、またぞろそろ集って来た非人達は歳三の白刃で一喝されると、意気地なくうずくまって仕舞った。

歳三は、なにがしの金を与え非人の一人を案内させて、近くの村から船を雇った。歳三の背には、お千代が負われていた。

月の鬼怒川を、しぶきに濡れ乍ら一気に下り、守谷から利根川本

流に入った頃、漸くお千代は元気になった。

夜は、ほのぼのと白んで、対岸の蘆の間から、葭原雀が囀り出した。

お千代は長襦袢の上から、歳三の羽織を掛け、船底に横になって歳三の膝を枕にして、うっとりとして葭原雀の囀りを聞いていた。

（五）

江戸の焼打ち事件はなかったが、小山宿では官軍と大鳥圭介の部隊の戦があった。

二度あったが、二度とも幕軍の大勝となった。

そのかげに、姿を順礼に変えたり、或は毒消し売とも化け、芸者や、或時は田舎娘になったお千代の間諜の働きがあった。

手枕お千代は不敵じやないか

次は、どの手でだますのか

隊長の大鳥圭介は、こんな都々逸を唄った。作意は無論賞讃にあった。お千代も、笑いながら美音で、其都々逸を唄ったという。

小山、宇都宮と転戦、連勝はしたが、大勢は如何ともし難く遂に全幕軍は総敗走となった。

八月三十日。徳川海軍副総裁榎本武揚を指揮官とした開陽、回天その他七隻の軍艦は、暴風雨の品川沖を抜けて浦加水道、房総半島を回り、犬吠岬の附近屏風浦で新選組の土方歳三、歩兵奉行の大鳥圭介等二百数十人を乗せると一路蝦夷地の函館迄突っ走った。

この連絡にはお千代が当たったという。

土方歳三は五稜郭で戦死した。

其後、お千代はどうなったか誰も知らぬ。

大鳥圭介は、官軍に降伏し、其後許されて江戸へ帰って来た。

其時、お千代をしのんで自作の都々逸を唄ったが、それが一時流行したといわれる。

（完）

(映画通信)

今月の縛られ女優達

大河原 珠樹



▽大江戸七人衆 (東映作品) 花柳小菊

大江戸の平和な庶民をおびやかす悪旗本達の鬼面組に、真向から挑戦する正義の七人衆。その頭目たる旗本三百石勝川縫之助に首ったけの深川芸者染吉が、鬼面組の頭領松平帯刀に横恋慕され、勝川が留守中に拐かされる。七人衆の一人平原甚兵衛が救出に來たので、帯刀は染吉を縛って別室に閉じこめる。大勢の武士達がドヤドヤと入って來て二人がいきな

り染吉の両腕をとってネジあげ、二重の細繩を胸に廻して後手にくくりあげる。連行される時に後手首の繩り目がチラチラ見えるが本當に縛っていた。

▽蜘蛛男 (新映画作品、大映配給)

宮城千賀子、河上敬子、その他

クライマックス近く、妻に裏切られた復讐鬼「蜘蛛男」が、妻に似た顔の女二十三人を虐殺するためパノラマ・シヨ―「地獄絵図」

を催す。人形のかわりに使われた二十三人の美女達はいずれも拐かされたもので、地下室に閉じ込められているが、映画スター富士洋子(宮城千賀子)明智探偵の助手淳子(河上敬子)もいる。この二人が連れて來られる時に細繩で前手縛り、猿轡をかまされ、こづかれながらよろよと入って來る。続いて「地獄絵図」のシヨ―になり、半裸の美女達の悶えるシーン。全部ではないが過半の女は手首をくくられ、頭上に捧げて毒ガスの責めにのたうつ。但しここでは宮城、河上両スターの姿はみられない。

▽江戸群盗伝 (松竹作品) 福田公子

すでに私からも、他の方からも紹介があつたので省略するのが、福田の演技といい、本格な縛りといい、今年上半期最高の圧巻であ

ろ。責め抜かれる大阪屋花鳥の灰色の囚衣の右腕(二の腕あたり)が破れて、そこにグイと縄が食い込んでいたところなど、たまらない魅力だ。

【註】五月号での紹介の折に嵯峨三智子の縛りとあったのは私の誤りにつき訂正します。

▽朱桜判官 (新東宝作品) 若杉嘉津子

素晴らしい吊り責めがみられる。好評だった昨秋の「天下の鬼夜叉姫」にさらに勝る快心作。前作ではモッコ型の後手吊りだけだったが、今作では答打ちの折檻などフロクがついている。時間的には僅か3カットで短い胸もはだけ、桜刺青の肩もあらわな長シユバシ姿、しかも裾も乱れて湯もじが艶めかしくかつ凄惨な成熟した女体を、グルグル巻の雁字搦目に後手に縛り三尺近くも吊り下げていた。芸者君奴が成瀬大膳からスリとって遠山左衛門尉に渡した密書の有りかえと髑髏組一味に弓の折れで胸や腰を打たれるわけ。緊縛感もあり迫力に富んでいた。やがて氣息エンエンの君奴は後手にギッチリ縛られ牢の中にほうり込まれるが、これまた近來の傑作であろう。実に見ごたえのある作品だ。

▽清水の佐太郎 (松竹作品) 伊吹友木子

旅芸人小春一座の太夫美寿弥、実は勤王公

郷の娘鶴姫が江戸への使者となつての変装。しかし新徴組に正体を見破られて捕えられる屯所の一室で密書を出せと責められる。細引で胸を二巻して後手、答で二三度帯のあたりを打たれるが白状しないので、ローソク責めにされかけるのを同席の備前屋松五郎が止めて、襟や懷や帯の下に手を滑り込ませて淫らな責めにあわせる。可憐な伊吹友木子の縛りをみたのも初めてだが、責めに悶えるポーズも特異なおびえたようなマスクがいきで存外巧い。ただ紐が細過ぎて緊縛感に乏し過ぎる。なおこの後で、松五郎が一座の娘を手ごめにしかける場面がある。手ぬぐいで前手縛りにされた小娘が松五郎の膝の上に仰向けに押えられて泣きわめく。端役で確かなことはいえないが佐乃美子ではないかと思うが。

▽悪魔の爪跡 (日活作品) 筑波久子

六月号で藤木仙治氏から紹介済み。上半身シユミーズ一枚の半裸体にされて椅子に後手縛りにされている。混血児ロードの持っている麻薬に触手を動かしている密輸団のボス、ポール達がロードを慕う女給の洋子から麻薬の有り場所をかき出そうと責める。最初は答打ちにするが何も知らない洋子が答えないので、次に乳房の間に煙草を押しつける。後手首だけの縛りでそれも一瞬しか見ることが出

来ない。責められる時の筑波久子の演技もあまり感心しない。

▽朱桜判官 (新東宝作品) 女優名不詳

越前屋を襲った髑髏組一味がこの家の娘お静を奪ってしまう。娘はやがて一味の首領酒井但馬守の息女若葉の病を治す薬にと生血をとられる運命となるのだが、猿ぐつわ後手縛り(四重五重のグルグル巻)で牢の中へ投げ込まれる。北沢典子の医師源資の娘お雪も拐われ牢に入れられるが、この方は縛りがみられない。なお牢から引出された娘の一人が手とり足とり裸にされて気を失うシーンもみもの。

なお今月観た中で縛りの無い映画を御参考迄にのべておきます。

▽旅は気まぐれ風まかせ (大映作品)

▽夜の鼓 (松竹作品)

▽火の玉奉行 (東映作品)

▽天下の副將軍・水戸黄門漫遊記 (新東宝作品)

根気よく続けたいと思っているこの「映画緊縛通信」。とかく資料が乏しくなって息切れがしてしまいう。今月もまた数少くてお恥しいのですが記録文献のつもりで書きました。悪しからず御容赦下さい。

Das Grausame Weib

Dr. Yohannes R. Birlinger.

☆ 残虐なる女性達 ☆

—1901年刊行の独文絵入単行本より—

森 本 愛 造・訳

最近発行されつつある雑誌の中で繰り返し掲載されている死刑執行の報道記事が、悉く事実そのままを伝えていくかどうか、という点については、一概に判断を下す事は出来ないが、それらの記事に現われる婦人達の敘述はまことにリアルな感じに溢れている。現代カメラを手にして死刑を撮影する英米婦人の姿は決して珍らしくないのである。併し私は不確実な、そうした現象から暫らく遠ざかって、是迄した様に従来の文献からの引用を以って例証しようと思う。

【訳者註・戦後、私達は新らしく輸入されて街に氾濫し始めた米国のライフ、タイムなどの雑誌に生々しい戦死者や処刑の写真を発見して驚かされた覚えがある。あの烈しい戦争末期でさえ、空襲や実戦をこそ実見した者も、新聞雑誌に死体や生傷の掲載された試しを知らなかった。私達はムッソリニの処刑場面をニュース映画で見、アウシュヴィッツの墨々たる死体の山を公刊紙上に発見する様になった。アメリカのみならず、西欧諸国の刊行物が、死刑、拷問を極めてリアルに報道して来たことは明かである。私達は婦人達が死刑を観覧するに止まらず、ナイアガラと共にその写真を記念アルバムに加えたいという慾望に馳られたであろう事を、本書に換る迄もなく認識することが出来る。又恐らく巷間に散見される以上の淫虐場面が多くの男女の手で

フィルムに収められているであろうことは想像に難くない。このビルリッゲル博士の簡単な敘述は、実に多くを物語る。惨虐を見、記録することは、最早、西欧婦人の個人的な徳と相容れぬものではなくなったのである。

屢々本欄で触れるので、食傷気味になっているかも知れないが、ナチス強制収容所で発見されたと云われる各種の個人的記録写真は全裸で独乙兵の前を追立てられるユダヤ女性や人為的に作られた死体の山や、鞭を手にした女看守などの極めて直接的な資料となっている。当時すでに現在の様にシネ・カメラが普及して居たならば、私達は更に興味ある十分な資料に遭遇して居たに違いない。私達はラッセルの著「人工地獄」の中で恐らくは女性の手で撮影されたイルマ・ギイゼの写真を発見する。ビルリッゲル博士の説明は甚だ独断的であるが、私は茲に更に重要な一つの引例をしようと思う。「特集文芸春秋」（卅一年十二月刊）『私はそこにいた』という雑誌の二〇四頁に「ガス死刑室の女記者」と題して、ノラ・グレアムという女性がカリフォルニア州サン・カンタンで執行されたポール・マーズデンという死刑囚のガス死刑の実況を伝えている。

「私が立会を許されたのは、私が執拗にそれを要求したからである。（中略）しかし私は偏執狂ではない。私は何も好き好んで人の死

ぬのを見たくなんかないし、まして死刑の執行に立会うことなど真平である。だがこれは女性の職業意識の問題である。(中略)婦人記者が死刑に立会っていけないという理由があるのだろうか。

ノラ・グレアムの論旨は極めて都合のよいことばかり述べている様に思われる。一体そんなに見たくないものを見る為に執拗に知事に頼み込むということが有り得るだろうか。彼女はそれを見たくないものを見る為に当日の「朝食を忘れてしまう」のである。彼女は雄弁に死刑室の模様、建築の様式、所在から刑務所のある離れ島の風景を語っている。「恐怖と苛責の」観客が一体こうした冷静な観察が可能なものであろうか。そうして、死刑囚の居る建物の中で一種異様な「死の匂い」を感じとり、「戦争の第一線に立った時」さえも「恐ろしい大量埋葬を見たときも感じなかったこの異様な甘酸っぱい臭気に全く堪えられなかった」と書いている。彼女の心理の本性が一体奈辺にあったかは最早疑う余地がないのである。「新聞記者の責務と特権」という言葉は、イルゼ・コッホやドロテア・ピンツが口にした「独乙民族の責務と看守としての特権」という言葉と何等の相違もないのである。「女性は法的、社会的の一切の制約から解放されたとき本能的に嗜虐的本能を露呈する場合が多い。」とするビルリッゲル博士の

根本的仮説は又も実証されているわけである。後半死刑の実況は宛ら五分間にわたってドン・キホーテの死を微細に描いたりヒアルト・シュトラウスにも似て、精彩巧妙なものである。彼女は決して不快の為に目をふせることはなかった。彼女の怖ろしい程の本能は目前で青酸ガスに苦しむ男の姿を一秒残らず観察した上、周囲の人々の挙動にさえ注意を怠っていない。私達は人がその本来の意志に反して、かくの如く冷静に振舞える事を信じる事は出来ない。更に私達は、如何に表現能力に秀でた文才を以ってしても、事実と文章とに相当に差異のあることを知っている。彼女は文章に表れた以上の強い感銘を以って実状を凝視した事は明らかである。かくの如くカメラを以って死刑を撮影することが、西欧婦人にとって容易であるだけでなく、歎びを以ってなされつつあったことは十分に理解されよう。

第一に、レオ・ハアゼ著の事実小説「ラギイの南西旅行」(ベルリン市刊行一九一九年)は強い興味を以って読み得るものの一つである。南西アフリカについて自分自身を主人公としたこの小説の一節に次の様な部分がある。粗野な又冒険の多い旅行は彼女の趣味にぴったりであった。彼女にとって、アフリカの南西部が存外平和であることは不満に思われるのだった。未開の米国西部ではここ以上に

興味のある事件が珍らしくなかった。少くとも、相対する蛮人とカウ・ボーイが住み、私刑が屢々に行われていたからである。

私刑の実況についての婦人達の興味についてはパウマンがその著「暗きアメリカ」の中で、一八九一年にニュー・オーリンズで起った事件について次の様に記している。

ある殺人事件の共犯として死刑になることになっていた二人のシチリア人が、暴徒の為に街に引きづり出された。コンゴ広場では大勢の市民が口々に怒号していた。二人は忽ち一系残らずはぎ取られて一人は立木に、他の一人は街灯の柱に縛りつけられた。そして数百発の弾が発射された。この成行きを婦人達はバルコニーや窓から眺めて居るのであった。

前に引用したレネ・ハアゼ女史は、前掲の著者以外の或る作品の中で、カメルンで行われた死刑執行について次の様に述べている。

五人の犯人はすでに獄舎につながれ、人々は知事が彼等の死刑の判決を確認するのをまつばかりであった。英国の官吏が退席した後すぐ確認状が届けられた。その為めに私達は幸運にも未踏査の地方への探険に出發する前に死刑の実施を見る事が出来たのである。警察長官の邸宅の前の丘に三台の絞首台が建てられた。中央には簡単な形式の主犯絞殺用の絞首台が、そして、その両側には夫々二人

宛を絞首する為の複式絞首台が設けられた。死刑の執行は一つも美的ではないし、楽しいものでもない。併し私達はカルメンに来てから、こういう見世物を何一つ見ていなかった。ので、長官の邸宅の窓からこの死刑を観覧することに決めたのである。死刑の執行について私は実態よりもっと恐ろしいものであると思っていた。私は残酷な面白さを考えてさえ居たのである。恰度当日はパラウエルの日で土人の酋長達が近隣の村の者を引連れて市内に出てくる日であったので、丘の麓には種々雑多の人種が集った。全くこの見物人達をみているだけでも十分に価値のあることであつた。絞首台の周りには銃を持った兵士達が半円型にとりまいており、絞首台の絞索の下には一個宛セメント樽があり、囚人はその上に立つ様になっていた。その樽には綱がついており後ろに立っている兵士がその一端をつかり握っていた。合図によって兵士は囚人の足下からこの樽を除くのである。刑場の現場には、立会者として、X大尉と私の良人と二、三人の西欧人が立っているだけであつた。やがて合図によって囚人達は刑場に連れ出されたが、彼等は更に不安の色を示さず、漠然とした落着きを示していた。驚ろくべき無頓着さで彼等はセメント樽に登り、その首の周囲に絞索をかけさせた。そこでX大尉はもう一度判決文を読み上げた。これは見物してい

本誌百号突破記念 懸賞原稿募集 について

本誌通刊第百号突破記念の懸賞募集原稿は、その後引続いて続々と到着しております。すでに七月号誌上で「お町の最期」を発表以来、八月号では「身悶える妖精」更に本月号では沖龍彦氏の「草双紙に於ける責場の研究」を掲載いたしました。

優秀作品は今後次々と誌上を飾

ってゆくつもりであります。入選該当作品多数の節は、懸案入選作品ばかりの特別号を臨時に増刊いたします故、何卒奮って御応募下さるよう御待ちいたします。尚、只今入選候補として数篇検討中でありまして、誌上紹介発表を御期待下さい。

△編集部▽

る有色人の中にこの死刑囚と同じ罪を犯したものが多く居ることが判っていた為に、彼等に強い感銘を与える為に特になされたものである。ところが、いざ執行という段になるとこの死刑の執行は段々と喜劇的になつて来た。兵士達（土民兵）は判決文の——知事の名に於いて——という部分で樽を倒す様に指令されていたにも拘らず、土民特有の悠長さで空を見上げている中に大切な瞬間を逃してしまつたのである。X大尉は一旦中止して、警察長官の言葉によって始めて樽は引き倒された。この有様は決して莊重でもなく、唯いたずらに恐ろしいという種類のものでもなかった。私は、とにかく一切が無事に終つたことを同伴の人々と共に喜んだ。

いずれにせよ、黒人が如く無頓着に死んでゆく事は注目し価値することである。以前に私は同じ感慨を以て、他の多くの種族の死に遭遇した。南西部でヘレロ族とホツテントツト族、南アメリカの変種有色人種、そうして今又このカメルンで同様の状景を見たのである。

【訳者註・有色人の苦痛、死に対する諦らめに似た無頓着さについて、外誌は、よく日本軍の玉砕を挙げる。東洋人の無表情さは西欧人の驚異である。私達も亦感情を表に現わさぬ事を以て美德とした教育を受けた。沈黙は何よりも雄弁に感情を伝えた時代があつたのである。併し、今や、その様な特技は我國民からも失われつつある。むしろ、強制収容所に於けるロシア人、ユダヤ人、支那人の方がより多くこの無表情の特技を示しているのではなかったらうか。】



切腹風土記

江戸の切腹

壬 生 三 郎

江戸時代に於ける刑罰としての武士の切腹式法に関する文献は沢山あるが、実例や自殺としての切腹、武士以外の切腹などの例を集めるとなるとなかなか容易なことではない。

武士の切腹例は徳川実記に一番確実で豊富な資料があるが、各種の風俗資料から丹念に集めて行く手もある。

たまたま発見しても

「元文二年十月四日之侍、麻布三河台馬場にて屋敷方之朝と相見え、切腹いたし候之處、其容貌装束大小共、いやしからず相見え候由所之者早速見付訴出、檢使有之候、其節も息絶不申存命にて、松平幸千代様御家来富永九

八郎と申仁之由、即晩相果之故、幸千代様赤坂御下敷へ御引取被成候由」(元文世説雜録卷之七)

とか。

「享保十九年三月二十九日、久我殿御家来及刃傷、新烏丸荒神口下る町平井数馬という者、六十二才、一条烏丸西へ八町林兵庫六十七才という者を切殺、我身も切腹す、意趣不祥」

(月堂見聞集卷之二十八)

の類が多く、特殊な事情とか状況の詳細な模様をつかむ資料を拾い出すことはすこぶる困難である。

自殺原因からみると意趣遺恨、喧嘩が一番

多い。何しろ人切り庖丁を腰にさしていて、恨みや喧嘩ならすぐ抜く。抜けば血の雨が降り、跡始末には切腹してしまう。非常に簡単なことだ。

「享保四年、先日上京仕候阿蘭陀人に付被参候与力、石河土佐守殿組井上平馬事、二月十四日道中筋島田にて乱氣被致候て、組下の者と喧嘩有之、翌日切腹、往古より無之事之由」(月堂見聞集卷之十)

享保五年四月、泉州岸和田の岡部美濃守の家臣で三千石取りの岡部数馬二十一才は召使の小蝶に言寄ったが、うんと言わぬので手討にしてしまった。

「然所に（四月十四日）小倉伝四郎（家老の悴）何方に忍び候や、懸け出数馬を殺し、即自害いたし候、親伝兵衛（家老）承之是も切腹致候、御母儀様御歎の余り、御自害被成候を漸次取留め候て御疵御養生被成候由風説仕候、世間には数馬殿御乱氣之由にて、御分知は本家へ参候」（月堂見聞集卷之十二）

などのやや混入った例もある。

武士はどうして腹を切りたがるかというところをおかした場合に切腹しないとんだ不名誉なことになるからで、例えば享保年間の郡山松平甲斐守のお家騒動のおり、主謀者の武田阿波（二千四百石、六十四才）は縛り首にされ、息子、甥、孫に至るまで繋累は全部打首にされた。こうなつては叶わないから此事件のときも「此節切腹の者十五人在之候得共、其姓名不分明候」（月堂見聞集卷之二十八）と手廻しよく切腹してしまふ。

刑罰としての切腹は武士としては大いに面目が保たれることなのだ。

殿中刃傷とか殿様の喧嘩とかは派手で、記録も詳細に残っているが、その中の一つ、宝永六年の前田安女正の件を挙げよう。

同二月九日に五代將軍綱吉の御台所が五十才で死去したが、この人は鷹司関白房輔の姫君だったので、二月十四日に上野寛永寺で法要があり、勅使参向ということになった。勅使の御馳走人になつたのが加賀前田の一族

一万石前田采女正利昌と和泉柳本一万石の織田監物秀親で、鮎だ鮎だといわれたかどうかわからぬが、

「御馳走人采女正儀監物に意恨有之哉、小サ刀にて膝へ突通し、監物うつむきて倒候を又切付け」深傷のために監物は後に死亡した。采女正は乱心ということにしたが、遂に切腹仰付けられ

一、座敷白洲にて切腹の支度候処に、備中守差図にて、筋目の方にも候へば、座敷の内可然由にて、俄に所を替、座敷縁通下に毛氈を敷、其上にふとん、其上にもふせん、其上に御古法の敷草を敷候由

御徒目付

介錯 野田甚五兵衛

（元禄宝永珍話卷四）

という優遇をうけて切腹した。この事件は元禄の忠臣蔵から八年後に起つたものだから当局者は忠臣蔵の二の舞をされてはとずいぶん神経をとがらせたが、幸い事が起らず、世間も忠臣蔵の方に人氣があつたせいから余りさわがずに仕舞つた。何でも二番煎じは効きめがうすい。

忠臣蔵といへば最初は扇腹の予定だったが途中で変更されて折敷には切先き一分ほど出した短刀が出されたのだが、扇腹のいい例が越前騒動の小栗美作で、延宝八年七月「同月二十六日、松平越前守邸におゐて、美作息大

六十二才父子ともに切腹仰付らる。御検使大目付彦坂壹岐守、御目付戸田八郎兵衛、松平孫太郎、介錯越前守家来田口官次郎、美作時に五十才。

右父子ともに扇腹とて、三方に扇子一方のせて前に置、これをつりいたたく時、直に首を討、これを扇子腹といふて、断罪の間の成敗なり」（久夢日記）という。

江戸時代の初期には大阪方の断罪に切腹処分を受けたものが非常に多いが、その次の切腹流行は殉死だった。これも義腹だの商い腹だのいわれて評判が悪くなり禁止されてからその例を断つたものの、まれには殉死したものもいた。享保九年のこと「辰十月十九日、於湯島天神後天沢山麟祥院自害人之事

本多喜十郎組之御家来

塩谷安右衛門（二十六才）

右は十九日之朝五ツ半過、卯塔場掃除之者掃除仕廻罷帰候節、本多喜十郎様御墓所入口の扉開き在え候故、立寄見候得ば、自害人有之候に付、早速役僧中へ相知せ、何も罷出遂見分候処、右自害人熨斗目長上下着用、小サ刀を以鋸元迄腹へ突込相果」（享保世話卷之二）

遺書が伝えるところでは塩谷の主家が離散騒動があつて、主人本多喜十郎が病死した際に殉死しようと思つたが一周忌をすぎたので

公儀から殉死あつかいを受けずにすむと考え、て決行したという。

腹の切り方で目につくのは青山鉄之助だが、享保九年四月二十六日に青山駿河守の養子鉄之助十五才が女中おらん十九才とねんごろになったのが露われ、おらんは暇を出されて本所回向院の隣の高野寺に預けられた。鉄之助はおらん恋しさに高野寺を訪れ、そこで心中を図った。

「鉄之助殿衣類は下は白小袖、中は空色羽二重、御紋角切角の内に葉菊の紋、二つ共に振袖、上には助之亟布子被召替候と相見え、御

絵画 写真 のアイデア募集

本誌の口絵(写真を含めて)並に代理部の分譲写真、或は「画帖」「写真帖」などのアイデアを広く皆さまから募集いたします。内容はどんなものでも結構です。採用の分には、原画、若くは引伸写真、画帖、アルバムを贈呈の外、優秀なるプランは本誌に掲載の上、編集用のフォトを贈呈いたします。出来るだけ詳細なる説明及び出来れば略画の添布をお願いします。

(編集部)

紋木綿の布子袖留め、馬乗袴小倉木綿立島、右の方を下に成、北枕に御伏被成候由、両肌御ぬぎ雪踏御はき被成候、自害被成候、御刀脇指御前に置き有之候、御脇差抜身にて血付在之候、御自害の場所高野寺門の内左の方雪隠の前、葭垣と雪隠との間三尺程有之候間にて御座候」(月堂見聞集卷之十六)

鉄之助は器量すぐれた美少年の由だが、おらんの死体は寺で取片付けたらしく書いてない。青山家には家督相続でお家騒動があり、鉄之助を殺して自害の態にしたのだとの風説もあり、実際に首すじに一ヶ所、後から切付けた疵が残っていて、供をした家来の福島助之允十三才が介錯したことが後に判明した。

(異説実話、月堂見聞集、享保世話)

十五才の少年が十九才の女と恋愛して心中したのを十三才の少年が介錯した、それがお家騒動の巻きそえを食っているとは珍らしい話である。

心中では合意が無理かは判明せぬが、新婚早々の武士夫婦が心中した話がある。

「元文三年三月十九日、本所林町辺、高百石一代小普請にて、種津久左衛門と申御方、去月二十七日御婚礼御整、当月五日奥方御差殺、切腹被成候由」(元文世説雜録卷之十四)

十文字腹は武士でも気ちがいか、無念を含んでのことが多いが、遺恨を残すなどは武士として見つともないから十文字などはしない

というのが武士のたしなみだとさえいわれて、いるようになるのだ。

享保九年一月二十九日のこと衆道関係で無理心中を図った足輕加納常右衛門三十才は相手の足輕稲葉左助二十才を切殺し「腹十文字に切り、腸をつかみ出し候得共不相果」(享保世話卷之三)

などは原因、切り方などから至極不体裁だといわれる例であろう。

発狂したものは

「天保二卯年七月二十三日御代官江川太郎左衛門殿手代、柏木林之助儀致乱心、手代其外之者共之手疵為負候儀申上候書付

土方出雲守

江川太郎左衛門家来

柏木林之助(三十八才)

乱心致し及刃傷自殺、翌朝七ツ半時相果申候、咽一寸程突疵一ヶ所、腹に八寸程深さ三寸程突疵一ヶ所、左之小指切落、都合三ヶ所」(宝暦現来集卷之二十一)

と数ヶ所に傷をつくり、あまり深くないものである。

(後記)

ここに引用した資料は従来の研究に全く使われたことのないものばかりである。

×

×

×

「ニュース小説」

復 員 船

—辰×丸事件—

榎 村

青 木

審・画 奏

は し が き

昭和二十一年六月「復員船上の戦犯裁判」
「上官は投身自殺」「上官の被害者四十二名」
等々の見出で、新聞紙上に報ぜられた「辰×丸事件」は、当時二十才を過ぎたばかりの私に、異常なショックを与えた。この小説は以上の新聞記事のスクラップをもとにして書かれたが、氏名は仮名を用い、船名は一字を伏字にした。尚、構成上フィクション混入の箇所あるを承知されたい。

一

復員船「辰×丸」は、バンコックからの引揚軍人三千三十二名を乗せ、浦賀に向けて一路帰国の途にあつた。

船室の蒸暑さに耐えかねて、夜が更けても、甲板のそこそこに煙草の火が見えている。

「小泉。お前、元気がないようだな」

根津大尉は、小泉二等兵の肩から抱いていた手を離すと、あらためて顔を覗き込んだ。

「え、いいえ……今、どの辺を走ってるんでしょう——？」

「この船か——そう、台湾の北方辺りだな」「そうですか——だんだん日本が近くなるん

ですね——」

「そうとも。お前なんか若いから、嬉しさも格別だろう」

「はア……でも——」

「でも？でも、何だ——？」

「自分は何だかヘンなんでありませう——嬉しくて気持がウキウキしてきていい筈なのに——」

——反対に滅入ってきて……」

「ハハハ、感傷って奴か。オイ、女々しいぞ。サ、ボチボチ戻って寝るとするか——」

「大尉殿！ 今少し、ここにいていただけないでありますか」

「うん？うん、そりやアいてもいいが——」
 「すみません……。大尉殿。大尉殿は、日本へ帰っても自分のことを——」
 「何だ、貴様。そんなことを心配してたのか。馬鹿な奴だ！」

「でも、大尉殿には奥様が……」

「女房は女房。お前は前だ。それに女房は女だぞ。貴様は男だ。比較になるか」

「はい……」

小泉二等兵は、不意に自分がいじらしくなり涙ぐんだ。

「小泉。お前泣いてるのか？馬鹿だな……」

根津大尉は、二再荒々しく小泉を抱き寄せた。

小泉二等兵は、大尉と別れるようなことがあったら、生きていけない気がする。復員後の自分の運命を考えると、不安が胸を締めつけるのだ。しかし、今は、それよりももっと大きな心配ごとがある筈であった。早くそれを云わなければならぬ。

「大尉殿！」

「もういい。何も云うな」

「いいえ。違います！」

「違う？何が違うんだ——？」

「重大なお話があるのです」

「何だ？云ってみろ」

そのとき、ウインチの蔭で人の動く気配がした。

「今の、堀内伍長殿ではなかったでしょうか——？」

「さア、暗くてよく判らんが、堀内がどうかしたのか？」

「はア——」

小泉は、人影の去った方角をすかして見てから、声をひそめると、

「実は、兵隊の一部に不穏な動きがあるので。首謀煽動者とみられる者は、堀内伍長とそれに、半田・丸尾両兵長です。兵の動きは今のところハッキリしませんが、いざというときは大半の者が同調すると推測されます」

「フン。で、何をやらかそうてんだ？」

「さア、彼等は、戦犯裁判、という言葉を使

ってますが、上官に対する反抗であることは確かで、相当な乱暴を働くものとみていいのだと思います」

「フン。土ン百姓奴が！奴等に何ができるってんだ。面白い。やるならやってみろ！」

「大尉殿。御用心ください。彼等は殺気立っています。何をやるか判りません」

「ようし。心配するな、敗れたりといえど、俺も鬼と云われた野戦隊の将校だ。雑兵共の

百や二百位向ったからって驚くか。俺が一人で相手になってやる！」

根津大尉は、口髭のある口許を不敵に歪めて笑った。

武装解除になると、将校達の多くは急に軍

人らしさをなくして、兵隊達に対しても卑屈な態度をとるようになった。意気は沮喪して、髪も髭も無精に伸び、みすばらしい恰好でコソコソ歩いている。

そうした中で、根津大尉だけは一人毛色が変っていた。頭や髭はきれいに手入れ、軍刀こそ佩いていないが、巾広い怒った肩の堂々たる体軀に、将校服を鮮かに着こなして、一分の隙もない。胸を張って大股に歩く歩き方も、昔と変わらず、両眼は今でもランランと輝いている。全く、敗戦が彼から奪ったものは何も無いように思われ、そうした彼の様子は、人々の眼に、颯爽とも、又異様とも見えたのである。

小泉二等兵は、今更の如く頼もしげに大尉を見たが、胸中の不安が一掃されたわけではない。いや、むしろ、不安は昂じたといっている。根津大尉の言動は、それだけでも兵達の感情を刺戟していたし、不幸にして事件が起きた場合、大尉の意気が軒昂であれば、それだけ事も大きくなるとみねばならない。まして、この船に乗っている将校のうちで、最も暴虐を恣にした大尉である。兵達の憎悪が大尉一人に絞られることも考えられるのだ。

小泉は、それを云おうとしたが、咽喉が乾いたようになって声が出なかった。

小泉が黙り込んでしまうと、根津大尉はポ

「サア、貴様もいって寝ろ。俺も寝る」
と云うなり、屈託の無い足どりで、船室の
ほうへ去っていた。

仕方なく、小泉二等兵も歩きだした。船室
へ入ると、急いで自分の処へいこうとしたが、
堀内伍長と視線が合うと、思わずドキリとし
て眼を伏せてしまった。

「オイ、小泉」

堀内伍長は、特徴のあるしわがれ声で呼ぶ
と、妙な笑い方をした。

「はい……」

「一寸来てみる」

「何でありますか」

「貴様。今、どこへ行ってた？」

「暑いので、涼んでいました」

「それは判ってる。誰といたんだ？」

「一人でいました」

「本当か——？」

「本当であります」

「フン。云わねえ気だな」

「本当に自分は——」

「よし。云いたくないなら、云うな。貴様も
馬鹿じやあるめえ。ヒヨんな真似でもした日
にやア、後でどんな目を見るかぐれえ判る筈
だ。なア——」

「……！」

小泉二等兵は、立っているのが苦しい程、
胸が騒いできた。やっぱり、先刻の人影は堀

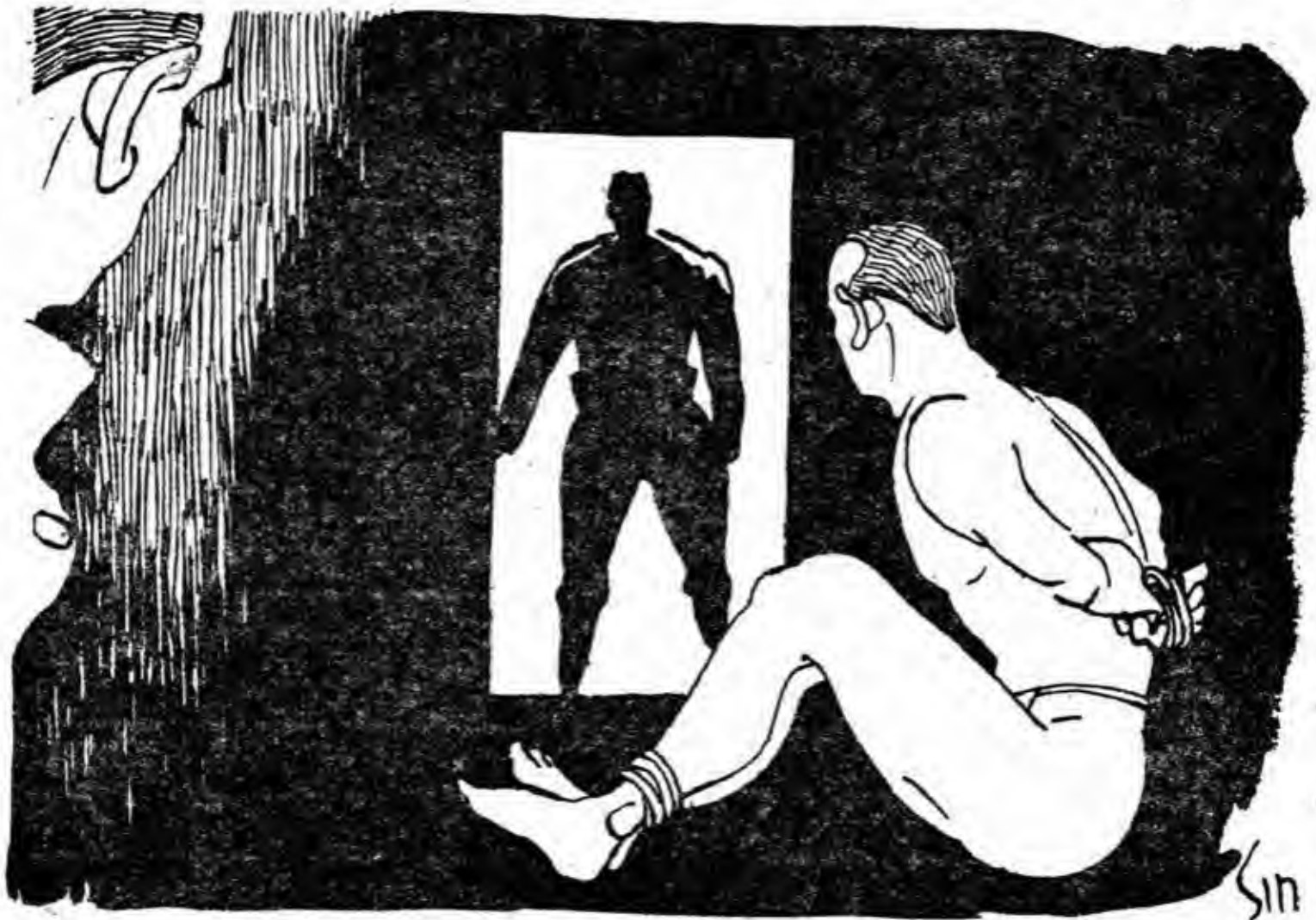
内だったのだろうか？い
や、それならば、もっと
追及が厳しい筈だ。それ
とも、知っていてワザと
とぼけているのかもしれ
ない。それに、大尉と自
分との仲はもう長いのだ
から、誰もが感づいてい
ると思わねばならない。
とすると、俺は彼等から
明らかにマークされてい
る。

小泉二等兵は身内の顛
えを制えることができな
かったが、それは、彼が
必ずしも臆病だったから
ではない。いわば、大尉
への心中だてが、武者振
いに似た昂奮を起させた
のである。

しかし、さすがに、そ
の夜小泉は眠ることがで
きなかった。

二

明けて、六月十六日。
灰色の雲の重く垂れ込め
た洋上で、狂気のような



「船内裁判」の幕が切つて落されたのである。朝まだきの、淡青い照明に浮んだ甲板に、まず呼び出されて来たのは、長身の松浦曹長であつた。彼の左右には、逃げださぬよう、半田と丸尾が腕をとつてピタリと喰いついてゐる。

「坐れッ！」

腕をとくと、半田兵長が、松浦の背をどづいた。松浦曹長は崩れるように坐ると、そのまま俯向いてゐた。

堀内伍長が、ゆっくりと近寄つた。

「おい。松浦！頭を上げて、俺の顔をよく見ろ！」

一瞬上げた松浦の顔は、恐れて蒼白くひきつっていたが、キラリと眼が光つたのは、絶望の中から発した精一杯の憎悪であつた。

「フフ、そんな眼で俺を見ても駄目だ。松浦貴様がかつて俺達に何をしたか、覚えてゐるだらう。今日は、俺達が、そっくりそのまま貴様を私刑にかけてやるからそう思え。覚悟はいいだらうな」

裁判、などと云いながら、いきなり処刑である。

松浦曹長は、頬をピクリと痙攣させたが、何も云わなかつた。

グルリと取り巻いてゐる兵隊達は、面白い見世物でも始まるように、好奇の眼を輝かしている。

「まず最初は、貴様の好きな往復ビンタだ。オイ。此奴を身動きならねえようにマストに縛りつけろ」

堀内の命令で、松浦曹長はマストを背にして、グルグルと幾重にも括りつけられた。

堀内伍長は、兵隊達を見渡して、

「お前達の中で、此奴にビンタを貰つたことのある者は皆出て来い。一人々々丁寧に返しをするんだ」と云つた。

いつときガヤガヤとざわめいた後、一人が進みでると、続いて我も我もと現れてきた。

松浦曹長は、もう観念するよりほかなかつた。ビンタの松と云われた程、彼は日課のように兵隊をはつてゐた。しかし、彼自身も勿論ビンタの味はしつてゐる。下士官になつてからは、何年か忘れてゐた味であつたが、今、二再、自分の頬でそれを味わされるとは昨日まで思つてもみなかったことである。

上等兵だが、年は松浦より五つぐらゐは上の、ズングリした兵隊が、まっさきに平手を振つた。痛快な音がして、松浦の顔が、左に右に、揺れた。音は次々に起り、松浦の顔が赤く脹れあがってくると、打つほうも昂奮してくるらしく、中には掛け声をかけたり、毒づいたりする者もでて、次第に凄惨な様相を呈し始めた。

「やめイ！……」

果しもなく続くビンタに、少々飽きてきたのか、堀内伍長は制止の声をかけると、ノツソリと松浦の前に寄つた。

「オイ、松浦。少しはこたえたか。大分いい顔色になったナ」

赤黒く変じた松浦曹長の顔は、まるで別人のように見える。

「仕上げに、俺のビンタをくれてやる！俺のは平手じゃないぞ。貴様が俺にくれたように編上靴だ！いいか」

松浦は脹れて細くなった眼を上げた。その眼に涙が滲んでゐる。

今度は鈍い音がして、「むう……」という呻きが洩れた。

堀内は、一打ち毎に、楽しむように相手の顔を覗き込んで、編上靴を振り上げた。

松浦の顔面は、皮膚が破れて血にまみれた。縄目の喰い込んだ胸が、力なく喘いでゐる。

堀内伍長は、自分の腕が疲れてきたので、やつと打つのをやめた。

「オイ、丸尾。此奴の縄を解け。解いたら裸に剥くん。次は、帯革で打ちのめしてやる！」

マストから放たれた松浦曹長は、忽ち衣服を剥がれ、越中褌一本で引き立てられた。

堀内は、ニタリとして帯革をしごく、あ、しかけて松浦を甲板に倒すなり、その背に向けて最初の一撃を加えた。

そのとき、僅かながら堀内の誤算が生じたのである。

逃げても無駄であるとは、松浦も百も承知の筈であつたし、だから、彼が、反射的に堀内の鞭を避けて逃げ出したのも、殆ど無意識だつたといえる。勿論、松浦曹長はすぐに捕つて縄をかけられた。

堀内伍長は、嘲るようにその姿を見下していたが、フイと気が變つて、

「半田。此奴を船倉にぶちこんでおけ。後でゆっくり可愛がつてやるんだ。見張りを忘れるな」

と命じた。

松浦曹長は、前部七番船倉に監禁された。手足を縛られ、裸のままである。監視には、

半田兵長と、川上二等兵が當つた。

松浦は、はじめのうち、チラチラと二人のほうを窃み視ていたが、まもなく首を垂れたきり動かなくなつた。

半田兵長は、甲板のほうが気になるらしく、顔りにソワソワしていたが、とうとう我慢できなくなつて、

「川上、俺、デッキの様子を見て来るからナ。場合によつたら誰か代りをよこすよ。何、一寸の間だ。頼むぜ」

と云うなり船倉を出ていってしまった。

川上二等兵は、一人になると急に松浦の存在が気になりだした。縛つてあるから、逃亡

の心配はないが、何か話しかけてこられたら困ると思つた。

松浦曹長が顔を上げた気配に、川上はドキツとした。無視しようとして、ワザとその辺を歩き回つてみた。

意外に早く扉が開いたとき、川上はホッと救われた思いがした。入つて来たのは、横井という上等兵である。

「チエツ。見張りなんて、一人つけときアたくさんじゃねえか。なア。逃げたにしたつて船の中だ。大した事アねえや。——そうだから曹長さんよ」

横井上等兵は、ブツブツ云いながら、松浦のそばへ寄つて、

「お前さんも世話のかかる人だね。あんなとき大人しく打たれていりやアよ。今頃はもう御用済みになつていたのにサ。今度こつから出されたときにやア、相当覚悟が必要だね。堀内伍長殿はしつこいからな——」

横井の言葉を中断するように松浦が何か云つた。

「え？何か云つたか——？」

「小便がしたいんだ——」

今度はハッキリ云つたが、松浦曹長の声は屈辱に顔を赤らめていた。

「何だ。オシッコか」

「横井上等兵殿。どうしますか？」

川上が、はかるように横井の顔を見た。

「そうだな。その場へしるとも云えないし、仕方がない。お前、連れてつてやれ」

「はい——」

「便所でなくていいぞ。デッキからさせろ。まて、俺もいく」

松浦曹長は足の縄だけ解かれ、横井上等兵と川上二等兵に監視されながら、船倉を出た。甲板の手すりに来て、川上が手の縄も解こうとすると、横井が周章てて制した。

「待て！手は解くな」

「しかし——」

「抵抗されたらどうする。お前、縄尻をしつかり持つとれ」

松浦曹長は手すりにビタリと軀をつけたが激しい要求がありながら、すぐには出てこない。

「貴様。やつぱり小便なんてでたらめだつたんだな。太え奴だ！」

横井上等兵は、それを見て忽ち顔を真っ赤にした。

「いや。本当に小便が出たかつたんだ」

「じゃア、してみろ！」

「今する——」

松浦はあせつて、一所懸命に力を入れた。そして、やつと、膀胱括約筋が開いたと思つたとき、気の早い横井の一撃を喰ひ、もんどりうつて転倒した。

「ヒエツ——」

と云って横井上等兵がとび退く。
 いったん出たとなると、止めようにも止まらなかった。断続して洩らしながら、松浦曹長は、何度か起きようとして軀を腕かせた。しかし、後手に縛られているから、仲々立てない。



へ歩きだした。
 その頃甲板では、次々と呼び出された、小隊長・中隊長・内務掛などが、座らされ、罵倒を浴び、暴行されていた。
 軍国主義に凝り固った上官の、叱責・殴打・作戦当時の作業の苛酷・諸給与の階級的差別、

二人の監視は遠まきにして見守っているだけである。
 ようやくにして止ると、やっと、川上が手を貸して松浦を立たせた。
 「チエッ。汚え野郎だ——」
 横井は、顔をしかめて近寄ろうともしない。
 松浦曹長は、一瞬、怒りを含んだ眼差しを横井に向けたが、すぐに何を云っても無駄だと悟ったのか、自分から船倉のほう

終戦後の被服分配の不公平・集結地より乗船地への将校用梱の運搬作業等々、その横暴ぶりに対する不平・鬱憤の爆発は、いつ熄むか全く予測のつかぬ状態になった。
 将校の梱の内容は一つ残らず検べられ、そのあけく、兵隊達の発意で、全部海中に投げ捨てられた。

平手・編上靴・帯革と、手当たり次第の得物でめった打ちにされ、人事不省になった将校は、寄ってたかつて胴上げされた。
 兵隊達の喚声は、七番船倉にまで伝わってきた。

松浦曹長が、二度めに生理を訴えたとき、その顔色が異様に蒼白なのを、川上二等兵は気がつかなかった。横井上等兵は、甲板の騒ぎが大きくなると何時かいなくなっていた。
 川上は、少し離れた処から、用を足す松浦を見守っていた。

松浦の上半体がユラリと傾いたとき、川上はハッとしたものの、未だ事態をよくのみ込めずにいて、その僅かの隙に、松浦曹長の軀は手すりを越えてしまっていた。

「松浦曹長殿ッ！……松浦曹長殿！……」

川上二等兵の絶叫が聞えたかのように、松浦は一度浮かび上がったが、すぐ又波にかくれて見えなくなった。

松浦曹長に、果して自殺の意志があったかどうかは判らない。ただ、確かなことは、後

手に縛られたままの彼が、どんなに泳ぎが達者だったとしても、万に一つの助かる見込みは無かったということだけである。

二

小泉二等兵は、恐怖の余り、生きた心地もなかった。一番恨まれてゐる筈の根津大尉が未だひき出されて来ないのは、彼に加えられる報復が、特別に大きいことを意味しているようで、いても立ってもいられなかった。

大沢という少佐は、罪人のような恰好でひかれて来ると、座らされるなり、小児のように声を上げて泣きだした。

それを見ると、小泉はたまらなくなつて、群を離れると歩きだした。足は将校用の船室へ向いてゐる。行つてどうするという成算があるわけでもないし、そういう行動が、ますます自分の立場を悪くするのを判つていながら、一種の悲壮さが彼を駆りたてて、足は次第に早くなった。

仰向けにベッドに転つてゐた根津大尉は、とび込んで来た男が小泉だと知ると、普段と変らぬ微笑を浮かべて、ゆっくりと起き上つた。

「大尉殿!……」

小泉二等兵は、それだけ云うと、急に力が抜けたように膝をついた。

「小泉。お前、こんな処へ来て、まずくはないのか?」

「そんなことより、大尉殿……」
「よしよし、お前は心配するな」
「でも……」

「どんな様子だ、上は——?」

「事態は悪くなる一方です——」

「フン——ところで、俺の番はまだかな」

「大尉殿。何とかありませんか?内地へ無電で連絡するとか、つまり、警察か引揚援護局の手を借りれば——」

「小泉。少し落着け。俺もいささか退屈してゐたところだ。この辺で一暴れするのも悪くない」

「そんな!——みんな裸にされ、殴る蹴るの暴行を受けてるんです。相手は大勢だし、かなう道理がありません!」

根津大尉は、立ち上ると、いきなり着ているものをぬぎ始めた。

「何をなさるんです?」

「こっちから裸になつて出ていってやるのだ」

「……!」

「こういうときは、六尺のほうがいいな」

根津大尉は、越中褌を外すと、替りに六尺褌をとり出した。

「やめてください——!」

小泉は思わず叫んでいた。剥ぐものが無ければ、奴等は褌でさえ剥ぐだろう。小泉は、誰の眼にも、大尉の全裸身を触れさせたくない。

かった。それは自分だけのものにしておきたかった。

股を開いて立つた根津大尉は、二重にすべく前に垂らしておいた褌の一端を、グイグイと力を入れて絞ると、尻のわれめを通して、更にグツと締め、固く結んだ。

「そんな恰好でいったら、奴等を刺戟するだけです。こちらから出ていくにしても、普通の恰好でいったほうがいいと思います」

小泉二等兵は、嫉妬で脳がクラクラした。このまま大尉を奴等の前に出すくらいなら、この場で大尉を殺して、自分も死にたいくらいであつた。

「どけ。小泉。お前はどこかに隠れていろ。出て来るんじゃないぞ」

「大尉殿!……」

「かまうな!」

「自分もいきます!」

「馬鹿ッ!」

「お願いです。連れていってください!」

「判らん奴だ。来い」

根津大尉は小泉二等兵の腕をとると、グングン歩きだした。しかし、じきに小泉は、それが甲板の方角でないのに気付いた。

「どこへいくんですか——?」

「どこでもいい。従いて来い」

根津大尉は七番船倉の扉を開けた。そこには川上二等兵が放心したように立っていた。

「何だ、川上。どうしたのだ？」

「はア、あの……」

川上は、裸の根津大尉を、恐ろしげに見上げて口ごもった。

「貴様、そこに縄を持ってるな。こっちへ借してみろ」

「ハイ……」

それは、松浦曹長の脚を縛ってあった縄である。川上は、もう駄目だと思った。

根津大尉は縄をとると、素早く小泉の両手を前で縛り、余りで両足も括った。

「いいか、川上。此奴が逃げださぬよう、しっかり番をしているんだ。それから、此処へは誰も入れるな」

「はい」

わけは判らないながらも、川上二等兵は一先ずホッとした。

六尺禪一本の根津大尉が現れた刹那、甲板の騒ぎは一瞬ピタリと鳴を鎮めた。

容貌魁偉な堀内伍長と、精悍ながら引き締まった美貌の根津大尉とは、双方共仁王立ちになったまま、火花の散るような視線で、激しく睨み合った。

兵隊達は固唾をのみ、そこここに荷物のように転された将校や下士官も、なりゆき如何と二人を見守る。

「堀内。俺が對手なら、貴様も不足はあるま

い！皆もどうだ？俺はちつとやそつとではねを上げんぞ。この俺がねを上げるまで打ってみるか！」

根津大尉の口辺に、物凄しい微笑が走った。

「うヌ、小癪な！貴様は後でゆっくりと可愛がってやるつもりだったが、そっちから御丁寧に御出ましとあっちやア、こっちも礼を尽さざアなるめえよ」

堀内伍長も、負けずに唇を曲げる。

根津大尉には、ひそかに成算があった。船内の混乱が收拾できない状態になれば、船長は必ず進路を変更して最寄りの港へ入港するに違いない。その間、自分の体力がもちこたえれば、これ以上の被害者を出さずにすむ。

根津大尉にその自信があったのは勿論だが、しかし、彼とても不死身ではない。それに、彼の考えは単純すぎた。堀内伍長が、異常性格と云っていい程、残忍性のある男であることを、彼は迂濶にも知らなかったのである。

「サア、どこからでも打て！俺が参るか、貴様等の腕が疲れるか、根比べだ」

根津大尉は、どっかりと胡坐をかくと、胸を張って四辺を睥睨した。

「フフ、さすがは根津大尉、いい度胸だ」

堀内伍長が合図をすると、半田・丸尾、それに数名の兵隊が、一齊に大尉へとびかかった。

「何をするッ！」

虚をつかれて、脆くもう倒されながら、根津大尉は叫んだ。

ニタリとした堀内が、禪の結びめに手をかける。

「おい、よせ！貴様等、何をする気だ？！俺は逃げも隠れもせん。堂々と打たれてやるのだ。貴様等も打つなら堂々と男らしくやれ。卑怯な真似はやめろ！」

大尉は喚きながら、大勢の手をはね返そうと腕く。

「堀内。お互に日本人同志だ。俺もこうして自分から出て来たからは、腕一本、脚一本折られても悔えてみせる！しかし、禪だけは締めさせてくれ。俺も恥だけは受けたくない。貴様にもこの気持は判る筈だ」

根津大尉は、努めて感情を殺して云ったが堀内伍長には、みじめな哀願と聞えた。

「よしよし、望み通り禪は締めて置いてやる。だが、そのお礼はして貰うぜ」

堀内は縄をとると、それを大尉の軀に搦ませる。同時に半田が後手にとって縛る。

「うヌ、貴様等、俺に縄目の恥を与える気かッ！」

根津大尉の顔面に朱がそそいだ。しかし、一旦不覚をとった彼は、もはや対手のなすがままになるよりほかなかった。

後手に大尉の体を強く締めた縄の後の結びめに、別の縄が通され、その端が起重機の鉤

にかけられた。

ウインチが始動し、筋肉へ喰い込んだ縄が牽かれると、根津大尉は、不本意ながら、立ち上らないわけにはいかなかった。

起重機は、容赦なく大尉の軀を吊り上げていく。爪先が甲板を離れた瞬間、彼は思わず「うッ！」と低く呻いた。その後は歯を喰いしばったが、全身から脂汗が噴き出した。

兵隊達は、殆ど呆然として、この惨虐な見世物に見惚れていた。

高々と空中に吊り上げられた根津大尉の軀は、一度止ってから徐々に下ろされて、床上五十糧位のところで固定された。

苦痛と屈辱に、青筋のふくれ上っている大尉の顔を、堀内伍長は、さも愉快でたまらぬ

ように眺めながら、帯革を手にとった。

パシッ、パシッ、と炸裂する鞭は、角度の関係から、主に下半身へ集中した。

鞭だけなら、たとえ肉を裂かれても、根津大尉は見事耐えられたかも知れない。しかし、軀に喰い入る縄の間断ない激痛には、ともすると苦悶の聲が洩れようとする。彼は、声だけは立てまいと必死で泳いだ。

それが堀内を苛立たせ、鞭は増々激しくなる。

呻き声こそ立てないが、大尉の顔は醜く歪んで、泣き顔のように無慚であった。

不意に帯革を捨てた堀内伍長は、

「おい、下ろせ」

と云って、額の汗を拭った。

◆新版マゾフォト分譲◆

久方ぶりに待望の春日ルミ嬢出演、男性モデルは愛読者某氏、復刊以来、初めて撮影した本格的なマゾフォト。本来、某氏の求めにより個人的に作成したのですが、特に御希望の方にのみ焼増いたします。尚従来分譲中のマゾフォトは全部、分譲打ち切りになっております。

第一組 凌辱篇

(略号 ま1)

大判判印画紙焼付、五枚一組

七百元

第二組 屈伏篇

(略号 ま2)

大判判印画紙焼付、五枚一組

七百元

第一組、第二組共、いずれも特に春日ルミ嬢を煩して最近作成した新しい作品で、第一組(凌辱篇)では足を舐めさせられたり、足で踏みつけられたり、足を洗わせられたり、大の男が精神的に凌辱させられているポーズ、或は後手猿轡に苛められているもの等を選びました。第二組(屈伏篇)では尻の下敷になつて屈伏している奴隷の姿、股の間に挟まれて呻吟したり、首の上に尻を乗せられているもの等に狙いをつけて選んでみました。

「しぶとい奴だ！今度は逆吊りにしてやる」

根津大尉の足首に、幾重にも縄が巻かれ、忽ち起重機が無感動にそれを吊り上げる。

さすがの彼も、苦痛の余り、屈辱感に失せ、小泉の存在も忘れた。苦痛に耐えようとする意志も薄れ、苦痛から逃れたいという本能的な欲求が、何度か悲鳴を上げようとした。

根津大尉を吊り上げた起重機は、方向を変え、彼の軀は今や海の上にあった。

波立つ海面がみるみる迫ってくる。

「ああッ！」と遂に彼は絶叫した。

兵隊達はバラバラと手すりに駆け寄って水面を覗き込む。

大尉の頭が水面を出ると、皆は喚声を上げ、水に浸ると息をつめる。

「助けてくれ！」思わずその言葉を発したとき、根津大尉は飄然として我に返った。

(クソ！俺はどこまでも耐えてみせるぞ)

すると小泉の顔が鮮かに甦った。

(小泉。心配するな。俺は必ずがんばり通すぞ)

ガボリと、又波が根津大尉の頭をのんだ。

天野船長は、事件の状況を判断の上、辰丸の浦賀直航を中止し、直ちに鹿児島に入港すると、全員を天保山宿舎に収容、この気遣いじみた一幕は、ようやくにしてその幕を下したのである。

(完)



(44) この作品

ふたたび沼兄へ。

七月号で詳細にお答えを受け、大そう有り難く存じました。

コプロはマゾか、フェティシズムか、私の「コプロはときにSでさえあり得る」との見解に対して、明快なお答えがありました。私は、あえて貴兄と論争するのは本意ではありません。むしろ教えを乞う意味で、今一回、この問題にふれておく必要を感じたのです。

手っ取り早く本論に入りましょう。

文芸春秋社発行、雑誌「文学界」六月号の芥川賞候補作品大江健三郎の創作「見るまえに跳べ」の一節にこうあります。

愛^マ好^ニ家^アの記^ノ録^ト

あるマゾヒストのノート

とやま・かづひこ

ガブリエルは、目をきらきらさせ、短くとぎれる小さな笑いに身もだえしながら、それが良重（この作品で活躍する女学生、ついでにいえば、この物語は、彼女のヒモである、ぼく、の告白である）と正常な交渉をもったことは一度もないと、すでに疲れきってシートに深く体を埋めて眠っている良重をあごで指しながらいった。（中略、ここでガブリエルはベッドへあおむけに横たわっていることが判る）……良重が両方のかかとをかれの耳の両わきにくっつけて立ち、それからゆっくり腰をかがめ、尻がかれ……否や、かれの号令にしたがつて体を前にたおす……やがてガブリエルは、くちびると歯をひらく……以下略……

「こんな……姿勢はぜったい他にありえない」とガブリエルは唇を唾でぬるぬるさせていった……ぼくは怒りで窒息しそうだ……云々

とあります。前後を省略したのでは原文のニュアンスがお判りにくいでしょうが、あきらかに男が、自ら求め、その体位では、Mのかたちをとっている。このぼあい彼女の心には、はじらいと、あきらめ、金ほしさのため忍従が見られ、反対に、男には「ぜったい他に見られない……姿勢」をとらせて快を求める。完全にSとMの交錯、それを見聞して怒るヒモの、ぼく、の心理は、Mと私は感ずるのです。

金の力で、はじらう女性に、自分の好みの

姿勢をもとめ、精神的にはSを楽しみ、行動においてはMの心を味わう。これこそ、私のいう「ロマンティック・マゾヒズム」だと、かづひこはおもうのです。

尚、御指摘の「魔の味い」高木伸夫は、正に私です。お目のたかひのには驚き入りました。十七才のときから二十八年間、コプロ趣味にとりつかれたかづひこは、今日まで見果てぬ夢を求め、ひたすら、不浄の世界に美しさを追究して生きてきました。そして今度もアブの世界をさまよいつつ、花から花へ蜜を求めて飛ぶつもりです。

数少き同信のなかには、この世界の楽しさを求めて日夜やまざる人が多いのです。では今日のテーマに入りましょう。

(54) 下痢の原因

週刊紙「シンニチ」の六月一日号から。

座談会の一節で、

喜兵衛、下痢っていえば「味覚」をタノシミ過ぎるとやはり下痢をやるようです。というのは尾籠な話ですが、日本人は主にトイレで、うしろから前の方へ紙で拭くんですね。だから、従って大腸菌は、……中略……ナメるんだから……

なるほどビロウな話だ（笑声）だけど、これは誰かの受け売りだが、そういうことに

ならんように、女には……（中略）……イボ状の突起があるんだそうです。いってみれば大腸菌の防波堤ですね（笑）という文章があった。

ここでもかづひこは考える。附着物をそのまま口にする。そのために、菌を受けて、御主人さまと同じく下痢をする。コトバをかえて、御主人さまの大腸菌をそのままお受けして、からだのシンまでけがされる。

隷属の、身を灼く快感が、ここにある。

それは、あたかも御主人さまのからだのウミを舐めとらせて頂いて、悪性の病菌を口に受け、失明はおろか、命をささげる。マゾの極致とはこれをさす言葉であろうか。

(46) シャンパンが売れる話

こんなコントがある（日本、五月号）マルセイユで鳴らしているチチータ姐さんがパリに遊びにきて、モンマルトルで羽振りをきかしている友だちをたずねた。

ふたりの美人は、客のウワサで夢中になり美しく見せる秘訣をしやべりまくった。

そのうち、フト見ると三面鏡の上に「シャルマント」とレットルに書いてあるきれいな箱が目についた。そこでチチータがきいた。

「ねえ、あんた、そのシャルマントってなによ」

「あとで使う消毒薬よ」
「そう、あたしそういう薬があるの知らなかったわ」

「じゃあ、なんで洗ってるの」

「お塩を使ってるわ。マルセイユではお塩が安いし、それに……」

「それに……？」

「それにお客がノドをかわかして、シャンパンをじやんじやん注文するのよ」

×
というのである。

なぜ、客がノドをかわかすかは、さすがに解説をカットしてあるし、このかづひこのレポを読んで下さる方々なら、これ以上つけ加えずとも、ハハアと分って下さるとおもう。

おそろく、このコントはフランス人の手で作られたものと思うが、このように、C技巧をテーマにした作品は、無数にあるところを見ると、むしろでは日常の風俗かもしれない。

それにしても、一流の大雑誌が、こうしてC技巧を堂々と持出すのは、わが意を得たりというべく、のどをかわかしている客の表情が、アリアリと目にうかぶのである。サラリと書かれたそのスマートさを買うものだ。

(74) らくがきについて

上野松坂屋旧館一階トイレ（男子用大便所）

のドアの中)に入ったら、呑みたい、食べた
いの、典型的らくがきが目の前にあり、御丁
寧に食べている所まで描いてある。例によ
り、かづひこはそれを手帳に写し取って、出
ると入れ代りに、東京見物らしい、地方の高
校生が入って行った。

この高校生、純真無垢な青年が、このよう
にアブノーマルならくがきを見たら、一たい
どんな気持を起すだろうか。

おそらくかれは未知の世界、大人たちの特
異な趣好の反面を見て異様な、シヨックを受
けるにちがいない。らくがきのひとつが、何
も知らないノーマルな青年をアブの世界に追
いやる。これは社会風紀上好ましくないこと
である。できればアブの人をつくりたくない
ものである。

(48) 哀願する客

ある日の「日本観光新聞」から。

(前略) この時ヨシエが帰ってきて「あの
オヤジ、いやらしいからイヤだわ」という
女たちは一セイに「あらどうして」ヨシエ
「ナメさせてくれだつてさ」一同「あらへ
ンタイね」となかなか腰をあげない。

「でもさ、一応顔見世だけして来てよ」と
オカミの言葉にシブシブと一人ずつ立って
ゆき帰ってきては口々に客のイヤらしさを
誇張して話す。「しようがないわね」とオ

カミは断りにゆき、客はブリブリして荒々
しく玄関を出ていった。オカミも「本当に
イケ好かないオヤジだよ、しまいは、あ
んなでもないからって、おがむんだヨ」
……

以上、短文ながら、現代のお客かたぎの一
面を生々しく描いている。金を払って哀願す
る客、三十五、六のクタビレた、オカミにま
で求めるという中年客の哀れさをよくスケッ
チしている。

ちなみに最近はこのように、いわゆるエッ
チの客がふえるいきおいにあり、吞ませてく
れとか食べさせてくれとかいうのを目的とす
る人もあり、特に上野あたりには食べさせる
専門の洋装美人がおり、高い料金でシヨッキ
ングな、コブロ趣味を売り物とし、平然と食
べさせる専門が横行していて、けっこう商売
繁昌だという話である。

(49) Tの体験談から

友人のTからこういうことを聞いた。

Tもかづひこと同傾向のマニアの一人だ。

彼は劇場やホテルのトイレに入ると、まず
便器をよく清掃し(これは同性や好ましから
ざる人のものを混入をさけるために)池の中
に一物をも止めぬまでに磨き上げると、今度
は流し水のコックを固く閉めて、タンクから
の水の流れを止めてしまう。

こうして程よき処で獲物を待つ。

もしも、これはと思う女主人が入ったとき
は、胸が期待で早鐘を打つということだ。

主人は、用便後、コックをひねるが、当然
水は出ない(Tが予め止めてしまったから)

何かの故障だと思って、そのまま出てゆく。

アトに残った物体は、それこそTへの天か
らの贈り物、それこそ心ゆくまで觀賞して、
気が遠くなる思いすらするとTは告白する。

更にTの話。

映画館へ入った女性が、それまでポケット
やバッグの底に入れておいた用済み後の鼻紙
をくらのやみを幸いとソツとすてる。

Tは予めステッキの先にレコード針を打込
んだ道具を使い、これを釣上げる。

落した主人公の横顔や、うしろ姿をぬすみ
見ながら、チューインガムでも噛むように、
ニチャニチャとこの紙を噛んで、その塩から
さを味わう快味はなんと云えないと、Tは
語るのである。

(50) 秘室にて

かづひこは、昨夜(六月九日)もこの目で
若い女性の用便風景を目のあたりにした。

所は新宿のTホテル。

同窓生とビールを久しぶりに呑んで、ほて
った頬を冷ますべく、ホテルのWCに入った
かづひこは、急に水が呑みたくなくて、何の

気なしにカーテンのむこうへ首を入れた。

と、そこには田舎から上京した友人Sの妹が洋式便器にかけてる。

和式トイレとちがって、洋式だから、一寸見たのでは、何がなんだか判らないが、用便の途中らしく、

「アラ……」

とはにかみながらも、逃げもならず、かづひこが如才なく言葉をかけたので、それにつれられてか、

「出て行って頂戴」

とも言わず、そのままの姿勢で、

「お腹こわしちゃって、カキフライがいけなかったのかな……」

と、かづひこが最も好む、「女性が自分のからだから出たもの」のコンシションのよしあしを話題にするのだった。

むかし、中国で戦争のさい、囚われた武将が、捕えた側の大将の甘心を買おうとしておりからひどい下痢に悩まされたその大将の便を口にして、病気の診断をし、それによって、その大将のお気に入りとなり、敵側に寝返って出世したというエピソードを頭にうかべたが、さすがにかづひこも、Sの妹に便を舐めて診断をしてやろうとまでは云いかねたが、そのクセ、その便器の底にしずんでいるかづひこのあこがれのものを見たくてたまらず、

「ちよつと見せてごらん、病気だと大へんだから……」

と、チラと、横目でにらんで、立去ったのだった。

(51) 怪音を発する人形

六月三日の内外タイムス紙から。

映画スタアの中田康子嬢にフアンから贈られた可愛らしい人形は、ミルクを飲み、オシッコでオムツをぬらすほか、パンツをぬがすと可愛いらしいオシリがピョコリ出て、この尻を指で押すと、「プウー」と快音を発し、本物そっくりのオナラ人形で、贈り主は元宮様だという。

人形にオシッコをさせる工夫は、今流行の人形にあるし、谷崎潤一郎の作品（青野氏の話）には、等身大の人形で、同じく人間同様に排泄をし、これを珍藏する金持の老人がベッドに寝た自分の顔の上にこれをまたがらせ、下腹部を押して、放屁からはては大便をさせ、面上にこれを浴びて喜ぶ作品が、旧い時代のものであったが、オナラフェチの人々にとっては、このような人形も魅力の対象となるのであろう。

(52) 易断の先生

同じく内外タムス六月七日号「ふし穴」のよみものから（以下原文のまま）

最近夜の新宿に女性専門の「毛相易断」という珍易者が出現した。この易者は体毛を鑑定しながら結婚、生命などの運勢を断ずるといふ。むろん鑑定場所は旅館の一室で見料は二百円。ところがこの易者、二本立営業をしており隣室にあらかじめノゾキ趣味の男客を案内している。易断風景を隣室からノゾかせるというわけだが、さすがに毛相を見てもらおうとする女性はいくなく逆にノゾこうとする男客は多いという地下に潜った赤線女給と易者が組み、サクラと成って男客の気持をそそり、売春の橋渡しをするのでは……とカンぐるものもある。そのせいかノゾキ料は一定していないそうなの……。

とある。

易占家、医師が職業を利用して、自己の趣味をみだす可能性については前にもふれたが毛相易断とはうまいことを考えたものだと思う。女心は迷いやすいもの、まして、運勢判断という立派な理由があるのだから、コトはかんたんだ。

その上、易ってもらう女性の側に、かりに露出症の性癖があったなら、これは双方ともに楽しいことに違いない。フェチの諸兄に捧げたテーマである。

(53) ある風景

「文芸春秋」の七月号に漫画家の中村伊助氏が「避病院の家族会議」という題で、一家の中毒さわぎを赤痢とまちがえられて三週間隔離された体験をユーモラスに書いています。

文中、赤痢とまちがえられただけに、吾があこがれのもの、便のことがあちこちに出て来て面白い。

二十才になる娘さんまで、検便におつき合
いさせられるところや、病院では

一日おきに「検便」ですよとやって来る。

これは看護婦さんに一人一人尻をまくられ
肛門にガラスの棒をつつこまれるのである
……相当深部までつつ込むので、痛い、と
細かく書いています。

赤痢と夏はつきもの、そして当り前のこと
ながら赤痢と下痢はつきもの。

かってかづひこは、趣味を同じくする友人
と論争したことがある。

その議論とは、妙齢の美しい女性のものな
ら、たとえそのひとがひどい下痢で、あきら
かに赤痢と判っていた場合、いくらコプロ派
と自ら許していても、このものを平然と口に
入れられるか否かということであった。

かづひこは、あえて口にする主張し、友
はいくら美しいひとのでも、赤痢のではねえ
とマユをひそめた。

いいではないか、赤痢となり、成いは一命

を失おうとも、美しく、若き女性のものとハ
ッキリしたら、それをすすり取ることは、か
づひこは喜んでやるであろう。

そして、人間の口にすべからざる、最もみ
にくい「食物」を摂取して、その主人と同じ
病いに倒れるなら、これもひとつのロマンテ
イック・マゾヒズムかもしれない。

赤痢の便は血がまじるから、名の通り赤痢
という。そのものを通じて、奉仕する主人の
血までめぐまれるなら、死んでもよいと、か
づひこはおもうのである。

(54) 情熱のコーヒー

次は日本観光新聞六月二日号から珍味メン
スのコーヒー

☆：ジャワの女たちは、恋をすると、相手の
男性に自分の月のものをコーヒーにまぜての
ませるとかならず恋が成就すると信じこんで
いる。それゆえ、われと思わぬ男性は一度は
このコーヒーをお見舞される運命にあるわけ
だ。今は亡き武田麟太郎は、その味について
「おれがひとすすりして、バグス」（たいへ
んうまい）という、じつとみつめていた女
の下まぶたが淡紅色にポツとそまっていた。
へ、ほれられた果報さ。きみなんかこのコー
ヒーの味も知らずに、トバクチでウロウロして
つまらんじやないか」と語った。

また小野佐世男は彼一流の話術で

「ジューンと音がした。びっくりしたね。鍛
治屋をつくりさ……」

と表現したものである。☆：しかし、逆に
恨まれることになる、血のかわりに毛髪を
細まかくきざんで、それをコーヒーにまぜて
のまされる。

くる日もくる日もそれを飲むうちに呪いの
毛だらけとなり、ついにその男は死ぬと信じ
られているのだ。武田も小野もジャワでは大
持てで、求愛コーヒーもたくさん飲んだかわ
りに呪いのコーヒーもまされたとみえ、あ
われ早死にしまった。

メンスが媚薬として珍重されたり、若返り
の妙薬とし喜ばれているのは、古来の文献に
もある通りで、ホルモンとつながりのあるこ
の「生理のはてのもの」は、吾々の興味をそ
そり、味覚をそそるに充分だ。

とくに、これが、処女のものとなればその
高貴性は一そう増すわけである。

それにしても、知らぬとはいえ、メンスを
吞まされるジャワの男性は、幸福だとかづひ
こは、ここでもため息をつくのである。

○左記のものは現在分譲打切りになっていま
す。「女体切腹構成案図譜」「女体自決悦唐
図」「女体風流アラベスク」「美しき女体家
畜飼育室」「女学生の羞恥責め」「ハートの
的・女体洗滌室」「緊縛ヌード十六ポーズ」

◇ 体験記 ◇

バー「ナナ」の人々

(第三回)

南 時 夫

(美しいマダムの話は続く。私は、もう可成り酔っていた。夢か現実か、私の頭は錯綜して来た。何か幽幻の世界へ引きずり込まれてゆくように感じ私は時々大きく眼を開いた。私の前の椅子に坐っているマダムは相変らず静かな口振りであったが、頬は上気して美しい紅をさしていた。ほら！ここ！こんなになっっているのよ。私はマダムの二の腕についた何本もの縞模様を見て現実を意識した。それはどんな雄弁よりも私を熱心な聞き手とするに十分過ぎるものであった……)

三、マダムの話(つづき)

それは何時だったかしら。蒸し暑い晩で雨

が降っておりまして。例の様にミスズが外出した後の王己と二人の世界、私はたちまち猿轡、後手の姿にされました。何かその日は気分が悪く、縛られるのは厭でしたので随分今日は止めにして貰う様に頼んだのです。王己が一時間だけというのでその積りでおりまして。足首を伝って仰向けに私を寝かせたときです。何か下のお店の方で物音がします。お客様かも知れないと思いましたが、何しろこの様な姿ではどうすることも出来ず身体を縮めておりました。お店を閉めた後に時々お客様が何か忘れ物をしたとかで再びお出になることがございます。私は王己に眼顔で知ら

せ、ついでに縄を解く様に背中を向けて手をばたばたさせてみましたが、私のそんな動作に関係なく王己は下に降りてゆきました。王己が居なくなつた後、なんとか一人ではどうして早く寝ようとおちこちごろごろ転がりながら苦心してみましたが、いつもよりゆいと思つた縄目でも矢張り自力で解くことは不可能でした。縛めから逃れることはあきらめた私は猿轡だけでもはずそうと畳に顔をすりつけてやっと口を縛った手拭だけは取りました。そんなことをしている間にも階下ではよく聞きとれませんが何か話声がした様に思いましたが、やがて又静になり王己も少し経



つてから再び上
つてまいりまし
た。

「だれだったの
？お客様？」

私がこう聞く
と

「うん、まあ
そんなところ
ね。そんなこと
より早く始めま
しょうよ。私、

今急に素晴らしい
思い付きをした
の。グッド・ア
イデアよ」

と云いながら
何か悪戯ほく笑
いました。

「ねえー、今日
はもう、この位
で勘弁して！少
し疲れているの
よ。今度うんと
縛られてあげる
から、今日はも
うほどいて。」
私は実際に多

少疲労気味でございましたので王己を余り刺
激しない様に努めて静かにこう頼みました。
王己も初めはおとなしく私の頼みを聞く気配
を示し後手の縄を解きにかかって呉れたので
すが、それを途中で止めて、

「矢張り思い付いたことやらせて。ママ、も
う一時間だけ附合って頂戴よ。丁度良い機会
なんだから。ね、いいでしょう？」

と云い出し私の顔を甘えた様にのぞき込む
のです。私も負けて、

「じやー一時間だけね。余り変なことしない
でね。」

といってしまった。一旦解かれた縄を
再び掛けられ、顎の方へずり落ちていた猿轡
も嵌め直されました。その上、今迄されたこ
とのない目かくしをされて私は急に暗闇の世
界へ追いやられてしまいました。人間は眼の
光を失うと、こうも不安になるものでしょう
か。眼隠をされ一体これから何をされるのか
何をされても身動きの出来ない自分。不安も
極度になると恐怖に変わるものです。真暗の中
でひっくり返っていると何か不気味な恐ろし
さに襲われて来ました。どうしよう、どうし
よう、私は一体どうなるの？やがて、もつれ
る様な足音が階段を上って来るのが聞えて来
ました。もう私の自由は耳の感覚だけでした
ので文字通り全身を耳にしてその足音で何者
か判断しようと努めました。王己が先程私を

縛り終えると直ぐ階下に下りて行つた気配でしたので、その足音も王己のものだとは想像出来ましたが、私を怖れさせたのはもつれる様な音でした。一人ではない。一人が王己だとしてもあと一人がいる。一体誰なのだろう。男？女？私の知っている人？例えどんな人でも、私のこの様な姿を見られたくはない。王己だけだと思えばこそ恥しさも、浅間しさも打捨てて苦痛に耐えていられるのが、王己以外の他人に衣服を剥がれ惨めに括り上げられたこの姿を見られてしまう。私は全身がカーと熱くなるのを感じ、出来る限り身を縮ませていました。もつれる様な足音が止つたと思うと王己の声がしました。

「さあ、ママ、起きて頂戴。恥しがらなくても大丈夫よ。お客様にも眼隠しして貰っているんだから。」

どっこいしよと私を抱きかかえて座らせると王己はその「お客様」の方へ行つた様子でした。「ママ」という言葉を低く囁く様にいったのでその人が私を知っているのだなと思いましたが、眼隠しをしてあるから」という言葉に幾分ほつとして私は不自由な恰好で座っていました。もうどうともなれという気持でございました。その人は「うん」とも「すん」ともいいません。私と同じ様に狼狽を嵌められているのでしょうか。そうすると手も縛られていることになります。私は自分の

ことを忘れて変な好奇心に一瞬襲われ眼隠しを取つてこの人を見たいと思ひました。「さあ、ここに座つて——そろそろ、後ろに寄りかかつていいわよ。」

この王己の声がした途端でございます。私の肌に生暖い皮膚が触れました。汗ばんでじつとりした皮膚。自分の肌にとこの誰だか分らない他人の肌が触れた時程不気味な感じはないでしよう。私は反射的に身をかがませてそれを除け様としましたが、ただでさえ後ろにひっくり返るようになっていた恰好では長く続かず直ぐ又この「見知らぬ肌」にぶつかりました。お風呂で他の人の肌に触れながら入っているあの感じよりも、今の場合はその人が全く判らないだけに不気味でした。そのうえ、私の想像通りその人も後手に縛られているらしく、私の手先に相手の腕や手首が触れます。ただ判つたことはその人は女でした。だって髪毛が私の肩口に垂れているし、接触した皮膚もなめらかで男の様に固い感じはななく女性の、それも可成り肉付きの良いものだったからでございます。その女も私と全く同じ姿で縛られ座らせられていることが想像されました。私も無力ならばこの女も無力なのです。誰だかは分らないけれど私はふと何か親密感の様なものまで感じました。「しっかり姿勢を正しくして。私、近来にない興奮よ！」

王己の上ずつた声が聞えると背中合せの二人は、腰から背にかけてぴたりと合されしました。私よりも、この人の方が座高が高いのでしよう。後手の位置も、肩の位置もずれていました。が、そうも違わない様にも感じました。やがて、私達二人は背中合せのまま別の縄で縛りつけられてゆきました。丁寧に後手と後手、二の腕と二の腕、首と首という具合に厳しく括りつけられると、もう私達二人の身体は密着して各々の意思では絶対離れることが不可能になりました。この人が時々身体を動かせると、それにつれて私も身体を動かさねばなりません。「コルシカの兄弟」という小説は身体の一部が密着した二人の人間の数奇な運命の物語ですけれど、私達二人とも今や自分一人の意志で行動することが出来なくなつてしまいました。縄によってくびれた二つの肉体。最後に私達二人の顔にも縄を掛け、頭と頭を結びつけた王己は

「二人ともどんな気持？一度連縛つていうのを実行してみたかったの。御二人に感謝するわ。一寸ひどく縛り過ぎたかな。でも後ろを向かれちゃつまらないから……。もう眼隠し取つても大丈夫ね。」

眼を覆つた布が取り去られました。私はもうどんな物でも見える筈でございました。でもそれは間違ひでした。首だけならまだしも額をも縛り合されている姿では顔を動かすこ

とも出来ません。正面のただ一点だけが私の見える全てでした。立木や何かの物体に括り付けられているのとは違って私は生の肉体に縛り付けられているのです。でもその結果は同じでした。立木を背負っている方が気が楽だったでしょう。見知らぬ女の身体を背負って、しかもすぐ後ろに居るのに見る事も出来ない。私にも好奇心が御座居ます。私の背に張り付いている女がどんな女か見たい、知りたい。要所々々を厳しく縛り合されている私達二人は、ただそのままの恰好で前後にか、横に移動することしか出来ないのです。今や私は完全に王己の計画のわなに落込みました。私が無理に後ろを向うとすれば縄が引張られる痛みから背後の人は苦し気な呻き声を出します。この女が動く私の腕、首、顔の縄が締って私が呻かざるを得ない。お互に背中の女を何んとか知りたいたと身体を藻掻せる度に猿轡に押殺された呻き声を立てるのです。それはサシスチンである王己を喜ばせ興奮させるに十分なものでした。王己は私達二人の顔を交互に覗き込みながら苦しみ悶えている様子に満足そうな表情を浮べています。張り合さった私達二人の背中では、もう汗でびっしょりになりました。私の汗とその女の汗とがミックスされて腰から下へと流れてゆきました。背負った女の髪毛が私の肩に触れそれが変にむず痒く我慢出来なくなりました。

搔けないと思うと尚更でした。私は身をよじりました。後ろの人は「う、ううう」と悲痛な声をあげそれが私の頭のすぐ後から聞えて来ます。その中に今度は背後の女が一段と激しく身体を動かせ始めました。身体を横によじったり、後ろにさがろうとして私の身体を押ししたり、足で畳をばたばた打ったり、その間中悲鳴に似たうなり声を発し、はあはあと云う荒い息づかいをしているのです。王己に何かの方法で責められているのでしょうか。つねられているのか、くすぐられているのか、勿論私には知る手段ありません。それよりも、その為私に私の身体を締めつける縄目です。までが悲鳴をあげる結果になりました。「一人だけ責めると二人一緒に責めたことになるんだから面白いわね。」

王己の声が後ろから聞えて来ます。全くその通りでした。私の身体には一指に触れなくとも、私を苦しめもががせることが出来るのです。

やがて二人ともぐったりしました。背中の女も、もう時々びくびく身体を震わすだけでした。この様な私達に再び眼隠しをしてから縛り合えた縄が解かれ二人は引離されました。とうとう私は私と同じ苦しみ悶えたもう一人の女を知ること出来ませんでした。私をそこへ転がしたまま、王己はいま一人の被縛者と階下に下りて行きました。前と同じ

様にもつれる足音をさせて……。

（「マダム、その女って、一体誰だったんだい、今も分らないの？」こう私は尋ねた。一幅の美しい女性連縛の絵図を想像するにもこの女を早く知りたかった。「それが、王己の気持は分らないけれど、私がその後尋ねたこともないし、王己としてもお互にこの様に分らないで連縛出来ることに成功したからはその方が面白いと思ったのでしよう。仲々種明しをして呉れなかったのだけど、とうとうある現場を見て私の方が先に知っちゃたの。」

「誰なの？」私はせき込んで聞いた。「それが、ミスズだったのよ。驚いたでしょう？」王己がサディストだと聞いた時に私を感じた意外さが今又私を襲った。王己が人を縛った責めたりする筈がない、と同時に、あの男の様な荒々しい立振舞いのグラマー娘が温しく人に縛られる筈がない。数人の男達を相手にするのなら兎も角、自分より体力の劣るしかも同性に縛られ責められるなんて。この話は全て狂った筋書に思えた。マダムは別として、ミスズが王己を責めてプレイに耽るのなら十分納得がゆくものだけれど、ミスズが王己に責められるなんて。私のこの気持を素早く読み取ったマダムはこう付け加えた。）

そう、ミスズだったの。私の背中に張り付けられた女はミスズだったのでございます。ミスズがどうしてその様にされたのか、それ

がミスズ自身の意見なのか、王己の一方的な意見の結果なのか私は今お話したくございません。王己が加虐^{ヤジ}の傾向を持っていることに御不審を抱かれる様にミスズに被虐^{ソッ}の輝きをお知らせ致したとしても尚更御不審を増すばかりでございましょう。このことはそれぞれ本人達に直接お聞き下さいませ。ただ私は事

実を事実としてお話するだけなのです。私のこのつたないお話も、随分と長くなりました。これ以上細部に亘^ワってお話しても同じ事の繰返しになり御退屈でしょう。だから最後に私以外に王己の相手になった今一人の女（他は知りませんけれど）がミスズであったことを知ったことの理由をお話するだけにとどめた



いと存じます。

見知らぬ女を背負って苦しみ悶えた夜から二週間ばかり経った頃でしょう。その夜は女学校時代の友人からは非話したいことがあるからという葉書があつて私はお店を三人にまかせて出掛けたのでございます。友人の家は横浜でしたので多分その晩は泊ることになるだろうと思い、その旨を話しておきました。七時頃着いてそれから話込んで十時頃になったでしょうか。寝ながらゆっくり話をしようという友人達の言葉に私もその用意をしていましたが、そこへ電報が来ました。静岡に居らっしゃるお友達のお父様が具合が悪くなったと云うのです。大さわぎになり、その夜の汽車で一応様子を見に行つて来るからとこの友人は私に申訳けなさそうな顔をしました。もう十一時を廻っていました。が、それでは私も駅まで見送り、やっと終電車に乗り帰ることにいたしました。勿論電車は途中までしか無くそれからはタクシーに乗つてお店に着いたのが一時頃だったでしょうか。お店はもう閉つて真暗です。私は合鍵で裏口から入り王己とミスズの寝ている部屋の脇の階段を上り自分の部屋に入りました。上るときふと見た様子では暗くてよく分かりませんが今日

は二人寝ている筈なのに王己一人しか居ない様子。ミスズは又外泊でもしたのだろう。私は別に気にも止めず疲れた身体を引ずって横になりました。

うとうとしてからどの位の時が経ったのでしょうか。私はお手洗に行きたくなり電燈をつけて階下に行きました。王己もぐっすり寝込んでいます様子。暗闇に慣れた眼には今度はよく分ります。蒲団は二つ敷いてあるのにミスズの姿が見えません。私はお店を横切ってお手洗の前まで行きスイッチをつけて中に入りました。そして私はそこで見たのです。初めは一寸何か判らなくて思わずぎよつとしました。お手洗には大きな鏡が壁に張ってあります。この前の壁に白い大きなものが揺れているのです。白い大きな肉塊でした。私が以前王己の冗談から想像したお店の前に吊るされた自分の姿がそのまま現実となつて今眼前にありました。しかしそれは私ではなく五尺四寸十四貫のミスズでした。私が入って来たことにそう反応を示さなかったのは多分王己と間違えたからなのでしょう。それが私だと気がつく動物の様な呻き声をあげ、かっとなきな眼を開け私をにらみつける様になると激しく揺れ動きました。私は自分以外の人が縛られている姿を見たことは、その時が初めてでした。そして又今迄自分自身に加えられた縄目もこの眼前にある縛体に比べれば明らか

に軽いものであることを知りました。もうお話ししました、あの「逆海老」のときの苦しみも比較になりませんでした。人間の肉体が、特に可弱いとされている女の肉体がこうまで緊縛に耐えることが出来ることを知って私はしばらくの間ぼう然としてそこに立っており、水洗の為に天井に走っている鉄管にミスズは吊るされていたのでございます。ブラジャーとパンティだけの姿でした。後ろの壁とミスズの身体との間が開いておりますので肉体が揺れ動く度に縄の掛け具合がよく分りました。油じみてもう固くなった麻縄で高き上手に縛られその後手はもうこれ以上は引き上げられないだろうと思われ程の高さで固定されこの縄が首に二巻き掛け更に前に迫っていました。丁度ブラジャーに覆れた乳房だけを強調する様に胸元でふり分けた縄が二の腕に巻きつき胴へと縛られております。亀甲型と申すのでございましょうか。きちんと間隔をとり左右対照に見事(?)な縄の掛け方でございしました。私はよく存じませんが本縄というものかも知れません。絵やなにかで罪人が掛けられているあれでございします。更に足は太股と、膝の関節の上下、足首、その上両足先まで縛られているのです。その様に一本に縛り合され棒の様な二つの足が膝のところから背後に折り曲げられ腰のところに結ばれています。ミスズの長い足でもびたり

と膝から折り曲げることは出来ないのか、多少の隙間はありましたが、それも無理に密着しようとして別の縄で、きびしく締められています。この様に括り上げられたミスズの肉体は太いロープで胸、腹、後手の三ヶ所を連結され天井の鉄管に吊り下げられているのです。あの同性の私でも素晴らしいと思うミスズのスラッとした肉付の良い、しかもそれが引き締まった肉体が無残という言葉以上の惨酷な縄目によって凸凹になり、あえぎながら悶えながらぶら下がっているのです。油じみた一本々々の縄でこま切れになってしまいうなぎびしい縛り。真白いブラジャーとパンティだけがくつきりと浮んでその下で激しい息遣いがしている。後手を余りに高く引き上げられた為ぐつと盛り上った肩の肉。私はミスズの顔を見ました。お店の時の化粧がそのままでした。大柄な顔つき。真黒に変化をもたせて引かれた眉。濃厚なお化粧、これもただのお白粉でなくドーランの様な情欲をそそる化粧。アイシャドウに色どられた瞼の下、長い睫毛。少々きつい大きな眼。そしていつも男をあしらっている鼻先。随分ナイトクラブや大きなバーで引き抜かれそうになったミスズの近代的な容姿。口だけがゆがんでいます。白いハンケチが幾枚も、詰め込まれる限り詰め込まれているのでしよう、閉じることの出来ないまま白い布を口の端にのぞかせその上から

口を真二つに割った様に白いバンドで締め上げられ、真赤な口唇がそのバンドを喰えていく様に見えます。更にその上からナイロンの布で二重三重と巻かれこの為頬がぐっと凹んで痛々しい有様でございました。猿轡をナイロンの布で嵌められているので口の様子がよく分ります。ルーシユがすれて口唇より外へこすれて附いて無残なものでした。飲み込めない唾液が口からあふれ出てナイロンの猿轡を濡らし顎の方へと伝っています。それが全身の緊縛以上の痛々しさでございました。

温和しい、可憐な娘ならとにかく、ミスズの様な男勝りの堂々たる体軀の女が宙吊りになって、猿轡からよだれを流しながらきつと眼を開いた有様は、凄惨そのものでございました。激しい揺れも、悲痛な唸り声もやがて止んでぐったりと頭を垂れてしまったミスズを見て私も我に返り、

「ミスズちゃん！しっかりして！誰がしたの？こんなことされたら死じやうじやないの。今ほどくから待ってなさい。」

と云いミスズの身体に手を触れようとした。どこから手をつけてよいのか分りません。側に椅子があるとところから、縛ったミスズを椅子に掛けて吊り上げ足を折り曲げてから椅子をはずしたのでしよう。私も一度王己に吊るされた経験がありましたので想像出来ました。私の場合は吊るされたと云っても今

マゾ画の決定版！ 分譲打切り近し！

責められる男性 十態 「マゾヒズム画廊」 分譲

淹れい子画 大中判印画紙焼付 十枚一組 千二百円 略号(ろう)

一、屋根裏の妖女 二、黒帯と雪の足 三、御寮さんと丁稚 四、女学生と中学教師
五、禪かつぎの受難 六、二号さんと重役 七、従姉と中学生 八、愉しい苦行 九、
衣桁の蔭に舞う鞭 十、土牢の女王とスパイ

◎絶対他では求め得られないマゾ画集。分譲中止にならないうちに是非一組お求め下さい。詳細解説は本誌33年2月号一六二頁、一六三頁御参照願います。

のミスズの様な無残さには比較にならないもので、後手に物置の梁に吊り下げられた際も

時間にして僅かでございました。ミスズはどの位の時間をこの空間ですごしたのか分りませんけれど私の何倍もの時間であることは確かでした。それに真暗な手洗の中で、たった一人泣いてもわめいても助けられる可能性のない場所一人で苦しみ一人で悶えなければならぬ。私は急いで椅子を引き寄せそこに上り先ず猿轡を取ってやりました。ナイロンの布を取り、バンドをはずし、口中の多量のハンケチを引き出すと私の手にミスズの唾液がべっとり附きました。ところが口が自由に

なったミスズは狂った様に叫び初めました。「見ないで！あっちに行つて！見ないでつら！」

この様に括り上げられ、宙吊りにされたミ

スズの身体はどこから一体これだけの叫ぶ力が出るのか。ヒステリックに叫び自由にならない全身を無理に動かし、この肌に喰い込む縄目の痛みに顔をしかめながらも、私の手を何とかして触れさせまいとするのでございます。

「直ぐ解いて上げるから静にしていなさい。こんな貴女を見ていられますか。」

私がそういつても、

「厭！厭！早くあっちに行つて！」

と絶叫するばかりです。私もどうにも仕方がなく、猿轡を取っただけでぶら下っているミスズをそのままにして手洗を出しました。

その夜は睡れませんでした。私が部屋に戻ると同時に王己が起きて手洗に行った気配がし、やがて先日と同じ様なもつれる足音が聞えて来ました。(未完)



「どうもその後はほとんど御無沙汰しておりました……どうしておられるか一度お伺いに上ろうと思いつつとんだ失礼を重ねて本当に申し訳ありません。今晩は御詫び旁々素晴らしいお土産を持って参りましたから一つ御批評願いたいと思うんですが……いえ大したものじゃないんです。この間、仲間だけでクランクアップ——と云うよりは寄せ集めたようなつぎはぎだらけですが御慰みに御覧なすって下さい。奥さんも御遠慮なくどうぞ……」

「道理でお土産にしちや馬鹿でかい箱だと思ってたよ。何んだい、例の8ミリかい？」

「安物ですが結構間に合うんです。色々訳があつて筋は説明しないと判りませんが映写中何処でも停めて観賞出来る処が味噌、まあマニア向最高映画だと……ハハハッ、思つて戴けば、なかに、儲からなくつても一向にかまわない代物なんですよ。」

「まさかあればっかりでお終いになるんじゃないだろうね。見れば判るつて……そう、じゃ拝見するかな。一つやつて見給え……」

と云う次第で、携帯のスクリーンを張る。コードをコンセントにつなぐ。夜だからカーテンを引けば適当な映写場となった。

「では始めます……」

手折られる女の群れ——随分優しいメイソタイトルが出たね。時代は江戸末期、成程ファーストシーンが祭と来た……と、こりや何処でも見られる風景だが桜の花が咲いて長閑なまた一きわ賑やかな移動シーン。方々に見世物小屋ののぼりがヒラヒラ飄つて、見たようなお馴染みの役者が歩いてる。

「これは某映画からの借り物なんです。これからセミロングになります。木の蔭から悪者が出て来たでしょう。人相の悪い今でいう愚連隊の仲間ですが……」

「アレ——御無体な……どうぞお許しなされて下さりませ。——アレ……アレ……ウッウッウ——、これッ静かにせい。必要あつてそなたの身体が欲しいのだ（と用意の麻酔薬入り布で口を覆う）それッ、この娘っ子をひっ担いで運んじませ。」

「これで娘一人が悪者の手へ、続いて向うから下女を連れて若い内儀が来るでしょう。」

あれがまた同じように捕まるんです。」

「へこんちわ、今日はいいい日和で御座んすねおっと……と、お逃げになることはありますまい。行きずりの三下野郎でも参詣人にや

間違いはねえ。何処のどなた様かは存じませんが一寸ばかりその美しいお顔が拝借したいんで……、まあ何をなさいますッ。お放しになって。それで御座んすか、そんなもんかねおッ邪魔のへいらねえうちに頂戴してうじやねえか、合点だッ。アレ——内儀さまが——うるせいや、こいつは溝の中でも放り込んじまえ、あとに内儀の履物—下駄が転ったまま。

「これで二人、今度は着飾った姫御を襲う処が出て来ます。」

「一寸待った、祭の雑踏の中で次々と娘女が誘拐されるのは一応判るが不思議と誰も助けに来ないね。」

「無闇と助け役が現われると困るんです。そこがまたいい処ではありませんか、ねえ、奥さん……」

「さあ、どんなものでしょう。ホホホ……」

「まあ、いい事にしよう。じや続きをやり給え。」

鎮守の森、石段の下手から侍女二人に案内され、重い裾をからけて姫御、静かに昇って来る。

「ロングですけどあの右側の杉林の蔭に奴等がかくれているんです。時々顔をのぞける面構えを御覧下さい。見えませんか、悪役はいつも辛らいですな。それッ、バラバラと飛び出して来た。」

「問答無用だ、やっちまえッ、アレ——助けて……が、どっこい一ことに姫と申しても元が御家老の姫君、足元の悪い石段の上で手向いながらいずれかへ逃れようとするが、荒くれ男には所詮蛇ににらまれた女蛙同然、かわいそうに遂に羽交じめされて、そのまま森蔭の中にひっ担つがれて行く。侍女の一人はドスで刺されたものか、その場にどうと倒れた。今一人の侍女は手を取られ脚をすくわれて、ひきずられるようにして連れ去られて了った……」

映画はそこでFO(フエドアウト)になる。「処でいよいよこれから次第にクライマックスになります。カットシーンもわざと長くしてありますから穴のあく程御観賞下さい。」

FI(フエドイン)で、米搗きの掉、米俵などが積んである処からみて、どうやら町はずれの水車小屋らしい。夜も大分更けている雲間から洩れる月の光も陰に籠って凄惨だ。カメラは土間の片隅からキヤッチする。僅かに蠢めく黒い影は……最前から無法にも拉致されて来た娘、内儀の二人、仲ば失神の姿で転がされている。麻酔からまだ覚めないらしい。すると建て付けの悪い表の破れ戸がギツギーギツと開いて姫を先頭に四五人の無頼漢がドヤドヤと入って来た。どうーんと突いたから姫と侍女の一人はバタバタと二人の女の

の足元に俯臥せになってともに泣き崩れる。

「へえれい骨を折らせやがったなあ、全く顔ぐるみぼてつとした女ばかり探すにや祭にやちと骨だぜ、なあ兄弟、岡っ引にめつからなかつたらいいようなものの、俺らあ冷や冷やしたぜ。だがどうでい、お詠向きの別嬪揃い十両とは下るめい。久振りに一杯やるか、ハハッ……」

処でこの女達は夜の明けねえうちに浜まで運んで鱷鬼の旦那に渡さにやならねえ、小判を拝むのはそれから後のことだ。どうせ先に行つたつてまともな事ありっこねえんだから今のうちに観念させた方がええかも知れん。獲物は今輪際逃すんじやねえぞッ、片っ端からふん縛って置け。

「……てな訳で、失神している娘と内儀を足蹴りにしてたたき起す。ハッとして立ち上ろうとする処を……ですよ、こんな風に。」

むずと掴んだ娘の腕を後ろに捻じ廻し、熊ッ、何をぐずぐずしてるんだッ、アレ——嫌やんなっちゃうなあ、今更アレ——も糞もあるもんかい。俺れん達に捕った……のが百……年……目と、縄を胸にかけて手を捻じ上るんだッ。留ッ、手めえ、かみさんの裾の中へ、何んて真似するんだ。大事なお宝さまだそら俺れのふんどしで娘っ子に猿轡させな。三公、手めえのふんどしを脱つかみさんに嵌めさせる。また汚ねえふんどしだなあ、おっ



さい。」

「しかし、いい処もあるんだよ。アフレコは真に迫ってる。本職はだしさ。」

「この縛り場の山はしんがりの姫をやる処なんです。一寸エロになっなかも知れません。じや続けて映写します。」

と……お姫さまとやら、静かになすっておくんなせい。飛んだ料理場を御覧なすって、さぞびっくりなさるだろうが何事も運とお諦めが肝心と云うもの。縛り侍女付きと云う処で地獄とやらに行っておくんない。

「ちよい待った。そのまま駒を停めて御覧、やっぱりこう云うシーンは暗いねえ。ふんだんにライトを使ったの？折角の縛り場が惜しいじゃないか。」

「セットは裏庭の小屋を使っただけです。暗部が撮れないと思って皆んなで屋根の瓦まで脱いで見たんですけど……よく観ないと判りませんね。どうも大っぴらにこんな処は撮れないんで、ついどうも……まあ一つ我慢して下

せんぜ、脚腰縛って柱にくくりつけましようか。これ、この通りのざまなんで……、留の野郎、ふんどしが無えばかりに股の下蹴られやがって……その姫か、ようし、思い切って荒療治やってみな、丁度お詔向な柱があるじやねえか。そうさ、磔にさ。いい眼の保養になるぜ、馬鹿野郎！後手に縛らんでどうする。その腰元も同んじにせい。親方、裾ばかりし開いちやってアソコは見えませんぜ。ならぐつと帯から上を反してみろよ。おっと前かがみのまんま縛っちゃ風が止んだ鯉登りも同然だらだらじやねえか、しっかりしろッ。脚をその股の下ん処を後ろに廻わして縛る。そうして両手で柱を抱かしてみろ、手頃なあ

ぶな絵が出来るじやねえか。ウウ……ウ、なあ、こう悲鳴が出なくっちゃ面白くねえ。

どうだい、女ってものは、ふん縛ってみるとたわいもないものんだ。葬式の前の引導じやねえが、もう直き唐人とやらの手に渡って和蘭陀屋敷のお花ちゃんかお菊さんと呼ばれるんだ。そうなりや俺ん達は塀が高く一寸やそつとじや近寄れも出来ねえ代物。お初を頂戴したい処だが吟味の前の玉とあっちゃ、こちとらも商売だ。因果と諦めて……留ッ、捲くりたかったら手めえの嬢の湯文字でも捲くれ、売物に手をつけるんじやねえぞ——。

カメラは一人一人なめるようにアップして恐怖に戦く女の乱れた姿態を描いて行く。

「カメラが女達の裏る側に廻って後手の処まで判つきり撮ったあたりは流石だね。普通の映画だと、殆んど省略してすぐ次に行くんだが……カラーだったらきものがうんと艶めかしく出るし情感が盛上ると思うが、ちよいと惜しい気もする。」

「序幕は別ですが、ここんとは一汗かきましたよ。何んせ素人ばかりの芝居でしょ。メイキヤップがうまく行かん処へ縛っては解いたりまた縛り直おしたりしてクタクタになっちゃいました。せめてもと思って女の方にはパンティだけは脱ぎして頂いた熱意を拘んで下さい。」

場面はこのままアイリスアウトになる。場面が変ると波の打寄せる海岸べりの砂浜をカメラをぐっと下げ、道路を突き飛ばされ、縄尻を引っ張られて曳かれて行く女達の腰から下の方、裾さばきを写しながらカメラは前からまた後ろから追って行く移動シーン。中でも先頭の黄八丈の娘は哀れである。帯は解け白い帯締めも鹿の子絞りの帯揚げも何処かに棄てられたらしく、曳きずる帯に裾から蹴出す湯文字に映えて胫の白いこと……そう云えば四人ともそうである。誰が監督したか心憎い描写で終始する。

「フイートを節約するために、ここの処は次とオーバーラップにしました。これが魑鬼と呼称する周旋業者、いや誘拐魔の親玉の屋敷で刺青をする部屋。女を折檻する部屋があつた親方が小判を前に売上げた頭をたたいていますね。どうやら取引が済んだ模様。ヘッヘッヘ……と大きく笑って引下る。」

「パントマイムかい？」

「そうしたんです。男同志の会話はどう見たって色気がありませんから……魑鬼の大旦那が何か子分に云いつけています。領いて子分が場から消えると廊下の横側から女四人今度は新手の子分達に縄尻を取られて出て来た。実はこれからその……」

「四人ともめかくししてるじやないか、相手の和蘭陀人でも来ているのかい？」

「いや……ここで女の値段、つまり奴等で値踏みして売り込む、その前の吟味、早く云つて品物の検査をやるうと云うんです。先ず一番若い姫君から始まるのですが、眼かくしのまま大旦那の前へ据えられると子分の一人が衣裳の上から、胸、乳房、腰、腿、胫と手で触つて肉付の具合を一通り検証する。大旦那が領けばよし、顔を横に振るうものなら女は即座に帯を解かれ、湯文字一つの裸にされる。と云う寸法。御多分に洩れず姫は見えないながらも抵抗、子分の一人が後手に縛った縄尻の処を押さえているでしょう。大旦那の指先きが庭の隅をさしました。あの部屋で痛い目に合わせろの合図なんです。」

「アレ……どうぞ、お許しなされて、嫌や嫌や……あッヒエ——あッあッう、う、う裸に、へいッ合点で御座んす。それ……」

娘の方は簡単ですよ、忽ち赤い湯文字一つに。フイルムを停めて見ましようか、モデルとしても相当なもんでしよう。奥さん如何です？」

「女優さんの縄を解いたり縛ったり大変ですわねえ、根気のおよしいこと。ホホホ……」
「処がこのシーンで誰一人無抵抗の女が現われない。そりやそうでしょう。何故って……」

「説明はもういいよ、女を誘拐したり売飛ばしたりして栄えたためしはない。この大旦那もその内お上から感づかれるね。大湖も蟻一匹でさ。」

「結局最後は借り物の映画で悪人は全部殺されちゃうんですが、まだ早いですよ。やっと一巻の半分位行つた処ですから……」

何処の館へ行つても女が縄を解かれた途端大抵帰えつちやいますから、ザ・エンドは実の処どうでもいいじやありませんか。次へ参りましょう。」

「これは何処まで行つても際限がないんじゃないか。もう少し女の心理を描いて貰いたかったね。そらッそこさ、折檻部屋で姫外三人の女を順ぐりに責めたにしてもよ、形式上の縛り感はどう時代遅れだよ。録音には胡魔かされんよ。子分が後手に縛り上げて棒のような物でたたいてる——その場面もさ。」

「強情な女だ、云うことをきくまで性の根を直おしてやる。えいッこれでもか」

「ピシヤリ……は古い。よろしく講談本を脱脚し給え、場末の映画館じやあるまいし。今度は脚本のいいのを擲えて撮り直すんだね。そのためには、お座なりの芝居でなしに責め役と責められる女性、それにカメラマンの三人だけにして雑音を取つて了う。撮影されると云う意識を働すと余計な表情になつて興業

臭くなる、そうでなく……そら、今やってる坐ったままの女をたたく処、まるで座禪し損った者を坊主がたたくのと同じだよ。

大分無理をして悲痛のクローズアップがあちこちあるけど演技は別として全部死んでいくよ。」

「どうもそう仰言るとこの映画は失敗だらけで、本当に申し訳あり……」

「ません処か、よろしいじやありませんか、裾やお着物の乱れた具合など今時の娘さんにしてはスター以上ですわ。それに御専門の後手に縛ったあたり微に入り細に亘ってお上手だと思えます。主人は理窟屋さんですからお気に留めずに。さてこの映画の最後はどうなるんでしょう？ どうぞお続けになって……」

「ではあと一寸ですからも兎角、少々冷めた挿水が入った処で気分を新らたにして——で、この四人の捕われた女達は離れ小島の和蘭陀屋敷に売られるまで御覧の通り座敷牢の中に入れられているんです。」

へなあ兄弟、女も拐されて今日で十日目。

俺らあ、牢に入るたんびに女臭くて堪らねえよ。髪も鬘も乱れ放しよ。風呂でも浴れて小ざっぱりさせりや、どいつもこいつもいい女になるのに……ああして一日中、縄で縛られて見張る俺達も大変だが看視される方でも身動き出来ねえ訳だよ。じや何かい、仏心を起

して湯文字でも洗っ

てやろうと云うかい

？冗談云うねえ、手

が腐らあなア。おお

寒い風が入って来た

雨かも知れねえ。

早う溜まりに帰って

ドブでもひっかける

か、ワハッハッハッ

……ブルブル、ハク

ッシヨンと来らあ。

ああ痛いわ、しび

れる位に縛られて——

これから先きどうな

るんでしょう。あの

……オランダ屋敷と

やら申しておりましたけど、怖いわ。では洋

妾に……でも最前の立話では唐人とやらの手

に渡されて生血を取られて薬の材料に……ま

あ怖ろしい。どうしたらよろしいんですよ

う。来る日も来る日も無態な責め折檻ばかり

ああ一日も早うここから逃がりたい——。

「この場面は合格でしょう。本当のことを申

上げると出演の娘さん達、スタジオに入る時

もう縛り縄を持って来たんですよ。ですから

座敷牢にささくれた荒縄ばかりで似合わない

んですけど御本人の希望なんですからそのま



ま撮ったのです。撮影がアップしてあとで腕や手首を見ると縄目が判っきり残ってスタツフの連中気の毒がっていましたけど……。これから、この映画は急スピッチになります。ワイプの連続で画面を替えるんです。

へさあ、出ませいッ、話がついたんだ。おつと……と、その姫と娘っ子はその長襦袢を着るんだ。へへッへッ、そのおかみさんとお腰元の二人は気の毒だが湯文字一枚になんた出るの是一緒だが行く処が違う。

アレ——お許しになって、嫌や嫌や……と



云ったて俺等のせいじゃねえんだ。可哀そうだが仕方ねえ。

帯を解かれ着物を剥がれた内儀と侍女の二人は赤い腰巻一枚にされて細引でまた後手に縛り上げられた。意味有り氣に満面ニヤリと笑う黒衣の支那服を着た男沈易某氏に女の縄尻が渡される。デハ、タシカニ……ヘヘッ毎度有りい、いや御苦労さまで、あばよ、地獄でいずれは対面か、処でこちらさまだ。

脱がせろ、脱がせろ、毛唐はきたねえことが大嫌れいだとよ。先方さまからのお届物、その緋縮緬の腰巻を嵌めさせてな。それから長襦袢だ。早うせんと解に間に合わんぞ。よし、それでよからう。どうせ先様で解いて頂く縄だ、バタバタしねえように後手に縛って声が出ねえように猿轡をかましときな。「いよいよ、ラストシーンになりました。ワイプと一部オーバースラップで目まぐるしいんですけど最前の中国人の手に渡った内儀と侍女の二人を入れたビール樽——これは某映画のフィルムを代用してゐるんですがカットとして今写ってるでしょう。樽を半分に割った中に両手を縛られてうなだれている湯文字一枚の女を新らたに挿入して密輸船は出て行く。波波……波のフェードアウト。一方、二丁の駕籠で運ばれて行く船付場。駕籠の垂れがハネル。曳きずり出

される縛られた長襦袢姿の女二人。白い猿轡のまま縄尻を取られて小突かれ、せかれて足場の悪い棧橋から解へと、波が立っていきます。ヘコラッ、乗らんか、諦めの悪い女だ……どういんと突かれたはずみで白足袋の右足が解のへりに。パッと開らいた両股、真赤な湯文字が画面一杯に見えてなまめかしい。附添いの男が顎で会図する。解の綱が解かれた。白い猿轡の女は崩れるように身体を曲げて動こうともしないうちに船頭の黒い影は前方の島へと解を漕いで行く……。

何んだか判らないんですが、終のタイトルをここで浮き出させて全巻の終りとした訳なんです……」

「成る程ね、君もよく喋ったが註釈付きでないと判らん映画だ。音楽が全然録音されてないんだから、こりや儲かる映画じゃないが。その意気を壮として総点数七十五点、NGがなかったと云うから八十五点にするかな。で余計なことだが、このまま終ったら悪人は殺るされる処か益々栄えちまう訳だな。いつ一網打尽に殺るされるんだい？」

「先生は裁判官いや奉行さまじゃないんだから勘弁して下さいよ。縛り映画で丁半勝負なしと云うことに……。いずれこのスチールは引伸して差上げますから。サテ、映画全巻の終りでお煎にキヤラメル、のしかかでも奥さ

ん、一つ戴きましようか。ワハッハッハッ……
 ……
 因にこの映画は後日金を工面して天然色で

撮ると云うが、未だに音沙汰のない処をみる
 と何処かで、くすぶっているのかも知れな
 い——。

題して素人シネプロあはだら経女体受難全
 巻の終り……。

(了)

【新版】女体緊縛フォト ○分譲○

各組一枚一組 (全部送料共)

R組 九十組 (印画紙の大きさ 9×13cm)

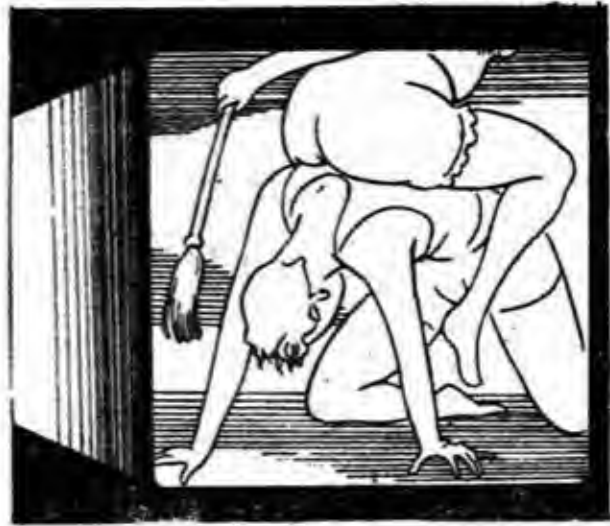
一組一枚	一〇〇円
五組五枚	四〇〇円
十組十枚	七五〇円
二十組二十枚	一四〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇円
六十組六十枚	三五〇〇円
七十組七十枚	四〇〇〇円

R1	柔肌と荒縄 (須川令子)
R2	海浜の緊縛 (萩千恵子)
R3	床間の飾り (佐賀美智子)
R4	高手小手 (花坂道子)
R5	海老縛り (萩千恵子)
R6	後手猿轡 (須川令子)
R7	後手足縛り (村田那美子)
R8	鏡うつし (伊吹真佐子)
R9	股間しぼり (須川令子)
R10	鎖縛晒責 (萩千恵子)
R11	股間縛正面 (伊吹真佐子)

R12	女学生縛り (須川令子)
R13	尻立縛り (萩千恵子)
R14	開股しぼり (川辺砂登子)
R15	猿轡の魅力 (伊吹真砂子)
R16	トイレ縛り (須川令子)
R17	立木しぼり (村田那美子)
R18	緊縛横臥 (厚狭春江)
R19	足揚梯子責 (伊吹真佐子)
R20	いたぶり (春日、伊吹)
R21	帆立縛 (萩千恵子)
R22	強烈梯子責 (伊吹真佐子)
R23	椅子責め (佐賀美智子)
R24	逆さ吊り (伊吹真佐子)
R25	後手吊責め (伊吹真佐子)
R26	股間縛後手 (中塚文子)
R27	逆海老責め (伊吹真佐子)
R28	高手小手 (加賀利江子)
R29	変型しぼり (萩千恵子)
R30	松樹後手縛 (村田那美子)
R31	くさり責め (伊吹真佐子)
R32	薄羅の緊縛 (加賀利江子)
R33	股間縦縛り (中富綾子)
R34	首縄股間縛 (坂口利子)
R35	手足逆吊り (伊吹真佐子)
R36	和装責め (藤田節子)

R37	仰向悦虐責 (川端多奈子)
R38	後手首縄締 (加賀利江子)
R39	乳房下緊縛 (村田那美子)
R40	肉体美誇示 (伊吹真佐子)
R41	お灸責め (春日、伊吹)
R42	後手猿轡 (萩千恵子)
R43	松樹しぼり (村田那美子)
R44	コルセット (中塚文子)
R45	股間しぼり (萩千恵子)
R46	手足緊縛 (萩千恵子)
R47	後手しぼり (加賀利江子)
R48	御開帳 (萩千恵子)
R49	くさり責 (川端多奈子)
R50	折檻の魅力 (須川令子)
R51	雁字搦目 (津森静子)
R52	股間緊縛 (萩千恵子)
R53	のぞき見 (萩千恵子)
R54	引き裂き (萩千恵子)
R55	後手しぼり (萩千恵子)
R56	猿ぐつわ (萩千恵子)
R57	苦悶の表情 (萩千恵子)
R58	あきらめ (萩千恵子)
R59	強烈しぼり (萩千恵子)
R60	トップモード (萩千恵子)
R61	全裸股間縛 (愛川悦子)
R62	逆立折檻 (大塚啓子)
R63	開股椅子責 (大塚啓子)
R64	振袖緊縛 (花坂道子)
R65	腰元吊り責 (村井知可子)

R66	ヌード縛り (愛川悦子)
R67	本縄しぼり (愛川悦子)
R68	股間しぼり (田中芳代)
R69	落花狼籍 (田中芳代)
R70	ハリツケ (川辺砂登子)
R71	帆立舟責め (益田房子)
R72	逆エビ責め (愛川悦子)
R73	変形全裸股間縛 (愛川悦子)
R74	ヌード縛り (花坂道子)
R75	全裸横臥緊縛 (花坂道子)
R76	ビクニツク (村田那美子)
R77	ハイヒール (萩千恵子)
R78	湖畔の宿 (須川令子)
R79	尻立逆縛り (須川令子)
R80	下着色模様 (須川令子)
R81	目隠し開股縛 (大塚啓子)
R82	後手高手小手 (田中芳代)
R83	乳房しぼり (愛川悦子)
R84	開股ベッド縛 (花坂道子)
R85	全裸床柱縛り (愛川悦子)
R86	亀ノ甲縛り (萩千恵子)
R87	ヌード股間縛 (愛川悦子)
R88	全裸乱れ髪縛 (大塚啓子)
R89	ガンシガラメ (川辺砂登子)
R90	腎羞責め (愛川悦子)



マゾヒズム百景

馬場好男

第五景 幼い被虐

明夫は小学校の三年生で、早生れだから八才になる。一人の子で甘やかされて育っているから我がままなのだが、家弁慶で外に出ると全然意地がない。母親の封建的な躰けも災いしているのか、何となく子供心に劣等的な気持を持っているみたいで「勉強をするんだよ」「女の子とあんまり遊ぶんじゃないよ」「お客様にはちゃんと挨拶をするもの」等の言動に、我がまま一杯に育ち乍らいささか委縮している様な状態である、外に出ると温和しい此の明夫の親友は、すぐ近所の同じ学級の由美子だ。由美子は明夫の性格とは全然反対で、処かまわす大声で叫んだり飛び廻

ったりする少女だ。此の二人は時折り喧嘩もするが、すぐ仲よくなる。喧嘩の場合は、矢張り温和しいと云っても明夫は男の子で、由美子は泣かされて逃げるのでなく追いかける、そして、泣かして逃げて行くのが明夫の方なのである、喧嘩に勝って勝負に負けると云った処だ。「由美っぺの奴、生意気だから泣かしてやった」と意気揚々と母に告げ乍ら心中では後悔し由美子の或る事の仕返しを恐れる明夫なのだ。その或る事の仕返しをされないうちに、早く由美の機嫌をとってと小さな頭を悩ます原因は、級は違いが学年が同じで明夫より一つ年上の、之も近所と云っても一寸離れている友達で徳郎の事だ。徳郎は兄弟も多く身体も大きく丈夫で元気な子で、明

夫の方で余り逆わないから仲がいいと云った有様で、或る日、此の三人が由美子の家で遊んだ事があった。由美子の父は勤めに出て留守、兄姉は学校からまだ帰らず、そして母もお使いに出て三人だけで本を見たり玩具をいじっていたが突然、徳郎が「お祭ごっこをしよう」と云い出した。此の辺はお祭りになると、みこしの外に騎馬武者や官女の行列があるのだが、それを真似て遊ぶと云うのである。発言には絶対に権利のある徳郎は、自分の思いのままに二人を動かす。「明ちゃん、お前は馬になるんだ。オレが武士、由美ちゃんは官女だよ」と云って明夫を四這わせ、風呂敷を背にかけて其の上に物差を腰にさした徳郎は跨って、部屋や廊下を通って一廻りさせ

た。「今度は由美チヤンが乗るんだ。之が着物だ」徳郎は由美子が出した彼女の赤い着物を肩にかけてやって、明夫の背に由美子を跨らせた。明夫は、かすかに女の子の馬になる屈従を不満そうな顔に現わしたが、徳郎とは喧嘩しても勝てないと思ひ込んでいたので、云うなりに部屋を這い廻った。そして自分では、由美子チヤンと二人きりになってこんな事をして遊びたい事もあったんだっけと思うのだった。ただ幼い気持で女の子に組み伏せられてみたい気持を持って居り乍ら、母に見られたら大変だと云う用心と子供心にどう云うキツカケで由美子に云ってその遊びをしようかと考えていたのだ。だが今、こうして徳郎に強いられて馬になっていると、もう遊びをやめたい気持になっていた。「今度はオレが武士になるよ」明夫が二人を一廻りしてやってから云うと「駄目だよ、馬になった者は最後まで馬だぞ。ねえ、由美子チヤン」徳郎は由美子の兄が恐いから、おせじを云って彼女を見る。「そうよ、明夫チヤンお馬よ。あ、そうだ。お馬のハナは白いでしよう？だから此のおしろいで」と云い乍ら、由美子は逃げようとする明夫をきめつけて、ひたいの処からハナ筋にかけて、おしろいで白く線を引いた。「よし、おい、もう一度だ。今度は由美子チヤンが先だ」明夫は又、馬になって由美子を乗せた。畳がひざ小僧にめり込む様

な気がし、廊下の処では割れるのではないかと云う様な痛さを覚えた。それでも明夫は、云うなりに幾度もくく淡いシトツ心を持ち乍ら這い廻っていた。こんな事があってから、由美子は明夫と喧嘩すると「徳チヤンと仇をとるから覚えておいで」と云うのだ。事実、その後、由美子を泣かして逃げ帰ったのも束の間、夕方、再び遊びに出た処を此の二人に撞ってしまった。徳郎の前に出ると蛇の前の蛙で、明夫は泣きそうになって謝った。「おい、そこへねろ」赤い夕陽が白壁の家を赤く染め、電柱の影が長く映っている地面に、徳郎は秋夫を仰向けにねかせた。秋夫はあわてて周囲を見廻したが、ちょうど人通りの途だえたのを見ますと、其の場に尻もちをついて転んだ。徳郎は秋夫の胸の上に馬のりになって、両ひざで肩をおさえた。「あんまり威ばると、こうして撲ってやるからな」徳郎が右手をあげたので、明夫は「ごめんよく」とあわててもがき出したが、徳郎はどっかと跨ったままで起させない。「由美チヤンも乗れよ」「ウン」由美子はいたずらッ子そうな顔で、徳郎の背後に跨ろうとすると「由美子チヤンは仇をとるのだから顔の上がいいや。前に乗れ、こいつは少しやつけた方がいいよ」と云う。由美子は短いスカートをたくしあげて、白いズロースの上から明夫の顔の上にお尻をのせてしまった。鼻も口もふさがれ

て呼吸が出来ず、地面に頭をおしつけられ胸には徳郎が乗り、二人の重みに明夫は「むゝ」と苦しそうに、わずかに身をよじらせ足をばたつかせた。「ハイドウく」上の二人は面白がつて身体をはずませるので、明夫は死にそうなるうめき声をあげた。由美子の白いズロースの間から僅かに眼を出した明夫の、突嗟の考えは、誰か来たら困ると云う事だった。お尻のすき間から僅かに口で息を吸ってもがいた。「あらあら、およしなさい。駄目よ。そんな事をしてお友達をいじめたら」誰か女の声が聞えて、明夫はハッとなった。徳郎と由美子はパッと立上ると、明夫を跨いで「ワイー、ワイー」と走って行った。誰か知らない若い女性、綺麗にお化粧した人だった。明夫は助け起されると、急に泣きじやくり出した。背中の土をパタパタはたいてもらい乍ら、明夫は急に恥ずかしくなると、家とは反対の方に急に駆け出した。そして一目散に、何処までも何処までも駆け続けた。「今のお姉さん、とても綺麗だったな。あんな優しいお姉さんが僕も欲しいな。そして僕を……」明夫は今の女性のすんなりとした脚を、さっき顔の上に馬のりされる時に見た由美子の足とをくらべてみる程の落着きを覚えた。明夫は走るのをやめて、今度は父母に「泣いたな」と云われない様、洋服の袖で顔をふき乍ら家に戻り出した。

第六景 海 辺 で

友人から聞いた話で五、六年前のK海岸で
の事で以下私と云うのは友人の事である。此
の海岸は夏は海水浴場としてそれこそ芋を洗
う様な雑踏ぶりで、カンカン照りつける真夏
の太陽の下に赤や緑、黄色の女性の水着やビ
ーチパラソルの色彩が強烈に海辺を象徴する
処だ。其の夏もどうやら終りかけ始めて土用
波がたつ頃、私達会社の連中で遅まき乍ら海
水浴に此の海岸へ一泊二日で出かけて来た。
私は泳ぎは余り達者な方ではないので専ら浅い
処で泳いだり一人海岸線をつたって岩山のゴ
ロゴロした誰もいない岬の裏側の方へ歩いて
みたりしていた。そして夕方頃の事である。
私の同僚でAと云うのが、年は二十四才だが
学生気分がぬけないと云うのか茶目ツ気な青
年で、いささか色好みときている。顔だちも
いい方なので二、三、女関係もあり、振った
振られたとやっていたが、何かしら憎めない
存在な位、明るい性格である。そのAに私が
「先刻あの岬の向う側で三人の女性が泳いで
いた」と話した事から、断然行ってみると云
い出したのである。「今頃まで居るはずがな
いぜ」と云う人の忠告も聞かず彼は一人でも
行くと云い出し、私も皆と泳ぎ騒ぐよりは、
あの静かな海岸の方がよかったので、二人で
そこへ行ってみたのだ。岩を押し破って生え

た様な松の木の影から、こちらの騒々しい海
水浴場とはうって変った静かな岩のゴロゴロ
した海岸を二人で見えて、「ホラ」と私は指を
さした。先刻のらしい三人の若い女性が、キ
ヤッキヤツと笑いさざめき乍ら泳いでいたの
だ。しぶきをかけあってみたり飛び廻ったり
して元気そのものである。恐らく泳いでは此
の辺に来て休み、又泳いでいるのだろう。そ
して如何にも此の夏の海水浴を惜しんで最後
まで楽しくと云う様な若あゆの様な躍動と云
うのが、びつたりのおぼれかたである。処が
此のAが、私とウイスキーの小瓶を飲み飲み
やって来たので、いささか多少乍ら酔いが廻
ったらしく「よし、見ていな。俺はあのそば
まで潜って行くよ。そして彼女達の股をくぐ
って帰ってくる」と云い出した。私はそんな
馬鹿な事をする筈もないし、又出来るわけも
ないと日頃、大風呂敷の気質のみえるAの事
だし、ふふん、とハナで笑ってまだ残ってい
る瓶を抱え込んで、岩の上に腰を落ちつけて
しまった。処が此のAが泳ぎは自慢するだけ
あって、反対側から巧みに潜り乍ら泳ぎ始め
て、あまり気にかけない私の眼からいつか消
えてしまった。私も彼の方は殆んど見ずに、
その女性達の方ばかり眺めていたのだ。夕陽
が赤く沈みかけて日中の雑踏は殆んどなく、
まして三人の女性の泳いでいる方は静かなも
ので、おしよせる波と風は肌寒い位である。

Aが消えて五分経ったか経たない頃だったで
あろうか突然、三人の女性が何か騒ぎ始めた
のだ。三人が大声を出して何か云ったと思う
と、そばに寄りそって泳いでいる。そして西
瓜でも奪いあう様な恰好で、岸の方へよって
来た。「おや？」と私は、目をこらすまでも
なかった。やさしそうに見えた此の女性達の
身体はなかなか大柄で逞しく、紺の水着がび
つたりと曲線を描いていたが、そんな事より
驚いたのは岸辺にあがって来た一人の女性の
太腿の間に、俯伏せになったAが胴をしめら
れ両手をねじあげられて出て来たのだ。海水
帽は脱げたのか髪がべつとりと乱れて額から
顔に垂れ下り、海中に長く抑えつけられてい
たのか、ぐったりとなつて女の股に胴を挟ま
れて引きずられていると云った姿で、あとの
二人が今度は手取り足取りでAを波がスーと
寄せてくる砂地まで引きずって来て、その場
に転した。私は「やられたな」と突嗟に思
い、松の樹の岩蔭に身をよせて有様を見守つ
た。Aは、きつと例の茶目ツ気で女性達のそ
ばまで行き、その股をくぐろうとして両脚で
締められて捕ったものらしい。Aは押しよせ
た波に顔を洗われて、身体をあげ立ち上って
二、三步よろけたが、一人の女性が腰のあた
りを蹴りつけると又うつぶせに倒れた。痴漢
と間違えられたと云っても仕方のない事だ
が、私は困ったと思った。逃げて行く訳も行

かず、と云つてこのままにしておくで大変な事になりかねない。三人の女性は足許のAを見下して立ち足はだかっている。一人が足でAの頭をふみつけてみたり蹴ったりしている。何か相談している様子だ。するとAが又、尻をもちあげ肘をついた恰好でうずくまった。水を吐き吐き頭をベコベコ振っているのは、盛に謝っているらしい。三人の女は、Aを両ひ蹴りつけて元の姿勢にし、一人は背に一人は腰に馬のりに腰をおろし、一人は立ったまま両手を腰にかけて片足でAの首筋をふまえた。私は一人の男を散々にいためつける此の振舞に、すっかり度胆をぬかれて出て行くに出て行けず弱ってしまった。あとで判った事だが、此の女性達は近頃の海女で、泳ぎと腕っぷしは到底我々の敵う相手でなく、都会のお嬢さん連中だったら、それこそ警察へつき出されて、危く腿切り魔と疑われても仕方がなかったかもしれない。彼女達だったからこそ、男を蹴ったり踏んだり馬乗りになって大声で笑うだけの事で助かったと云うものだった。「よう。あんさんも私の股っ子、くぐるのけよ」と私の片手をねじあげて砂地に片ほを抑えつけ、それを又Aに馬のりに跨った二人が笑い乍ら見ていた夕暮れの有様が今も忘れられない。Aのおかげで散々な目にあったが、逞しい此の時の女性が、忘れられないのも不思議なものである。

第七景 街頭のマゾあれこれ

先般、来日して東京、大阪で公演したニューヨーク、シチー・バレー団の出しもので「檻」はマゾヒスト必見のものだったらしい。残念乍ら私は機会に恵れず、テレビでも見る事が出来なかったのは今もって口惜しいと思つている。檻のスティール写真をみても、女王ぐもに份した女性が舞台にねている男性の胸の上を跨いだり、跨がったり、両腿の間に首を挟まれた男がそのままネクターも飲めると云う姿勢のシーンもあって、全く残念でならない。それに此の「檻」の評判が非常によかつたのをみても、最近には街にマゾが多くなつたのでないかと思つたりしている。観た方が之を詳しく書いて戴けたらと思う。

デルミ監督の映画「十戒」のラストに近いシーンに群衆が酔い痴れる処があるが、僅かな場面だが踊り狂う群衆を描いた中に、馬になった男の背に馬のりになって一緒に暴れ廻る女のシーンがある。大画面に躍動する此の姿態は、マゾヒストでなくても固ずるのむ様である。新東宝映画「女体模倣」は美女の裸を見る以外はむしろサド向きだが、せりふの中に面白いのがあった。俳優名も役名も忘れたが「君は女王だよ、美しい女王様だ」「貴方は？」「勿論、君のドレイだよ」と云つた処である。どんな男でも美女の前ではドレイ

にでもなりたいとは、確かに思うものだ。それを映画のせりふの中に、マゾ観念とは一寸違うが、入っていたのは面白い。

最近の若い女性は肢体もののびのびとして行動も考え方も活発だ。加えて裸の季節となつてくると、女性の美しさが初夏のひざしに一層ひきたてられてくる。そして今年の流行はシヨート、スカートで、前にも流行した事はあるがその時より更に短いのが今年である。歩いてさえも膝小僧をむき出しにしているが、電車等で前に腰をかけたシヨート・スカートの女性を見ると、こちらで眼のやり場に困ってしまう。それに、此の頃の女性は自分の個性を知っているから、脚に自信をもった者が此のスカートをつけるから、いよいよ我々を嘆かせる。街にハンランする脚、脚、脚、美しい女性の此の脚許に何故、ひれ伏す事が出来ず満たされぬ満足を求めねばならないのかと思う。

前にテレビニュースで見たが、九州のマンガ家の集いで試胆会があり、その時の胆めしなるものが尿瓶でビールを飲み、便器の中に入った味噌煮を食べると云うものである。よく二科展あたりで美術家連中が身体を黒く塗って、みこしの上に女神に讀えてストリッパを乗せ、かつぎ廻って騒いでいるのを見たが、こう云う趣向で健全な女性ばかりを集めて、本物のビールや彼女らのそれをミック

スして女神祭りなるものをやったら面白そう
だ。

BB旋風で、ブリジッド・バルドーの魅力
はますます大変なものだが「殿方御免遊ばせ」

「此の神聖なお転婆娘」と姿態の美しい事も
だが、ああ云うお転婆娘を相手に、サドとマ
ゾのプレイをしたら、さぞかしマゾ冥利につ
きると思うが、世の中はままたぬものだ。

映画『奴の拳銃は

地獄だぜ』に思う

〔通信〕

浦田 紀 夫

映画「奴の拳銃は地獄だぜ」の中原ひと
みは実によかった。

密輸団の本拠に変名でダンサーとして潜
入した美少女、坪内さと子（中原ひとみ）
は、その正体を見破られハイヤーで箱根へ
送られる。両手を掴まれ数十人の荒くれ男
の真中に立たされ、「違います！」と健気
にも必死の面持で首を振るさと子。「痛め
つける」の命令で、ほっそりした両手を後
に捻じ上げられ、鈴元を掴まれて室の片隅
へ……、椅子に後手に括りつけられる美少
女、ブリューと白のチェックに白いカラー
と白いボウのワンピース・ドレス、ナイロ

ン・ストッキングをびったり穿いた両足に
ブリューのハイヒールの若々しい姿。その
胸に麻縄がギリギリと四筋も喰い込んでい
る痛々しさ。

ピストルが構えられる。彼女の大きな瞳
は更に大きく見開かれる。だが唇を絶望に
押し歪めながらも、さと子は口を割らな
い。発射！彼女の左頬を掠めて壁の漆喰を
飛び散らす銃弾。可愛い顔は歪められた儘
思わず首をすくめる美少女。

「云わないのか！」第二弾が右頬を掠めて
……歪む美貌、続いて第三弾、第四弾、中
原ひとみのあの大きな黒い眸、眼元に迫っ

「素直な悪女」で此のバルドーが、海辺で男
の頬や首をふまえるシーンがあったが圧巻だ
った。

此の頃のアメリカ映画では、男が女性をひ
っぱたくシーンが多くなつたと云う。そう云
えば日本映画も、面倒くさくなると男は女性
をひっぱたいて、従いてくるなら来いとばか
りにスタスタ行ってしまう。そして女性も
又、ひっぱたかれてはじめて相手の男が好き
になり、男女同権は名ばかりで男のドレイミ
たいな点がみられる事がある。我々マゾ愛好
者には嫌な風潮だが、私は一寸違った見方を
してみたのだ。それは男性横暴の時代には喜
劇、落語など世相を諷刺したり茶化したりす
るのは「嫌天下」が多く、「女が強い」立場
におかれている。それが逆になつたのは、そ
れだけ世相が男性のマゾ化でないかと云う訳
である。余り大した理論でないが、一つの見
方であると考える。

立読みで、著者は忘れたが「顔の事典」と
云う本に、マゾヒストの顔と云う項があっ
た。

それによると、谷崎潤一郎を筆頭にあげてマ
ゾヒストは殆んどが受け口であると書いてあ
る。前にも何かでマゾヒストは髭が濃いか
口笛が吹けないとかと云うのを見たが、私は
此の受け口も否定する。何故なら私は、どい

た濃い目の眉が慄える。心持ち団子鼻の若々しい、人なっこのいあの顔が、アッ、アッ、という低い悲しげな叫びとともに、のけぞり、傾き、すくむ。第五弾、第六弾、烈しい十連発、軽く全体にウェーブしたソフトなショウトカットの髪がかすかに揺れて、彼女は血の気の失せた顔を、やがてガックリ右へ傾け失神してしまう。

実に残酷な拷問だった。ダンサーに身をやつしているとはいえ、うぶな純情可憐な令嬢、若く健気な美少女だけに、惨めさ恐しさも一入だった、しかも気を失う迄、絶望に打ち挫がれ乍ら、一言も口を割らずに歯を喰い縛っているところなど一層痛々しかった。

欲を云えば、こう云う拷問もして欲しかったと思う。

両手を掴まれて立たされているさと子の頬に鉄拳が飛び、縛られた姿も胸だけでなく、乳房の下あたりにも縄が三筋程深く喰い込む。後にまわされた両手は縄だけでなく鋼鉄の手錠が嵌められる。(映画は手を縛っていない)両足首もギリギリ固く縛られる。そして若々しい頬を縊れる程、強く締めつけて白布の猿轡が噛まされる。口の上からでなく白い歯と歯の間をギョツと絞り上げて……そして、更に次の拷問が繰り返

えされる。先ず彼女を後手に縛り上げた儘太いロープで天井へ吊り上げる。両脚は縛られたまま、空中で苦し気に呻き、悶える彼女、ハイヒールを穿いた美しい脚が、ヒクヒクと引つる様に波打つ。涙、うつろな眸、

続いて、ほっそりした両手を頭上に交叉させて真すぐに吊り上げられる。ハイヒールの爪先が、やっと床に着く位。衿首を掴まれ、ソフトな髪を掴んで下へグイと曳かれる。魂消るような悲鳴……。

引降されて烈しい鞭打ち。がんじがらめに縛しめられて転げまわるさと子、ワンピースの裾が捲くれ、可愛い膝小僧がのぞく衣服は無惨に裂けて、白桃のような乳房滑らかな肩がこぼれ出る。

力尽き、涙にぬれた彼女の黒眸。

この美しく、あどけない純情女優の、そういう悲運に苛まれる姿を是非一度充分に時間を掛けて観せて貰えたらと思うのである。

この映画「奴の拳銃は地獄だぜ」のスタイルは是非、口絵に載せて欲しいものです。弾の下で顔を歪め、正面を向いて縛られている姿、縛られたままガックリと倒れかかる場面の二葉は何としてでも、お願いしたいと熱望する次第です。

みても受け口でないから――。

私は昨年の春から秋にかけてよくスクータ―を乗り廻したが、面白い統計をとってみた。只、対象人員が僅かなので統計と云う程でもないが、一寸面白く感じられる。それはいろんな年代の女性を後に乗せてやったが、其の女性達がどう云う乗り方をしたかと云うのだ。横に腰をかける場合と跨って乗る場合とは次の様になった。勿論、延人員でなく各人対象である。

	跨って乗る	横坐りに乗る
十代	六	一
(十五以上)		
二十代	九	四
三十代	二	七
四十代		二

私は之だけをみて云うのでないけれど、二十才位の青年子女が大人になり更に若い世代の来る時代が楽しみであるが、もっとあとに生れたらよかったと残念でもある。

東京中日新聞に連載された南部僑一郎氏の「映画ラヴ、シオン移り変り」中に春琴物語の映画を評して、女の足を洗ってやったり胸に抱いて暖めたりしての恋は非常に美しかったと云い、マゾヒズムの境地にある恋が至上のものだと書いてあるが、私も同感である。何時の世にも男性マゾが街に村に溢れん事を希って、又次の景に入ろう。



彦造が、おたねと京子を伴って高原の開墾畑へ行った翌日のことである。

朝飯を済ませた彦造が組合へ出荷する鶏卵を木箱へ詰めている処へ、ひよっこり西村の弥助が訪ねて来た。

「どうしたい弥助、えらい早いじゃないか」

「うん、おぬしに一寸話があつてな、早くから邪魔をしたんだが……」

「俺に話がある？……まあ上れよ」

「いや、それより表まで出よう」

弥助は、そう云って彦造を促して戸外へ出た。見渡す谷々に霧が下りて、初夏の山峡には今朝も蟬がジーシーと鳴いている。

だらだら坂を下って、彦造の家の見えなくなった辺りの栗の木の木蔭まで彦造を誘い出した弥助は、その木の下に蹲踞んで、

「実は昨日の夕方、藤兵衛旦那に呼ばれて使いを頼まれたんだがね」

「いつもどうもない。おぬしに話をして、今日これから直ぐに連れて来いと云うんだよ。何しろ旦那のああした激しい気性だからな。その代りと云っちゃア何だが、お京さんが旦那の邸に在る間は、あの黒石山の炭材の木をおぬしが焼くだけは自由に伐採さしてやるッて云っていたぜ」

「俺ア、そんなものは欲しくねえ」

彦造はぶつきら棒にそう云うと、腹立たし

「うむ」

「おぬしは家に若い女を囲つてると云うじやあないか」

「ああ、お京の事か、別に囲っている云う訳じやアない。あれは亡くなった弟の嫁だよ。後家になつて行く処がないもんだで、引取って面倒を見ているんだ。処で藤兵衛旦那の用件というのは？」

「それだ、そのお京さんとか云つたな。その人を旦那の邸へ半年ほど寄越して欲しいと云うんだがね」

「えッ、あのお京を？」

「そうだ。俺もそんな女がおぬしの家に在る事は、ちっとも知らなかったが……旦那がどうして知っていたかな？」

「それで、それはいつ？」

げに足許の石ころを蹴飛ばした。

「欲しくねえッたつて、お京さんを旦那の邸へ差出すのを断るわけに行きまい。旦那は村の独裁者だものな。そりや、おぬしだってだしぬけに、こんな話は不服だろうさ。俺にはその気持は判る。俺だって、こんな使いには立ちたくねえけどもよ。旦那に呼ばれて云い付けられりやア仕方がねえもん……なア彦さん、ここはひとつ眼をつむつて、暫らくお京さんを旦那の邸に預けようや」

二人が話している藤兵衛旦那と云うのは、この村一番の旧家の当主で、前には村長や農業組合長などを勤めていたが、今はそうした表向きの公職を養子の宗吉に譲って悠々自適していた。しかしこの村の山林や田畑の半ば以上を持ち、農産物の集荷販売権や葉たばこの栽培権など多方面に亘る実権を一手に握っており、豪壮な邸には、絶えず町から利権屋や色んな職種の人間が出入りして、彼の手中に躍おどっていた。

藤兵衛は、先妻との間に出来た一人娘に宗吉と云う養子を取ると、役場の直ぐ近くに新しく家を建てて其処へ住ませ、後妻のお千賀と、古くからいる女中のお繁と三人で古い邸の中に住んでいる。

処が表向きは家族三人の筈が、実際には藤兵衛の邸にはお千賀とお繁以外に、いつも五六人の女がいた。その女達は、藤兵衛が他

所から連れて来た者もいたが、村の女房や娘たちを一週間とか一ト月とか勝手に藤兵衛が決めて呼び寄せていた。——旦那に逆らっちゃ村にいらなくなるでなア——と村の人が云う通り、村内に関する限り藤兵衛の思う事は意の儘であった。

「おや、お倉さん。あんた旦那のお邸から何時帰った？」

「昨日だがや」

「旦那にしつぽり可愛がられたんだろ」

「馬鹿云いんさんな。旦那が、わたし等のべしやんこ面を相手にするもんかい。そらお掃除、お洗濯、お食事とお繁婆アにこき使われたんだよう」

「とか何とか云つて、一ト月も家を空けていて留さんは何と云っているの」

「うちの人かい？——やれやれ、厄やくは済んだかい——だつてさ。あたしの留守をいいことにして、隣り村のお喜代後家でも追い廻まわしていたんだらうよ」

村の田圃道で、女房達のこうした話題になる藤兵衛の行状である。

彦造も藤兵衛のそうした行状はよく知っていた。知っていたればこそ、おたねや京子を出来るだけ麓の部落に下さないように努めていたのであった。それもおたねの方は別として、藤兵衛旦那が京子のいる事をどうして知ったらう。今まで一度も村の人に顔を見せた

事のない京子。強いて云えば京子が初めてこの家へ来る途中だが、まだ寒かった頃の、肩掛けを頭からすっぽり冠かぶりつて風態をかくしていたのを誰かが見たとしても、おたねか別人か判らぬ筈だ、と不思議でならなかった。

しかし、今はそんな事を詮索していても仕方がない。彦造は弥助と一緒に家へ入ると京子を呼んだ。

「なア、お京。実は、村の旦那のお邸へ半年ばかりお前に行つて貰わなくちやアならないんだ。今その使いが見えているんだが……」と切り出した。

「あら、義兄さん。旦那のお邸つて、何処の？」

京子は何が何やらさっぱり判らぬ、けげんな顔で彦造を見た。

「くわしい話をしなけれや判るまいが、この村に豪い旦那がいるんだよ。そしてその邸へ村の女達が交代で勤めに行くしきたりになっているんだ。邸での仕事かい。俺も詳しい事は知らんが、何しろお客様が多いのに家族の少ない家でね。まあ女中代りの仕事と思えばいいんじやアないか、なア弥助」

「まあ、そうだ。現に今まで泉谷のお佐代坊と、啓太の女房が行っている。まあ、たいして苦しい仕事でもないだらう」

「そう云う事だ、なアお京。行つて呉れるかい？」

「義兄さんが行けと云われれば、仕方ありませんもの」

京子は素直に云つてうつむいたが、心の中では彦造の許から離れたくない気持ちで一杯であった。

「そうか、じやア早速支度をして、弥助どんな案内して貰うがいい」

「ええ、ではちよつと」

「ああ、身の廻りの物は何もいらぬいぜ」

着換えに立ってゆく京子の後から弥助が声をかけた。

やがて弥助に伴われて、だらだら坂を下つてゆく京子の姿を、彦造とおたねは手を振つて見送った。京子も何度も振り返っては手を挙げてこたえた。

「おおい、元気でよう」

彦造が両手を口へ当てて、小さくなってゆく京子の姿に呼びかけると、その声が向いの山に届いて余韻を曳いて返つて来た。

「今日から又二人きりになるんだねえ」

と、おたねが淋しそうに云った。

彦造は、何時までも京子と弥助の姿の消えていった谷のあたりを、じつと見凝めていた。「おい津田、ちよつと休んで行こう。まったくひどい道だなア」

四十がらみの背広の男は、ボザットから取り出したハンカチで頸のあたりを拭きながら道傍の石へ腰を下した。津田と呼ばれた若い

青年は鞆を草の上に置いて

「どうせ、酪農地つてものは、皆こんな所ですよ」

と云つて、純白なパナマ帽子の底を手でちよいと持上げて眼前に連なる山を見上げた。

「森川さん、この村の藤兵衛って人は中々の策士だと云つてましたね」

「ああ、だが、どうせ山村の顔役さ。話はずまく行くと思う」

「何とか、好い条件で話を纏めたいものですな」

「相当な放牧地を持っているんだからな」

「さア、もうあと僅かの道のりらしいです。元氣を出しましょう」

「ああ、そうしよう」

太陽のきらきら輝やく炎天の石ころ道を、都会から来た二人は喘ぐようにして藤兵衛の邸に向つた。

二人が、藤兵衛の邸へ着いて先ず驚いた事は、その邸の豪荘さであった。小高い丘の上に更に石垣を築いて土塀を廻し、その中に大型な草葺の家が幾棟も並んでいる。まるで草屋根の城と云つても良い程の構えである。

二人が長い石段を登って一歩門内に入ると其処に十四人余りの女が彼等を待っていて「ご連絡によりましてお待ち申し上げておりました。さア、どうぞこちらへ」

と云つて正面の玄関前を右へ曲つて、隣の

家の式台へ案内した。外から見た古風な建物も内部は大分改造せられて一部は純然たる洋風に、又、或る処は古風な造りをそのまま生かして修繕してあつて、あるじの建築美術に對する造詣の深さが窺われるようであつた。

案内して来た女は、二人を畳敷の一室に通すと、

「暑い日中をお越し戴きまして、さぞお疲れの事と存じましてお風呂を用意致しました。どうぞお召し下さいませ。こちらの襖の隣りが浴室になっております」

そう云つて頭を下げると、乱れ籠を出して来た。ハンガーを持って背広を洋服掛けへかける。まことにてきぱきして二人は物を云うまもなく浴室に入ってしまった。

「どうだい津田、氣が利いているじやアないか。訪ねるなり早々応接の前に入浴とは」

「中々客を遇する術を心得ていますね。それにこの岩風呂は又凝つたものですね。まるでどこかの湯泉へ行つてゐる見たいです」

二人が悦に入つて浸つてゐるとき、その岩風呂の岩蔭から、日本髪に結つた二人の女が現われた。二人とも紅の色も鮮やかな湯文字一枚の姿である。それが湯槽のふちから湯が溢れて、ひたひたと浸つてゐる洗い場の石だたみの上へ両手をついて

「お流しいたします」

と云つて頭を下げた。森川はあまり突然の

女の出現に、呆氣に取られた恰好で思わず顔を見合わせた。

一寸、毒氣を抜かれた形である。

やがて森川が

「いや、これはとんだお世話をかけますな」

と云って、湯から上っ

て女に背を向けた。津田は、明るい陽射しの洩れる浴場での不意の出来事に戸惑って、氣まり悪げに逡巡していた。

「姐さんか女中さんか知らないが、まるで温泉見たいだね」

と森川がお世辞を云う

と

「はい、ここは出雲の皆生温泉から取り寄せました温泉でございます」

と云ったので、森川は

「へええ——」

と云ったままで、あとの言葉が続かなかった。

湯から上ると、さっきの年増の女が甲斐々々しく浴衣を着せかけて、まるで一流の旅館にいる程行き届いたもてなしである。



「こんな浴衣がけの姿で初対面は、どうも失礼のようで」

と森川が云うと

「いいえ、これは主人の云い付けでその方が却って打解けて話がしよいとの事でございませうゆえ、どうぞそのままお召し下さいませ」

と、先に立って廊下に出た。そして

「それでは只今から御案内申し上げます」

そう云って頭を下げた。

「ははは、浴衣がけで皮袍を下げてる姿など、どう見ても変な恰好だな」

津田は自分の姿に苦笑しながら、森川と一緒に廊下を歩いて行った。百年以上も経たと思われるこの家の廊下の床は部厚い肥え松の板を丹念に拭き込んで、どしりとした重厚さの中に行き届いた手入れの跡が見えて、艶やかに光っている。足を運ぶスリッパが滑りはせぬかと思われる程の見事さである。

その廊下を突き当って右へ折れると、其処は石廊になっいて大小様々の飛び石が連なっている。左側は数寄屋造りの壁、右側は中庭で築山、泉水の配置が何とも云えぬ趣を添えている。それも都会や温泉地のように、限られた狭い地面にしつらえられた庭のような小細工ではなく、思い切った土地を伸び伸びと使った雄大な景観で、背後にある自然の山もその庭の点景の中に採り入れられているという仕組みである。

森川と津田が、その庭の趣に見惚れている

と

「さあ、どうぞお通り下さいませ」

と女が云って、左側の凝った細工の杉戸の方へ右手を差延べた。この女の案内はここまでのらしい。

二人は杉戸を開けて建物の中に入ると、其処は大畳程の溜りで更にその奥に洋風のドアがあった。森川が傍で軽くノックすると、中から

「おうー」

と云ういらえの聲がした。

——藤兵衛とはどんな男か——

二人は初めて会う人物への期待に、幾分気持を緊張させながら、ドアの把手に手を掛けた。

「いや、ようこそ。お待ちしておりました」

テーパーの向うに腰かけていた男が、のっそりと立って両手を広げた。

年輩は五十四五才であろうか、色は浅黒いがきりつと緊った顔立、さして肥ってもないが好みの縮みの和服をゆったり着た身のこなしが、とても草深い農村の顔役とは思えない程垢抜けしている。

「さア、どうぞ」

藤兵衛は二人に椅子をすすめると、再び自分の椅子に深々と腰を下した。

「ああ、初めまして……私が大東乳業の……」

と森川が立ったまま挨拶しかけるのを

「ええ、存じております。さあさあ先ず落着いて」

と遮ったので、それでは、と森川がすすめられた椅子に腰を下そうとして、思わずハッと飛び上らんばかりに驚いた。

森川と津田の二人にすすめられた椅子は、単なる応接用の物ではなくて、これは特別に造られた人間椅子である。

古い日本の怪奇小説に人が椅子の凭れの後ろから中に入る「人間椅子」の構想があったが、この部屋のは坐席も肘掛けも低く造った木製の椅子に、真珠色の光沢を持つ統のパンティ一枚をまとっただけの女が、両足を椅子の脚に、両腕をその椅子の腕木に同じ統の薄紐で縛りつけられている。ふっくらと盛り上った胸乳を露わに見せて頸を上げ、顔を空さまに向けて、房々と梳き流した長い髪は、椅子の背の真鍮の環にぎゅぐゅと繋ぎ止められている。年の頃はいづれも二十七、八才位であろうか。一人は瓜実顔の、一人は少し丸顔の整った顔立ちである。三纏程な幅の透明なビニールで眼隠しをされているので、眼はつむったままである。長いまつ毛がそのビニールに抑えつけられて痛々しい感じで透いて見える。

「これは……」

と人がためらっているのを

「田舎で何のおもてなしも出来ません。どうぞ御遠慮なく」

と藤兵衛は、客人の狼狽ぶりを楽しむような眼付で彼等を促した。森川と津田は気まり悪そうに顔を見合わせながら、その人間椅子にそーッと腰を下した。

薄い浴衣を透して伝わる若い女の肌の感触が妙に神経を刺激して落着かない。

「すると、つまりこの村に相当数の乳牛を入れて、この一帯を新らしい酪農地にしたいと仰言るんですね」

「そうなんです。それで乳牛を委託飼養にするか、それとも分譲形式にするか、又乳価の協定、集乳の方法などについて格別なお力をかりたいと存じまして……」

「わかりました。それではそちらさんの条件を伺った上で、村の関係者と相談致しまして御社の申入れに対して協力するか否かの大綱を定めましょう。区々の事は又、後日それぞれの係が打合せをする事に致しまして、夕刻幹部の会合を開きますから、今夕は拙宅へお泊り下さい」

「では、何分共によりしくお願い致します」
藤兵衛の応対はまことにきばきしていて胸のすくような所があった。

丁度話が一段落した時、二人が入って来た反対側のドアが開いて、一人の女が盆を捧げて入って来た。

森川と津川はこの女の服を見て再び眼を見張った。白いカラーを着けた黒サテンのワンピースを着て、銀器を載せた銀盆を捧げている姿は、まるで舞台の上のサロメを思わすようである。しかも、そのワンピースのデザインが変っているのだった。半袖の袖と衿にくっきりと白いカラーとカフスを着け、カラーの下に一つ釦があつて其処から腋の下まで大きく開き、それから腹部へ彎曲して胸と腹の境の処で左右から合つた布は二つの釦で止められて再び大きく両の横腹に開き、臍を中心に輪を描いて釦に繋がっている。

引緊めるようにびったり合つた服から両の乳房と腹部が、はち切れるように張り切つてみえている。

その女は藤兵衛の側まで歩いてゆくと、一度会釈をして両膝を床についた。銀盆は胸に捧げたままである。盆の上には一面に唐草模様を彫つた空の銀の碗が三個、同じ模様の小さい香料入が一個載つてゐる。少し遅れて又一人女が這入つて来た。この女はピンクのドレスを着て、両手に同色の肘迄ある手袋を穿いている。盆を持った女は藤兵衛の椅子の肘掛けに背を凭して、上体をぐつと反らした。ドレスの女がその横に立ち、彼女のぶりぶりと張り切つてゐる乳房を搾りはじめた。

シュッ。シュッ。

この女は産後であらう。濃い白い液が見る

見るうちに三個の銀器に次々と充たされていく。

彼女の服の風変わりなデザインは、藤兵衛が女の乳を搾らせるために特に考へついたものかも知れない。

ドレスの女の手は彼女の右の乳房から左の乳房へ――。まるで山羊の乳でも搾るように、感情など全然無視した仕草でぐいぐいと搾っている。彼女は軽く眼を瞑つて、ドレスの女の手が力が入るたびに、かすかに腹を波打たせている。

森川も津川も、さつきから頭が少し変になつたような気がしてゐた。自分達の尻の下に敷かれて、椅子のクッション代りになつてゐる女。今、乳を搾られてゐる女。搾つてゐる女。また先刻浴室で背中を流してくれた女。いずれも若い、かなり顔も肢体も整つた女が彼等の眼前に繰り展げる妖艶な姿態は二人の神経を妙に刺激し、彼等の理性を幻惑しそうに思われた。まるでハレムへ迷い込んだような気持である。そして、奴隷のように易々諾々として、藤兵衛の意の儘になつてゐる女達が、どう云うわけでこの家にゐるのか？という疑問も、兎もすれば今現に腰かけてゐる女の体温、悩ましい触感に推されて、頭の中から打消されようとした。

森川はそつと自分の上体を後ろに寄せた。

彼の浴衣越しの背に、女の豊かな胸の双丘が

触れた。一瞬、森川の足を支えている女の太股がピクリと動いたように感じられた。胸から脚へ、反射的に作用する反応を楽しむように、森川はそれとなく自分の背で椅子の女の乳房を押した。ピクッ、ピクッ、と女の太股が、腹部がそのたびに痙攣して彼の官能を揺さぶつた。藤兵衛は何気なく、森川のそうした動きを窺つてゐた。

やがて銀盆を捧げた女が、自分の乳に香料を添えて森川と津川に薦めた。さすが乳業会社へ勤めて、乳には馴れている二人も、このような人乳の扱い方は初めてないので一寸口にするのを躊躇したが、藤兵衛はいかにも馴れてゐると云つた手つきで、わけもなく銀碗を口へ運んだ。

「大変風変わりなおもてなしで恐縮いたしておりますが、今のご婦人は……」

と、先刻からの不審の点を切り出すと、藤兵衛は

「アハッハッハ」

と大きく笑つて

「あれですか。あれは、村の若い衆の女房でな、最近子供を産みました。お客様の接待役に、一寸呼んだままでです。村の者は、わたしの云う事は何でもききます」

と軽く云つた。森川は続けて

「では、この椅子の……」

と云いかけると

「いや、この女は村の女房や娘ではありません。まあそんなに詮索しないでゆっくりなさって下さい。わたしはこれからお話の件で打合せの為、ちよつと失礼します。後に女中をつけておきますから、この部屋でご休憩なさるなり、別室でお寛ぎになるなり、どうぞ御自由になさって下さい。夜にはまた面白いものをお目に掛けましょう」

藤兵衛はそう云うと、二人を人間椅子に残したまま部屋を出て行った。

女中のお繁は森川と津田を案内して間もなく応接室を出て行った。三人がいなくなる椅子に縛られている京子は、腰を浮かすようにして身じろぎをした。ビニール布で眼隠しをされているので、自分の姿は分らなかったが、人間ばなれのした恰好にされている事は慥かだった。彼女はかなり長い間、自分の身体の上に、森川という男の大きな尻を据えられて、まるで拷問にでも遭っているような息苦しさを味わっていたのが、今やつと身軽になつて、思わず息を大きく吸い込んだ。

彼女は昨日、山の家で彦造やおたねと別れて、西村の弥助と云う男にこの邸に連れて来られてからの出来事を想い返していた。京子がこの邸へ入った途端に、お繁という年の行つた女中が旧い廊下の突き当りの四畳半の部屋へ連れて行って、いきなり彼女に着物を脱

ぐ様命じた。

「ふん、まあまあと云う処だな」

お繁は京子の鼻をつまんだり、胸を突っ付いたりしながら身体の点検をした。そして「お京とか云ったね。おまえ、山の彦造に可愛がつて貰ったんだろう」

と、からかうように云った。彼女は恥かしさに俯向きながら

「いいえ」

と軽く頭を振つたが

「そんな事は無い。ほら、ちゃんと顔に書いてあるよ、——彦さんが恋しい——とね。だがお前には気の毒だが、当分彦造には逢えないよ。何しろおまえさんの素晴らしい姿を旦那に見込まれたらしいからね」

そう云つてお繁は京子の髪を右手で掴んで顔を自分の方へ捻じ向けた。そして

「あらかじめ云つておくがね、この家では旦那とわたしの云う事は絶対だよ。奥様もおられるが、その方はお前達には何も仰言りはしない。お前さんが少しでも旦那様や私に逆らうと、死ぬような苦しい目に遭わなければならぬのだということを、心に銘じてよく覚えてお置き」

京子は、引籠られるような髪の痛さをこらえてうなずいたが、

「はい、と云えないかい？、横着な女だね」と云いながら、鼻の頭をぎゅツと抓つた。

「——はい」

「今からこんなじや先きが思いやられるよ。いいかい、私がいいと云うまで此処で両足を開いて、両手を真つすぐに揃えて前へ伸ばして、じつとしてゐるんだ。私は一寸用事をしに来るから、帰るまでその姿勢を崩すんじやアないよ。それをもつと足を開くんのだ」

そう云うとお繁は、自分の足先で京子の踝をポンと蹴つて足を開かせた。そして京子の先刻脱いだ衣類を全部一纏めにして、その部屋を出て行った。

京子はラジオ体操を途中で停止したような恰好でじつと立っていたが、暫らくすると両腕が次第に下へさがつて来る。ハツと気が付いて水平に戻すと、今度は開いて踏張っている両足の関節が、不自然な緊張に痛みを覚えて堪えられなくなつて来る。彼女は、お繁の足音がしないか、と全神経を耳に集中しながら、そろそろと足を狭めて楽な姿勢になつたが、ものの五分も経たない中に、ことりと云う物音に驚いて、又初めの姿勢に返らねばならなかった。

やがて戻つて来たお繁は

「そうしていれば涼しくつて気持が良いだろう。だが、今日はこれから旦那様にお目見得をしなくっちゃならないのだから、お風呂へ入つてよく磨くんだよ」

そう云つて京子の足許へタオルを一本ぽん

とほうり出した。

「何だい羞かしそうにしてサ、さっさとお歩きよ」

タオルを手にした京子はお繁に牽かれるようにして長い廊下を幾つも曲って浴室に連れて行かれた。そして

「入浴時間は十分、石鹸は隅の棚にあるからね」

と云うお繁の声を後にして浴室へ入った。

これから先、自分がどうなるのか、この家でどんな仕事をさせられるのだろうかと云う

不安の気持はあったが兎も角、贅を尽した浴槽に浸って手足を伸しているのは、何とも云

えず気持が良かった。昼の陽射しの明るい広い浴場に、うっすらと湯気が立ち昇って、彼女の成熟した肢体を柔かく包んだ。

「時間だよ」

と隣りの部屋でお繁の声がした。

「はい、ただ今」

京子は急いで湯槽から出ると、タオルを絞る間ももどかしそうにして肌の雫を拭いた。

「さあ、これをお着、これが今日のお目見得

着だよ」

脱衣室では、お繁が赤い縮緬に金糸で菊の模様を散らした長襦袢を持って待っていた。

素肌で、袖に手を通すと、裾上げの腰紐が一本、黄と緑のうろこ模様の伊達締めはお繁の手で、胴中がくびれる程きつく巻き締められた。

やがて着終った京子は、再びお繁に導かれて長い廊下に出た。そして先刻まで京子が立たされていた部屋の前まで帰ると、その入口の扉の真中に『京子』と自分の名を書いた名札が貼られていた。お繁はその隣りの部屋の『春江』と名札のある扉をサツと開いて

「横着しちゃアないかい？」と云った。そして京子を振返って

「そうらご覧よ。この女もお前の連れだ。さっき隠岐の島から連れられて来たんだよ」

そう云って一步引退った。その女は先刻、京子がしていたと同じ様に両腕を前へ、脚を開いた姿を入口の方へ向って曝していた。

「もう暫らく、そのままの姿勢でいるんだ。わかったかい？」

お繁の甲高い声に、春江という女は微かに頷ずいた。年令は京子より一つ二つ若い位だろうか、まだ初心らしく



臉に涙を溜めて身体を羞恥に震わせていた。「こんな事位で震えていちや、このお邸は勤まらないよ。尤も勤まらないって、どうしても旦那様の好きなようにされるんだだけだね。さあ、行くよ」

お繁は、半ば独り言のように云って扉を閉めると、再び廊下を歩き出した。

この広い屋敷は廊下伝いに何処までも続いていた。途中の洗濯場には村の女房が二人白い布を洗濯板の上で擦っていたが、お繁と京子の姿を見ると、互に顔を見合せて何事か囁き合った。

「お前さん達は口を動かさないで、さっさと手を動かすだ。今日中にそれが全部乾いてしまわなかったら、あとが酷いよ。いいかえ」お繁にそう怒鳴られて、二人は慌ててじやぶじやぶと石鹼の泡を立てた。

台所では別の村の女が二人で食事の支度をしていた。

「お前さん等の今朝の味噌汁の味付けは何だい。もっと味加減に注意しないと今夜は寝かさないよ」

お繁は、ここでも、その女達を口汚なく罵っていた。

台所を過ぎると階段があつて、京子は二階へ導かれた。

藤兵衛の部屋は二階の一番端にあつて、三方が廊下になっており、凝った欄干がしつら

えてあつて、村中が見渡せる高樓になつていた。次の間には黒いサテンで胸と腹を開いて仕立てた藤兵衛好みの服を着た女が一人、座机に向つて帳簿にペンを走らせていた。これは藤兵衛の秘書兼小間使で淳子という、この村の助役の娘である。

お繁は淳子にむかつて

「旦那さまにお目見得です。京子と云つて都合を伺つて下さい」

と云つた。お繁も、この淳子にだけは言葉が丁寧だ。それは淳子がこの村でのインテリで、且つ藤兵衛の秘書として文書や帳簿の整理やら表向き用の事を一切引構えてしているからであつた。それに対してお繁は、云わばこの邸の奥向の取締りという立場にあつた。

「京子さんですね、一寸待つていて下さい」

淳子は間の襖を開けて藤兵衛の部屋へ入つて行つたが、直ぐ出て来て

「じやあ、どうぞお入りになつて」

と襖の方へ手を差し延べた。

中一と間置いて次の部屋が藤兵衛の居間である。お繁は音のしないように膝まずいたまま静かに襖を半分程開いて頭を畳に擦りつけた。京子もお繁の背後で頭を深く下げた。

「繁か」

広い居間の中央に大きな紫檀の机を据えてその後に立派な床を背にしてどっかりと腰を下した藤兵衛は、読みかけていた書類をばた

りと閉じて二人の方を見た。

「はい、京子を召し連れしました」

お繁は顔を伏せたまままで返事をした。

「入るがよい」

「はい」

膝で上つて敷居際へ入り、後手でそつと襖を閉める。

「京というんだな。前へ出なさい」

「さア、こちらへ、ずつと出て、それ」

お繁は身体を固くしている京子を抱えるようにして自分の前へ押し出した。

「ふん、お前だったのだな。昨日、山で面白い遊びをしていたのは」

突然の藤兵衛の言葉に、京子は返事が出来なかつた。

——何処かで見られていたのだ——

瞬間的にそう感じ取ると、急に顔に血がカーッとする様な心持ちがした。お繁は何の事だか訳が分らぬと云つた面持である。

「繁、いいな」

と藤兵衛が目配せすると

「はい、畏まりました」

とお繁は肯いて京子に「旦那にお見せするんだから、其処へ立つてこれをお脱ぎ」

と云つて京子の長襦袢の袖を引張つた。

「はい——あの」

京子が逡巡するのを

「よく見て戴くんだよ、さあ」

と京子を抱えるようにして立ち上ると、早や伊達締に手を掛けてするとそれを解き放した。京子は羞かしさに身体を震わせながら肩から長繻絆を滑らせた。はらりと、京子の手からそれが離れると、お繁は急いで長繻絆を自分の膝元へ引き寄せた。

彦造の適當の責めで一層妖艶さを増した京子が藤兵衛の前に佇立した。

「ふん、成る程、一寸後を向いて……ああよし、今度はこちらを向いて……おい、何も恥かしがる事はない。両手を横に垂らして、じつと俺の顔を見るんだ」

藤兵衛の言葉に、それまで前で組んでいた掌を仕方なく横に廻した。射すくめる様な藤兵衛の視線の行方を逐うと、思わず身を屈めたくなる思いに駆られるのであった。

ややあつて

「よしッ。繁、あそこの函にバンドがあるから、それを京に締めてやれ」

と云つて部屋の一隅を指さした。

「はい、あの貞操帯でございますか」

「そうだ」

「畏まりました」

とお繁は藤兵衛の指した戸棚から朱塗りの函を持って来て藤兵衛の横に置いた。彼は自分で蓋をあけて中から五、六個のそれぞれ形の変った貞操帯を取り出して眺めていたが、

「繁、この鈴付きのは如何だろう」

と言つてその中の一個を取上げた。それは洋銀製の立派なもので腹を巻く三センチ程のベルトの前と後に精巧な彫刻をした楕形の被覆板が下端で繋がっていて、その前の楕形の板の中央上部から細い鎖で大小三個の銀の鈴が垂れ下っているものであった。

「ほんにこれがよろしいございましょう」

とお繁はそれを受取ると

「旦那様が良いのを選んで下さったんだよ。」

さあ、こちらを向いてごらん」

「まあ、こんなものを……」

と京子は本能的に拒もうとして、お繁の腕に手を掛けたが、下からぐいッと睨み上げたお繁の眼にハッとなつて慌てて手を離してしまった。

「ハハハハ、身体に緊りが出来て仲々良いじゃないか」

アないか」

「このこは肌の色が白いから、能く似合いますよ」

「時に繁、お前は、どんなバンドをしていたかな？」

「お忘れになるのも無理はございません。もう久しく以前に戴きましたままですもの」

さすがのお繁も、ちよつと照れたようである。そしてこの女も貞操帯をしている様子であった。

「よしッ、もう退つてよろしい。そしてこの

女にはお千賀の世話をさせる」

「あの、奥様の？」

「そうだ、一応そうして置く。だが、この女に用事がある時には何時でも呼ぶ」

「わかりました。それでは、これから奥様の処へ挨拶に連れて行きます」

そうして身体を動かす毎にチリン、リリンと微かな音を立てる貞操帯の上へ長繻絆を着る事を許された京子は、お繁と共に又ぞろ丁寧に頭を下げて藤兵衛の居間を退出した。

京子は生れて始めて締めるバンドの、異様な緊縛感が気になり、どうも歩き難くて仕様がなく、ともすればお繁との歩調が合わず、遅れ勝ちになった。お繁が歩を止めて、そんな様子のお繁を振り向いて眼を光らせた。京子はハッとして急いで傍迄行き、

「済みません。もう遅れない様に歩きますから……」

と先手を打つて謝った。先程のお繁の仕打ちから、テッキリ叱られると思つたからだ、然しお繁は黙つて京子を凝視したままである。京子には、亦この沈黙が薄気味悪く、首うなだれて身を竦ませていた。……暫く経つて、お繁がポツンと一人言の様に呟いた。

「直きに慣れるサ……フッフフ……」

そして又、スタスタと歩き出した。京子はホッとして後を追うのだった。



はだかうま
裸馬との対談

乗杉貴代子

沼正三氏のために、
これは私が乗馬について、コーチしているG短大を出たばかりの二十一才の女性の話です。彼女は母一人、子一人、父は財界の有力者ということですが、要するに私生児です。母というのは元赤坂の芸者だったとのことですが、いまは踊りの師匠をしており、母子ともにオツムは中々良いようです。

す。それだけに彼女は必要以上に劣等感があるようですし、それを補う意味でもこの征服的なスポーツ「乗馬」を愛好するのでしょう。騎乗ぶりは勇壮活潑、このままゆけばある種の選手権は得れるかも知れません。そのようなわけでぎゅうぎゅう乗廻される馬の方も一方ならぬ汗を流しているようです。さらに母一人、子一人の家のため無用心とあって

書生を置いています。二十一・二でしょう。用心棒と女中代りにコキ使われて？いるようです。彼女の話だと「どうせ私も近々はお座敷に出る身、そうなればさぞオトナドモに玩具扱いされるのだろうから、せめて書生に下着ぐらいは洗わさなければつまらない……」と割切って下ばき類もどしどし洗わせるとのこと。「毎日汚すだけ汚して、洗わせるのが楽しい」といったドライな娘でもあるのです。

そこで彼女の愛馬をして、質問させ、乗り手のお嬢さまから返事を頂かしてみる形にしましょう。

ウマ お嬢さまは気が向くと鞍も置かずに私の背に跨がりますが、それはどういうお気持ちからですか。

嬢 聞くだけ野暮なことだけど日頃痛めつけているし、今日は特別お前のために答えてあげよう。この間もK高校のA君はハダカ馬に乗って、気抜けした様な顔をして帰って来たわよ。私だって似たり寄ったりよ、K子ちゃんみたいに馬上で失神しないだけずっとましよ。

そこで先ず第一の魅力は密着面積が大きいということ。お前の背骨に張付くようにピッタリと跨がるのだから太腿からヒップの筋肉の動きがピチピチ目に映り、私の目

を楽しませてくれる。冬の寒い日などお前の体温、脈博がほのかに伝わってくるわ。お前を支配するということはスポーツと美容を兼ねたことともいえるのよ。ざっと鞍付馬の数倍の乗心地かしら。……そんな不服そうな顔をしているとムチをあげるよ。

ウマ いえ、不服ではございません……。いつも乗回されているので大体分っているつもりですが、お嬢さまがはだか馬を攻める時の気持、服装、御し方といったことを……。

嬢 そうね時期は秋から桜の頃がよく、場所には海辺とか湖畔の砂浜が好き。砂浜だとお前の背骨の反撞が軟かくあたるので疲れない。とにかくはだか馬だと休む間がないからね。楽しみも大きいけど苦痛も比例して大きい。だからティンエージャーの女の子にははだか馬はすすめないの。私はあせらずゆっくり時間をかけ、お前がいらいらして疲れるまで楽しむことにしているの。

服装は鞍付馬と似たものだけど半身が強く締められるようにストッキング、プロテクター、コルセット、厚手のブリーフ、ブラジャーは必需品ね。これらをしわにならぬように、きつめに付け、摩擦が激しいだけに軟かくてクッションの利いたものを入

れておくの。ズボンは細身で薄手の白、黒、グリーン仕立、といったのをはくと太ももの動きが手にとるように見えるので、男性が喜ぶらしいわ。

海水着のまま跨がる時はよほど股当てを完全にしなないとソソウをしたり、スリ傷を作ったりであとの気分が悪かったりするから特別の配慮が要るの。特別というのは下馬後海水に入っただけで取り除けるようにしておけば問題ないということよ。お前のまぐさ桶の中に入れてもいいと思うけどね。

あと慾をいえばワルツかトロットのような乗馬行進向音楽をかけてくれるとたまにはいいわ。音楽が気分に合わせてお前の尻にムチ当てるなり、拍車で蹴りつければお前は気持よくはなてくれるからね。

最後にお前の御し方だけど、時々もう少し反抗してくれればよい、と思うことがあるのよ。余り素直じやムチの使いようも拍車を当てる機会もない。そのうち私の手、足がいらいらしてくるの。元気な身体各部はそれぞれ適度に使用ぬとかえって疲労感を感じるものよ。今後はその点を覚えておいてちょうだい。

私ははだか馬だっけはずかしがったり、笑ったりはしないわよ。女王の風情をむねとして泰然と跨がり、なるべく力を加えず感覚を

楽しむ乗り方をしたいのだから。時には自分の都合でセミネ（馬背の一番高い所）にずり上るようにして気分の転換をはかることもあるが、あれは女王の乗り方としては例外か、あるいはこれから疾駆させようと思ふ時に、心地よくもませるのになるべく前方に跨った方が騎座が安定するのでやるだけのことよ。

ウマ では、最後に一つだけお願い致します。乗馬後の洗い物などはいかように……嬢 ウマの分際で余計なことを気にするわね。ムチくちから話してあげる。（と

いうや否や彼女はウマの背に跨った。そして小一時間砂浜で湧き出てくるような楽しみを味った後ウマを解放した……ああ疲れた。大分汗をかいちゃったわ、もうちょっとでジョーブス（女用乗馬ズボン）にしみ出るくらい。これを書生に洗わして、風呂に入り、よく磨きあげたところでアンマにたんねんにマッサージさせるの。特に、はだか馬を乗回した後の、下半身にかけてのもみほぐしの味はまさに「セミ天国」、そのあと若旦那にお小遣をたんまりもらえば、後は明日の乗馬にそなえてぐっすりというわけよ。分った？ピシリ。

手帖雑報欄

沼 正 三

二〇九 三島由岐夫『旅の絵本』ニューヨーク・シテイ・バレエ団の演し物「檻」The Cageの素晴らしさは、本誌読者通信（六月号）にも出ていたが、同じ感想がこの書中にある。雄蜘蛛が雌蜘蛛に襲弄され、殺され、喰われる舞台を叙し、「男性のマゾヒズムと女性のサディズムの極致であって、こんなに性的な戦慄的なバレエというものを、私は未だかつて見たことがない」と云っている。又別の箇所で、この「檻」はエネルギーと頽廢との全き結合という意味でのアメリカ文化の真髓の表現だと書いている。（現地で氏の印象は実に強烈だった様だ。）マゾ・バレエにアメリカ文化を象徴させる見方で、面白い。（私は吾妻氏との論争でアメリカ文明のマゾヒスティクな性格に触れた）。なお、雄蜘蛛役の男性舞踊手マガラネスはメキシコ人である。白人美女群に玩弄される有色人男性という視点からも、このバレエは味わるであろうことを指摘しておく。——「檻」の紹介の部分以外は、この書は別にマゾヒストに用はない。

二一〇 三宅艶子「男性飼育法」（婦人公論七月号別冊附録）其他シヨッキングな標題である。生物学的には男性は女性より弱者である、というアシュレー・モンタギュー『女性この優れたるもの』（田中寿美子訳）の所説を踏えて、だから、夫は「仕える」べきものでなく、「飼育する」べきものだ、と説く。男性操縦法の内容は目新らしくはないが、飼育の二字が良い。愛玩とか調教とかにつながる文字である。大迫倫子『男性この愛すべきもの』はこの意味の愛玩と理解すべきだし、訓練、調教を受ける夫の地位は、「男性この哀れなるもの——東西エプロン亭主くらべ」（婦人朝日七月号特集）と表現される。逆に石垣綾子『女は太陽の如く』であり、『素晴らしきかな女性』（婦人公論三二年一二月号特集）である。内容的にはいずれも大したことなく、羊頭狗肉だけれども、少くとも、標題を見ていると、男女の地位が逆転して来ている。標題だけが先走っていることは認めるが、そういう表現が可能になった社会的風潮——下剋上にならって、女剋男ともいうべきか——を喜ぶたいのである。

る。四月下旬の朝日新聞の声欄は「男女の言葉づかい」と題して、女学生が「オッス」といい、男の方が「そうよ」とか「だめなの」とか「あら」などといっている現象を慨いていた。シスター・ボーイに対してブラザー・ガールも誕生した(余り戴ける代物でないが)男女交際も、女が主導権を持つアメリカの若い世代の風潮が輸入せられつつある。「プロポーズはあなたのもの」(週刊女性六・一五号)というわけだ。才女時代といわれるマスコミ現象も、盛り上ってくる女性攻勢における旗手という見地から理解すべきだろう。そういう風潮に支えられてこそ「男性飼育法」という標題がジャーナリズムの中央に登場し得たわけなのである。

二一 菅原むつを漫画「首輪をもつ女」(傑作倶楽部三三年夏の増刊) 八犬伝の名犬八房の生れ代りの男が伏姫の生れ代りの女を捜し当てる。エンゲージ・リングとして首輪を嵌められる。文字通りの男性飼育だが、想だけで、絵はひどくお粗末。

二二 李家正文「なないろの筆」 歴史のいろと題する篇中「葉となった糞尿譚」の項あり、故事を収める。コプロ・ウロラグニアには多少刺戟がある。——特に一項を立てる程でないが、サンデー毎日六・二二号にキャンブ場で女ばかりのテントをねらい、飯盒の炊場や便所をつくって金を貰う商売があるとあった。便所つくりの食指が動いたから、附記しておく。

二三 五味川純平「人間の条件」第三部 六冊を通じて、マゾ的に興味あるのは、第三部で将校官舎の当番になる条りだけである(手帖第八十七項参照)。角倉中尉は若い奥様と中尉の妹佳久子の三人暮らし。梶はそこで女達に酷使される。特に佳久子は彼に関心を持ちわざと虐める。「靴を出して」「結んで」「戸を開けて」「お風呂場に靴下出しといたから洗って……ズロースまで洗わせるのだ。尤も梶は健全無比でマゾ的に反応しないから張合はないが。なお、この前後、「あんた」「あなた」「あたし」「私」等の

語が、麻生氏の語感よりむしろ私の語感に近く(三三年二月号手帖番外参照)使分けられているのに気が付いたことを報告しておく

二四 高橋鉄訳「性学辞典」(世界性学全集二〇巻) この全集のことは従来も触れて来た(雑報一四一、一八二、二〇四)が、今度最終巻として、大著ビルダー・レキシコン(図入性百科)が高橋鉄訳で出ると聞いて、実は驚いたのだ。失礼ながら、高橋氏にこの本が訳せる筈がない。きつとアルバイト学生でも備って、翻訳の下請をさせたのだろうと想像しながら、とにかく一本を購って読んで見た。断っておくが私は原書を持っていない。そこで訳文だけからの批評になるが、案の定ひどいもので、誤訳という語学の問題以前の文化史的非常識に黙視し兼ねるものがある。以下その一端を指摘し、この似而非学者に反省を求めたいと思う。

下請を——それも一人ならず——使ったらしい一番の証拠は、固有名詞の表記が、マチマチになっていることである。バコフエンをバツコフエン(五八頁)、バツハオーフエン(六〇頁)、バツハオーヘン(二四四頁)、マルチアリスをマルティアル(七六頁)、マージュアル(一三七頁)、オヴィディウスをオビディウス(一九七頁)、オヴィッド(二一五頁)など一人の同じ人の訳文である筈がない。観音(一八頁)とクアンニン(二一六頁)、ジブシー(二二七頁)とチゴイネル人(一三頁その他)、スキートン(三七頁)とスキート人(一一七頁)(正しくはスキチア人)、ブルタルク(九六頁)とブルータルキ(五九頁)、クレオール(六七頁)とクレオ人(一五九頁)(前者が正しい。手帖第百十三項参照)等々、この類は枚挙に遑がない。

それにしても、随分程度の悪い下請を頼んだもので、ジュネーヴをゲンフ(一九六頁)、サンジバル島をツアンツイバ(二一〇頁)などはドイツ語読みというところで恕せるかも知れぬが、英国のジェームズ一世をヤコブ一世(一一四頁)と、フランスのアンドリ三世を

ハイソリツヒ三世（一三八頁）とかアンソリツヒ三世（一七〇頁、参訳！）と、ルイ諸王をルドヴィツヒ（四四頁その他多数）と、ドイツ発音の儘訳すのは非常識だし、パール神をパールス神（一九三頁）、美女の意で用いたヘレンをヘレネン（九五頁）など訳しているのは、下請の文法的無知（初歩的格変化の無視）からだ、氏に文化史的常識さえあれば正しく直せただろう。老プリニウスの「老」の意味の文字を名前と見た、プリニウス・エー（二六〇頁）も滑稽だが、その著書「博物誌」を「自然の歴史」と訳したのは、*natural history*（博物学）という英語も御存じないらしい。

Kansu が「甘肅」位調べれば分るのに「広東」（九一頁）としている。死刑の意の *Lebensstrafe* を生活刑（五五頁）としている。タリズマーネ（二六〇頁）では何のことか分らぬ、護符と訳すべきだ。サルタン夫人（一一八頁）では、トルコ皇帝もまるでミスター・サルタン見たいではないか。リヒテンシュタインが少時小姓として仕えた奥方を崇拜し、彼女が手を洗った水を飲んだ、という故事は、変態性科学史上著名の逸話であるが、それが「愛妾が入浴した風呂の水を飲んだ」（一二九頁）と誤訳されている。性科学史の常識もなしに、性百科の「文化史篇」を訳す——訳者と自称する——とは、僭越ではないか。

滑稽なのは、Bourke "Urut" をボールケ「瘻物」（一六七頁）と訳していることだ。この書名は「汚物」と訳するのが正しい。氏と私との論争（本誌二九年四月号、六月号参照）を御存じの方にはすぐお分りだろうが、この本が例の "Scatologic Rites" の独訳書である。私がドイツ流にブルケと読んだ著者名をバークの間違いだと指摘した筈の高橋氏が、今度はボールケと妙な読み方をしているのはどういうわけだ？これだけでも下請を使った証拠と云えるし、それに氏が下請の訳稿を殆んど検討しなかったことも明らかになるというものである。

代理部分譲品総目録（第四号）完成

本当に長らく御待たせいたしましたして申訳ありませんでした。代理部分譲品総目録やつと出来上りました。今迄御申込み或は予約を頂きました方々へは完成と同時に早速御送り申し上げます。新しく目録御入用の方は八円切手同封の上御請求願います。先にお申込下さって未着の方は葉書で御一報次第急送申し上げます。

下請の仕事を鵜呑にしていたことの決定的証拠をあげて、お笑草にしよう。本書のスカートの項（一二九頁）とベチコートの項（二三二頁）とを対照して御覧。同じ原文が重複して、別々に二様に訳してあることが一目瞭然だ。原語 *Unterrock* はベチコートと訳すのが正しいから、スカートと訳した一項は全然誤りだが、同じ原文がこうして二人の下請訳者によって別々に標題を立てられているのから察すると、訳者（！）高橋氏は、項目の選択という基本作業さえ下請に委ねていたことが推測できよう。戻って来た訳稿を原文と対照することはおろか、邦語訳文として検討することさえ怠り、そのまゝ鵜呑にして、ただその標題を五十音順に並べ直すことだけが氏の仕事だったらしい。やもなく、一体どうしてこんなフザケタ、ブザマな現象が生じたのだろう。氏の弁解を聞きたいものだ。まだまだあるが、この位にしておく。

膨大な原著を「意のままに抄訳した」と誇称する高橋氏よ。原文を読まぬ私でさえ、いくらでもケチがつけられるのです。原書を持つてゐる人は日本中にあなた一人ではないのですよ。その人達の目に原文と照し合せたあなたの訳文がどう写るか。考えたことがありますか。恐いと思いませんか。

原著を冒瀆する高橋氏よ。恥を知りなさい。

速報

今後の縛り映画

嵯峨美也子

最大の魅力は今秋東宝で上映の、黒沢明監督の「隠し砦の三悪人」である。これは旧主の姫、雪姫と二百貫の金の延棒を敵中を横断して運ぶという西部劇もどきの大活劇篇で、主人公は三船敏郎の六郎太。これを手助けするのが千秋実、藤原釜足、この姫の雪姫が何千人から選ばれた上原美佐である。三ヶ国の国境を突破して行くだけに、幾多の危難が組まれている。その中をスリル満点で突破して行くのだが、遂に発見され、三船の六郎太に上原の雪姫、それに人買いから救われた娘の三人は発見されて捕えられる。シナリオには、太縄にガンジガラメに縛り上げられて牢の中へほりこまれるとある。雪姫の衣裳といえば、袖なしの半裸の野性的な格好、コリ性の黒沢監督がどのような、リアルな縛り絵を見せてくれるか楽しみである。そしてついに

彼等は縛られたまま裸馬に乗せられて引廻しにあり、処刑されんとするのだが、その途中で救われる。これがなければお仕舞だが……最大の楽しみである。

松竹に若手の新人が多く入った。これら新人を売出す「七人若衆誕生」で大いに縛りシン、石コ詰まで出す。最初の縛りは、高野山で女犯の罪を犯した寺小姓八弥（林与一）林又一郎の孫）と茶屋娘お美保（佐乃美子）が縛られて最後は生きうめのまま殺される。石コ詰の極刑にあう、倉橋監督どんな演出をするか、そして主人公の寺小姓成田久米之助（花の本寿）と恋人の雑賀屋お梅（富士真奈美）は高野山を逃れんとするが、お梅は捕えられ男装させられ、山へ連れて行かれ縛られ猿ぐつわをかまされ悪僧に犯されんとする。若い青春スター達だけに大いにいい所

を見せてくれるだろう。また「浮世風呂」（監督木村恵吾）は湯女を描いたもので、福田公子、山鳩くるみ、千典子らが大きい濃艶なところを見せるが、山鳩くるみのおしんが、泥棒の疑いで縛りあげられ、捕手に恋人の己之助（松本錦四郎）と引かれる。

松竹ではまた、浩吉の「伝七捕物帖、人魚地獄」でラストシーンに、人魚に出ているおしのと伝七の恋女房お俊らが悪人に捕えられ、ツヅラの中に閉じこめられ、花火で打上げられようとするシーンがある。

大映の最大の話題は、雷蔵、山本富士子の「人肌孔雀」で、山本富士子は薬売り、芸者若衆と三役で大活躍、立回りも見せるが、芸者姿の染香で、敵をはかろうとして縛られる「銭形平次」以来の縛られシーンを見せる。一緒に浜世津子の芸者菊次も縛り上げられる。中村玉緒の娘おみよが人質に取られ縛られカゴで運ばれる。その命と引替えに呼出しを受けた富士子の若衆京極若萩が助けに行き、蔵の戸を明けた時、中には縛られたおみよ。ハッと驚く若萩の背後には鉄砲、そこへ雷蔵の奈須新八郎が助けに現われる。

この作品では、近藤美恵子が女賊夜嵐お銀新内流しなど四役で活躍する。

文部大臣の専属室

(マリアンヌの手記 第七回)

原作 セシル・フォーレ
 翻訳 鴉 嘔吐 夫

一

ふとした事で、文部大臣のサン・ピエル氏にすっかり気に入られてしまったマリアンヌは、その日から厳しい特別鍛錬の養成に入る事になった。

このマダム家に、普通の客の数倍、数十倍の利益をもたらす、文部大臣の寵愛の女性は、今迄暫くなかった。それは、その厳しさに、耐えるだけの、真に被虐の喜びに浸れる事の出来る女性が見つからなかったのである。マリアンヌが、いつものように朝の起床時

間までの間を、赤いベチコート一枚で寝台に寝そべっていると、太い革鞭を持ってマダムがやって来た。

「マリアンヌさん、貴女は今日から特別なんですよ。さあ、すぐ起きなさい」

彼女はびっくりして飛び起きた。

マダムは荒々しく彼女の体を抱き起し、赤いベチコートを剥ぎ取ると、片腕を腹の下へ入れて突き倒した。彼女の体は前のめりにのめって、手をつき、お尻だけが高く上げられる恰好になった。

「良いかい、これからは今迄と違って遊びじ

やないんだからね。覚悟をするんだよ」

振り上げられた片腕から、動かぬよう押えつけられている彼女の体に、革の鞭が激しい音をたてて振り落された。

「ウウツ」

と、その力の強さに彼女は、思わず苦痛の呻き声をもらした。

「声を出してはいけません。大臣は、どんな痛みに逢おうとも、体も動かさず声もたてずにじっと耐えることが出来る人をお好みです。今日からその練習をするのです」

鞭は容赦なく振下された。見る間に赤い痕

が無惨につき、みみずののたくったように腫れてきた。

存分に臀部全体が傷ついた時、初めてマダムは体を放した。

「さあ、行きましょう」

マダムは、そのまま痛さに震えている彼女の体をひきずるようにして、階下へ連れて行った。

階下には、毎日の皮膚鍛錬用の浴室があ



る。突き飛ばされるように、そこへ入れられた彼女は、手足をしっかりと台に固定された。彼女は醜い四つん這いの姿勢で、臀部を高く掲げたまま、我慢しなければならなくな

た。すると、中央上のシャワーから湯が勢い良く噴出してきた。

「あっ、痛い」

彼女は、思わず大声を出した。湯の中に、

塩分と刺激物が混ざってあるらしい。今出来たばかりの傷口にしみて、たまらなく痛いのであった。

しぶきに濡れるので、自分も衣服を脱ぎ捨てて豊かな体をむき出しにしたマダムは、そ

ろへ立って、

「我慢するんだよ。少し、しみるけどね。それに馴れると二、三時間は相当の痛みがあっても耐えられるようになるんだからね」

そう言って、腫れ上った尻にシャワーの液が洩れなくかかるよう、撫で廻すのだった。

「何しろ文部大臣の、サン・ビエール氏は凄いですからね。余程の準備をして行かないと気絶してしまいますよ。それに、あの人は失神するのは大嫌いでね。何もかも解っていて、それでちっとも身動きせず、耐えている人が大好きなんですよ」

ぴしやんと力一杯、平手で叩くと、マダムはそう言った。マリアンヌは、これから先の試練を思うと、まるで魂が縮み上るようであった。

二

パリの一流のデザイナーに仕立てさせた、素晴らしいスーツに着換えた彼女は、マダムに連れられて外に出た。

裏には例の黒い箱型の車が待っていた。深くカーテンを下して、マダムと共に乗りこむ

と、車はオートエイの通りから、シヤンゼリゼを抜けて、名士の邸宅の並ぶ、山手のサン・ヂエルマン通りに出た。

車は一軒の豪華の洋館に入り、玄関の前の車寄せに止った。

「文部大臣、サン・ピエール様のお邸ですよ」

マダムが耳もとでささやいた。彼女は青ざめた緊張で頷いた。どんな事をされるか見当がつかないが、きつと怖い酷い目にあわされるのに違いない。そんな彼女の気持をかきたてるようにマダムは

「苦しいですよ。覚悟は良いですね」と念を押した。

二人が玄関に立つと、待ちかねたように、いかつい髯だらけのサン・ピエール氏が出て来た。

「おう、マダムにマリアンヌ、良く来てくれた。さあ中へお入り」

二人は応接室へ招き入れられた。豪華なクッション、美しい裝飾の部屋、この中には何の秘密も無さそうな、和やかな雰囲気の家であった。

召使いが何回か往復して、菓子類が運ばれた。マダムも、マリアンヌも、すすめられるままに、洋酒やケーキ類を喰べっていると、突然、大臣が言った。

「それでは、わしの専属室へ案内しようかね」マダムがにっこりと笑った。

「お願いしますわ。昔、私が若かった時は、色々とお役に立ったもんですけれど、今ではとても駄目です。でも、その代り、マリアンヌがきつと、力一杯頑張って、お役にたつ事と思いますわ」

二人は立ち上った。

大臣は書棚の一部を押すと、そこがひっくり返って、そのまま、中へ入れるような戸口になっていた。

三人はそこをくぐり抜けた。

中には、黒人の大男が全身に黒光りのする油を一杯塗らたてて四人ばかりたっていた。

「マダムから最初はやって貰おうかな」

「あら私なんか」

「良いじゃないか、昔を思い出すためだよ」

「それじゃ」

とマダムがかすかな恥らいを思せて頷くと大臣は黒人に何か命令を下した。

すると黒人はいきなり、マダムに飛びかかりその体を捕えると着ているものを、力一杯破くようにして、剥ぎとってしまった。

そして、一人が片腕、一人が片足と四人がてんでに持って、体を大の字にひろげて、床の上に浮くように持った。そのまま、黒人は手を上げ、体を天井に届く程高く四人で持ち上げた。これは大変な力である。そして、しっかりと固定すると、大臣は、細い鋼鉄の鞭を持って出て来た。鞭の根元に電線がソケットまで通じている。その

先は体にふれると、激しい電流が放射することになったのだ。

「いいかね」

マダムの広げられた足の間に立った、大臣は背を伸ばすようにして鞭を振った。ピューツと激しい音がして鞭が当たると、豊かな太股のふくらみにぴしりつと喰いこむ。

「ウウツ」



と耐えかねてマダムは呻き声をもらした。マダムの体が激しい電流で、ぴりぴりと怖いケイレンを示す。

「ビエール様許して」

マダムは泣いて訴えた。

「内臓まで、焼けてしびれそうな痛さです」

「まだまだ、昔はもっと痛みを我慢したじやないかね」

大臣は簡単にやめそうには無かった。そして、尚も激しい打撃が休みなく続けられた。それは、銅鉄が肌に喰いこむ痛さと、電流が全筋肉を支配する痛さの二重の責苦であった。

黒奴によって、しっかりと固定された身体をさんざん痛めつけられたマダムは、息も絶え絶えになつて、やっと釈放された。

大臣は冷い声で言った。

「マリアンヌ、解ったかね。こんな具合のものなんだ。今度は君の番だよ」

マリアンヌは、震えてうなづいた。「ハイ」

いきなり四人の黒人が彼女の体を捕え、その衣服を惜し気もなく破き出した。



そして彼女の、まだ固い感じの体が露わにされると、大臣も眼を見張ってふうと息をついた。

「素晴らしい体だ。この間は良く気がつかな

続く。

「アア」

と声にならぬ声を上げると

かったが、こんな美しい体は見た事はない。さあわしは思いきり責めてやるぞ」

彼女の体はやはり、四人の黒人によって、床上一米位の所でしっかりと固定された。

大臣が持つて来たのはブラシであった。

それは柔い針金の毛が密生している。針金と言つても、糸と変りない細さ。ただふれただけでは毛のように柔らかい。

ブラシの根元には、やはり電線がついている。

そして強力な電流が接続されているのであった。

大臣が上向きの腹の上を軽く一撫ですると、瞬間数千の毛から一時に放出された電流は、皮膚の痛点を刺激して流れた。

白いぬめぬめした肌の上に赤く細い線条が

「声を出すな」

と厳しい叱責の言葉が下った。

彼女はびくりとして黙った。しかし次の瞬間、ブラシは体中に容赦なくこすりつけられた。その度に、体の深奥部までビリビリと響く、怖しい痛みが押し寄せた。

体をのたうたせて、その苦しみを脱れようとしたが、しかし黒人がしつかり掴んでいたために、体はびくとも動かなかった。体中、むき出しになって、どこも防ぐすべがない彼女は、否でも応でも、その苦しみを甘受しなければならなかった。

そしてそれから二十分ばかり、体中、くまなくこすり廻す、電流の摩擦が続いた。

三

ぐったりと横たわって、息もたえだえになつてゐる彼女は、やがて、やっと一人で立上ると、大臣の鞭に追われるようにして次の部屋に入った。

そこには、様々な機械がおかれてあった。

ベルト、円筒、回転盤、いずれもここへ入れられた女性の、あらゆる誇りを奪い去り、被虐の凄絶な喜びに浸らせるものであった。

彼女の体は、そこへ入ってきた黒人の手により、細い柱に括りつけられた。

そして暫くすると、その柱に接した体の部分が耐らなく、くすぐったく、かゆくなつて

きた。それは彼女は気がつかなかったが柱には微細な穴があいており、それが肌の温みで円筒の中の空気が膨脹するに従つて、浸み出るようにして、強力な刺激素が誘出するのであった。

「ハッ、ハッ」

と彼女はその刺激を耐えるため息をはずませた。しかし、どうしても耐えきれない。自分でも望まないのに、彼女の口から特別の言葉が出てきた。

「ぶって、鞭でもっときつくぶって。何もかも忘れるように、きつく、きつく！」

と遂に懇願するように叫んでしまったのであった。

大臣は髻だらけの顔をニヤリとほころばせた。

「ふふ、そう注文通りにいかんわい」

自分のこわい髻を、彼女の肌にごりごりこすりつけた。

「ヒエーッ」

あまりのこそばさゆえは、彼女は、悲鳴か上げた。前から来る薬品による刺激、後の肌をくすぐる髻の感触、彼女は耐え切れずに泣き出した。

「ぶって下さい。痛いのはどんなに辛くても我慢します。でも、くすぐるのだけは勘弁して下さい」

「我儘を言うな。わしの専属室へ来た限りは

一切の批判を許さん」

大臣は泣いて頼む、マリアンヌの願いも一蹴して、尚も髻で刺激し続けた。

もはや彼女は黙って耐えるより仕方なかった。

そして、体中刺激し終え、円筒にすがりついている彼女が殆んど、前後のかゆみとくすぐったさで失神しそうになると、始めて大臣は、細い鞭を持って来た。

「そろそろ、望みのものを上げようかね」

「お願いします」

彼女は今や、砂漠の旅人が一杯の水を求めるように、激しくそれをのぞんだ。今、体中にはびこる、この不思議なこそばさを逃れるには、力一杯の鞭の打撃で、目がさめるような痛さを味わい、それで忘れるより外無いのである。

「よいか、マリアンヌ」

ビューンと細い鞭が空中に弧を画くと、腰部のふくらみにビシヤリとまきついた。

「ウウ、嬉しい」

彼女は、早天に水を得たように、嬉んで、叫んだ。

「もっと下さい。もっとおいしい鞭を」

しゅーんと体の奥底まで響く、鞭の痛さは彼女の体中にはびこる、くすぐったさを、一瞬去らせて、爽快な喜びを体中にみなぎらせた。

「ようし、では行くぞ」

大臣は続けて、打ち出した。

「ああ、打って、もっと打って！」

彼女は喜びの声を出して、激しい鞭を尚もむさぼるように求めた。

四

背中じゆうに、赤い鞭の痕がつき、皮膚が破れた所からは二、三条の血がにじみ出して白い皮膚に、縞模様をつけていた。

ぐったりとした彼女は、円筒から外されると今まで休んでいたマダム所に連れてこられた。

二人の女性はそこで、床に転がされ、それぞれ背中を丸め、体を折り曲げて手足をむすび合されて、丸い塊にされた。

四人の黒人がその塊りを軽々と持つと別の部屋へ連れて行った。

マリアンヌも、マダムも無理に丸くされた不自然極まる姿態に息も苦しくて、声も出せない思いであった。

次の部屋は、固い氈絨の上に、一面に、毛ばだった、獣毛が植えてある床であった。ぐるぐる転がされると体中がちくちく痛い。四人の黒人は向い合うと、てんでに足に、グロームのような柔かい靴をはいて、目の前の肉塊を蹴出した。

その度に二人は、思いがけない所をはげし

く蹴られ、体中がチクチクする、じゆうたんの土を、前後左右に転がり廻されるのであった。

目は廻るし、痛みはひどいし、苦しみはとても逃れようはなかった。

大臣は、苦痛の呻き声をあげて転がり廻る二人の姿を、嬉しそうに眺め、自己の陣営に球を入れられた黒人の体を、激しく鞭で叩いて罰し乍ら、皆が余計一生懸命働くよう、せきたてるのであった。

その中に、二人は気分が悪くなってきた。マダムはぐぐつと吐気がしてきて耐え切れずに吐いた。その吐瀉物が、べつとり床をぬらすと、黒人は一層、勢い良く蹴出した。

「苦しめ、苦しめ、我がいととき娘達よ」大臣はそれを見て、一層、狂ったように黒人を打ち始め、競技を激しくするよう励ました。

やがて今度は、とうとう耐えきれずマリアンヌが、床を汚してしまった。

「ヒエッ、ヒエッ」

と大臣は、飛び上って喜んだ。自分もその固い獣毛の床に口をつけて、吸い取ろうとする。黒人達も、争って分厚い唇を、その床面につけ、むさぼり始めた。

二人の美女は、ただ、あまりの苦しさと、恥しめに泣いて許しを乞うより外、方法がないのであった。

――数刻して、その日の日課は終った。

大臣の命により、新しい衣服を支給されて別室で着換えた二人は、疲労した顔で、別れの挨拶に出てきた。大臣は機嫌良く言った。

「今日は本当によく頑張ってくれて有難う。私は大いに満足だ。今後とも良かったら、度々来てくれたまえ」

そして小切手を書いて渡した。

マダムは受取って、ハッと喜びの色を見せていった。

「まあ、こんなに沢山」

「取っておきなさい。マリアンヌは実に素晴らしい。その素晴らしさに比べれば、ほんの僅かばかりのものですまないが」

二人はわざわざ玄関まで大臣に送られると再び車に乗って、巴里の町の通りへ出た。

マダムは訊いた。

「マリアンヌ、又、伺う勇気があるかい」

「ええ」

彼女は、ポウツと顔を赤らめると、深くうなづいた。その顔をマダムは、同性でありながらも美しいな――という思いでしみじみ眺めていた。

――了――

×

×

×

変な小説

蜃^{しん}

氣^き

樓^{ろう}

奥 田 滝 夫

「私は自分がサディストである事を嬉しく思っている男性です。と同時に、よきパートナーがいないため毎日がつまらなくてならないサディストであります。どなたか女性のマゾの方で私の悩みを癒して下さる方はありませんか。……」

青年は玄関に投げこまれた包みを受けとり、それが何であるかを一瞬のうちに悟ると、自分の部屋へ駆け込んで、もどかしく封を切った。

「あっ、載っている！」

彼は、読者通信欄に自分の投書を発見すると心の中で歓喜を叫び誰も見えていないのに顔をあからめた。そして改めて読み返した。低い声を出して読んでみた。

読み終った青年は口絵に目を通し、そこに新人モデルのすばらしい緊縛写真をみつけると、彼の体内に不思議な気分が走るのを感じ

た。青年はそのうずきを快く噛みしめながら、その雑誌を手にとつて町へ出た。

真夏のギラギラした太陽が、舗道に陰影をくっきりとつけていた。喫茶店の黄色いカーテンがひっそりしている。表通りの片かけを行く女も、電車の中に立っている女も、うだりきっているらしかった。しかし、彼女たちはみな黙っている。赤い唇を開いて笑ってさえない。彼女たちの大きなお尻は、暑さを払い落すかのように、プクンと突出され、歩く度に左右にブルンブルンとゆれていた。

「この女は、ずい分歩いて来たらしい。白いハイヒールにうつすらと埃がかぶさっている。電車賃のけんやくかな？ イヤに気取っていやがるが。」

女は、青年の前をツカツカと歩いて行く。スタイルのいい綺麗な女だ。何者だろう、ダンサーかな？

女が左右の足を交互に前へ出す度に、そして太ももがタイトスカートにことさらに密着する度に、美しい女体の曲線が描き出された。青年は、ゆっくりと女の後からそれを見つめていた。ただその時、彼の雑誌を持っている手に心なしか力が入ったようだった。

「この女の下着、さぞ汗で濡れている事だろうな。」

青年には、その匂いを想像する事ができるような気がした。と同時にそれを確かめたいと思った。

——この女の衣服を剥ぎとって縛り上げる。しかし、わざと下着はぬがさない。その上から縛る。きつく……。そして物やわからかに責を加える。被虐に悶えて、女の下着は更に汗でしっとりするだろう。縄をとき、抵抗する力も無く投げ出された豊かな肢体、下着を剥ぎ取ると、その匂いを嗅いでみる。そしてこの綺麗な顔をした女の芳くわしい体臭を再確認する。——

「ゴ—」あたりになめき散らしながら乗客を満載した電車がやって来た。海岸行きであった。青年はチラと腕時計に目を落すと、惜しそうに女の後を目で追ったが、もう女の姿はなかった。ただ白っぽい群衆が歩道を流れている。青年は電車に乗った。

混んでいた。ムンムンする。

青年は、やっと隅に立つことができた。しかし、さすが電車だ。走れば開け放った窓からの風が快い。彼の隣りの吊革にしなやかな手をかけていた女が、その風をあたしにも下さいな、と云うのか、少し彼の方へにじり寄って来た。しかし、顔を青年と合わせるのが恥かしいのだろう、くると後をむいてしまった。青年は充分に女の腕と背中を見つめる事ができた。

豊かな肉づきだ。が、決して醜くない。女の背が高いからか。

——青年は柔らかさと弾力性に弾んだ感触を思いうかべて生唾を飲みこんだ。

「ここにも、俺に縛ってもらいたい女がいる。」

黒いレースの手袋をはめた手首に縄を巻きつけて両手をねじ上げ肌に幾重にも縄を喰いこませると、この女は何と云うだろう？

「アレー、助けてエ。」

いや、そんな野暮な声はたてまい。ふっと熱いため息を洩し、びくつき返り、大きく見開かれた黒い瞳で俺を見つめると、唇を一寸ゆがめて笑い、やわらかな声で、

「もっときつく、……きつく縛って……、あたままらない……むむ……。」

うん、そうだ、きつとそう云うに違いない。俺が縛ってやったんだもの——。

が、女は黙って降りてしまった。

青年の前には、大またを開けて座席に腰かけた紳士が口をあけて眠っている。彼はその紳士を見下していたが、ふと微笑をもらした。この男は今まで何人の女と交際しただろう。疲れきった顔をしている。しかし、女を縛って喜ばせた事があつただろうか。そしてこの男の細君も、（多分、五人は子供を産んだらう。）この男と通常の生活だけしか知らずに、これが夫婦だと思って、彼女の若さを良人と子供のためにすりへらして行く事だろう。……

窓外はやがて遠く広くひらけて、はるかに青い空と、その境がわからない海が望まれて来た。青くチカチカ輝いている。

青年はチラと時計を見、その時持っていた雑誌の存在を改めて認識するとはほえんだ。

海岸は若い女の姿態で一ぱいであつた。

海岸特有の磯くさい匂い。オゾン？ しかしそれは青年にふと思ひ出させるものがあつた。薄い水着一枚の女たちがこれ程多く集っているのだから、一人々々では気づかずに過ぎてしまう匂いが、かたまって俺の鼻をくすぐるのだろう。——とにかく、海岸は青年に何かを訴え感じさせたのである。

彼は小高い松林に入った。誰も居ない。静かな日かげであった。彼はさも楽しそうに寝そべると、今まで大事に持って来た雑誌を開いた。汗かきの彼の指が、白い表紙にはっきりと指紋を押した。

「そうだ、俺の本だよ。」

青年は、茶色に押されたその渦巻に愛着さえ感じた。

x

x

x

青年は、じつと先程から二頁に並べられた緊縛写真を眺めている。

M・H嬢。

美しい女だな、と彼は思った。ロング・ヘアーがロマンティックな雰囲気をもたらし出している。青年は髪長い女が好きだった。

「この女、どんな声だろう？」

青年は女の肉の薄っぺらでない形のいい唇を見つめた。猿ぐつわは、はめられていない。

「九州って云うと、あのゴツイ言葉を使う所だな。すると、この女も……。イヤ待てよ、あれは鹿児島だけかな。」

このきれいな女と男性的な田舎べん、その二つの連想が青年には非常におかしく感じられた。彼は思わず、声をたてて笑ってしまった。この何の意味もない滑稽が、青年とM・H嬢をより親密にさせた。

女の鼻は高かった。しかし、ツンとはしていない。丸味を帯びてそこにやさしさがただよっている。

この恰好のいい鼻は今までどんな匂いを嗅いで来たのだろう。彼女の私室に飾られた、百合の花の香にもうっとりした事だろう。又彼女が店頭に立って香水の瓶を手にとり、どれにしようかと思いついた時にも、ピクピクと活躍したに違いない。しかし、これだけはつきり云える。この女のこの鼻は何かを待っている鼻だ。彼女は両手を縛られているのだから、鼻は嗅がされる事を待っているのだと云い直そう。

青年はM・H嬢の横顔を見つめた。

そうじゃないか、うん確かにそうだ。だから俺は、今着ている肌着を脱いでやろう。この女の為に。――

いや、御希望ならば、あと一週間程よごしてもいい。そして、汚れた、俺の体臭のしみ込んだ肌着で、この女の鼻をしつかりきつく包んでやろう。余りを口に押しこめてやろう。猿ぐつわだよ。彼女は目を細めて息を吸いこむだろう。そして、言葉にならない押しつぶされたうめきをもらすだろう。ビロードのような感じの声で……。

写真を青年はなお見つめる。

M・H嬢の後手を縛った縄は、下にのびてスカートにかくれている。彼はさっきからそれを眺めていたのだ。太股を縛られているのに違いない。とすると、女の着ている黒衣がじやまであった。

「太股を縛られているながら、この表情か。――」

女の顔には、ほほえみが浮んでいた。

青年は、もどかしくてたまらなかった。やけに砂地の上をゴロゴロと転がった。

俺が縛りたい、俺が縛るんだ。この女は九州からわざわざ大阪まで来たんじゃないか、縛られにサ。だから、東京まで来られないはずはない、縛られる為に。

M・H嬢の手首、腕、胸、腹、太股、足をヒシヒシと縛り上げる。勿論、彼女はさっきの猿ぐつわをはめられているのだ。俺はこの女をだき起し、猿ぐつわをゆっくりはずしてやる。女の高い鼻が、俺の目の前で新しい空気を吸ってふくらんでいる。俺は女の長い髪をつかむとグイと下に引張る。女は痛さにたえられず、たちまち上をむいてしまうだろう。鼻の穴を二つ、おしげもなく俺の顔先に向けたまま。

さて、あとはゆっくりとこの鼻を。……

青年は、こういう美女を自由に縛る事ができる、この雑誌の編集部がうらやましかった。いつだったか、座談会の記事に、はたで思う程楽なものではないとの弁が出ていたが一度でいいから、そんな悲鳴をあげてみたいと彼は思った。

S・T嬢。

近頃あまり口絵にでないが、彼女も以前から青年が愛していた女だった。



青年をかみ合わせる事なく、二人をして永遠に、はなれ去って行かせる事であろう。

S・T嬢よ、私の叫びを聞いて下さい。

「私は自分がサディストである事を嬉しく思っている男性です。と同時に、よきパートナーがいない為、毎日がつまらなくてならないサディストでもあります。どなたか女性のマゾの方で、私の悩みをいやして下さる方はありませんか。私は名誉あるサディストの名にかけて紳士的行動をとる事を誓います。」

この女はなかなかのマゾヒストだ、と彼はふとS・T嬢がもらした告白文からそう思った。

「私達、女の立場から考えますと、やはり、女をふん縛ってくれる位の意気のある男の方が嬉しいと思いますわ。でも、男の方の気持ちってわかりませんけれど、女から云えば、従順とか素直というのは自分の身についての性質でしようし、又、そんなに従順にするということに一種の喜びがあるんじゃないかと思います。」

S・T嬢よ、貴女はこの言葉をまだお忘れではないでしょうか？

青年は何度S・T嬢の名前と共に、この彼女のささやきを、頭の中でくり返した事であろう。ああ、こんな気持の女が俺の周囲にいたならば、そして、俺という男を知ってくれたならば、俺はどんなに幸福だろう。世界一幸せな男になれるのだ。

が、現実という無情な歯車は、S・T嬢と

貴女は又、次のようにおっしゃっています。

「縛られている時の哀れそうな顔つき、なよなよとした自分の姿態眼をつぶっているの、そんな情景は直接自分の眼には入りませんが、縛られているながら、そういう事を想像するのは楽しいことでしょうね。」

……でしょう。だから私が貴女にその楽しい想像を心ゆくまで味わせてあげたいと思うのです。いやですか？ 私は貴女を身動きのできぬ程縛り上げたいのです。いけませんか？ ああ——。

青年は松林ごしに青空を眺めた。白い、女体を思わせる雲が下から見ると梢にひっかかっているようだ。

「オヤ、松葉の針責めだ。」

青年は楽しそうにはほえんだ。

えっ、何ですって？

「わたしは口や鼻は出来るだけ、強く掩って頂いた方がよかったと思います。」

そうそう、貴女はそんな事もおっしゃってましたね。そうですか……。猿ぐつわは何時でも用意してありますよ。一寸よごれてますがね……。

だから、この女の素顔を青年は知らなかった。何時も黒い布で彼女の鼻から下が覆われていたからだ。しかし、彼女のうすく閉じられた目の表情は、彼女がその黒い猿ぐつわを享樂している事を物語っていた。

「どんな顔の女だろう。」

が、それは青年には容易に想像できる事であった。

この女の心と同じように、美しくやさしい顔さ。……

静かだ、なんと静かな事だろう。青年の眼の下にはあれ程大勢の

水着たちが色とりどりにごちやごちやしているのに、ここまでは叫び声一つ聞えてこなかった。ただ松籟と打寄せては碎ける波の音。太陽は相変らず身近でキラキラしているが、木蔭はそれを忘れさせてくれた。松葉の緑さえヒヤリとする。涼しいそして全く静かだ。

沖をヨットが白い帆を太陽にキラリと反射させながらすべって行く。——

「お前、今月号にのっていた奥田っていう人の読者通信を見たかい。」

良人は、夕食後くつろいだ姿で縁側から打水された庭の夜景をながめていたが、ふと振り返ると妻に云った。

「ええ、見ましたわ。マゾ女のパートナーが欲しいっていうあれでしょう？」

「うん。じゃ、お前あれ読んでどう思った？」

「どう……って……。貴方は？」

女は少し恥らしいに顔を赤らめてほほえんだが、うまく良人の質問から体をかわした。

「はっはっは、うまく逃げたね。じゃ僕が云うと、僕は奥田っていう青年の真けんな叫びが、あの通信から感じられたんだが、お前は？」

「そうね、あたしもそれは感じましたわ。——私は自分がサディストである事を嬉しく思っている男性です。と同時によきパートナーがいないため毎日がつまらなくてはいられないサディストでもあります。どなたか女性のマゾの方で私の悩みをいやして下さる方はありませんか。……」

「おや、お前すっかり暗記してるんじゃないか。こいつめ、油断がならないぞ、いつの間に……。」

良人と妻の楽しげな笑い声が、蚊取線香のゆるい紫煙を動かした。

「僕はつくづくこの奥田君に同情したんだ。と云うのが、今はお前という美しいマゾ女を妻としてゐるから、生活に張りがある世界一の幸せ者だが、お前を見つめる迄の僕は全くの奥田君だったからさ。僕は奥田君のあの叫びを聞いて、ハッとしたんだよ。そこについて、この間までの僕、お前と結婚しない前の僕を発見したからね。だから、この奥田君のさびしい気持はわかりすぎる位、僕にはわかるんだ。」

妻は静に微笑みながら、良人の珍しい長広舌を聞いている。

「サディストの男にとって、マゾ女のパートナーが得られない位、つまらない。つらい気持はないからなア。」

「それは女の身にとってもそうですわ。孤独なマゾヒストの女というのも、かなしいものですわ。そのたまらなさに、身もだえする程ですよ。あたしも、早く目の前にサディストの男の方が現われればいい。そしてあたしを身動きのできないぐらい縛ってほしいって何時も一人でゐる時には思っていましたわ。」

良人は妻の顔をみつめた。ツと二人の視線が合い、良人はニヤリとする。

「ねえ、どうだろう。お前、奥田君に縛らせてあげないか？」

「あら、あたしが？　だって……、貴方、いくらなんでも……そんな……。」

「ね、それがいい。お前縛らせて上げなさい。奥田君は、名誉あるサディストの名にかけて紳士的行動をとる事を誓います、って云っているじゃないか。大丈夫だよ。決して彼は不必要にお前の体に手を触れたりしないさ。奥田君が名誉あるサディストなら僕もその一人だ。お前は僕の妻じゃないか、それも平凡な妻じゃないマゾ女じゃないか。ね、彼に理解と同情をもってやり給え。僕たちは奥田君の

言葉を信用しよう。」

「奥田さんって、可哀想な方ね。」

「そうさ、サディストなんて云うものは、みな気の弱い恥かしがりやなんだよ。奥田君だって、あの通信を書くのはやつとの事だったろう。それだけに真剣さ。僕たちは信じていいんだよ、あの言葉を……。」

「貴方のお許しがでたのなら、あたし縛られてもいいわ。」

「勿論、僕も立会うよ。いや、別に変な意味にとちやいけない。そうじゃないんだ。僕はお前が僕だけを愛してくれている事を知っているし、僕もそうだ。僕たちの愛情をここで誓言しあう必要はないだろう。又、奥田君もお前に対して、充分人妻だという敬意をばらうだろうから、何の故障もないわけだ。まして、そんな下品な心配なんか……。しかし、僕がお前たち二人の所へ行きたいと云うのはだね、奥田君の手腕を見たいというサディストのやむにやまれぬ探究心からさ。一体彼はどんな縛り方をするのだろう、彼独特の考案になる何か新しいやり方でもあるのじゃないか、と思つてね。」

妻は妖しく目を輝かせながら黙って微笑んでいる。

「どうやら奥田君はまだ若い人らしいから、その時先輩として僕がいろいろ忠告や指導をしてやってもいい。」

「そうね、そうなさるといいわ。きつと奥田さん喜びますわ。」

「うん、僕にはあの青年が何だか、弟のように思えてならないんだよ。」

「あたし、早速お手紙してみますわ。」

X子は、ある会社の事務員である。

体の肉付きが至極よいのだが、スラリとしてゐるので何を着てもよく似合つた。彼女がピツタリしたタイトスカートをばいて出社すると、男の同僚は犬の様にクンクン鼻をならし舌なめずりをしてX

子の傍へやってくる。この男たちがもし湯上りのX子が、浴衣一枚ですずんでいる所を見たらどうなるであろう。うすい浴衣は彼女の体の線をくっきりとえがいている。

X子は自分の体に投げかけられる不躰な下品な、そういう男たちの視線をよく知っていた。そしてその度に顔がまっ赤になる程の恥かしい思いをし、身ぶるいする程の嫌悪感をもやすのであった。

「なんていやらしい人たち！」

しかしその翌日も、又次の日も、X子はタイトスカートををはいて出社するのである。そして家に帰えれば浴衣一枚で散歩する。

X子よ、お前もわからない女だ。男たちにジロジロお前の体の線を見られるのがそれ程いやだったら、何故タイトスカートをぬがえないのだ。何故ゆるやかな、ひだのあるスカートををはかないのだ。死ぬ程いやだなんて云ったって、実は男たちにそういう風に見られるのが内心嬉しくてたまらないのだろう。だからタイトをぬげないのだろう。その証拠に、お前のスカートは普通のよりもあまりにも、腰からもをしめすぎている。

もしX子がこれを聞いたなら、きっと赤らめた顔を両手で覆い、くたくたと体をくづれるように折り曲げるとしのび泣きに泣くだろう。

足下で泣いている女を見おろしているのもいいものだ。もっといじめてやれ。何に？ それは誤解だって？ いやあ一体どうなのだ。泣いていちやわからない、顔をあげて説明してみろ。

しかし、何をこの上説明する必要がある。君が見つめているX子のタイトスカートが、さっきからその理由を述べているではないか。



つまり、X子はタイトスカートで彼女自身の両脚を縛っているのである。両手も動かせないようなブラウスが着たかった。しかし現実の問題としてそれはできない。いや、はっきり云えばX子は自分の体をヒシヒシと縛りたいのである。これが彼女の内心の欲求なのである。悲願なのであった。しかし縄つきの姿で毎日ラッシュユアワーを電車にゆられ、朝の歩道を人波に流されて出社する事はでき

ないことだ。そこで、せめて……、X子は考えた。彼女はタイトスカートで自分の両脚を縛ったのである。浴衣の時は腰巻がその役をする。——これなら誰もあやしまないわ……。

X子はマゾヒストであった。そして、マゾ女特有の内気さで何時も物静かな感じのする女であった。彼女に言いよる男は何人ともなくあるのだが、皆彼女の目には下品で薄っぺらに見えた。愛の縄でギリギリと自分のことを縛り上げてくれる男性の出現をいつも胸の中でえがいていた。

そういう彼女であるだけに、自分のひそかな楽しみと願いを他人に知られる事を極度に恐れていた。彼女と生活をともにしている肉親でさえ、少しも気づいてはなかった。まして会社の男たちは——彼らには、X子はいつも黙っている冷たい女と思われていた。そう、人に見られる事は彼女にとって少しも苦痛ではなかった。自分の嫌いな男たちにはどう思われようとかまわない。しかし、X子は、永久に世の中の男たちから冷たい女として見捨てられてしまう事は悲しかった、おそろしかった。あたしは仮面をかぶっているだけなのに……。誰かあたしの仮面をはぎ取ってくれる男の方はいないかしら。そしてあたしっていう女が、決して冷たい女でなく胸のうちは、ほら、こんなに情熱が、マゾヒストの妖しい血がたぎっているのを発見してくれる方はいないかしら。

結局、さびしいX子は、ひとりで我が身を慰めるより外になかった。彼女の私室には一山に積み重ねられた雑誌がある。K——というその雑誌を会社から帰ってくると、彼女は何回もくり返して読んだ。が、その後ではことさらに自分の寂寥感に、ひしひしとおそわれるのであった。そんな時、思わず涙をこぼした事もある。

伏屋春江という女の方が、自分で自分を縛る方法をその雑誌に書いた事がある。X子も縄を用意し一行づつ読んでは、やってみたがなかなかうまくいかなかった。どうしても後手の手首を縛る縄がゆ

るんでしまう。

「だめだわ、やっぱりほかの人に縛ってもらわなくては。」

伏屋春江さんとお友達になりたかったが、X子の内気が手紙を書くことを彼女にさせなかった。それが今となると、しきりにくやまれる。

猿ぐつわだけは、しっかりとほめる事ができた。

「うわ、わッ、うッ、うッ……」

猿ぐつわをはめて両手をうしろにまわし、部屋の中をころげまわった事もあったが、やっぱりそれまでであった。

「ああ、あたしは自分の腕にくいこむ縄目のかたさを味わいたい。肉のくびれを見つめたい。」

彼女はわざと夜おそく散歩にでる事があった。それも人通りのない暗い道などをゆっくりと歩く。

「誰か、あたしを襲ってくれないかしら。」

せっぱつまって、こんな恐しい期待さえ持つようになったのである。

寝る時も窓を開け放ったままである。暑いせいもあるが、X子にはよく新聞の三面記事にぎわす強盗事件がうらやましかったのだ。若い娘が強盗に襲われ、縛られて猿ぐつわ……という記事にさえ胸をとどろかせた。これがあたしだったら。——

「その女の方、どんなお気持かしら。朝までずっと縛られていたのかしら。その強盗は女の方をどんな気持で縛ったのだらう……。」

そして、はっとするのである。

X子は、内気な女だけに、自分の貞操だけは何時の日か現れるであらうただ一人の愛する男性の為に守っておきたいと願う古風な女であった。太陽族のアヴンチュールなど、彼女には想像もできない事であった。

だから、強盗に襲われる事を願うようになった自分を発見すると

我ながらそのあさましさに驚き、かなしくなるのであった。

「いけないわ、そんな事思っては……」

が、マゾヒストの血は、彼女の真剣な反省をあざ笑うようにうずくのである。ああ、あたしは一体どうしたらいいんでしよう——。

「私は自分がサディストである事を嬉しく思っている男性です。と同時によきパートナーがいない為毎日がつまらなくてならない一サディストでもあります。どなたか女性のマゾの方で私の悩みをいやして下さる方はありませんか、私は名誉あるサディストの名にかけて紳士的行動をとる事を誓います。……」

そうした頃、X子にはからずも今月号の読者通信で、奥田という青年の叫びを知ったのである。そればかりか、ぎくりとひかれる何かをさえ感じたのである。

「思いきって、あたしが名乗り出ようかしら。」

その考えはX子にとって恐ろしい位魅力のあるものであった。チラと不安が胸をかすめたが、

「大丈夫、この方は信用できるわ。そんな気がする。」

サディストの名誉にかけて……じや、あたしもマゾヒストの名に恥ないように奥田さんを信頼して二人で緊縛プレイをたのしめばいいんだわ。

「そうだわ、何も躊躇する事はないんだわ。あたしの考えも奥田さんの云うことも、決して非道德的な事じやないんだわ。男女がダンスをたのしむように天真爛漫にサド・マゾのプレイをすればいいんだわ。」

こう決心するとX子は、今までのいらだちとあせりが他人事のようには思える程安心しきってしまった。

「あたしはすぐ奥田さんにお便りをしよう。そして共に満される心をやいやし合おう。もし、あたしのやる事を世間の人々が指弾するならば、それはする世間が悪いんだわ。一体、あたしたちのやる事が

どれ程罪だっていうの？ 悪だっていうの？ さあ、説明してちょうだい、ね、早く——」

「O子さん、この間あなたに紹介したあたしのボーイフレンドだったね、すっかり貴女にまいいっちゃったらしいの。何度もあなたの事きいだって云ってたわ。フ、フ、何かおごりなさい。」

放課後、一人校門を出ようとした時、お友達のアさんが後ろから、あたしの背中をトンとたたいてそう云ってたけど、本当の事かしら？ Aさんはなかなか茶目っ気のある人だから、あたしの事からかったのじやないかしら……。

けれども、嘘でも本当でもあまり悪い気はしないわね、そう云われるのは……。まあ、あたしったらずい分しよっている……。でも、それは別として、ボーイフレンドがいるAさんが羨ましいわ。Aさんたら毎日がたのしくてたまらないみたい。でもAさん不良じやないのよ。勉強だつてきちんとやっているんですもの。高校生的よく学びよく遊べ、よ。これが現代の女学生気質なんだわ。だからボーイフレンドがいるのは、何もAさん一人じやないのよ。BさんもCさんも、あの人も、……いや、この人だって——。いないのは、O子あたしだけかもしれないわ。つまんないの。

「O子さん、あなた男嫌いなね、一寸いいじやないの。美しき男嫌いの女学生、なかなか詩的だわ。」

何時だったかAさんが例の口調であたしに云ってたけれども、一寸もよかないわ。あたしだって女学生ですもの、ほしいわ。男嫌いなんて、まあ失礼な！

でもあたしには、ボーイフレンドをつくるチャンスも無いし、まして知り合いも無いし、といって、無理に好きでもない不良学生とお友達にはなりたくないし、それに、……それに一寸、人に云えない性質を持つてゐるの。考えただけでもドキドキするわ。だから、そ

これらのボーイフレンドじゃだめ。まあ、ここ二、三年はあきらめたわ。学校を卒業しておつとめにでも行ったら、あたしを理解してくれる好きな男の人ができるかも知れないわね。その方がいいわ、ニキビ面の学生よりか。——でもネ、これにはチョッピリ負け惜しみもあるのよ、フフン。

だからあたし、せめてお兄様でもいたらナアってつくづく思うのよ。Aさん、Bさんには男の兄弟もいるのに、さびしいあたしは生憎長女ときている、全く皮肉だわ。

もし、あたしにお兄様がいたら。……きつと、スツキリとした大学生だわ。K大かR大がいいわ、洒落ていて。「O子、もっと勉強しなくちやいけないよ。そしたらあたし、「ハイっ」って嫌いな英語の単語でもなんでもきつと覚えてみせるわ。時々、「O子、映画へ行かないか」っておつしやるわ。いいナアそうしたら、あたし、お兄様にうんとあまえちやうんだくれどな……。

お兄様、あたしの云う事、なんでも聞いて下さるかしら。「うん、よしよし、うん、よしよし」って。……だといんだけどナア。

前に一寸云ったあたしの人に云えない性質、お兄様にだけこっそり打ちあけちやおうかな。恥かしいわ、……でも。

お聞ききになってお兄様、どんなお顔なさるんでしょう。悲しそうなお顔？それとも軽蔑しきった目であたしを見るかしら？いいえ、きつとそんな事はないわ。あたしのお兄様なんだもの。

じゃ、安心した。云っちやおう。

「あのね、……誰にも云わないでよ、お兄様。あたしね、……縛られるのが好きなの。誰かにきつく縛ってもらいたい。だからお兄様、O子を縛ってエ——」

マゾヒズムっていうのね、あたしみたいな性質を。ずっと前から小学生の頃からそうだったの。O子っていけない子かしら？

お兄様はあたしの告白をお聞きになると、ニッコリお笑いになっ

て、「うん、いいよ。どれ、縛ってあげよう。縄はこれかい？」って、やさしくおつしやるにきまつてるわ。でも、あたしの両手をぐっとうしろにねじ上げる時は、ようしやなく痛い位にギリギリ縛って下さるわ。

いつだったかのKという雑誌に、そんな絵があったわね、兄妹で縛り遊びをしている所が……。たしかに、こんな説明がついていたわ。

妹「兄さん、いや、いや、そんなもの見せちゃ、いや」

兄「これを見るのを、いやって知ってるのがおかしいな、こっちを向いて見てごらん」

妹が縛られて兄から無理に緊縛写真を見せられてる所なんです。

妹は裸だったけれど、あたしも裸になろうかしら。そりや、少しは恥かしいけれど素肌に縄目の方がびったり感じられるんですもの。

……

あーら、いやだ。あたしったらいゝ気になって何を独り言云ってたんでしょう。まるで夢をみるような話だわ。第一にあたしにはお兄様はごさいません。第二にあたしがこんなに縛ってもらいたがっているのに、まだ誰もO子の気持を察してくれる男性がいないのです。だから素肌にヒシヒシっていう縄目の味も想像だけ——。

というわけで、現実には憂うつな私なの。

けれどもあたしの決心一つで、その灰色の日ともお別れだわ。と云うのはね、七月号の読者通信に奥田っていう青年の叫びがのっているのを読んだからよ。

「私は自分がサディストである事を嬉しく思っている男性です。と同時によきパートナーがいないため毎日がつまらなくてならないサディストでもあります。どなたか女性のマゾの方で、私の悩みをいやして下さる方はありませんか、私は名誉あるサディストの名に

かけて紳士的行動をとる事を誓います。……」
ですって！

名誉あるサディストの名にかけて紳士的行動をとる事を誓う。なんていいわね、あたし気に入っちゃった。まるでルパンのせりふみたい。奥田さんってどんな方かしら、お兄様っておよびするのにふさわしい人かしら。この人もあたしと同じように相手がいらないため、満たされぬ心をいだいて味気ない毎日を送っているんだわ。

だからあたし、思いきって奥田さんにお手紙書こうと思うの。

「奥田さん、あなたの読者通信拝見しました。あたしは高校二年の女学生でマゾヒストです。で、貴方に縛っていただきたいと存じます。××で×月×日×時、お目にかかりましょう。」

縛られることの好きなO子より」

セーラー服と縄。ね、すてきでしょ。縛られる女学生なんて、吉屋信子さんの少女小説にも無いテーマだわ。でも、女の人が縛られている姿は、雨に悩める海棠^①って云うのかしら、これが本当の花物語かも知れないわね。

ふと、腕がむず痒かったので青年は正気づいて払い除けた。一匹の蟹が横っ飛びに逃げて行く。

それを見て青年は、我に返った。俺はねていたものと見える。では、今のは、あれは夢か、なんだ夢だったのか、ああ——。

(完)

現代マゾヒズム芸術時評

原 忠 正

復刊第七十項

ソビエト映画「サーカスの芸術家達」

モスフィルム作品一九五七年度

本映画は、再三本項に挙げた「サーカス」

(一九五二年度モスフィルム作品)とは別個に新しく製作されたものと思われる。勿論本項では、この中で女熊使い、女虎使い、女ライオン使い、の三人についてののみを取扱う訳

であるが、女ライオン使いの中、イリイナ・ブルジーモブア女史については旧稿に詳しく述べたので割愛する。又、サーカス、特に曲馬団の演目と、サディズムについては同じく旧号に詳しい為割愛する。

第一に女虎使いのマルガリタ・ナザロヴァ女史について

本項は既に、屢々この高名な婦人教師につ

いて述べた。併し乍ら、残念なことに、私達は幾つかのスチル写真と、断片的なニュース映画によってしか、彼女について知ることが出来なかった。筆者は最初彼女について、ニュース誌(ノボステイ誌)の、リュドミラ・ゴロコウスカヤ女史の代理人たる、ダートリン氏からの書翰と、写真によって知識を得た。ニュース映画に現われた彼女は約一年前、ブリテイッシュ・ワールド・ニュースに黒海の畔に虎と遊ぶナザロヴァ女史が紹介され更に、その後約半年後にメトロ・ニュースに、虎を連れてモスクワ動物園を訪問するナザロヴァ女史が紹介された。共に水着姿とスーツであって、調教師としてのナザロヴァ女史は映画によっては全く紹介されていない。猶、

映画によっては全く紹介されていない。猶、

序に併記して置くのであるが今から約四ヶ月前、ブリテイシユ・ワールド・ニュースは、地方の小学校を訪れた、イリナ・ブルジョモヴァ女史を紹介したことがある。ナザロヴァ女史は単なる猛獣使いの演目のみでなく、非常に高い台上に虎達を登らせ自ら更に高い台上に立つという珍らしい演技を得意とすると言われている。

第二に女熊使いについて、

筆者は誠に残念なことに、「サーカスの王者」に出演した女熊使いも、本映画に出演する熊使いも名前を知らない。フライトフ一座の如きシヨウ的要素には乏しくとも、この調教困難とされている動物を徹底的に調教したこれらの女性調教師の演技に深い関心を寄せている。

第三に女ライオン使いについて、

前述のイリイナ・ブルジョモヴァ女史の他に、逸すべからざる有名な女性ライオン使いにタマラ・ブスライエーヴァ女史がある。ブスライエーヴァ女史は、只今来日中のポリシヨイ・サーカスの団長、ボリス・エーデル氏の助手として永年働いて居た人であるという。ブルジョモヴァ女史が自己の勇敢な創意による特殊な演目が多いのに対して、ブスライエーヴァ女史の演目は殆んどが最もオーソドックスなもので占められて居る様である。

以上述べた他、馬術や犬の調教師にも特記すべき人は多い。併し、サーカス、特にモスクワの国立サーカスについての資料は甚だしく少い。割愛して他日改めて詳述することをお約束して置く次第である。猶、本映画は大映洋画部の配給であるから、其の系統のロード・シヨウに先ず現われると考えてよいと思う。

復刊第七十一項

「俺はソ連女将校に犯された」

「実話」誌八月号所載

この記事は、恐らくほんの暗示的なタネによつて編集し直した作品であらうかと思われる。何となれば、全く不自然な描写が多すぎるのであり、対女性の考え方の如きは、決して收容所生活からは出ていない、余裕のありすぎる、ゼイタクな感覚が多すぎる、と考えられるからである。内容は收容所の一日本兵が、女将校達の欲情のハケ口として酷使されている内に、その中の一人に恋情を持つが、やがて帰国すると云う程のものであるが、女将校達が、そんなに男に満足を与える訳がないし、強制された交りが、忘れられない程の快的な味を与える訳もない。当然、本稿が架空な想像によつて、改変加筆されたことを示す以上の様な部分が散見されるが、このテーマとなつてゐる不思議は、快楽的な恐怖感が

マゾヒズムの思理上の基底となるものと同質である点に、注意を喚起するわけである。

復刊第七十二項

「ナチス娘子軍」

「実話と秘録」誌八月号所載

最近、ネオ・ナチズムの抬頭に刺激されてか、独乙に題材を採ったエロ・グロ記事が屢々現われ始めた。これもその中の一つ、典拠はどうもアメリカのバクロ雑誌らしいが詳細は判らない。

ナポレオン暗殺計画にも登場したといわれる、不思議な暗殺法の一つで、女性を媒体として、病毒を対者に染すという方法によつて、敵軍に病毒を蔓延させようという企図の下に、各地の娘を集めて病毒保持者とし、各地の英米軍兵士相手の慰安婦に仕立てる訳である。本文は空想的な部分が多くて、事実の報告とは思われないが、ナチズムの狂信性や、末期に於ける諸般の情勢から推して、あり得ないことではないと思われる節も多い。

何れにせよナチズムが、各種の偏向性愛に深く根ざした部分を持つていたこと、そうして同時に無意識の中に、其等がナチズムの魅力の一つとなつてゐた事を考えると、娘子軍の実在も又首肯し得ないことではあるまい。

魔^マ教^{キョウ}圈^{ケン}ナンバーエイト
NO 8

(その七)

土 路 草 一

(一) 千代小路邸の来客

さしも豪壮を誇った千代小路元公爵邸も、大黒柱を失ってみると、火の消えたような静けさが訪れた。

生前、敷石を雀羅と踏み混った靴音も、葬儀を境にして、ぼったり絶え、今更ながら伊奈子は世の無情、浮世の儚さを嘆かざるを得なかった。

十数人もいた家僕、書生にも暇を出し、今は古くからいる女中二人に身の廻りを頼む状態で、空家のような森閑とした寂しさが轟々と一人娘を包んでいた。

政財界に覇を称えていた千代小路綾雄氏の資産にしても、蓋を開けてみれば世の常を免がれず、僅かにこの邸宅を残すだけの余裕しかなかった。

親族会議の席上、伊奈子は邸を売却し、アパート暮らしをしたいと提案した。

併し、旧態依然たる連中は挙って反対し、家名と格式の維持を主張した。だが、その為の手段や方策、即ち、伊奈子の生活費や邸の維持費などに就いては、何等、積極的に手を差伸べる者としてなく、只、配偶の決っていない令嬢に対して結婚を勧め、それに依って千代小路家の存続を計ろうとするに過ぎなかった。

た。

伊奈子にしてみたら、やはり近代娘である。単に家名と格式の為に身を固め、生涯、負い目をみねばならぬ生活など考えることは出来なかった。

終日、悶々としている日が続いた。

「津田様がいらっしやいました」

女中の知らせに、居室でテレビを見ていた伊奈子は明るい表情を取戻した。

兄さんに云いつけられたからと云って、毎日訪ねてくれる津田保志江が、今の伊奈子には唯一の楽しい話相手だった。

「こちらへお通しして」

「いえ、お客様をお連れしたので応接間でお待ちするとおっしゃっていらっしやいます」

「お客様？」

「はい、男の方ですけど」

誰かしら、伊奈子には思い当らなかったがお茶を運ぶように云いつけると応接間のドアを開けた。

「いらっしやい！」

気軽な声を保志江にかけると令嬢は美しい視線を客へ移した。

名古屋健平は、友人の妹の紹介に低く頭を下げる。

男らしいお方、令嬢は相手の凛々しい相貌に好感を抱いて気品のある笑顔を向ける。

健平は鄭重に悔みを述べた。

「お掛けになって」

勧めに従って、健平は、ゆるやかな紫煙を立ちのぼらせる。

「いいお邸ですな」

「私には無用の長物ですわ。ねえ、保志江さん」

と同調を求めた美貌を向ける。

「名古屋さん、伊奈子さんはこのお邸をお売りになりたいと仰言っていらっしやるの。誰方か、よい買手を捜して頂けません？」

「ほう、どうして？」

保志江は一通り事情を説明する。

「成程、玉手箱も開いてみればと云ったとこ

ですね。わかりました。一骨折らして頂きましよう。でも、考えように依っては、そのほうがお嬢さんには幸せかもしれませんよ。元公爵の御令嬢ではなく、一個の近代人、千代小路伊奈子になれるチャンスでもあるのですからね」

「ええ、私もそう思っておりますの」

伊奈子は助力者を得た思いで、弾んだ声音になった。

「処で、古傷に触るようで申し訳ないのですがお父様のことに就いて伺わせて戴きたいのです……」

健平は口調を改めると、煙草の火を揉み消した。伊奈子は面を曇らせる。

「これは、貴女のお父様だけの問題ではなく極端な云い方をすれば、日本の存亡に係わる重要な問題に繋がっているのです」

二人の娘は意外な発言に驚きの色を刷く。

「詳しいことは今ここで申し上げられませんが津田君にも、その為の中東へ行つて貰ったのです。千代小路氏は日イ石油開発会社の発起人総代であり、イラク北辺山中の石油発掘の推進者でした。このイラク山中を探索する旗頭であったという処に、今度の事件の謎を解く鍵があると僕は考えるのです。イラクは御存知のように第一次世界大戦後に独立した国で、それ迄はトルコ領だったのです。いや、それより、メソポタミアと呼ばれ、人類文化

発生地、且つてはバビロニア・アッシリア・カルデアなどの王朝に依つて古代文化が栄えた処と言つたほうが解り易いでしょう。面積約四十三万五千平方呎の国ですが、国土の三分の二は砂漠で、北部に僅かに湿地帯と丘陵地帯を残すだけです。この北部地帯に日イ石油開発の探鉱の手が伸ばされたのです。北部地区、此処には約五万と推定されるクルード族が棲んでいます。精悍な種族で昔は度々、隊商を襲つたり人家を荒らしたりしたもので、最近このクルード族の動向におかしな節が見えているのです。と云うのは部落の離合集散です。或村落では一齊に火を放つて村を焼き払い、住民全部が他部落へ移動してゆくかと思えば、今度は単なる沼沢地であつた原野に忽然と一部落が出現するといった有様なのです。何故だか解りません。只、その為日イ石油開発の探鉱者が、ちよつと困つた状態に追いこまれております。食料や飲料水の補給です。スケジュールの上で当然、行き当るべき村がなかったり、ボーリング予定地に住民が居坐つていたりといった具合です。それと、現地でも有能な技術者が雲隠れになつた原因不明の事故死をしているのです」

娘達は、興味深そうに健平の眼を凝視している。内調員は語を継いだ。

「そして今度は発起人総代の惨殺です。彼等の目的が解らないだけに我々も雲を掴むような気持ちですが、これは放って置く訳には行きません。日本の秩序を乱すような行為、挑戦的な犯罪は、この事件だけではないのです。怪しいと推理すれば数多くの事件を並べたてることが出来ますが、残念なことには、彼等の仕業だと云う確たる証拠がありません。それで伊奈子さんにお訊ねしたいのです。どんな些細なことでも結構です。お父さんのことで腑に落ちないと思ったことがあったら話して下さい」健平は、ぎらぎらした眼を令嬢に注いだ。伊奈子の美貌はその熱意を受けとめかねて、たじたととなる。

「お父さんの持つておられたバッチの入手経路など知りませんか？」

内調員は糸を手繰り出そうとする。

「はい、父は何も話しませんでしたから……でも高塚は何か知ってないかしら？」

「高塚さんって？」

「書生ですの。よく父の使いをしておりましてから」

「その人は今おいでになりますか？」

「いえ、辞めさせました。ちよっとお待ち下さい。住所が控えてある筈ですから」

伊奈子は立上って部屋を出て行った。

(二) 新事実の発見

品位ある令女は戻って、アドレスブックを健平に渡すと、澄んだ声で記憶を話し始めた。「幾人か、アラビア人らしい方が父を訪ねてお出でになりました。その時はお仕事のことだと思っておりましたので、別に気にも留めておりませんでしたけど、今のお話をお聴きして一つ思い当ることがありますわ。」

先月の始め頃でしたかしら、私が外出先から帰って参りますと、この応接間で大声で怒鳴る声が聴えたのです。父が大分怒っていたようでした。その言葉が水の補給とか、山田技師を帰せとか云う内容でしたわ。相手の言葉はよく聞きとれませんでしたけれど、落着いた声で返事致しておりました。父の癪癪は有名でしたから何とも思わず通り過ぎて了ったのですが、暫くして廊下を通りましたら丁度その男が帰る処でした。日本人そっくりな顔で、アラビア風な白い上衣を着ていなかったら、とても中東人とは判別出来ない人でしたわ。私を横眼で、じろっと見た眼光の怖さは今でも忘れられません。氷のように冷く蔑すんだ眼でしたもの……」

伊奈子は身慄いするように肩を竦めた。

「その男の特徴は？」

「名古屋さんくらいな背丈だったかしら、瘦型の面長な顔でした。眉は細く、唇は薄く、色は浅黒い……」

「じゃ、後でモニタージュ写真を作らせます

から、お願いします」

健平はメモしていた手帳を伏せてから、思いついたように

「ついだに貴女が日比谷でレポされた緑縁の眼鏡の男の顔も作っておきましょう」

と云って万年筆のキャップを嵌めると、傍から保志江が

「その外人なんですけど、ユーマ人だと思いますの」

「ユーマ人？どうしてそれが？」

健平は親友の妹に向き直って問い糺す。

「伊奈子さんはネクタイだけじゃはつきりしないと仰言るのですけど、私は間違いない人だと思ふのです」

保志江は勢いこんで云った。健平は苦笑して

「どうも解らないな。もっと具体的に云ってくれないや」

保志江も少し照れて云い直した。

「先日、伊奈子さんになにげなく、その外人の服装を訊いていたのです。服の色は？靴の型は？などと訊ねて、ネクタイの模様は？と云ったら赤と紺の縞の上に金色の王冠がプリントしてあったという返事です。はてなと私は思いました。何処かで見た記憶があるのです。こんな奇抜な柄なんて滅多にあるものじやありませんわ。暫く考えましたが、やっと思い出しました。それは比奈地さんの家にい

「たイーベラさんの友達ですわ」
 「何だって！比奈地さんって、新邦電工の社長
 長の比奈地さんかい？」
 健平は意外な処で比奈地の名前が出て、思
 わず膝を乗り出した。

「ええ、そうですわ。御存知でしたの？」
 保志江もそれなら話易いとはかり問返す。
 「知っている。だが、君達はどうして？」
 「息子の正哉さんも私達の雑誌グループなの
 ですわ」



「ふうん、それじゃ、路子さんも知っている
 ね」

「ええ、明るくって理知的で、お奇麗で、と
 ても素敵の方ですわね」

健平はくしき縁を感じながらも敢えて、路
 子の失踪を云わずに話を促がした。

「正哉さんは此頃演劇に凝っていらつしやい
 ますけど、一年くらい前は、雑誌を育てるん
 だなんて云って、とても熱を入れて下さった
 んです。伊奈子さんのお父様と正哉さんのお
 父様がお仕事の上の知合だった関係もあって
 発行資金をおねだりしたり、編集打合せも伊
 奈子さんのお家と比奈地さんのお宅とで交互
 に開いておりましたの。その時、比奈地さん
 のお家にユーマ人のイーベラさんというお嬢
 さんが間借りなさっていらつしやいました。
 何でも仏領赤道アフリカの財産家の娘さんと
 かで、日本見物かたがた美術史の研究を兼ね
 て来日されたのだそうですが、権高いお嬢さ
 んで馴染み難い方でしたわ。二カ月程前に帰
 国されたのですが、植民地育ちの故か私達を
 別な人間、それも人種的に一段下のものとし
 て見ていらつしやるようで、私達とは交ろう
 とはなさいませんでしたわ。でも、路子さん
 とは別でした。よく連立っては出掛けてゆか
 れましたもの。違ふものですわね。黒人の従
 者がおつきして、身の廻り一切をやらせて
 いるのですから、黒人と云っても皮膚の色

は黄褐色に近い少年ですけど、これが又、イーベラさんに仕えるのに、神に仕える如くというのでしょうか、御主人の前では平蜘蛛のように土下座して御用を務めておりましたわ。それなのにイーベラさんは気に入らないことがあると、私達の見ている前でも平気で黒人を裸にして鞭打たれるのです。植民地生活ってあんなのかしれませんけど、私達は少年が可哀想になって鞭痕に薬を塗ってやりたりしました。話は逸れてしまいましたけど、そのイーベラさんの処へ訪ねてくるユーマの方がいらつしやったんです。イーベラさんは私達と同じ年頃なのに、その人は四十才くらいで眼の鋭い方でした。お二人の詳しい関係は存じませんが、比奈地さんのお宅で二度程お眼にかかりました。その方が王冠のプリン・タイを締めていらつしやったのですわ」

保志江は話し終って、コーヒー茶碗を把った。

健平は深々と腕を組む。ユーマメーソンと中東との繋がり？ 予期されていたことではあったが、手掛りになるかもしれない事実を得て、内調員の頭脳は勇躍して回転を始めた。「私も最初はそんなことを思ってもみなかったんですけど、保志江さんに口許や猫背の特徴を云われると、その人のように思えて来ました」伊奈子が口を添える。

「成程、早速、洗ってみましょう。それから

正哉君に逢いたいのだが……」

「はい、電話してみます」

保志江は立上る。何か掴めるかもしれない。健平は雀躍して打ち手を考えていた。

三、調教の奏効

其処は、まるで家畜飼育場のような部屋であつた。

コンクリートの水槽が床に掘られてあるかと思えば、駒繋ぎのような杭が片隅に並んでいたし、飼料桶が積重ねてある傍に、皮と鎖の装具が放り出してあつた。

只、違ふのは、其処に繋がれているのが、全身獣毛で蔽われた四つ足の動物ではなく、白く滑らかな皮膚を持つ美しい女達であつたことだ。

壁際に背を並べている一群の裸女達は、映画館から拐かされて来た新品だ。

彼女達は両耳を二条の鋼線によって左右に張られ、後手で堵列している。

麗しい頬に白く乾いた涙の線をくっきり引いて、詰めた息使いで微動だもしないのだ。

彼女達とても、最初、固定された時、噴き上げてくる悲哭に頬を震わし、拘束の疲れに腰を拗ろうとしたのだ。

だが、不意にやわらかい耳朶を粉碎するような烈痛が、ずずんと頭芯に刺し通り、己が

ものならぬ臓腑の叫びを、可細い咽喉でふり絞らねばならなかった。

耳を引張っている二つの鋼線が、少しでも牽かれると、即座に電流が流れて耳肉を襲う仕組になっていることを知った時、美裸群は一寸たりとも身動きが出来なくなつてしまつた。豊満な腰を立て、ふっくらした胸を張り、泉のように涙を湧かせている瞳を真正面に向けて、置物のように静止した陳列品となり果ててしまつたのだ。

明朗に青春を享樂し、それそれ楽しく多彩な日々を過していた女達だ。或は恋人との結婚を間近く控えて、胸躍らせていた乙女がいたかもしれないし、前途を約束されたニューフェイスとして、己が出演場面の演技を確かめに来た娘もいたかもしれない。

だが現在の姿は、スクリーンならぬ灰色の石のステージに逆に醜郁たる己が裸像を映写し、異国の観客達に觀賞されている。それは入荷品の下見展示なのである。

駒繋ぎの杭には五、六匹の白い家畜が繋留されている。口輪の鎖を眼より少し高い位置で鉤に引掛けられると、もう彼女達は馬や牛並に自分では外すことが出来なくなり、完全に繋ぎ留められたことになるのだ。

簡単にひよいと引掛けられたそれが、いくらばたついても、跳び上つても、哀れな裸身の腕を描くに過ぎなくなつてしまつたのだ。

「手が使えたら、口が届いたら訳なく脱することが出来るであろうに……」

ハイキングの途次、田舎の道端で見かける草を食んでいる牛や西部劇映画に現われる酒場前の杭に留められている馬の姿と、己が今の姿とを引き比べている女もあることだろう……が、なす術とてない白い畜生達は悄然と首を垂れ、許された範囲内の姿勢で憩んでいる。

一方、コンクリートの水槽は家畜達の水呑場なのだ。(裏返せば水賣場にもなる)

家畜達は調教師の命令で、膝を床に揃え上体を倒して水槽へ首を突込込む。何日前に汲み溜めたかしれない古い水に、ざんぶと顔を躍りこませ、一息に吸い上げる。激しい労役に渴ききつた咽喉をもどかしげにびくつかせながら……。併し、調教師は思う存分吞ませることは決してしない。汗を余計発散させることは疲労を早めることにもなるからだ。

せいぜい二口か、三口、まだ水が胃に落ちるか落ちないくらいで、ぐいと口鎖を索く。畜生は腕いて鎖の力に抵抗し、水を含もうとするが、鞭が一閃するとうらめしげに水を睨



み、おとなしく調教師の前に蹲ってしまうのだ。

美加子は鼠取り競技の不成績と家畜洗礼式の反抗の為、罰として飼主の命令で、一日コップ一杯量の水に制限されて、三日間を過し

て来た。

何の労働もしていなかったら、それは大した苦痛とならず済んだかもしれないが、体力最大限の酷使である。眼が霞み、声が哽すれ昼となく夜となく咽喉を掻ききつて水を求め

た。

背を厳しく責めたてる鞭も、もう彼女の肢体を満足に動かすことが出来なくなり、見事に発達した四肢は弛緩し、動作がよろけていた。それだけに、この部屋に連れこまれた美加子は本能的に水気を嗅ぎとって、胸を轟かせタツマに握られている引鎖をぐいぐいとひっ張った。

「こいつ、現金な奴だ。だがな、まだ水を吞ませてやるとは云わないぞ」

勝谷は意地悪そうに笑って、飼主の手から鎖を引取ると、水槽の上に垂れている釣瓶のような釣縄に引掛けて坐らせる。

「あっ！ 水だ！ 水だ！」

美畜はもう鞭も怖くなかった。飼主の怒りも後の仕置も一瞬忘れた。

「飲める！ 水が飲める！」

からからに灼きついた咽喉は焚きつけられて、燃え熾った。

湿った水の匂いが、青く湛えた水の色が、嗜みのある令嬢の行動を餓鬼のように執念の虜にした。

お茶か、コーヒーか、ミルクしか含まなかった愛らしい口を、いきなり水槽の中へ突込む。子子こそ湧いていなかったが、芥の浮いた薄汚れた水であったのに……。
が……がくんと口に繋がっている鎖が張って、衝撃が頬を破った。

水面上、十糎ぐらいで、彼女の干割れている唇が停ってしまったのだ。ぼさつと垂れた髪先の先が、ゆらりと水中に漂ったのに、乙女の口は幻影にまで見た水に届かないのだ。

彼女は悶えた。花の顔を振り動かし、唇を突き出し、餓狼のように猛った。

鎖で吊られていて、何程暴れても所詮届かぬことは、利発なビジネス・ガールでなくとも解かる筈なのに、彼女は狂ったように水を求める。

その姿は、もう城家の令嬢ではない。本能の儘、渴鬼となった蠢めく動物の姿だ。

「びっ！ 背が鳴った。」

「吞ませるとは云っていない！」

「びっ！ びっ！」

続いて降った痛み、家畜は漸く我を取返す。そして、乱気を宿していた瞳に一瞬無念と諦めを流して顔を背けた。己れの惨めさに心を濡らしたのだろう。だが、咽喉の要求と拘束の教典は自分を振返っている時間を持たせなかった。純白に弾んでいる恍肌を、弱々しく屈服の姿に倒し、主人の足に降頭した。そして、哀つぽく

「水を下さい！ お願いします。水を飲ませて下さい！」

と廻らぬ舌で含み鳴いた。乞食のように、いや、一匹の餓犬のように、石床に聰明な額を擦りつける。

「とんま！ 許しなく勝手に動く奴には水はやれねえ」

勝谷は、ぎらつと峻しい光りを冷眼に流して、うそぶいた。

家畜はそれだけで絶望が胸を占める。云ったことは撤回しない男であることを知り始めたからだ。

美加子は哀願の所作を繰返した。そうするより仕方がなかったのだ。水も欲しいし、共に彼等の怒りの怖さも今迄の拘禁がいやという程教えていた。叩頭で効目がないと解かると、ふと、軽侮して見過して来た朋輩畜の動作が思い浮んだ。

でも、あんなことはやれないわ。人間性を無視したあんなこと……。人間の矜持つてもがあるわ……。

あゝ、でも、でも水が欲しい。この灼けついた咽喉の苦しみ、このばらばらになってしまいくらいの苦しみの苦しみはどうすればいいの？ どうすればこの劫苦から逃れることが出来るの？ 意地や誇りでは鎖や鞭の痛みは解消しないわ。あゝ、救けて！ もう耐えられない。水、水、水よ！

上流育ちの美女は、心の凝りをぐっと吞み下す。清水の舞台から跳び下りる気持と云おうか、固く眼を瞑り息を殺して、タツマの足の甲に、毒のような紅唇を無我夢中で押しつけた。

嫌い抜いた男の、脂臭い埃りにまみれた足の甲へ……。

艶やかな光沢を持った黒髪が、キッド靴の周りでうねった。

志操健固であると自他共に認めていた美加子ではある。併し、身体生存の最大な慾求を、それも厳しい桎梏と激しい責苦を加算した上で耐えきるには、余りにも恵まれた環境や何不足ない自由に囲まれて育ったお嬢さんだった。衣服を纏い、日常並の起居を与えられるといったような人間の扱いを受けているのなら、まだしも上層人として誇りを維持しようと努めたかもしれない。だが、秘めていた柔肌を曝け出され、口枷、手錠、足鎖と拘束され、その上、連日蛇蝎の論理で鞭打たれ、四囲に同様な破天荒の修羅場を展開されてみれば、羞恥や屈辱を感じる以上に、蒲柳の身は抵抗心を失っていた。

日頃、贅沢にミルクやジュースを飲み捨てにし、未だかつて飲食の制限など考えたことすらなかった婀娜やかな身には、この酷烈な水の遮断は死に繋がる苦しみであった。

撫子の志操は瑕璃のように脆くも破壊されて、粉々に思考の外に飛び散った。

水！ 水！ 水！

美加子の脳細胞は砂漠の炎熱に照らされた獣のように、水の姿を求めて彷徨っていた。もうタツーマへの嫌悪は勿論のこと、己れ

を制御する理性も、魔教徒達に対する抗争心もない。あるものは只、胃の渴きを癒したいの一念だけである。

そして、一度切って落した衿持の堰は、次々と透騰する肉体の苦痛や、生への欲求の前に、引続いて破れ去るだろう。即ち、誇りを失うことに強く反撥していた乙女の気高い心は、獣的な動作をすることに躊躇を薄くし、畜生の生態に近づいてゆくことになるのだ。

四 朱唇による洗濯

「どうです？家畜の本性が出て来ましたぞ」魔国人はにやつと笑いながらタツーマに云った。

書記官の心に、得も云われぬ疼きが出る。

あゝ、俺の足を舐めているこの口が、あの愛らしい魅力を湛えた唇なのだ。擦れゆく足甲を齧っているこの息使いが、あの真白な歯並から洩れている芳わしい呼吸なのだ。

清純な乙女の触れ得なかった柔かい感触が鳩尾へ伝い上ってきて、タツーマの五感は妖しく律動した。

彼女を恋人視する気持は無くなっていたがドラマの一景を見るように、まだ女として、人として観察する気はあった。

一面識もない女ならいざしらず、自分が想った女である。まして彼は魔教も信じていないし、一国の外交代表としての節操もある。

表面は別として、心底から彼女を家畜扱い出来なかったのは当然と云えるだろう。

だが、その清楚な乙女が、自分の足に接吻する。渴きの為とは云いながら、何の命令も強制もなしに……。

彼の琴線は高鳴り勝利の調べを弾奏した。そして、少しばかり憐憫が湧いた。

「飲ませてやったら？」

勝谷の顔を窺って促した。

優秀なビジネス・ガールは麗貌に動物的な喜色を漲らせて飼主の表情を見上げ、偽りのないことを認めると此処を先途の思いでズボンの裾に豊頬を擦りつけた。

「そう簡単に許しちゃ、良品には仕上りませんぞ」

勝谷はちよつと張りをなくした声でいったが、間の悪そうなタツーマの顔付を見て、「だが、飼主さんの言葉じゃ、無下に断わる訳にはゆきませんや。一仕事させながら飲ませましょう」

と冷えた愛想笑いを浮べる。

直接の所有者の言辭に威厳を持たせることは、家畜調教の為には必要なことであった。

所有主の意見が通らなければ、家畜は主人を軽視することになる。だから、家畜の前では飽くまでも飼主の意志は尊重され、調教師は従わなければならない。併し裏では、家畜に対する全権は調教師に附与され、取扱いに関

しては彼等の思う儘だった。

尤も一定の調教期間が終った場合は別だが……。

勝谷がタツーマの耳元で何か囁いた。書記官が頷くのをみると躊躇っている美畜に

「おい！御主人様のお靴をお脱がせしろ！」
勿論それは美加子の口で行うことを意味した。タツーマは傍の小椅子に腰を下す。

清浄な乙女は暗涙を呑む。だが、反撥を示す気力はすでに失せていた。

おずおずと、干割れてはいたが、ふくよかな粘膜を蔵する朱唇が茶の靴皮に被さる。

真白に零れて、美貌を一際惹きたてていた皓齒が、油墨で垢ずんだ靴紐を挟む。

「御主人様の大切な品物に歯跡をつけたり、傷けたりしたら、只では置かないぞ」

家畜は解けない紐の結びを慎重に犬歯で噛みほくしていた。切れないまでも、繊維の縊を戻してしまつてはいけないと……。

併し、新畜は口の動かし方に慣れていなかった。無器用な唇の使い方に、靴油や汚塵も共に啜りあげていた。

「もたもたするな！」
ぴしっ！と、無情の調教鞭が督促する。

新畜は焦つて紐を更に絡ませる。

豊かな頬を獣の仕草で紅調させながら、漸く解き終つて、乾いた泥の附着した踵皮を芳息を吐く唇で啞え、腫物にでも触るように、そつと傷しないように取外し、床に揃えた。そして、絶対主タツーマの足にスリッパを履かせる。

美加子にしても、タツーマにしても、こんなことをし、又させることが出来ると思つてもみたことがあつたらうか？ 美加子にしてみたら、相手は嫌味なへどの出そうな人物であつたし、書記官にしてみたら女は高嶺に咲いた麗しい大輪の花であつた筈だ。

乙女は悲運の涙を流すにしては、余りにも疲れ果てていた。選りに選つて、嫌いだ抜いた男の、それも薄汚れた靴を犬のように啞える。宿命としては、神を呪いたい程の屈辱であつた。併し彼女の頭脳は屈辱を思う前に、恐れが渦巻き、生理の苦難が逆巻いていた。

「靴下をお取替するのだ。御主人様の高貴な足肌に賤しいお前の唇が触れるのは勿体ないことだぞ。飼畜の栄誉だ。充分に氣をつけてやれ！」

卑賤な生れの傍若な男が、生物的に高級な存在となり、教養もあり知的で典雅な女体が、別種の下等動物となる。足首に唇をあてることを光榮とする生きもの



になり果てたのだ。

雑巾が放り出され、家畜は靴皮で汚れた唇を擦すり拭った。

異性の唇を知らなかった、なおやかな朱唇が、気使わしげに飼主の針のような毛で覆われた脛に当る。香り高い息を吹きつけながら留ゴムを挟み、注意深く引下げた。

ふうんと脂臭い、すえた匂いが鼻孔を刺した。ラジオ帝都の美女は、急に息の詰まるような嫌悪で胸が塞がった。

高雅に育ち、清潔な暮しを営んでいた乙女には、本質的に耐えられぬ悪感であった。

これが虫酔の走った男の足なんだ。その男の靴下を唇で脱がす。何と云う惨めさ、何という哀れさ。美加子の胸は早鐘のように打った。

だが、まだ欲望のほうが強かった。歯をぎりりと噛みしめると、くるくると踵を脱し、布の爪先を啜えて引張った。

履かせるほうは、もっと難しかった。垢まみれの足指を舐め、汚脂でべとついている足裏に鼻を摺りつけ、眼を半ば瞑るように新しい靴下をたどたどしく履かせていった。

勝谷は脱ぎ捨てた汚れ靴下を竹棒で挿み、水槽の中へ突込んだ、たっぷり水を含ませると、ぽんと家畜の竦んでいる膝前へ掲げる。「その靴下を洗濯するんだ。まず水洗いしてそれから石鹼をつけて洗う。但しお前の口の

中でやるのだ。御主人様に奉仕出来、尊い御足の分泌物が戴け、渴きを潤せる。寛大なお慈悲に感謝しろ！」

何としたことであろうか？ 汗と脂でじつとりした靴下を口の中で洗えと云う。

令嬢は流石に躊躇した。顔を深く伏せるとわなわなと頬を震わした。生来の潔癖感がぶるると体内に激しい汚辱を流した。

「お情けを受けないつもりなのか！」

勝谷が、鞭柄を円い顎に差しこんで挟じり起し、返す手で美の横面を力一杯張った。

「う、うっ！」

火の出るような痺れに、美貌は呻く。

「いやだ！ いやっ！ こんなことするなんていやっ！」

だが肩を蹴られ、腿を踏まれ、ひゆう、ひゆうと空気の中を鞭が走ると、彼女の心は急速に萎んだ。

鼠を啜えた身で今更なにを……という観念が、智脳の片隅を駈けた。

もう堕ちた身、家畜の動作をしている身で何を誇ろうとするのだ。何を護ろうとするのだ。

一度崩れた志操は、坂道を転ろげ落ちるように凋落していった。

美加子は爽やかなアルトを響かせた口で、一気に濡れた汚れ物を食んだ。

塩味を含んだ汚臭が、だらっと舌の上を流

れる。が……それよりも咽喉元を通り過ぎた水の、何と甘露なことであつたか……。

それは絞りたてのミルクよりも、一流料理店のスープよりも素晴らしい味を胃の腑へ浸み通らせた。美加子は我を忘れて汚布を噛みしめると、ちゆうちゆうとジュースを吸るように靴下の垢水を吸った。

「馬鹿野郎！ 洗わない先に水を飲んでしまいやがって！ よく口の中で揉まないと靴下を取上げるぞ」

靴下を取上げられることは、水と絶縁することを意味する。嫌がった靴下も今は高度の栄養と味を配合された食品を味う如く、精緻な口腔から出すことは出来なくなっていた。

慈悲で再度濡らして貰った靴下を、美加子はまるでチューインガムを噛むように、口中に納めたり、口端にはみ出したりさせながら丁寧に揉みほぐした。

唇から顎に、薄黒く汚れた涎水が滴り零れる。恐らく、口腔は垢の臭気やぎとぎとした汗脂のねばりが拡がっているであろうに、家畜は美味そうに眼を細め、与えられた水気を味っていた。

女は、いや、男でもそうだろう。例え嫌っていた相手であつても、抵抗を奪われ、飢餓の下に強要が繰返えされるといつしか嫌悪感を取り除かれてくる。それは生理的なものか、或は観念上の諦めかもしれないが、大体こ

れらは強制の中で行われ、それに依って被害者は抵抗を失い、服従の行動を採るようになるらしい。

美加子にしても、その轍を踏みつつあるといえるだろう。タツマの汚れた靴下の洗いを吞まされて、もうどうされても仕方がない、という気持になっていたことは確である。

水洗いが終り、石鹼泡が口辺に噴き出す。コンクリートの凹みを盥にし、石の突起を洗濯板にして、美女の口はあぶくだらけで懸命に働いている。

こうなると水は吞めないが、後の濯ぎ水が恋しい。

清新な才女は飢渴をあからさまにして家畜の仕事に専念する。

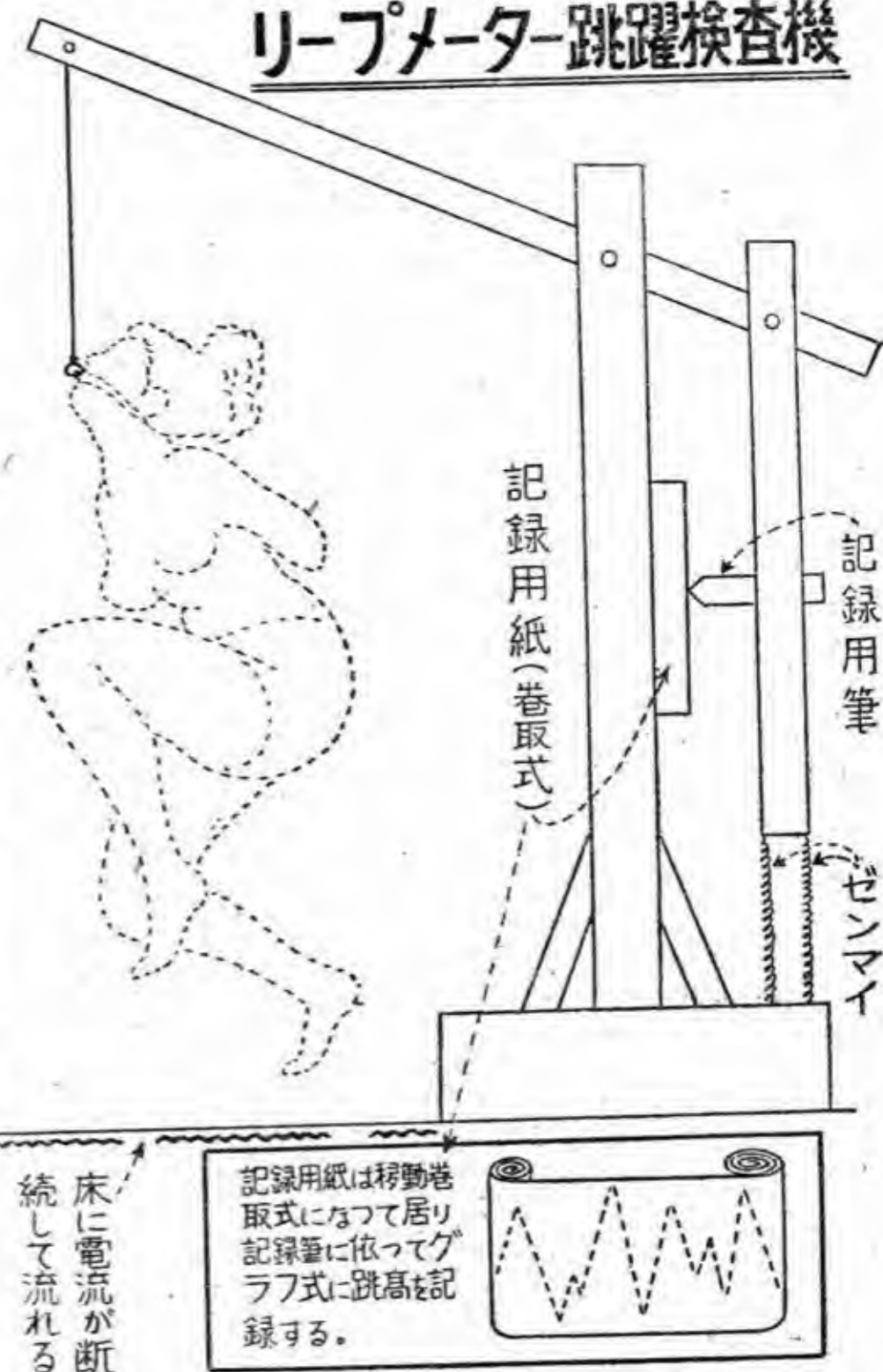
高い知性、聡明な判断力、それらは獣のこすからさに置き替えられて、一匹の家畜に育ってゆくのだ。

(五) 美女の跳躍苦斗

黒山谷子と南城は、連れ立って畜体測定室に入る。家畜の身体的健全さを測る検査場である。

どうせ、此等の家畜達は船便で遠からず本国に送られ、精密な検査をなされるのだから此処では、不具を発見するとか、異常に弱体な女畜を取除くだけの簡単な検査をするのだ。だが、執行員の心次第では、家畜達にとって

リープメーター跳躍検査機



厳しい責場にもなるけれど……。

或家畜は脚筋力を調べられていた。膝関節を大体一二〇度の角度に曲げ、後手に筋力計の把手棒を握り、号令で脚を伸ばし直立しようとする。その力を、ぐるぐると計器盤の針が示すのだ。

他の囚女は眼隠しをされ、片足立になってバランステストを受けている。保持姿勢の時間が計られ、又、一線上を歩かされる。

別世界のように鞭音もしないし、悲鳴も聴えていなかった。穏やかな検査員なのか、黒塔会らしからぬ平穏な風景である。

だが、一匹だけは違った。そいつは、氣息奄々と苦斗していた。

その一匹とは類まれなる美嬢、比奈地路子である。

彼女だけがリープメーターのジャンプ検査機に(図参照)かけられて、絶間なく垂直に

床に電流が断続して流れる

跳び上っていた。

一定の跳躍時間（床から足が離れて落ちてくる迄の時間）を決めて、床に電流が断続して流れるようになっていたのだ。だから、足下に電気のある間は跳び上っていなければならぬし、タイミングが狂うと直ちに、足裏を鋭い衝撃が襲うのだ。

記録用紙には彼女の跳躍回数や跳高がグラフ形式で記されているのだが、路子自身は一日中跳び続けているような疲れで汗を流しながら夢中だった。

肌寒い季節なのに、衣と離別させられた玲瓏な肩や背肌からは淋漓と汗を流し、明媚な乳房をぶるると犬の乳房のように揺すり、流麗な脚線をバネ仕掛の人形のように腰深く折り、弾みをつけて伸ばしていた。育ちのよい彼女にとって、この季節にこんな汗を出し、還視の中でこんな恥態を採ったことは出生以来始めてに違いない。

谷子と南城が近寄ってくる。

路子は南城を見過して、はつと魔女の姿に怯える。

だが跳躍を止めることは出来ない。電撃の鮮痛は余りにも骨身に耐えて知らされていなかった。

索寞とした悲しみが胸を占める。

裏切られた信頼、救いの期待を失った現在の境遇、そして冷酷無慙な扱い。

路子は胸心を縛られて、伏眼になって跳んでいた。

「こいつの畜体調査は？」

「撮影も含めて一通り済んだわ。このジャンプは余興よ」

「飛行機輸送じや運動不足になるから埋合せって訳ですか」

「うゝん、じつとさせといても、つまんないもの」

つまんない？ あゝ、良家の教養もあり聡明でもある絶世の美女が、つまんないと云う単なる婢女の気まぐれで、魂限りの苦斗をせねばならないとは……

「でも、ちよつとした逸品だと思わない？」

谷子は丁度躓まった姿勢になった麗女の、清美に実った乳房を鞭柄で突いた。

「あっ！」

処女の本能が身を竦める。とたんに、お留守になった跳躍を電流が容謝なく責める。

「わあっ！」

乙女は平素の素養を捨て去った絶叫を上げる。瞋いたように足を組み替え、周章して持ち上げる。

「ふん、お前は跳ぶことだけを考えていればいいんだ。」

恥しがらるなんてもつての外とばかり、魔女は冷く吐き捨てて、純美な後姿を観察する。つい先日迄、嫺やかにペンを握り、スマー

トにハンドバッグを抱え、「エンゼル」で愁しげに事情を告白しながらコーヒー茶碗を把っていた優美な手が、腰の上で黒錆の金具に依って、きっちり合わさっている。そして、薄桃色の艶を有する小さな爪が、掌の中に苦しげに畳まれている。

谷子は山型に高低を記している記録用紙を眺める。

「ほう、鞭痕がないね」

南城は珍しいことがあるものだとばかりに同僚の横顔を窺いながら、ぶりぶりと馬尻のように躍動している白眉の臀部を突いた。

「えゝ、注文主にお眼にかけるまではね」

秀麗な家畜は羞恥に埋っていた。

女の願いを籠めて愛しみ育くんできた清らかな肉体を、花恥しく曝け出し、己から跳躍して、極端な動態までも抽出する。

そして、胸や腰や腿を好き勝手に突かれ、蹴られても、避けることは愚か跳ね上ることやめられない。

覚悟して来たとはいいいながら、余りにも想像とかけ離れた言語に絶する世界なのだ。

高雅な人格を高めた教養も、慎しみ深いとされた礼儀も、この世界では毛程さえも通用しなかった。いや、かえって邪魔にさえなるのだ。

良家の子女は耐えきれぬ屈辱に、兎もすれば、足許が乱れ勝になる。

だが、機械は冷酷に正確に機能を發揮する。令嬢は肺腑の声を絞って、全身に痙攣を流し、姿勢を合わせて、ジャンプを続ける。

「明日でしょう。飛行機のお迎えは？」

南城はしげしげと感嘆の眼差しで、伸縮している美肌を凝視めて云った。

「えゝ、だから、出発迄、休ませず運動させようと思うの」

どうせ箱詰にして寝かして置かなければならないから、疲れさせておいたほうが麻酔の効きも良いし、反抗の力も消滅すると云う計算である。

路子の脚筋は弛みを見せ始める。

「とめて！ もう堪忍して！」

谷子さん、停めて下さい！

美女は、婀娜やかな肉体に蔵された力を出し尽して、思考が宙に浮かんでくる。

もう自分の脚ではなかった。

反射的に屈折し、床を蹴っているに過ぎなかった。

理智的な額にはたおやかな黒髪がへばりつき、湖水のように深く澄んだ瞳には哀しみの翳が涙の膜を刷き、鼻孔と口は懸命に肉の凝りを呼吸していた。



透きとおるような美肌は、濡れ鼠となって滴たり、ふっくりした可愛らしい掌は木彫のように固く汗を擱んでいた。

明日、故国に別れを告げねばならぬと聴いても、反応を示すだけの気力も果ててしまったのか、路子は只管、高尚な精神全部を肉体

斗争に注ぎこんで、喪心を支えていた。

「名残り惜しいな、貴女とも当分お別れか」

「そうね。でも、直ぐ舞い戻ってくるわよ。」

所詮、棒に嵌った本国暮らしなど、私には出来そうもないもの」

谷子は舞い戻って来れるだろう。併し、比

奈地路子は永久に戻れないかもしれないのである。

二十一年の歲月、明るく楽しく育った故国へ、二度と再び、帰れることはないと思わねばならない。

別れのテープを張ることなく、手を振って見送る人としてなく、箱闘の中で眠ったまま別離させられるのだ。

外では陽光が燦と輝き、緑が鮮やかに映えているのに、一瞥を惜しむことも出来ず、混載貨物として箱詰で運び出されるのだ。

「ああお！ わああお！ あわあ！」

路子は精魂の限界で

よるめいて来た。

二度、三度、五度、脚は上らず、びりびりと脳体を破碎せんばかりに貫き通る強痛に、理智も教養も嗜みも攪乱されて、彼女は人間のものでない悲叫を奏であげる。

これが、慎しみ深かった令嬢の動物として昂げる咆哮なのだ。

そしてその声帯も震動を弱め、びくくつと関節を収縮させ、総身敗退の前徴を示し始める。

谷子と南城は顔を見合せて、ゆっくりスィツチを断った。

六 正哉に伸びる魔手

聰明を秘めた美麗な肉体は、くなくと一塊の肉となって崩折れる。

ホースの水が勢よく家畜の顔で飛沫いた。

「む、むう！」

荒々しい呼吸が、花卉を散らして盛上った乳房を揺すぶる。

「だらしない奴ね」

「この様を正哉に見せたら面白いだろうな」南城の言葉に、路子は整えていた肺の膨らみをはっと停める。瞑っていた円かな瞳をぱちと開いて男の顔に視線を当てる。

「あっ！ やっぱああの時の男……」

温雅な乙女は、弟の演劇サークルの友人だと云った男の顔をまざまざと認めて、がっく

りと胸を亀首のように竦んだ。

あの日。弟とも別れのような気がして部屋へお茶を運んでやった。

二人は何か議論していたがやめて、路子に向って正哉が、こういったのだ。

「女は征服されるのを好む動物だと南城君がいうんだけど、姉さん反論してみろよ」

路子は戸迷って怪訝な顔を見ると、南城が引取って、

「女は古くから束縛を好むでしょう。例えば指輪を嵌める。これは飾りかもしれないが、指の束縛を意味しますね。耳輪をつけ、腕輪を嵌める。或はタイト・スカートやハイヒールなるものを履いて足の動きを制限する。女は自らを拘束して喜んでいる動物といえると思うのです」

青年はいけ、図々しくいった。

「でも、動物じや可哀想よ」

路子は苦笑する。

「併し動物でしょう。檻にこそ入っていないが、亭主なるものに飼われて食を与えられている……」

「そりや、ひどいわ。夫に仕えるのは家庭を守る」と云う、女の職分なんじやなくって。男

女はお互いの愛情と理解の上に成立つものなのよ。指輪や耳輪にしたって、女の本能的な美意識よ。貴男だって髪も梳かしていない、お化粧もしていない、洋服にアイロンもかけ

ていない、女を御覧になるよりは、綺麗な娘のほうがよろしいんじゃないか

路子は、最初ちよっとむきになったが、相手の年令を考えると大人気なくなつて、にこりとして説明した。

「花が蜜蜂を呼び寄せるようにですか、でも僕は女の美はヌードと屈服にあると思いますね。纏いつけた美は虚飾だし、自由な振舞は女の本質に反しますよ」

南城は表情も崩さず云った。

「問答無用って訳。ドライですわね」

乙女は呆れて少しばかり皮肉った。

そんな会話が あつた後で、正哉が席を立つて南城と二人きりになった時、彼は無気味に底冷えのする声で云つたのだ。

「路子さん、いつか、貴女をヌードにし、手足を縛り上げて僕の足下に転がしてみましよう。その時、貴女はどんな気持になるでしょうね。僕はそれから、その美しいが動物である肌を飼育物らしく鞭打つてあげます。貴女は泣き叫ぶでしょう。でも涙の下で、きっと僕のいったことを納得し女の本質、云い換えれば自分の家畜性を肯定し僕の足に絡みついて飼養を懇願するでしょう」

路子は、ぞっと血が凍るような怖い気が走った。電話に続いた悪魔の声にいたたまれず耳を覆いたい恐怖であつた。弟の友人とは思えない圧迫に、顔もあげ得ず息苦しく逃げる

紺 紺 の 郷 愁

菅 良 太

ように席を立ってしまったのだ。

優雅な乙女は、その時のことを思い浮べた。今、彼の言の通り、肩も乳房も腿も冷いコンクリートの上に剥き曝らし、而も手足を錠されて激しい責を受け、寝返える力もなく喘いでいる。路子は頬を床に倒し、皓齒をぎりつと噛んだ。

「どうだい？ どんな気持ちだい！」

南城は予言の実現に鼻をうごめかして麗しい乳房の上に靴で踏み上り、片足をぐったり横向いている智脳を蔵する鬢に載せる。

「ああっ！ あうっ！」

絶佳な美貌は挫がれて、さんさんと涙を落す。犇々と敗北感に似た悲しさと口惜しさが

胸裏を括りあげた。

「俺の手で充分納得させることは出来なかったが、今度逢う時には、お前も心底から家畜になっていよう。その時は俺に礼を云うんだぜ。正哉は引受けたからな」

路子は嗚咽が噎り上げて来た。

未完

戦後の青少年は和服を着る事が少いため、もはや紺紺に兵児帯姿などあまり見ることがないが、私はあの紺紺に一種の郷愁を感じるものである。少年の荒い紺模様の紺紺を裾短く着て、若蘆のようにまっすぐに伸びた足に紺鼻緒の駒下駄をつっかけた姿には何かソドミア的な匂いを感じる。更に青年になって紺の匂いたかい久留米紺の細いものに浅黄の裾廻しをつけた袴を無造作に来て、黒の兵児帯をぐるぐる巻きにした姿は何かしら魅力がある。成年期の熟れたような体臭に混って、高

貴で素朴な紺紺の匂いは、私の心をときめかせた。夏の湯上りの肌に着た白紺も又、同じ魅力をもっている。浅黒く引緊った青年の肌の色に調和した白紺の、やゝふくらみをもった臀のあたりのたるみにも、温い人間的な魅惑をもっている。

もう十四、五年前、戦争の酣のころ、私はある連隊の城下町に下宿していたが、その下宿の隣部屋に連隊勤務の中尉が住んでいた。この青年将校は勿調、独身で快活な性格だったから、すぐに仲良しになったが、彼は隊か

ら帰るとすぐこの紺紺を着ていた。何でも郷里が久留米で、織元の息子だという事で、とても、そこらの呉服屋では求められないようなゴリっとした感触だった。私は彼が和服になる姿がすきであった。私服になった彼は、軍服の時以上に軍人らしかった。私の部屋などによく遊びに来て無造作に胡坐をかいたがその紺紺の間から純白な晒の褌がちらりと見えて、私をハッとさせた。白い前下りが紺と対照して、目が痛くなるようにまぶしかった。その中尉は、やや毛深い、ちたのか、ゆったりと着た紺の襟元に白い晒の縹緞と、まばらな胸毛がのぞいていた。この中尉は間もなく出征し、その後の消息を絶ったが、この頃から私は不思議と紺紺と黒の兵児帯をつけた青年に対する憧憬を感じた。

紺紺の単衣を着て、黒の兵児帯を緊めた二十四、五の青年が、縄で後手に緊縛されて転がされて、乱れた裾から純白の褌が覗き、浅黒く疎な毛の生えた足を苦しうに藻掻いている姿が、幻想の中にあつた。



◇ 告 白 小 説 ◇

マゾヒズムの谷間

鍵 村 江 津 子

マゾヒズムということについて私は何ひとつ智識らしいものを持ち合わせてはおりません。私にとってそれはただ羞恥と嫌汚の象徴としてしか感じることが出来ないのです。S子とのあの六ヶ月にわたる異常な生活さえなかったから、私はおそらく、こういう言葉を一生知らないで終ってしまったことでしょう。勿論そのS子との生活というものも、決して初めから私が進んで求めたものではありませんでした。いつの間にか、私はS子の妖しい魅力のとりことなつてズルズルとまるで引きづりこまれる様に彼女の網の中に捕えられてしまったのです。何回となく私は彼女の領域から逃れ出そうとしてもがき苦しんだことでしょう。でもその度にS子は一層悩ましく粘り気のある手段で私を引き戻し思うがままに全身を束縛してしまつたのです。私は焦れば焦る程、丁度檻の中で飼い馴らされ調教される犬の様な存在になり下つてしまいました。私はその息苦しさ能耐えかねて、時折ふと何もかもふりすててすべてを精算してしまおうかと考えたことさえあつたのです。

そのS子が、一年程前に、突然まるで眼の前にあるローソクの灯を誰かが黙ってふき消した様に、何の予告もなく私の前から姿を消してしまつたのです。それは本当に予期していなかった事でした。ある日、私がいつもの通り出勤すると、朝礼の時間にS子の姿が見

えないのです。配置について開店のベルが鳴ってからも、彼女はあらわれませんでした。何か急に緊張から解き放された様にうつろな気持でその一日をすごした私は、それっきり二度とS子に会う事が出来なくなってしまうたのです。

私がS子を初めて意識したのは、昨年春のことでした。デパートはもう終業間近で、私は急に一日のつかれが出て来たのを感じながら、ネクタイ売場のケースにもたれてボンヤリと、絶え間なく流れてゆく人の波をみつめていました。銀座のMデパート、華やかな花壇の様な色彩の海に私たちはもう馴れっこになっっているせいか、何となくけだるいうつとうしさをさえ感じます。そんなとき、突然一人の男性が私の前に立ったのです。

「君、君——」

二三度呼ばれたのに気がつかなかった様で私はハッと気をとり直しあわてて笑顔を作りました。

「いらっしやいませ」

「——」

中年に近いそのお客様はネクタイを弄びながら私の顔をじいっと見つめているのです。その視線に私は何となしにある異常なものを感ぜないではいられませんでした。

「おつかいものでございますか？」

一寸気押され気味でとまどいしながら私がいよいよ話のキッカケをつかまえたとき、そのお客様はネクタイには別に興味もない御様子で、いきなり私に向って

「98番は君ですね？」

と仰言るのです。

「ハ？」

とっさにその意味がのみこめないで、私がいよいよぼんやりしている

「ア、いらっしやいませ」

いきなり私をつきのける様に、S子はその方の前にたちました。そして私をチラリと横眼でにらんだその眼が、ソツとする程するどかったことを、私は本能的に感じとっていたのです。今迄S子がお相手をしていた若いお客様があれこれとネクタイをおえらびになるのにつきながら、私はそつと自分のナンバーをたしかめて見ました。すると、どうしたことかその時に限って私の不注意だったのです。いつもは86番である筈の私の胸のナンバーが、逆にピンでとめられて、一寸見ただけでは98番と見えないこともありません。そういえば、S子のナンバーは、間違いもなく98番であったのです。このことは、私も別に深く気にはとめませんでしたけれど、S子のキラッど光るあの鋭い視線は妙に私の胸の中に灼きつけられてしまっていました。勿論その前からお友達としての交際ぐらいはしていた

のですけれど、このことがあってからS子は急に私に近づいてくる様になったのです。時々映画と一緒にさそってくれたり、帰り途に私が遠慮するのを無理矢理高級な喫茶店などに案内して御馳走してくれたり、お会計はその都度S子が支払うのですが、鈍感な私はお金持だなア、と感心する程度にしか彼女の正体を察することが出来ませんでした。そんなことが一ヶ月あまりも続いて、やがて私にとってはあの恐ろしい生活への第一歩となった二番目の機会が訪れて来たのです。

その日は別にS子との約束もなく、私は一人でいつものように地下鉄に乗って渋谷まで帰ってきましたが、何となくこのまま家に帰ってしまうのが惜しい様な気がして、しばらくの間、店のウィンドを見たりしながら駅の附近を散歩していたのです。そして道玄坂の方からハチ公の近くまで引き返して来たときスット眼の前を横ぎったのが、他ならぬS子でした。眼鏡をかけた上品な紳士と同伴の様に、オヤと思つてふりかえったとき、私は再びS子の眼を見たのです。とぎすまされたナイフの様な鋭い視線、私は思わず身のすくむ様な思いになってしまいました。そしてその翌日、私は彼女からまたお茶にさそわれてしまいました。その日はあまり気がすすまなかったのですけれど、ほとんど強制的なS子の言葉に、つい断りきれずに私はコロンパン

という喫茶店のドアをくぐったのです。その片隅のボックスで、初めてうちあけられたS子の秘密に、私はどれ程おどろきの眼を見張ったことでしょう。

S子にしてみれば、私がおもってもっと深いところまで察しているのではないかと疑っている様子でしたが、でも本当に私は何ひとつその事に気づいてはいなかったのです。それどころか、話の意外さに、むしろあっけにとられてしまうばかりでしたが、それがかえってS子には私がトボけている様にも見えただけでしょう。彼女の追求は鋭く、私は知らないことを問いつめられて、しどろもどろになりながら、とうとう私は大体のことは知っていましたが、とうとう私にもない返答をさせられてしまったのです。結局、私は固く口どめされることだろう。口どめされるまでもなく、こんなことは誰にも決して話したりしなればよいのだという常識的な計算が、つい私にそんな嘘の告白をさせてしまったのだと思います。

S子の話の内容というのは、あまりにも恐ろしいことで、ここにその全部をおしらせすることは出来ませんが、かいつまんで話しますと、私たちの勤めているMデパートの店員の内部にある種の組織が出来ているということなのです。S子もその中の一人でしたが、会員と内部との連絡は、すべて胸のナンバーで

行われていました。あの時、中年の紳士が

「98番は君ですね」

と声をかけたのも、今から思えばこのことだったのです。私には、S子の持っているお金の出所がどこかということもよくわかりましたし、昨日の男性と彼女との関係も、今度こそはつきりとその真相を知ることが出来ました。ただそれだけのことだったら、私が話を外にもらさなければ、それでいいという私の思っていた通りになっていたかもしれせん。でもS子には更にその裏があつたのです。最も悪意に満ちた解釈をするならば、彼女は本当にこのMデパートのクラブのことを私が知らなかったのを逆に利用して嘘の告白を強要したのかもしれませんが、S子は私のこの言葉を武器にして、もっとも私を苦しめはじめたのです。

「貴女が絶対に私の秘密をバラさないという証拠を見せていただきたいわ」

そう言つてS子は迫ってきました。すでにその時、気持の上で完全に彼女から圧倒されてしまつていた私は、ただ無言でおびえた眸を伏せるほか、何をするすべとでなかったのです。

こうして、その日のうちに、私はある旅館に連れこまれ、S子から想像も及ばない程の強制的な仕打をうけさせられてしまったのです。その時のS子にとっては、もうその口実

などはどうでもよかったのかもしれませんが。

私は最初から激しく抵抗したのですけれど、平手で頬を叩かれ髪を掴まれてその場にねじ倒されてしまいました。その上両手を後で縛られ、胸ははだけてしまふし裾は乱れてどうすることも出来ません。咽喉の上に、S子が跨っているの息苦しい咳にむせかえつて、とうとう彼女の暴力に抗う力を失つてしまったのです。私がおとなしくなると、S子は急にやさしい態度になりました。合意の上で、とは言つても、私はこの中で憎悪と悔恨とでにえかえるような思いを耐えながら、私はもう死んだ方がよいとさえ思いました。勿論縛られたことは初めての経験でしたし、被虐の快感などは少しも感ぜられません。私はもう氷のように冷えきつた気持で、彼女の前に身体を投げ出しておりました。

それからほとんど二日おき、三日おきに、私達は旅館の部屋にとじこもる様になったのです。後でS子が私に告白したのですけれど、私を苛めなくなると、一刻も、我慢出来なくなるというのです。何も知らない私にとって女同志でひそかに旅館の門をくぐる時の気恥かしさ、そうした中で、私はS子の加虐欲を全身に浴せかけられ、今まで全く未知であつた縛られると云う感覚の世界をすこしずつ知らされていったのです。顔面をS子のヴォリユームのあるヒップに押しつぶされ、胸から

二の腕、手首に喰い込む縄の痛さに唸き声をあげながらのたうちまわった経験が何回か重なり、やがては嫌だと感じる気持そのものがそうした感覚と結びついてしまう様になってきました。最初は本当に嫌なのです。この感じはいつになっても変わりませんでした。逃げ出したいと思うところ、ずるずると引きづられてゆく気持とが均衡して私を悩ませます。やがてそれがすこしづつ比重をかえ、最初のあれ程嫌だと思った気持が、今度は逆にもっと苦しいことをされたい、もっと強く縛られたいという熱望となって私のところを燃え上らせてしまうのです。

こうしてS子と私との異常な交際はいつ果てるともなくつづき、理性ではそれを固く拒みながら、つい彼女の思うがままの女として教育されてしまった私でした。悪魔の様な女と憎む反面、愛しくもあったのです。このSが、まるでかき消すように、今から丁度一年前、私から無言のまま去っていったしまったのです。あれ程までに忌み嫌っていた彼女から解放されて、その後の私には再び平和で安らかな生活が訪れてくる筈でした。いいえ少くとも三ヶ月の間はその通りだったのです。幸福な未来への希望に、私は平凡でしたけれど誰よりも娘らしい甘く楽しい生活を送ることが出来たのでした。でもやはりこころの片

隅には、S子に対する恐怖と期待の念がこびりついて、奇妙な影をやどしていたというところだけは否めない事実だったのです。こうして一ト月、二ヶ月と表面的には何事もなく、静かな毎日がすぎ去って行きました。でも、ああ何ということでしょう。S子に対する私の気持は、そのころから次第に変化して恐怖はやがて消えさり、せつない期待だけに変わり、遂には激しい失望となって私のところをかきむしるのです。あのころの、歪められた生活をもう一度自分から求めている私に気がついたとき、私は我を忘れて夜の床に声をしのんでむせび泣くより他にありませんでした。そのおえつさえもが、いつの間にかS子を慕うあまりの叫び声に変わってゆきます。私の胸に腕にしかと巻きつき、肌に喰い込む細引の痛さがよみがえってくる。乳房に、彼女の爪が音をたててうずくのです。何ということでしょう。この気持は、まごうかたなく恋なのです。女が女に恋をするということ、ただそれだけなら、思春期の娘の甘美な背徳として或は許されることかもしれません。でも、S子は悪魔の化身なのです。それに彼女はすこしも私を愛してはいなかったのです。ただ私を縛り、もががすことだけを愛していたのです。これは本当に悲しいことですけれど、私にははっきりそれがわかるのです。愛情もなく、ただ加虐欲の充足だけのために私の肢体を対

象としていたということを知りながら、縛ってくれるS子のために身もころも捧げつくしてしまおうとしている私——、我れと我が身にこれ程まで残酷に責め虐められている私の様な女が他にあるでしょうか、信じたくないことですけれど、私には、マゾヒストの血汐が体の中を流れているのに違いなのです。私は今、S子がただ一冊、私の手元におき忘れていったこの書物をたよりにして、拙い筆をはこんでおります。これは、私があのS子、憎い恋しいS子に宛て、魔女に身を売る恋文なのです。S子のために、私は踏まれても蹴られても喜んでついてゆく決心をしています。愛とか同情とか、そんな安易な代償は決して求めようとは思いません。ただただ私は彼女のモノとして、あのころの様に縛られ、苦しめられ彼女のなぐさめものとして使っていたことが出来たら——。私はそれだけでいいのです。

もう一度、突然私の前から消えた様に、突然現れて、私を突倒し、組敷して欲しい。私の両手を背中に思い切りねじ上げて欲しい。そしてギリギリと血行の止まる程に、強く細引を肌に喰込ませて縛って欲しい。……

S子……私の忌むらしい恋人、何処に居るのか知る由もありませんが、若し、この一文が切れた縁を再び繋いでくれるならば……私は強くそれを望み、期待して居ります。(終)

○十一月号（復刊第二十号）

口絵
實絵「磔」(ハリツケ)……四馬孝・西

ケンちゃんのこと……………柴崎 黎
男奴隷のことども……………皆川のふ

犬の生態……………杉本真二
女体切腹秘話……………青山芳恵
愁風連……………

M	S
責	苦
竹	岡
目	谷
矢	上
士	吟

日本印象記

(外人の見えはらきり) 南方純

紅のつゆあと 香野 滋

破(たつき)五十シナリオ 海野 繁

御用盗変 岸本 忠正

現代マノヒスム芸術時評 大河内 樹

強盗団に襲われた若後家 菅 良太

縛られた女優達(追加) 近藤 浩二

映画にあらわれた男性責シ 矢島 浩二

創作結婚の条件 牧 高志

私の女装履歴 三條 卓史

女体風俗 妖艶花の巻 夢原 狂介

雑誌通信 妖艶花の巻 夢原 狂介

創作 妖艶花の巻 夢原 狂介

十三人目の奴隷 夢原 狂介

ダイアナ夫人 夢原 狂介

読者通信 夢原 狂介

編集後記 夢原 狂介

〇六月号(復刊第二十八号)

【定価二百円】

口絵

面集 革製縫ぐるみ 四馬 孝画

絵画 迫りくるスリル 杉原 虹児画

縛り写真 変形吊り責機 忍頂寺 保子

縛り写真 三味線 写真部 特写

時代物写真集 腰元折檻 阿部 秀提供

緊縛映画名場面集 阿部 秀提供

大映(銭形平次捕物帖) 阿部 秀提供

松竹(題名不詳) 阿部 秀提供

洋面スチール二題 編集部 選

仏映画(情婦マノン) 編集部 選

写真 双丘(そうきゅう) 愛川 悦子

やくざさがらみ草紙 海野 繁

春浅き日に 佐藤 すみ子

〇七月号(復刊第二十九号)

【定価二百円】

口絵 孝傑作名集一本足の穿衣 四馬 孝画

縛り写真 鬼面童騎隊 星美 智子

縛り写真 鬼面童騎隊 星美 智子

縛り写真 鬼面童騎隊 星美 智子

縛り写真 鬼面童騎隊 星美 智子

縛り写真 鬼面童騎隊 星美 智子

縛り写真 鬼面童騎隊 星美 智子

〇八月号(復刊第三十一号)

【定価二百円】

口絵 四馬孝傑作集 拷問會 四馬 孝画

縛り写真 拷問會 四馬 孝画

縛り写真 拷問會 四馬 孝画

縛り写真 拷問會 四馬 孝画

縛り写真 拷問會 四馬 孝画

縛り写真 拷問會 四馬 孝画

縛り写真 拷問會 四馬 孝画

新東宝「毒婦夜嵐お絹と天人お玉」

江見 涉

新東宝「幽霊沼の黄金」

瀬戸 麗子

新東宝「サタン城の魔王」

益田 房子

新東宝「サタン城の魔王」

南村 俊平

新東宝「サタン城の魔王」

比 隆

新東宝「サタン城の魔王」

新東宝「サタン城の魔王」

新東宝「サタン城の魔王」

新東宝「サタン城の魔王」

新東宝「サタン城の魔王」

新東宝「サタン城の魔王」

新東宝「サタン城の魔王」

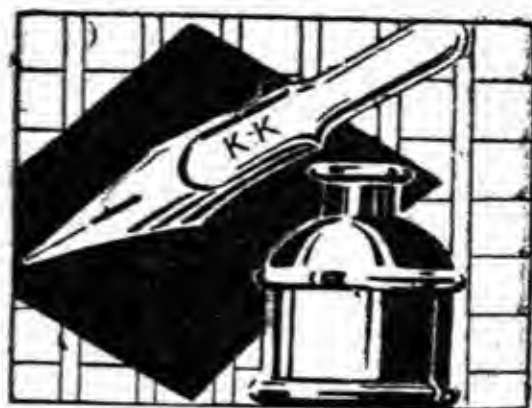
新東宝「サタン城の魔王」

新東宝「サタン城の魔王」

新東宝「サタン城の魔王」

新東宝「サタン城の魔王」

新東宝「サタン城の魔王」



読者通信

七月号を見て、先ず驚いたことは、K誌もすっかり調子を取り戻したと云う感じでした。挿絵も豊富、表紙内容共に充実していて、実に非の打ち処なしといった処です。口絵では杉原虹児氏の「浴室のブレイ」が素晴しかった。氏の描く苦しみ悶る女の表情は正に完璧です。本文に入って、再び初められた九雅氏の「特異な角度から」が期待に沿ったものでよかった。時代物では、入選作品の「お町の最期」と緑猛比古氏の「拷問記」夫々興味をそそるに十分なものであり、又挿絵が素晴らしい。池田喜代子さんの「子供の時の浣腸」も、いわゆるマニアでない点が気に入りました。浣腸されることに麻痺して楽しげに書かれた文より、何

か真実性に訴える点があり、面白く拝見しました。処で毎号拝見して尊敬している人に、近藤一氏がおります。氏の創作力の旺盛さには目を見張るばかりです。毎号書き続けるというところは容易ではないことと思います。氏の好きなブレイは小生には余り共感を抱きませんが、とにかくその張りきりぶりには驚いてしまいました。バラエティに富んだ創作、毎号ヒットを出しております。創作することは容易ではありません。どうか余り無理をせず御健筆を振われんことをお祈り致します。

(東京 東一郎)

その後、貴社益々御発展の御様子、愛好生の一人として喜びにたえません。さて、今回の特集号の感想を。「緊縛艶姿十四態」「蠟滴」「白蝶の舞踊」「荒縄と柔肌」など、まるでこの光景を眼前にみているような迫力がありますね。また「囚衣」は、ほんとうの囚人が眼の前で責められているようです。最後の頁の「口絵写真について」は、最近にないよい企画で、我々読者としては写真から直接受けける印象と筆によって書かれたそのいきさつなどを読んでその印象

とをミックスしますと、一段と興味深く感ぜられ、貴社の内で自分が仕事をしていたような気がします。この企画は、これからの本誌の最後の頁のところまでよいですか、少しでもつけて下さい。また復刊前のように「モデル嬢の横顔」というような記事があったら、一段と面白くなると思います。やはり貴社はサディズムの記事中心でいつて下さい。読者にもその方が多く、またこのような事に新しく興味を持つようになるのも、やはり、サディズムからで、他のものはそれに飽きてしまったものが追求するものだと思います。また分譲写真は高いのでなかなか手が出ませんが、臨時増刊号の形で出版されるのは我々としては嬉しく、止むを得ませんが高くても一冊五百円以下だと買いよいと思います。また緊縛写真で女体の魅力のポイントである脚が縛ってある写真がありませんが、やはり足のそれも奪ってしまわないと何か少し物足りないと思うのですが、可能なようでしたら、そうして頂

◎写真特写引受◎
特別に交った着衣、ポーズ、アイデア等によつて写真の特写を御希望の方は写真部に於てお引受致します。詳細なる趣向を御連絡下されば費用其の他にいてお返事いたします。

(返信料同封下さい)

七月号を始めて愛読させて貰いました。こんな面白い本が今まで解らなかったとは、僕もどうかしていると思います。読んで見ますと、女性の緊縛ものが何と多いことに驚いてしまいました。しかし僕には、こういうサド的なものは興味がないらしく、マゾ的なものに対しては常に胸が騒ぎ出して来て特に西田佐代美様のお書きになった「私の馬」は完全に僕をとりこにしました。うです。これを読んでからというもの、僕のは、僕の頭には彼女の威厳のある姿と、完全に彼女に侮辱されている馬としての僕の姿が、何時までも消え去ろうとしないのです。

きたいと思います。特に太股に喰入る縄など素晴らしいと思います。その他、緊縛に使う縄などの購入方法や種類など興味あるものだと思います。以上のように色々意見を書いてきました。貴社が我々の意見をとり入れて下さるよう御願致します。

(東京 T・M生)

毎日、あの文を十回程繰り返し繰り返し読み乍ら、乗馬遊びの光景を思い浮べているのです。夜になりますと尙更このことが頭に焼きついて、少しも眠れなくなるとう朝になつてしまつたというところは二回や三回じゃありません。どうか、この僕の希望を叶えて下さるよう御願ひ致します。(M生)

本日、特集号入手致しました。予想していた以上に素晴らしい出来栄です。特によかつたのは左の三篇です。(一)表紙裏「鞭を提げた女」(二)四馬孝「夜汽車で逢つた美人」の画及びストーリー(三)グラフィア花坂道子。今後是非、三カ月に一度か半年に一度の割にて、このような増刊号を発売されることを期待するものです。(Y・S生)

○ 待望久しかりし特集号は、普通号のように夾雑物(?)のない、すつきりしたサドばかりで、久振りにこの上ない満足を味わいました。画も写真もふんだんで嬉しい限りです。殊に写真の迫力は旧号をしのいで尙、あまりあります。「緊縛艶姿十四態」の田中モデルはいつも乍らのあどけない顔、初々

しい姿体で最も好きなモデルです。が、美しい長襦袢姿を露わに剥かれ、柔肌にキリキリと縄が食い入り固く頬に食い込む猿ぐつわ、恐怖のまなざし、苦しげな姿体などかつてない美事な責められ姿です。慾をいえば「拷問」のように竹の棒が革鞭のアクセサリーがあれば尙よかつたろうと思います。とまれ、責め苛まれる美少女の苦悶をあらわして第一の傑作です。「囚衣」「拷問」又、傑作です。長い黒髪を振り乱し、割竹に責められソロバン責めに苦悶する。胸をはだけられ、なおすすべもなく俯向く姿。さては哀れ天井に吊り下げ

られる無残な姿など哀れな女囚の姿は、モデル嬢の美しい顔によつて、より哀れさを増しています。「床間の花」「長襦袢」共に優しくしおらしい日本娘への折檻、におうような乙女の肌の芳香が感ぜられる程です。キチンとした和服姿を一枚一枚と無残に引っぱかれ、てゆく姿が、何ともいえず艶かしいですね。一番はじめの場面の、伏目になつて観念したような姿は実によいですね。しかし何故に帯をしないのですか、キチンと帯をしている方がよいのに。美貌の花坂嬢には、これからも和服の責を望みたいですね。「蠟滴」は、豊か

◎女体切腹フォト◎

「腰元自刃」

村井知可子嬢

大中判印画紙焼付
六枚一組 八百円

お家の重宝を紛失した美貌の腰元が激しい責折檻の末、遂に敵方から忍び込んだ間諜であることを白状する。そして今は、せめて武士の娘らしく深く切腹して果てることを願う。彼女に秘かな好意を寄せていた御側の若侍は彼女の介錯を願つて出て許される。今迄の折檻の場は忽ち凄惨な

美女切腹の場と変る。という構想のもとに六枚連続の切腹フォト(全場面切腹)六枚の中、五枚は若侍介錯の場面。女体切腹マニアの方は是非一度ごらん下さい。日本髪をふり乱して苦悶するさまは、必ずや皆様を魅了せずにはおかないでしょう。(女性モデルの外、美男モデル登場)

な肌へ食い入る太縄、真白な乳房の間へ滴る熱い蠟滴、悲鳴！身によじつて苦しむ乙女。右下の口を開けた写真など悲鳴が聞え、喘ぐ息の音が聞えるようです。「白蝶の舞踊」は高手小手に括り上げられ、こけつまろびつ跳き廻る姿が連続写真で映画を見ているような迫力があります。中々面白い試みと思います。これから、こういう連続写真による責めの姿などを続けて欲しいものです。「荒縄と素肌」は、トゲトゲした荒縄が白い柔肌に情容赦なく食い入る無残さは、緊縛美の極致ですね。モデル嬢も痛くて大変ですが、もう少し緊めてみたい気がします。画の方では、大好きな女学生への責めが二つもあり、大いに満足しました。但し、少々体が立派すぎて、可憐な少女の蕾の感じが一寸足りないのが残念です。美少女の美しさは、成熟しきらないか弱い初々しい処にあるのですから成熟しきった女にセーラ服を着せてみても余リグツとしない処か、汚い感じがえるものです。本文は大いに結構でした。先月号から書いておられる南村さんの画は本当によいですね。鳥羽僧正の鳥獣戯面を思わせる動物共に捕えられ責められ

最新版『縛り』写真八分・譲

(9×13Cm) 判印画紙焼付

益田房子嬢股間縛り五態

五枚一組四〇〇円 略号(ます)

五枚一組四〇〇円 略号(りよ)

モデル 川辺砂登子嬢

八月号の本誌口絵にて初めて登場した柔軟優美な姿態の新人益田房子嬢の股間縛り

全裸手高小手縛り猿轡

三枚一組二五〇円 略号(たか)

賭儀(かけにえ)三態

モデル 愛川 悦子嬢

三枚一組二五〇円 略号(かけ)

高々と首筋近くまで厳しく吊り上げられた後手縛り、頬もくびれよとばかり締めつけられた猿轡、わ。肌を喰い込む二の腕の縄目。

女学生凌辱図絵

裸の女体に掛けられた奇妙な縄、果してこの縄が自分で解くことが出来るでしょうか。

る可憐な少女たちの可愛さは、筆者の人柄がしのばれて嬉しい限りです。中には余り幼なすぎる少女もあるようですが、これが本当の美少女責めでしょうね。南村さんに御願いたしますが、今度は女学生(中学から高校)に、運動着や夏のセーラー服や軽快なブラウスやシャツ、下着などつけさせて縛り上げ責めてやって下さいませんか。先々月の「天城山……」の画などいいですね。本文は何れも甲乙ない出来ばえで、何度も読みかえしても飽きません。特に余りにも悲惨なものがなくて何よりでした。

特集号は続けて発行して下さい。う、お願い申し上げます。編集後記にもあるように、画と写真に重きをおいた特集号を鶴首して止みません。(名古屋 宮津光男)

○ サド特集臨時増刊号、本日到着夢中で読み耽けりました。内容も珠玉的な作品が素晴しかったです。期待にそぐわぬ面白くて読みごたえのあるものばかりでした。感動も新たに読み初めたものでした。但し表紙はチョット低調気味で、こればかりは前回の「責小説特集号」の方がよかったです。口

絵、写真は正に粒選りのものばかりで、非の打処がありません。杉原虹児氏の作品は、目次裏のデッサン集の如き小品でも、顔の表情などの描写が素晴らしく、何ともたまりません。四馬孝氏の作風は余り好きではありませんが、氏の女学生物の挿画は完璧で、文句ありません。殊に宇丸一平氏の作品に對しての口絵でのスカートの描き方は、よい描き方でした。滝れい子さんの「非情の部屋」の口絵挿画がよかったです。更に杉原虹児氏の作品では「女賊捕縛」の苦痛にゆがんだ顔の表情が素晴らしく、とにかくこの種のサド挿画では、杉原氏の右に出る人はいないといつて過言ではありますまい。しかし、決して他の挿画面家が下手だというのではありません。誤解のないように。南村俊平氏の作風は余りにも可憐にし過ぎ、苦痛の跡がないので物足りない点もありますが、氏の作風には、そのあどけなさがある点によさがあるのです。よう。「水槽」と「戦友救出」がそれぞれ私にはよい印象を与えました。グラビヤでは、確かに田中芳代さんのスタイルも悪くはありませんが、私には一番初めのスタイルがたまりませんでした。大塚

啓子さんの苦痛の影がありありと判る「拷問」「囚衣」の方が如何にも真に迫って凄じく興奮を与えました。殊に「懸崖」が圧倒的です。彼女は、白蝶の舞踊の如きポーズも完璧です。実に秀れたモデルと感じました。花坂道子さんの着物は、何か不自然という感じ。(東京 I・A生)

○ 臨時増刊号は写真と挿画の逸品揃いで、殊に相当の頁数があつて見てたえがあり、さすがは特集号の値打があるものと、編集の御苦心に深甚の感謝を捧げます。何卒今後三月に一回位にサド特集号(マゾにも通じる)を是非発行して下さい。又、挿画、写真はもう少しふやし、説物は少し位減して下さい。なお、増刊号に掲載された写真共に、希望を含めて個々の感想を述べさせて頂きます。四馬孝、滝れい子、杉原虹児氏の挿画は、印象に残った傑作だと思いましたが、殊に四馬氏の皮具を使った構図、何ともいえない名場面です。ただ惜しいと思うのは、女賊が捕縛されて高手小手の本縄で引かれて行くところが一枚あれば、なおよかったです。○緊縛艶姿十四態緊縛感があつて非常によか

った。縄もある程度喰込んでいた。処も見えて甚だよいと思つたが、ただ残念なことは着物が邪魔になつて背面の手首とか腕へ食い込む縄目の見えない処もあった。上半身裸体に脱がせて、下半身だけにはちゃんと着せていても、腕や手首へ肉もくびれる位に縄が食い込んでいる処を写してほしい。又縄の色が白っぽくてはつきり写らないので、黒色とか濃い赤色等、はつきり目だつ色のものを使つて貰いたい。

○囚衣——白衣で囚人の雰囲気を出す努力は買うが、どうも囚衣が却つて邪魔になつた。肩から袖を脱がせた恰好にするか、又は上半身裸にして腕をギリギリ強く引締めた縄が肉へ喰い込んだ処がはつきり見えるようにしてほしい。異色の汚れた縄は、写真写りがはつきりして非常によかつた。○けん

がい——白衣と紐の色が白系統で、よく見えなかつたのは誠に惜しい。いつそ体にピッタリしたタイトのようなものとして、紐は黒色か赤色のモス、チリメン、三尺帯式のもので吊ればそう痛くもないし写真写りがよくてはつきり見えると思う。猶、画面が少し小さすぎてはつきり見えない処がある。もう少し大きくして又、吊らない後姿を是非一枚写して欲しい。笑つたような表情は、悦慮という感じを出して非常によい。手と足を同じ位の高さに吊つたのは面白い。○床の間の花——美しいという感じは非常によく出ていて成功だが欲をいえば、着物の色をうす色として又、体にびつたり着物一枚のみとし、紐を濃い黒色として腕へ喰込むのが見えるようにし、首の方へ手首を吊り上げておれば猶よかつたと思う。○蠟滴——縄が

◎沅腸連続フオート◎

略号(ちよ)

(9×13cm) 印画紙焼付 十二枚一組 九〇〇円

モ デ ル 愛川 悦子嬢

沅腸マニア待望の沅腸場面連続写真、ガラス製三〇CC沅腸器エネマシリシ、イルリガートル、いちじく沅腸などを駆使して女体沅腸の雰囲気をついに醸し出しました。発売以来、好評に好評を重ねて参りました。分譲打ち切りにならない中お求めの程を。

女体禪美の緊縛

(9×13センチ) 印画紙焼付

五枚一組 四百円

略号(こん1)

女体の禪美フオート

(9×13センチ) 印画紙焼付

二枚一組 二百円

略号(こん2)

太すぎる気がする。黒く写るビニールの細紐等で強く縛つた方が美しく見えると思う。○白蝶の舞踊

腕へ喰込む縄の跡といい、上下を二、三巻したのと又、凄じい様な姿が実によくとれている。唯惜しいのは縄の色が薄いのではつきり見えない処がある。黒いビニールとか細紐を使つたら猶よいと思う。又、首の方へ手首を後から吊り上げてあつた方が緊縛感があつて非常によい。○荒縄と柔肌

——豊満な乳房を写すために斜め後から写したので、真後から手首をギッチリ縛られてるのがよく見えぬので、決して垂涎ものではない。○長襦袢——これも上半身脱がせてギリギリと素肌を直接縛つて見たかつた。猿ぐつわは非常によい。○野外モード——貴重な誌面を実に勿体ない。モードを見たければカメラ雑誌のモード集が何冊でも出ている。本誌には、こんなものは絶体不用。それより

も、もっと緊縛写真をふやして貰いたい。

○ 二月号の神戸の八潮さんの投稿には、思わずアツとかたずを飲んだ。こうした女性の出現をどんなに待ち恋がれたことか？百万人の味方を得た思いです。小生、四十才、物心のついた、七、八才の頃より鼻責めに異常な興味を持っています。現在、交際している若い女性の方の鼻を弄んで楽しんでいますが、何といつても一方的で百パーセントの理解は得られませんが。遠慮しながら弄んでいる始末です。希望としては、涙と鼻汁でグチャグチャに……が最大の楽しみです。文面によれば、すべてが大柄な目鼻立ちの由、鼻も従つて愛玩するのに充分手応えがあるものと察します。想像するだけで楽しい限りです。ぜひ御目にかかりたいものです。貴女の意志に反し

て無茶や乱暴は勿論致しません。お互に楽しい雰囲気を楽しみたいものです。参考までに申し上げますが小生は縛りは余り好みません。只鼻、鼻、鼻、これが小生の一生を通じての何よりのアイドルです。八潮さんと御交信願えればこの上ありません。七月号の口絵、四馬孝氏の「一本足の窄衣」例によって軽い鼻責め。四馬氏の鼻孔描写は（鼻責め以外の場合でも）毎号楽しみにしています。アツという着想を御待ちしています。

（江藤恵夢）

特集号拜見。私の最も気に入ったのは、四馬孝氏の「或るスクリーン」。「夜汽車で逢った美人」「蜘蛛」その二、その三でした。グラビヤは、どれも皆大好きで、愛川悦子さん、大塚啓子さんの柔肌にグッと喰込んだ縄目と悦子の表情は素晴らしく、花坂道子さん、田中芳代さんも好きでした。中でも最も心を引かれたのは愛川悦子さんの蠟滴です。荒縄と柔肌で素晴らしい乳房を痛めつける蠟の滴にカットされた表情が残念でした。かつての川端多奈子さん以上のモデルでしょう。これから毎月このようにグラビヤを多く載せて欲

しいものです。それにグラビヤ特集といったものを作って欲しいと思います。又、この頃は女装した責めのものがないのは、ちよつと淋しい。かつて掲載された「ああ恍惚境」や「女志願者の夢」等といったようなものが大好きです。私も女装の責めに身を挺したいと念願している一人です。同好の士の御便りを御待ち致します。

（兵庫 飯塚勝男）

種々の困難と制約があるにもかかわらず、常に怯むことなく、読者本位のサービスに徹し、鋭意斯業を継続躍進される貴社御一同の御努力に対して、深甚の謝意を表します。復刊以来、私の最も感銘の深かった作品は第二十号（昭和三十三年十一月号）所載の、「美容病院」でした。それは美女、愛子、に対する汚辱強制の章が、その着想の妙に加えて、まことに描写が詳細、且つ大胆に行われていたからです。すなわち、私の魅せられた点は一、愛子が裸であったこと。二、彼女が使用させられたモノが、想像も及ばぬ程屈辱にみちていたこと。三、責め手が同性の女であったこと。フジが愛子の乙女心の羞恥を巧みに衡いて凌辱

花坂道子嬢 優美姿態緊縛集

純黒調 大中判印画紙（タテ十八糎ヨコ十三糎）焼付

花坂道子嬢全裸緊縛

十枚一組 八〇〇円 略号（はな1）

可憐な美貌と優美な姿態で圧倒的な人気のある花坂道子嬢が、はじめて和服を脱いで全裸の姿態に厳しい縄目を受けた鮮明な写真。

花坂道子嬢股間縛集

十枚一組 八〇〇円 略号（はな2）

前作に引続いて初めて衣服を脱いだ花坂道子嬢に強烈な股間縛が敢行されました。これこそマニア垂涎の得難い逸品であります。◎以上二集二十枚同時に求めの節は一五〇〇円に割引いたします。

花坂道子嬢ヌード縛

二枚一組 三〇〇円 （略号はな3）

花坂道子嬢股間緊縛

二枚一組 三〇〇円 （略号はな4）

を重なるあたり、まことに魅力百発であった。四、描写が限界内で詳述されていたこと。五、挿絵が大胆に、そのものズバリを描いてくれたこと。等であります。旧号、「蜘蛛と蝶々」以来の感激でした。身勝手な欲をいえば、華々しい行為に移る前に、「蜘蛛と蝶々」に於ける里枝の場合のように、耐え難い要求に羞恥苦悶する愛子を、命令通りに上手にやれたらそれだけ早く解放してやる」と偽って

愛子が通常なら到底耐え忍ぶことのできなない様な、羞恥と屈辱に満ちた行為、例えば犬の曲芸等を自ら演じさせる。というような展開があれば、更に白眉のものになったと思います。七月号「お町の最後」も実に愉しく読ませて戴きました。だが残念なことに最も期待された、責めの場面が、途中で断たれてしまっていることです。余興とは実に素晴らしい着想です。折角、あそこで行ったのですから

しかもお絹への危害という、いかなる責苦でも絶対に町を承服させることの出来る条件を、備えているのですから……。町が打たれても泣くとなると、お銀が業を煮やして子分達に命じ、お絹の着物に身を隠す。お絹は悲鳴をあげて身悶えする。肌着に子分達の魔手が伸びたところで、ようやく町が承知する、念を押すお銀、屈辱と羞恥に泣きながら、承諾の覚悟を示す町、だが、それでもなかなかその行為は現出されない。怒るお銀……。遂に町は美しい顔を仰向けにされ、鼻をつままれて塩辛い水を無理矢理、口から溢れる程飲まされる。やがて町の腹がまるで妊婦のように、ブツブツと膨れかえる、待つ程もなく催してくる猛烈な生理現象。一旦は絶望に悲壮な覚悟はさだめたもののそこは女の本能、羞恥が何ものにも勝つて、矢張り耐える。あられなく身悶えて必死に哀願する町、それを嘲笑しながらみつめるお銀達……。全身真根に染めて町は

者にとつて垂涎おくあたわさるものと信じます。着想の奇抜さに加えて比類ない筆、全く毎号、次は如何なる場面が展開されるかという期待で、早くも次号が待遠しくなります。しかしこの傑作にもやはり恨みたくなるのが、排泄関係の場面が全然登場しないことです。せめて連載中一回でも、この場面が挿入できないものでしょうか？、檻禁されているのですから美加子も当然、この生理現象には苦しめられている筈ですが、まだ全然触れられていません。もし出来ましたら、責められている最中に要求が起り、それが絶好の責めへと変るといったようにして、出来るだけ描写して戴けないものでしょうか、美加子と同じ運命を予想される路子の場合に実現していただけたなら、望外の喜びです。天与の美貌と豊満な肉体に恵まれた美しい乙女、それを、肉体的な苦痛よりも、精神的な恥辱と苦痛を与えて責めることの方が、私は女体責小説の醍醐味だと信じています。如何なるものでしょうか。最後に、現在の貴誌に最大の魅力を感じるのが、四馬孝氏の責め画だということです、強調させて戴きます。口絵だけでなく、挿絵にも更

甲斐に参案『涙のダイヤモンド』(略号) 四馬孝画

大判判印画紙焼付 三枚一組 四百円

○伸し責 ○苦悶のコレット ○浣腸責

に一段と御活躍が願えませんが、誠に勝手なお願いでしかなく、また四馬氏に、次の様な私の望みを聞いていただきたいのですが。一、「蜘蛛と蝶々」の文中、里枝の責められる姿を参考に、責められる女に豊満な令嬢風の裸女が嬌やかな首に、頑丈な首輪を嵌められ、四肢を開いて四つん這いに這い歩かされている。お尻にレースの手袋(ハイヒールなら更に結構)を乗せられ口にブラジャートをくわえさせられている。口、責める者一人は令嬢風、一人はその女中風。前者は乗馬服姿で責められる女の後方で鞭を振上げて責める。後者は前方で責められる女の首輪に繋る太い鎖の端を引っ張っている。背景に木馬があれば申分ありません。以上の様な絵を描いて欲しいと思うのですが企画して戴けませんか、分譲品として

○

四馬孝様へ。貴方は今まで現在の方に限って、しかも単数(画に一人の主人公のみ)の画を描かれましたが、私の考えでは時には複数の方がより効果が上ると考えます。例えば画のタイミングとか、サディストにとつては縛り等は、その過程が一番の問題なので「上衣を剥ぐ」「後手に猿ぐつわ」「鎖」等々も、その実行の途中が最も美しいと思います。一人完成された縛りの姿を晒している前で、次の女がその姿にされつ

甲斐に参案『涙のダイヤモンド』(略号) 四馬孝画

大判判印画紙焼付 二枚一組 三百円

○胃の洗滌 ○ヒマシ油責

写真 硃

(ハリツケ)

三態

略号(はり)

大判判画紙焼付 三枚一組 四〇〇円
モ デ ル 大塚 啓子嬢

両手を左右の横木にがっちり縛りつけられて身動きの出来ない全身を宙にハリツケられ高々と硃柱に浮き上った囚女。可憐な足指は苦痛にビクビク痙攣している。足首にもひしひしと縄目が喰い込み、痛い、痛い、と悲痛な絶叫を繰り返すのを、そのまま放置して表情の変化を次々と余すところなくキャッチした十数枚の中から、特に雰囲気横溢したもの三ポーズをピックアップしました。文字通り真正銘、トリックではない柱の十字硃のポーズ。是非一組を。

つある段階といった風な面を望んで止みません。次に表情について貴方の面の魅力は、一つは表情にあると考えます。特集号の中では「地蜘蛛」が私は最も好きですが目、鼻、手、体、其他どこをとつても素晴らしいと思います。「玩具」も又、然りです。今後余り機械的な定着したものを避けて、動きのある、素晴らしい作品を期待します。

(埼玉 M・S生)

○ 貴小説特集号に続いてサド特集号が出て、夫々の愛好グループを随喜せしめたことだろう。そこで南方氏が切腹特集のアイデアを出されたことは、誠に時宜を待たものといえよう。同氏の構想による

と、編集に半年位をかけてとあるから、さしずめ切腹マニアへの素晴らしいクリスマス・プレゼントとなる訳だ。切腹に関する特集や座談会は編集部あたりで既に計画だけはあつたものと考えられるが、困難な社会情勢のために仲々実現しそうにない。しかし最近、その可能性も大分熟して来たように思われるので、南方氏の今回の提案となつたものだろう。そこで早速、マニアの一人として、小生もその驥尾に附する次第である。標題は「女性の自刃並に切腹特集号」としたい。理由は女性自刃に関する著作は皆無であるから、切腹に限らず拙く自刃に題材を求め、これに加うるに異色のものとして、切

腹を大きく取上げたいからであるそれから、男性の切腹は全然、オミットしたい。その理由は、世に切腹に関する著作は珍しくなく、しかもそのすべてが男性(武士)の切腹だから、男性切腹マニアの人には奇クを必要としないからである。記事では、特に女性の自刃に力を入れて頂きたい。又、切腹を実行した女性の手記をスクープして欲しい。挿画は、記事内容に所謂、ハイファイであることが望ましい。モデルによる写真は演技表情等に迫真性を持たすこと。全国女性自刃並に切腹マニアに或るテーマ(例えば貴方はどうした動機から愛好者となられましたか)で、アンケートを求めた頁を設けることも面白いと思われまふ。以上、思いついたまま南方氏にささやかなお力添えを致したつもりです。

(兵庫一)

○ 御誌は珍しく稀少なので愛読しています。読者の中にサドの方が随分おられた様子ですが、私は海軍で練えられて以来、この頃になつてその頃がなつかしく、水兵時代の通りに情容赦なく精神棒の味を、もう一度受けてみたいと思ふようになっていきます。このよう

な事を実行してみたいという熱意や趣味の方で心当りがありましたら御願ひ致します。縛り、ムチ打何んでも結構です。どうか一度、試してやろうという特志家を御紹介下さい。身長五尺四寸、体重は十五貫、健康で中肉、年令は三十才、上品な素人で若さと精気に溢れています。私の求めているのは未知の世界のスリルです。ではふさわしき上官、又は御主人の出現を待ちます。(兵庫T・T生)

○ 七月号。緑猛比古氏の「拷問記」が出色。自殺した女の首を切つてさらしものにしなければ、我慢出来ない男の妄執と、皮膚を破り骨をくだくような拷問にも遂に口を割らなかつた女の悲願との対決を生々しく描写している。辻村氏の「話の屑籠」写真撮影の楽屋話が面白い。大いに読者に親近感を持たせる。箕田氏もその意味において必ず編集後記は書いてもらいたいの。挿画に新しい顔触れが出て誌面の単調さが救われたのは有難い。特にカットにピリツとした味のが多くなつた。今後、画家の氏名も発表してはどうか。壬生三郎氏の切腹研究は好記事。今秋「切腹七部集」出版の由であるが、

その時は誌上で紹介してもらいたい。新東宝映画「朱桜判官」は余りよくなく好太郎もパツとせず、若杉嘉津子の後手縛り吊責シーンが、ただ一つの見せ所となつてゐる。男女お揃いの朱桜の刺青とは高木彬光氏らしく愉快。責めシーンで肩先の刺青が見える所などなかなかよろしい。欲をいえば、このシーンはカメラの位置をかえてもう数カットを加え、迫力を出してもらいたかつた。浅草常盤座で若手歌舞伎が松蔭の「毒婦小松」を出しているのを見に行つた。黙阿弥作の大変珍しいもの。毒婦といつても、それほど悪に徹したものではなく、今の時世から見ればむしろ純情な位のものである。小屋が浅草である為か演出は、かなりどぎつ、女郎屋の場面では帯をするする解いて紙をくわえて屏風の内に入るといったきわどい仕草をやり、狼にくい殺される場面も、血だらけで凄味を出している狼にくい切られた生首が、兄の鶴飼舟に拾われるなどグロ趣味だが至極丁寧にまじめに演じて好感がもてた。新聞の批評では悪意的なものもあつたが、前回の「切られお富」に続いての松蔭の新芸城開拓には、もっと好意的な応援を送

りたいと思う。(神奈川 南方純)

○

割合に熱心な答の麻生保は、すっかり忘れてしまいました。何しろここ数ヶ月間は、本業が矢張り忙しかつたもので、映画も雑誌もろくに読むひまがなかつたため、時評の資料も一向に集めていません。麻生の大好きなソラヤ皇后(昨年十二月号参照)の離婚事件など書き忘れたのでありますが、もう時すでに遅く、時評としての興味は失われてしまつたようです。やつと少しひまになつたので、また「生活と意見」など書かせて頂きますよう。ところで敬愛する沼大兄に、また物言いをつける様で何とも恐縮なのですが、麻生はダイアナ夫人を、事もあるうに裸馬には乗せたくありません。こんな事は、田舎娘がモンペをはいてする事です。上品な仕立のいい乗馬服を着た美しい女性の馬は、立派に馬装をしていくべきです。勿論霜柱のたつ初冬の朝などに裸馬は鞍馬に比べて、どう考えてもみずぼらしく見えるからです。麻生はここで乗り手の快感は一切無視しています。然し、ダイアナ夫人御自身、乗馬にはシヨウ的要素の多い事、また常に高貴であるべき事

をいつも強調していらつしやいますから、必ずしも麻生の意見を、一方的だとは思ひにならないうでしよう。(東京 麻生保)

○

私は今迄に奇々を時々買つてもらつて読んだり、この家の主人のもつてゐるのを見せてもらつたりしていましたが、お便りするの初めてです。とにかく原稿の編集にいろいろと御苦心のあとがうかがえて御誌の独特な方針に心から敬意を表してゐるものでございませう。今後ともよろしくおねがいいたします。さて今日は、懸賞募集原稿に応募するために書きはじめました原稿をやつと書きおわりました。なにしろ私は文章が下手で

自分で思つたことをそのままでも書けませんが、私の一生のうち唯一度の体験を皆さんに読んで頂こうかしら、という軽い気持ちで書いてみました。義父も死に義母もあとを追つて死んでしまつた今、私はこの御主人家族にひきとられていますが、皆さんの原稿を見ますと大抵見聞記の形をとつておられるようですが、私は私自身もよい、一つの真実を自分の立場で書いてみました。本当に下手で十分その状景が出せませんが、私も自分が苦しめられたことを克明におぼえてもおりませんし、創作出来るような頭ではないし、どうも文章に不満がありますが、とり

女体緊縛フォト G組 大中判印画紙焼付

各組1枚
1組 一五〇円
十枚 六〇〇円
一〇〇〇円 (送共)

- | | |
|-----------------|-----------------|
| G1 鉄鎖と柔肌 (高瀬 忍) | G6 アイデア (萩千恵子) |
| G2 股間縛正面 (高瀬 忍) | G7 叫喚の森 (伊吹真佐子) |
| G3 海老晒し (萩千恵子) | G8 全裸目隠し(村田那美子) |
| G4 羞紅の椅子 (菅登紀子) | G9 優すがた (花坂道子) |
| G5 量感の帯 (伊吹真佐子) | G10 開股一番 (萩千恵子) |

あえずお送り申します。もし御訂正下さって使用して下さいのでしたら、どうぞよろしくおねがい申します。こんな告白ではだめだと思召しましたら、やいて下さいませ。懸賞原稿でなく読者原稿の体験告白手記にまわしていただいても結構です。苦しみの人生を持つた一女性の体験記をお送りいたします。貴誌のますますの御発展をおいのりしてペンをおきます。もし貴誌の頁にのる光栄がありましたら名前をかくして下さいませ。仮名でおねがいします。

(神戸 加藤冬子)

私がこんな気持を抱く様になったのは小学校六年生位の頃からでした。私の受持の先生でとてもよく肥った二十二、三貫位の先生があり窮屈そうに詰襟服を着てズボンは短いのを穿いてお尻なんか歩く度にぶりぶりしていました。そんな姿が私の目に今も印象的に残っています。私はその頃からそのように肥った人を見るとすぐ後を願って見るのでした。又電車なんかで腰掛けている肥った人を見るとその衣服に包まれた身体を想像してみるのでした。又特に私の楽しみは銭湯で見る肥満体の人、う

すいメリヤスパンツを脱いで大きい腹を突き出し乍ら悠々と湯槽に入っている人を見ると、ああ、こんな人の背中を流したり足や手を洗ってみたいと思うことが度々あります。それから私は、もう閑さえあれば、そういう空想を働かすことに追われていました。現在では、数多くの男性に拷問されるとか、折檻されるとかいう空想が多いのですがまだ一回も実際にそういう機会にあつたことはありません。本当にそういう目にあつたら一番先に逃げ出してしまおうでしょうが、小説や告白記で読んだり空想したりするのは、とても楽しいのです。これは一体どういうわけなのでしょう、自分でもさっぱりわけがわからず毎日いらして暮しています。然しとにかく貴誌を読むことは非常に楽しいことです。毎日々欠かさず読んでおります。私のような肥満体の同性に關心を御持ちの方がありましたら誌上での呼びかけをお待ちいたします。

(坂上鉄夫)

奇譚クラブ復刊以来ますます御発展との事我々大いに喜ばしき次第です。さて私、昭和二十七年頃よりの愛読者ですが、休刊前の本

女体緊縛フォトE組 9×13cm印画紙焼付

ES1 ヌード緊縛集

モデル 佐賀美智子嬢

三枚一組 二〇〇円

ES2 全裸悦虐集

モデル 須川 令子嬢

四枚一組 二五〇円

ES3 腎 羞

モデル 佐賀美智子嬢

三枚一組 二〇〇円

ES4 酒宴の弄者

モデル 佐賀美智子嬢

二枚一組 一五〇円

ES5 脱がされる娘

モデル 須川 令子嬢

五枚一組 三〇〇円

ES6 あわや寸前

モデル 佐賀美智子嬢

二枚一組 一五〇円

ES7 剥れたスロース

モデル 佐賀美智子嬢

五枚一組 三〇〇円

ES8 乙女のすべて

モデル 花坂 道子嬢

七枚一組 四〇〇円

ES9 女学生の縛り

モデル 須川 令子嬢

二枚一組 一五〇円

ES10 緊縛のベッドシーン

モデル 佐賀美智子嬢

六枚一組 三五〇円

誌に一度読者アイデアの挿画が一度採用されたことがあります。「煙草責め」という一種の女体責めのイメージです。私が煙草責めを思いついた動機は、数年前、当時二十一才の或る女性と交際していましたが、彼女が好気心から喫煙したいと言出し教えてやりました。其の後、数日して来たのでキセルで煙草を吸わせた所、始めは口の中へ煙を入れるだけでむせむせぬようになり肺迄煙を入れぬため肺の水蒸気と共に白蒸

気になる迄は数日かかりましたとにかく口へ含むだけで吐き出せと教え先ず煙草を吸う恰好がついた様に覚えております。女性を責める時に煙草を吸わせた面白いなと思ひ、彼女を一度だけ絹のマフラで後手に縛り、坐らせたままキセルに巻煙草をさし込みくわえさせて、マフラの縄尻を引いたリして、のけぞらせたりして責めてみました。彼女は最後迄キセルをはなさず苦しうにフウフウいていました。そんなことから、「煙草責め」のイメージといったも

◎新人モデル嬢◎新作緊縛姿態☆

純黒調光沢印画紙(9×13Cm)判焼付

新人娘三人の最もオースドックスな縛りをここに提供いたしました。いずれも最近の本誌口絵並に臨時増刊号誌上に於て活躍いたしました、皆さま御馴染のビチビチと張りきった近代娘ばかりであります。

一、愛川悦子嬢の巻

☆ベッド変型縛り 略号(しん1) 四枚一組 三〇〇円

ベッド上の白布に繰りひろげられる悦子嬢のアクロバティックな全裸のポーズは縄目にいためつけられながら輝くライトを浴びて白々と豊かなアクションをふりまいてゆく。

☆全裸強烈縛り 略号(しん2) 四枚一組 三〇〇円

山里離れた温泉宿の一階の一室、硝子窓から洩れる淡い夕陽に照らし出された湯上りの裸身には、ひしひしと肌に喰い込む麻縄が妖しくゆらめいている。

大塚啓子嬢の巻

☆股間縛り 略号(しん3) 六枚一組 四〇〇円

柔かそうでいながら弾力性に富んだ初肌にぎりぎり喰い込んだ縄目はくびれるように二の腕、腹、肌と締めつけている。

☆全裸縛り 略号(しん4) 五枚一組 三五〇円

丈なす黒髪が豊満な柔肌にコントラストする美しさ。全身に喰い入る縄の縞模様。麻縄と白肌の織りなす妖美。

田中芳代嬢の巻

☆セーラ服縛り 略号(しん5) 五枚一組 三五〇円

可憐愛すべき表情、なよなよとした巧みなポーズ。セーラー服を着こなして縄目に悶える田中芳代嬢の清純なまなざし。スカートの裾の中に秘めてエロチシズム。

☆股間しばり 略号(しん6) 四枚一組 三〇〇円

高手小手に吊り上った後手、二の腕から胸にかけて二重に、胴のくびれに締めつけ余った縄が股をくぐって後手に連る身ゆるぎも出来ない縦しばりのきびしさ。もだえのたうつ全身の律動を掴んだ四態。

のを考えてみました。若し採用して頂ければ幸甚です。略図数枚同封しましたが、このアイデアによるフオート又は絵が出来ましたら是非御譲り下さい。又鼻孔へ煙草を差し込むのは今迄しばしば出たこともあるので故意に略しました。この他に磁石責め、等のアイデアも持っておりますが、又の機会に御報告いたしますよう。(京都 FO生)

早速「サド特集号」お送り下さる有難うございました。予告には中旬発売ということでしたので、どうせ月の中頃からあとに出るのだらう位に思っていましたところ予期しない早さで十日過ぎに届いたので驚いてしまいました。予約金を送ったときの期待も大きかったのですが、手にした時の感激も又新たなものがありました。ズッシリと手ごたえのある雑誌の感触もう頁を開かない先から、全身にぞくぞくと走る戦慄にも似た感動これはマニアならでは味わえぬ一瞬だと思えます。先ず我々の為にのみ狙いをつけて編集に努力して下さった先生方に感謝の念を捧げて、わななく指先で次々と頁を繰ってゆきました。実際、ミィチャ

ンハーチャン向の出版物を作るのに熱を挙げる人は多いのですが、こういつた限られた読者を相手とした出版物を作ってくれる人は少いものです。独乙では、こうした特殊な研究には理解を持ち、優秀な人が当たっているということを聞いています。現在の日本ではまだまだ継子扱いです。それはさておき、特集号の内容ですが、口絵も写真も、よくこそ出来たの一語につきまします。表紙裏から目次裏に至るまで行き届いた心づかいには有難いです。こうした写真一枚、絵一枚でも足を棒にして古本屋通いをしたって中々入手出来ないものばかりです。戦前、こういった資料を集めてみて、その困難さを知っている私は、現在こうして一冊にまとめられたものを手に出来る幸福をしみじみ味っています。編集にたずさわっていられる方々はそう大して思っていないかもしれませんが、これは大変な労作です。一々について感想なり批評なりを述べてみたいと思います。徒らに提燈持ちのようなことになつてはと思ひ(それだけ感動しているわけですが)省略いたしますが、今後も引続いて、こういった企画をどしどし進めていただきた

次号(十月号)の本誌は八月下旬発売です

いと御願ひして拙い文を終りとします。
(福岡 木村生)

法谷四郎様へ。八月号で貴方様の御厚意を知り感激致しました。私のような者の作品に、これ程までの御愛読を頂いて居りましたこと、もったいないことに存じます。私は今までも度々告白して参りましたように、どなたにも理解して頂けそうもない異常な欲望に悶える女でございます。男装への憧れそしてその男装に身を包んだ女の妖しいサド、マゾの相剋。乗馬ズボンや飛行服の女腹切が生まれる宿命を、私は負っているのです。

「戦雲アジアの女王」の高倉みゆきが着けていた軍服。「遠い道」のドン・アダムが着た潜水服や、ガバガバとしたレインコートが私のフェティシズムをかきたて陶酔させ、そして女腹切の幻を追わせるのです。私は拘束された宿命の中に悶え、そして死んで行く女が好きです。それは私自身の姿でもあるからです。私は結婚生活に破れ今は同性愛に生きようと心に決めております。法谷様、私は夜毎の

プレイに力つきて筆をとることさえ苦しいのです。お願い……乗馬ズボンやレインコートに身をかためた女の惱ましい最期を、私に代って書いて下さいませ。そしてどこかの隅で身悶えする心をお救い下さいませ。
(藤山秀緒)

日本人は可成り古くから褌を着用しているが、これはいう迄もなく南方の土人が日本に流着した際にもたらしたものである。大正時代は殆ど日本男子はこれを締めていたが、その後次第に下着が欧米調となり現今、特に終戦後は稀に散見されるに過ぎなくなつた。然し本誌でしばしば紹介されたように千葉県地方の漁師は殆ど全部着用している。嘗て池田ふみ子さんや保原美千代さんが奨められていたように日本の多くの女性は、男子が晒の六尺褌をきりりと締めてもらい度いと願っているのである。パンツ全盛時代でも某女優は男子の六尺褌姿が最も男性的で魅力があるといっている。実は私の家は代々漁師であり母も漁師の娘であつたので、私は十五の年から褌を

させられ欠かしたことがない。以来私はもう十年以上褌を締めている。日本男子はどしどし六尺を締めるようにしたいものである。
(褌愛好者 S B 生)

○

梶孫一様、八月号の「映画にあらわれた男性責」の一文拝見致し大変嬉しく思いました。僕にとつて八月号中の最大の読物で繰返して読みました。ずい分古いものを御存じなので驚きました。ラモン・ナヴァロの「ベンハー」は僕も見ました。ヴァレンチノの好敵手であつたナヴァロはギリシャ風の整つた美男子でしたがニダヤの若君の「ベンハー」に扮して奴隷になつて船底で槽漕にされたり沙漠で水汲みにされたりした汗まみれの褌の姿を今でも目に浮べています。全裸のポートレイト当時大切にしていた。又「成吉思汗の仮面」は見ませんでした。あの

青年の仰臥大の字に緊縛されたスチール今でも覚えています。細巾の薄い布で股部を最小限に掩つていてポリスカロフの博士が今にも拷問にかけようとしている息づまのような場面でした。

○その他戦後の種々の責場面の御紹介興味ぶかく拝見しました。僕は西部劇はあまり見ていないので知らないものが多いようでした。が再上映の機会があつたら見たいと思つています。大体僕と同世代の方のようで、お話しする機会がありましたらさぞ話か尽きない事と思います。それにしても貴方の描写の筆致も時々すぐれていて、これも博識とともに感心致しました。又機会がありましたら同様の文章御発表していただけたら伴と思ひます。この欄でもお言葉いただけたらこれ以上の喜びはありません。
(菅 良太)

女体 『切腹風景十二態』 (9×13Cm) 印画紙焼付 十二枚一組 九百円

モデル 大塚 啓子嬢 略号(せふ)

白鞘の短刀をぐさりと豊満な腹部に突き立てた凄惨な場面の中にも、モデル嬢の清純さが悲愴の美しさを保っている切腹場面のフオート。黒髪を口にくわえた苦悶の表情、三面鏡にうつる女ハラキリの表情。従来の女性切腹写真分譲打切りに伴って新しく作成された新趣向のフオート。

代理部分讓品総目録

新人モデル多数
新しく参加!!

御入用の方は八円切手封入の上御申込み下さい。お送りします。

○東京の小野様、御親切な、お便り有難く拝見致しました。想像で始まり、空想で終る私の少女のズロースへの憧憬に比べ、何んと、幸せな、貴兄の毎日でしょうか。小野様を始め、私と同じズロースやパンティに、あこがれる、方々が他にも居られる事が読者通信に依って分かりましたが、私にはどうも、女店員から、ズロースを買う勇氣がありませんので、どなたか、若い女性の方で、或るいは、田中さん、愛川さんの御使用済みの、ズロースパンティをゆずっていただければ、身に余る光栄だと思います。それ以外にも、貴誌の毎号の口絵に要をたくす他有りませんが、六月号は少女に関する記事と共に、ズロースパンティの文字も多く見え胸をときめかせました。口絵ではズロースの上から股縛りにされ、逆吊りにされた少女と、後手に縛られ、坐らされている少女の半天の下から、ズロースのぞいている、七月号、下藤と坐禪草が、まんが化されている、

不満も有りますが、少女のズロースマニアの私に取って、今までのもので、最上のものだと思います。それから、六月号で杉原虹児氏の迫りくるスリルに於ける、女性の穿いているものが、ズロースとも思えぬ、やわらかい布を只、巻いているとしか見えぬのも残念でした。氏のリアリティに満ちた。画法に依って美しい少女のズロース一枚の姿を、独特なアイデアに依って、強調したものを今後お願致します。その意味で小野様の「下着コレクション」期待致して居ります。皆様、誌上にて御便り下さい。(峯岸一美)

○本誌に児島輝彦氏の名文を永く見ないことは残念でなりません。先月、男性割腹の通信を載せて頂き諸兄の御仲間入りをさせて貰った者ですが、児島氏のような熱心な割腹ファンも他に沢山居られることでしょうか。割腹ファンの方と文通したいと思えますから、御便り下さい。割腹以外にも僕は、若い肉づきのいい美青年が処刑され

女体『浣腸風景十二態』(9×31Cm) 印画紙焼付 十二枚一組 九百円

モデル 大塚 啓子嬢 略号(ちふ)

石鹼液を満した五百CC容量のイルリガートルから進出する溶液、二十CCのガラス製浣腸器、エネマシリンジを用い、浣腸器の温湯を注腸する場面、或はいちじく浣腸による浣腸など浣腸場面の姿態十二ポーズを新しいモデル嬢によって演じて貰いました

る場面を好みます。木に吊し縛りにされ、腹部に矢を射込まれて苦悶している美青年。又、逆さ吊りにされ股裂きの刑に処せられていた特務機関の兵士。若侍が禪一本で磔にされ臍深く矢を射込まれている場面……特に好きなのは「黒い絨氈」という映画で、姦通の罪で土人の美青年が楯一つ持たされ楯の上に追い上げられ、吹矢を四方八方から射られる刑。楯で勇ましく防ぐが防ぎ切れずに先ず毒の吹矢がふくよかな下腹部にブスリ「ウウウ」と苦しみつつ矢を引抜くと、今度は逞ましい腹板にブツリ、これも引抜くと続けざまに背中に二・三本ブスブスと刺さる。耐えかねてガックリ倒れる若者の体は、そのまま楯から逆さに落ちて死ぬ。その死体を囲んで土人たちが弔いの歌を歌う処、忘れられませんが、残念乍ら死体は画面には出ませんが、可憐な顔を苦悶にゆがめ、口からドツと血を吐きつつ

死んでいったことでしょうか。壮烈に勇ましく処刑され、公衆の面前で血だらけになり口からドクドクと血を吐いて、ガックリ息絶える美青年にあこがれています。同好の士のお便りお待ちしております。(東京 矢島生)

○貴誌益々御発展の事、心から御慶び申上ります。本月号の口絵、四馬氏の美人調教馬、本当に素晴らしい出来栄です。お、胴と股間をきつく締め上げた革の音がギューギューと聞えて来る様です。今迄の四馬氏のもので一番良かったと思えます。実は美容病院の文章の出来に心を奪われながらも、挿絵の方がもう一つ感心出来るものとは思われませんでした。この五月号の四馬氏の口絵で十分美容病院の愛子の着けているのは皮肉な事トを表現出来ているのは皮肉な事トと思います。(暴言御ゆるし下さい)来月号では又きつと変った責

☆本誌のニセ物現わる!

本誌の好調な売行きに便乗した東京の某悪質出版社が印刷所と結託して、本誌の臨時増刊号「責小説特集号」の複製版を作成、東京都内を中心とした大々的に販売したことを探知しました。ニセ物は全部オフレット印刷のもので、専門家が見れば直ぐ判別しますが、素人目には一寸判り難い位巧妙に作っていました。出版社並に印刷所も判明しましたので、目下登録商標侵犯其の

他で損害賠償提訴中であり、ニセ札が横行したり海賊版が大手を振ってまかり通る時代であり、製して秘かに販売するといふことは近頃珍しい新手法の「他人の襷を相撲をとる」一棚ボタ「式」のやり方ではありませんか。「ニセ物」が現れるのは一流商品の証左」と云われますが、果してどうでしょう

を見たり読んだり出来るのかと思ふとうれしくてたまりません。実は私はアタロバットに心をひかれて居ります。アタロバットこそ責の多くの要素を持ったものだと思つて居ります。旧刊の終り頃にアタロバット応用の責を発表すると言われながら実現せず、復刊してからも「拷問に笑う女」という辻村隆氏の文がありました。これがアタロとして完成された女を利用した責でありましたが、私の考へでは拷問によつてアタロを仕込んでゆく過程を書いて頂きたいと思ひます。これは外の多くのアタロバット愛好者の方々も持つておられる考へではないかと思ひます。アタロバットに修得するのに長い日数を要し、その上毎日長時間の苦しい訓練を必要とします。外の責のように思い付きですぐにも出来る責とはこの点、違つて来ると思ひます。訓練の衣裳も小さなバ

ンツにすれば襪又はブリーフ愛好の方にも受け入れられると思ひます。又逆海老責めは裏返しのア感覚にも連がるものであり、被訓練者をテンエイジャーにすれば、少女責めの愛好の方にも満足を与えらると思ひます。同封の新聞の切り抜きは先日、シンニチ及び昨午三月の新聞西ですが、これを見ましても、酢をのんだりで体を柔らかくするのはなく、血のにじむ猛訓練によつて初めて出来るものだといふことが分ります。しかもこれらの人は誰もその訓練の様子を具体的に話さず「アタロはとて難しいもの、それならどうするの」とか「よほど好きでないと長続きしない」といつて居りますが、これを裏返しにすれば好きでない場合や進んでやる気のなたものには外の方法で仕込むしかないといふことであります。(東条まこと)

「編集後記」

○盛夏の候、皆さま如何お暮しですか。臨時増刊号「SADO特集号」が好評裡に発売され、ほつと一息つくひまもなく編集部では暑さにもめげず引続いて各種特集号の企画を立案中であります。

○先ず「SADO特集号」をこらんなにつた多くの方々から要望されました緊縛写真ばかりの限定版特集号の発行。これはどんな形式で印刷したら最も効果よく安価に仕上げるか目下検討中です。収容する写真は五月一ぱいで殆ど現像を完了しましたので、何れ目鼻が付き次第本誌上で詳細発表する考えです。

○次には、四馬孝氏の表紙口絵挿画による弓沢俊二郎作、長篇読切責小説「青い魔院」これは多分、普通号と同じ定価ぐらゐで発売になることと思ひます。

○更に準備中のものとしては、沼正三氏の「ある夢想家の手帖」新稿、昭和二十八年発行の本誌所載の悦虐作品特集号といつたものがあります。

○いづれ秋風の吹き初める頃からボツボツ皆さまのお手元に届くことだろうと思ひます。本誌普通号に併行して是非御愛読下さるよう御願ひ致します。

○本誌普通号といえは白い表紙で馴染まれて既に三十号あまり、最近では欠号も遅刊もなく順調に発売されていることは大変喜ばしいことでありますが、やはりこ

のささやかな小冊子といえども、確実な月刊で発行されていると風当たりも強く、中にはニセ物を作つたりする悪質な者が出て来たりして前途益々多難をきわめる模様と運命占ひが出さうです。

○然し、本誌の内容は一字一句もゆるがせにしない注意心で隅から隅まで熱意をこめて作成しております。読者数が限られているからといつて、決して投げやりな編集をやつていないつもりです。これは読んで下さる皆さま方が一番よく判つて下さつてゐることだと思ひます。

○扱て、本月号ではトップに懸賞原稿の入選作として「草双紙に於ける責場の研究」(沖竜彦)を載せました。少し固いものですが真面目な研究家には注目される作品だろうと思ひます。まことにマニアらしいコクのある作品を寄せられる近藤一氏の「受刑の肌」斯界のオーストリイ士倭四股平氏の「続・女斗美短歌」南時夫氏の「バーナナ」の人々」は愈々佳境に入つて次号が待たれます。雄大なスケールで展開された「魔教団NO8」は毎号手に汗を握らせ、沼正三氏の呼びかけに応じて乗杉貴代子さんの「裸馬との対話」久し振りに「マリアンヌの手記」文部大臣の専属室」が華麗な責を以て彩り、「紅山彦」は遂に大詰に來た感じ。次号では、更に力作揃いで皆さまに御目見えいたしましょう。(三三、七、十)